Bible. N.T. Japanese. 1877.
Shin'yaku seisho v.1

耶穌降生一千八百七十七年

翻譯委員社中
米國聖書會社

新約聖書馬太傳

明治十年

日本横濱上梓

新約全書　馬太傳福音書

第一章 アブラハムの裔なるダビデの子なる耶穌キリストの系圖、

二 アブラハム イサクを生み イサク ヤコブを生 ヤコブ ユダと その兄弟を生めり 三 ユダ タマルによりて パレスとザラを生み パレス エスロンを生み エスロン アラムを生み 四 アラム アミナダブを生み アミナダブ ナアソンを生み ナアソン サルモンを生み 五 サルモン ラカブによりて ボアズを生 ボアズ ルツによりて オベデを生 オベデ エッサイを生み 六 エッサイ ダビデ王を生む ダビデ王 ウリヤの妻によりて ソロモンを

うみ 七 ソロモン レハベアムをうみ レハベアム アビアをう
み アビア アサをうみ 八 アサ ヨサパテをうみ ヨサパテ ヨラム
をうみ ヨラム ウッズヤをうみ 九 ウッズヤ ヨタムをうみ ヨタム
アカズをうみ アカズ ヘゼキヤをうみ 十 ヘゼキヤ マナセをう
み マナセ アモンをうみ アモン ヨシアをうめり 十一 バブロン
まうつさるゝとき ヨシア ヨアハズとその兄弟(きやうだい)をうみ 十二 バブロン
まうつされたるのち ヨアハズ シアテルをうむ シアテル
ゼルバベルをうみ 十三 ゼルバベル アビウデをうみ アビウデ
エリアキンをうみ エリアキン アゾルをうみ 十四 アゾル
ザドクをうみ ザドク アキムをうみ アキム エリウデをう

み十五エリウデ エリアザルをうみ エリアザル マツタンをう
み マツタン ヤコブをうみ 十六 ヤコブ マリアの夫ヨセフをう
めり このマリアよりキリストととなふる耶穌うまれたま
ひき 十七 よてその世系をかぞふれば アブラハムよりダビデにい
たるまで十四代 ダビデよりバブロンにうつさるゝときまで
で十四代 バブロンにうつされしよりキリストまで十四代
なり 十八 それ耶穌キリストのうまれたまへることは左のごと
きし その母マリアはヨセフと婣せるのみにていまださ
ことも あらざりしとき聖靈に感じてみごもりしがその懐孕
たることあらはれければ 十九 夫ヨセフたゞしき人なるゆゑ

ばこれをはづかしむることをこのまず。ひそかに離縁せん
とおもへり 20 このことをおもひめぐらせるをりに
主のつかひこの夢にあらはれていひけるは。ダビデのす
ゑヨセフよなんぢ妻マリアをめとることをおそるゝなかれ。
そのはらめるところのものは聖靈によるなり 21 これ子を
うまんその名を耶蘇となづくべし。そは其の民を罪より
すくはんとすればなり 22 すべてこのことは預言者によりて
主のいひたまひしことばに 23 處女はらみて子をうまんそ
の名をインマヌエルととなふべしとあるにかなはんため
なり。その名をとけば神われらとともにいますとの義なり

二四 ヨセフねむりより起て主のつかひの命ぜしごとくなさげひその妻をめとりたまひしと 二五 冢子のうまるゝまで妹をともよせざりきそのうまれし子を耶蘇となづけたり

第二章

一 それ耶蘇はヘロデ王のときユダヤのベツレヘムにうまれたまひしがそのとき博士たちひがしのくによりエルサレムにきたり 二 いひけるはユダヤ人の王とてうまれたまへるものはいづこに在や われらひがしのかたにてその星をみてきたれりこのかたを拝せんためきたれりと 三 ヘロデ王このことをきゝていたくおどろきエルサレムの民もみな然りき 四 すべての祭司のをさと民の學者とをあつめてヘロデとひける

ハキリストのうまるべきところハいづこなるや 五 こたへ
けるハユダヤのベツレヘムなり。そハ預言者のしるされた
ることばに 六 ユダヤの地ベツレヘムよなんぢハユダヤの郡
中にていとちひさきものにあらずわがイスラエルの民を
やしなふべき君そのうちよりいでんといへり 七 こゝに
おいてヘロデひそかに博士たちをよびて星のあらはれしと
きを詳にとひて、のちにかれらをベツレヘムにつかはさんとして
いひけるハゆきて嬰兒のことをつぶさにたづねこれにあ
はゞ我にもつげよわれもまたゆきて拜すべし 九 かれら王の
命をきゝてゆきけるに前にひがしのかたにてみたりし星かれら

らにさきだちてをさなごのをるところにいたりてそのうへ
にとゞまりぬ十かれらこの星をみていとよろこび十一き
でゝ室にいりければ嬰兒のそのはゝマリアとともにをる
を見ひれふしてをさなごを拜し寶盒をひらきて黄金乳香
沒藥などの禮物をさゝげたり十二さてのち夢にヘロデへかへる
なかれとの默示をかうむりほかのみちよりその國にかへ
りぬ○十三かれらが去るのち主のつかひヨセフのいめにあ
らはれていひけるはヘロデをさなごを索てころさんとす
るゆゑに起てをさなごとそのはゝをたづさへエジプト
にのがれてをれわがなんぢにしめさんときまでこのところに

よくじまゐ迯 十四 ヨセフ起きて夜をさなごとその母とをたづさへく
エジプトにゆき 十五 ヘロデの死るまでそこにとゞまれり。こ
れ主よげんしやによりてわれわが子をエジプトよりよび
いだせりといひたまひしにかなはせんためなり 十六 こゝに
おいてヘロデはかせにあざむかれたるをしりておほいにい
かり人をつかはして博士にくはしくとひたる時をもとゝり
ベツレヘムとそのさかひのうちなる二歳したのをさなご
をことごとくころせり 十七 こゝにおいて預言者エレミヤのことばに
ま 十八 なげきのかなしみいたく憂ふるこゑラマにきこえラケル
その子どもをなげきその子どものなきによりて慰まずと

いひしことのかなへり
十九 かくてヘロデみまかりしに主のつかひヨセフのゆめにエジプトにてあらはれいひけるハ
二十 おきて嬰兒とその母とをたづさへイスラエルの地にゆけ嬰兒のいのちをもとむるものハすでに死たりと
二十一 ヨセフ起てをさなごとその母とをたづさへてイスラエルの地にいたりしが
二二 アケラヲ父ヘロデにかはりてユダヤの王たりときゝければそこにゆくことをおそる。また夢につげをかうむりてガリラヤのうちにさりゆけ
二三 ナザレといへるむらにいたりてとゞまり。このことハナザレ人とよばれんと預言者によりていひおかれたる言のかなはんためなり

第三章 そのころバプテスマのヨハネきたりてユダヤの野
にて宣つたへていひけるは。天國はちかし悔あらためよ。これは
主の道をそなへそのみちすぢをなほくせよと野によばはる
人のこゑありと預言者イサヤがいひし人なり 四 このヨハネ
は身にらくだの毛衣をき腰にはかはのおびをむすび蝗蟲と
野蜜を食物とせり 五 このときエルサレムおよびユダヤ
とこぞりて又ヨルダンの四方よりひと〴〵いでゝヨハネに
つき 六 おのが罪をくいあらはしてヨルダンにてこの人より
バプテスマをさづけられたり 七 バプテスマをうけんとて
パリサイおよびサドカイの人々のおほくきたるをみて

これにいひけるハ蝮のすゑよ誰なんぢらにきたらんとせる怒をさくべきことをつげしや。さらバ悔改にかなふ果をむすべよ。なんぢら心のうちにわれらが先祖にアブラハムありといふなかれ。おほよそわれなんぢらにつげん。神ハこの石をもてアブラハムの子となしうるなり。いまや斧を樹のねにおかるゝ。ゆゑに善果をむすばざる樹ハきられてそ火になげいれらるべし。われハなんぢらを悔あらためさせんとて水をもてなんぢらにバプテスマをさづく。われよりのちにきたるものハわれよりまさりて能力あり。われハその履をとるにもたらず。かれハ聖靈と火をもてなんぢらに

バプテスマをさづけん 十二 手に箕をもちてその禾場(うちば)をきよめ麦(むぎ)をあつめてその倉(くら)にいれ糠(ぬか)ハきえざる火にてやくべし○このとき耶蘇(いえそ)ヨハネにバプテスマをうけんとてガリラヤよりヨルダンにきたりたまふ 十四 ヨハネ辞(じ)していひけるハわれハなんぢよりバプテスマをうくべきものなるになんぢかへつてわれにきたるか 十五 耶蘇こたへけるハしばらくゆるせ如此(かく)なしてのたゞしきことハわれらつくすべきなりとこゝにおいてヨハネこれをゆるせり 十六 耶蘇(いえそ)バプテスマをうけて水よりあがるとき天たちまちこれがためにひらけ聖霊(せいれい)の鴿(はと)のごとくくだりてそのうへにきたるところ 十七 また天より

聲ありてこはわがこゝろにかなふわが愛子なりといへり

第四章

さて耶穌せいれいにみちびかれて悪魔にこゝろみられんために野にゆきたまふ 二 四十日四十夜くらふことをたちたまひのち餓ゑぬ 三 こゝろむるものこのときいたりていひけるは。なんぢもし神の子ならば命じてこの石を餅とせよ 四 耶穌こたへつけるは人はパンのみにていくるものにあらずたゞ神の口よりいづるすべてのことばによるとしるされたり 五 こゝにおいて悪魔これを聖京にたづさへゆき殿のいたゞきにたゝせていひけるは 六 なんぢもし神の子ならばおのが身をしたへなげよそはなんぢがために神そのつかひたちに命

ぜんじのよしろ手(て)まそきらへてなんぢの足(あし)の下(した)にふませざるや
うたべしとあるなれたり 七 耶蘇(いえそ)これにいひけるは主(しゆ)たる
なんぢの神(かみ)をこゝろむべからずとまた録(しる)せり 八 あくま
またこれをいとたかき山(やま)にたづさへゆきて世界(せかい)のくにぐにと
その榮華(えいぐわ)とをみせて 九 なんぢもしひれふして我(われ)を拝(はい)せ
ばこれらをみななんぢにあたふべしといふ 十 耶蘇(いえそ)これに
いひけるはサタンよ去(さ)れぞ。主(しゆ)たるなんぢの神(かみ)を拝(はい)しただ
これにのみつかふべしと録(しる)されたり 十一 つひに悪魔(あくま)これを
はなれさり天使(てんのつかひ)たちきたりつかふ○ 十二 耶蘇(いえそ)ヨハネのとらへられし
ことをきゝてガリラヤにゆき 十三 ナザレをさりゼブルンと

ネブタリとのさかひなるうみべのカペナウムにいたりて
こゝにすまひけり 十四 これ預言者イザヤのことばに 十五 ゼブルンの
地ナブタリの地うみにそひたる地ヨルダンのむかふの地
異邦人のガリラヤ 十六 くらきにをる民はおほいな
る光をみ死地と死蔭にをるものゝうへにひかりいでた
りといひしことのかなはんためなり〇 十七 このときより耶蘇
はじめて道をつたへ天國はちかよれりあらためよといひ
たまへり 十八 耶蘇ガリラヤのうみべをあゆみてペテロとい
ふシモンその兄弟アンデレとふたりして海にあみをうつる
をみたり。このふたりは漁者なり 十九 これにいひけるは。われにし

たがへわれなんぢらを人をすなどるものとなさしめん 二十 かれ
らやがて網をすてゝ耶蘇にしたがふ 二一 こゝよりすゝみけ
るにまたほかの兄弟ふたり即ちゼベダイの子ヤコブとそ
のきやうだいヨハネ父ゼベダイとともに舟にてあみをつ
くろへるをみてこれをよびしに 二二 このものどもやがて舟と父
とをおきて耶蘇にしたがへり○ 二三 耶蘇ガリラヤをあまねく
めぐりてその會堂にてをしへをなし天國の福音をのべつた
へ[illegible]民のうちにあるすべての病すべてのわづらひをいや
しぬ 二四 その聲名あまねくシリヤにひろがりしかば人々すべ
てのわづらひ萬殊のやまひにかゝりくるしめるものあ

るいハ鬼につかれたるもの癲癇ちゆうぶのやまひあるもの

らをみなこれにつれきたりけれバこれを癒せり 二五 ガリラヤ

とデカボリス エルサレム ユダヤ ヨルダンのむかふより お

ほくの人々きたりしたがふ

第五章 一 耶蘇おほくの人をみて山にのぼり坐したまひけれ

バ門徒たちもそのもとにきたれり 二 耶蘇くちをひらきて

をしへいひけるハ 三 心のまづしきものハさいはひなり

そハ天國ハすなはちその人のものなれバなり 四 かなしむ

ものハさいはひなり そのひとハ安慰をうくべけれバなり

五 柔和なるものハさいはひなり そのひとハ地上を嗣こと

をつぐべけれバなり 六 うゑかわくごとく義をしたふものハ
さいはひなり その人ハ飽ことをうべけれバなり 七 あはれみ
ぶかきものハ福なり その人ハ矜恤をうべけれバなり
八 こゝろの清潔なるものハさいはひなり その人ハ神をみるこ
とを得べけれバなり 九 和睦をこのむものハさいはひな
り その人ハ神の子ととなへらるべけれバなり 十 たゞしき
ことのためにせめらるゝものハ福なり てんこくハかれ
らの人のものなるなり 十一 わがためにひとなんぢらを詬
譏りなやまし害いつはりしさまぐのあしきことをいはん。その
ときハなんぢらさいはひなり 十二 よろこびたのしめ 天にお

いてなんぢらの報賞おほいなれバなり なんぢらよりさき
の預言者をもかくせめたりき 十三 なんぢらハ地の塩
なり 塩もしその味をうしなハバ何をもてかもとの味に
かへさんや のちハ用なし そとにすてられて人にふまるゝのみ
十四 なんぢらハ世のひかりなり 山のうへにたてたる
城ハかくるゝことをえず 十五 燈をともして桝の下におかず
たゞ燭臺におきて家にあるすべてのものをてらすなり
十六 このごとくひとびとのまへになんぢらの光をかゞやか
せ さらバ人々なんぢらのよきおこなひをみて天にいます
なんぢらの父をあがむべし 十七 われ律法と預言者をこぼ

つるためにきたりとおもふなかれ。道わざをさらんとてきたり
まつるにあらず。かへつて成全せんためなり。十八 誡に
なんぢらにつげん。天地のつきざるうちに、おきての一點一畫
もとりけつくさずしてまつたることなし。十九 このゆゑに人もし
誡のいとちひさき一をやぶり、またそのごとく人にをしへ
なば天國において最小ものといはれん。おほよそこれをお
こなひ。このつ人にをしふるものは天國においておほいなる
ものといはるべし。二十 われ道なんぢらにつげん。學者とパリサイ
の人のたゞしきよりもなんぢらのたゞしきことまさらず
ばなんぢら決て天國にいることあたはず。二十一 いにしへの人に

つけて殺(ころす)ことなかれころすものは審判(さばき)にあづかるべしとい
へることはなんぢらがきゝしところなり
二二 されどわ
れなんぢらにつげん。すべて故(ゆゑ)なくしてその兄弟(きやうだい)をいかる
ものはさばきにあづかるべし。またその兄弟(きやうだい)をおろかものよ
といふものは集議(しふぎ)にあづかるべし。また狂妄(きやうまう)よといふものは
地獄(ぢごく)の火(ひ)にあづかるべし
二三 このゆゑになんぢもし禮物(そなへもの)
をたづさへて壇(だん)にゆきたるときそこにて兄弟(きやうだい)にうらま
るゝことあるとおもひいださば
二四 そのそなへものをだん
のまへに留(おき)おきてゆきてなんぢの兄弟(きやうだい)とやはらぎ後(のち)きたり
てなんぢのそなへものを獻(ささげ)よ
二五 なんぢをうつたふるもの

とゝもに途間にあるときすみくやはらげよおそらくハ訟
るものなんぢをしらべやくにわたし審官またなんぢをし
たやくにわたし遂になんぢハ獄にいれられん 二六 まことにまこ
とになんぢにつげん分釐までもつくのえざらバこのならバ
そこをいづることあたはざるなり○二七 いにしへの人につ
げて姦淫することなかれといへることあるをなんぢらが
きゝしところなり 二八 されどわれなんぢらにつげん。おほよ
そ婦をみて色情をおこすものハこゝろのうちにてすでにかん
いんしたるなり 二九 もしみぎの眼なんぢを罪におとさバぬ
きいだしてこれをすてよ。そハ五體のひとつをうしなふハ

全身ぢごくになげいれらるゝよりハまさるなり 三十 もしみぎの
手なんぢをつまづかせバきりてすてよ。そハ五體
のひとつをうしなふハぜんしん地獄になげいれらるゝよ
りハまされバなり〇 三一 またいへることありおほよそその妻
をいださんとせバこれに離縁状をあたふべしと 三二 されど
われなんぢらにつげん。姦淫のゆゑならでその妻をいだ
すものハこれにかんいんをおかさしむるなりまたいだされた
る婦をめとるものも姦淫をおこなふなり〇 三三 またいにし
への人に告ていつはりの誓をたつることなかれなんぢ
らちかひしことハ主にはたすべしといへることあ

こゝハなんぢらがきゝしところなり 三四 されどわれなんぢら
につげん。さらに誓ことなかれ。天をさしてもちかふなかれ。こ
れ神のくらゐなればなり 三五 地をさしてもちかふことなか
れ。これ神の足臺なればなり。ヱルサレムをさしてもちかふこと
なかれ。これ大王のみやこなればなり 三六 なんぢのかしらを
さしてもちかふなかれ。なんぢハひとすぢの髪だもしろくしくろ
くすることあたハざればなり 三七 なんぢらたゞ是々否々と
いへ。これよりすぐるハ悪よりいづるなり() 三八 目にて目を
つぐのひ齒にて齒をつぐのふといへることあるハなんぢ
らがきゝしところなり 三九 されどわれなんぢらにつげん悪

に敵することなかれ人なんぢの右の頬をうたば他の
の頬をもめぐらしてこれにむけよ 四十 なんぢを訟へて
裏衣をとらんとするものにハ外服をもまかせよ 四一 人
なんぢに一里の公役をしひなば之とともに二里ゆけ 四二
なんぢに求るものにハあたへ借んとするものをしりぞく
ることなかれ 四三 なんぢの隣をいつくしみてその敵をうらむ
べしといへることあるをなんぢらきゝしところなり 四四
されど我なんぢらにつげん。なんぢらの敵をいつくしみ。
なんぢらを詛ものを祝しなんぢらをにくむものを善視し。
なやめ迫害ものゝために祈禱せよ 此くするハ天にいま

ばなんぢらが父(ちゝ)の子(こ)とならんためなり。それ天(てん)の父(ちゝ)はその日(ひ)をよきものにもあしきものにもてらし雨(あめ)をたゞしきものにもたゞしからざるものにもふらせたまへり 四六 なんぢら自己(じぶん)をあいするものを愛(あい)するはなんの報賞(むくい)かあらん。みつぎとりもしかせざらんや 四七 安否(あんぴ)を兄弟(きやうだい)にのみとふは人(ひと)よりなんのまさりたることかあらん。稅吏(みつぎとり)もしかせざらんや 四八 このゆゑに天(てん)にいますなんぢらの父(ちゝ)の純全(まつたき)がごとくなんぢらも純全(まつたう)なるべし

第六章(だいろくしやう) なんぢら人(ひと)にみせんためにそのたゞしきを人(ひと)のまへに行(おこな)ふことをつゝしめ。もししからずば天(てん)にいますなんぢ

らの父よりむくいはえざれば 二 このゆゑに施濟をなすとき人のあがめをえんためにするは會堂や街衢にて偽善者のごとく鉦をふきならすことなかれ まことになんぢらにつげん彼らハすでにその報賞をえたり 三 なんぢらほどこしをするとき右の手のなすことを左の手にしらしむるなかれ 四 如此するハそのほどこしのかくれんがためなり さらば暗中にこゝろみたまふなんぢの父ハあらはに報たまふべし 五 なんぢいのるときに偽善者のごとくするなかれ彼らハ人にみられんがために會堂や街衢のすみにたちていのることをこのむ まことになんぢらにつげん彼らハすでに

その報賞をあたへたまへり 六 なんぢいのるときハ密室にいりて門を
とぢてかくれたるにいますなんぢの父にいのれさらバこの
ことをみたまふなんぢの父ハ明顯にむくいたまふべ
し 七 なんぢらいのるときハ異邦人のごとくくりかへしご
とをいふなかれかれらハ言おほきによりてきかれんとおも
へり 八 このゆゑにかれらにならふことなかれなんぢらの
父ハねがはざるさきにそのなんぢらのもとむるものをしりたまへ
ばなり 九 さればなんぢらかくのごとくいのるべし天にましま
すわれらの父よねがはくハ聖名をあがめさせたまへ 十 神國
をきたらせたまへ聖旨の天になるごとく地にもなさせた

まへ 十一 われらのなくてならぬ糧をけふもあたへたまへ 十二
われらに罪をおかすものをわれがゆるすごとくわれらのつ
みを免したまへ 十三 われらをあしきことにさそはせずなほ
惡よりすくひいだしたまへ。國と權と榮はなんぢのかぎり
なくたもちたまふものなればなり。アーメン 十四 なんぢらもし
人のつみをゆるさば天にましますなんぢらの父もまたなん
ぢらをゆるしたまはん 十五 されどもし人のつみをゆるさゞ
ればなんぢらの父もなんぢらの罪をゆるしたまはざるべ
し 十六 なんぢら斷食するとき偽善者のごとく憂容をなする
なかれ かれらはだんじきを人にしめさんために顔色をそこ

そのふつうにまことにあんぢらにつげん。このものらハすでにその
むくいをえたり 十七 なんぢ断食するときハかしらにあぶら
をぬり面をあらへ。このくさるハなんぢのだんじきを人にみへ
ざらしそ暗中にいますなんぢの父にあらはれんがためなり
さらバこのくらきにてみたまふなんぢの父ハあらはに報た
まふべし 十九 蟲くひ銹くさり盗うがちてぬすむところの
地にたからをたくはふることなかれ 二十 蟲くひ銹くさり盗
うがちてぬすまざるところの天にたからをたくはふべし 二十一
そハなんぢらの財寶のあるところに心もまたあるべければ
なり 二十二 身のひかりハ目なり。もしなんぢの目おさまらバ

ならば全身もまたあきらかなるべし
二三 されどなんぢの目あしからば全身もくらかるべしこのゆゑになんぢのうちの光もしくらくならばその暗こといかばかり大ならずや○
二四 人はふたりの主につかふることあたはずあるはかれをにくみこれを愛しあるはこれにしたしみかれをかろしむべければなりなんぢら神と財貨とにかねつかふることあたはず
二五 このゆゑに我なんぢらにつげん。生命のためになにを食ひなにをのまんと身のためになにを衣んとおもひわづらふことなかれいのちは糧よりまさり身は衣よりもまさるものならずや
二六 なんぢらそらの鳥をみよ稼ことなくかることをせず

倉にたくはふることなししかるになんぢらの天の父ハこ
れをやしなひたまへりなんぢらハこれよりもはなはだまさ
るものならずや 二七 なんぢら誰かよくおもひわづらひ
てそのいのちを寸陰ものべえんや 二八 またなにゆゑ衣の
ことをおもひわづらふや野の百合花をいかにしてそだつ
かを思ひ見よ労めず紡がざるなり 二九 われなんぢらにつげん
ソロモンの栄華の極のときだにもこの花のひとつほどもよ
そほはざりき 三〇 神ハけふ野にありてあす爐になげいれらる
る草をもかくよそほはせたまへバましてなんぢらをやあゝ
信仰うすきものよ 三一 さればなにをくらはんなにを飲まんなにを

衣んとておもひわづらふなかれ 三二 これみな異邦人のもと

むるものなり。なんぢらの天の父ハすべてこれらのもの

なくてならぬことをしりたまへり 三三 なんぢらまづ神の國

とその義とをもとめよさらばこれらのものハみななんぢ

らに加へらるべし 三四 このゆゑに明日のことをおもひわづら

ふなかれ。明日ハあすのことをおもひわづらへ。一日の苦勞

ハいちにちにて足り

第七章

人のつみをさだむることなかれ。おそらくハなんぢ

らもまたつみをさだめられん 二 なんぢらが人のつみを定る

ごとくおのが罪をもさだめらるべし。なんぢらが人を量る

くゝおのますよりなんぢらはからるべし。三なんぢ兄弟の目にあるちりをみておのが目にある梁木をしらざるはなんぞや。四おのれが目にうつばりのあるにいかで兄弟にむかひてなんぢが目にある物屑をとりさらせよといふことをえんや。五偽善者よまづおのれの目よりうつばりをとりさらば兄弟の目より物屑をとることあきらかにみゆべし。六犬に聖物をあたふるなかれ。また豕のまへになんぢらの珍珠をなげあたふることなかれ。おそらくは足にてこれを践ふりかへりてなんぢらをかみやぶらん。七求よさらばあたへられん。たづねよさらばあはん。門をたゝけよさらばひらかるべし。こ

ことを得ん、すべてもとむるものハ得たづぬるものハ
あひ門をたゝくものハひらかるべければなり 九 なんぢら
のうち誰かその子パンをもとめんに石をあたへん人や 十 また
さ魚をもとめんに蛇をあたへん人や 十一 さらバなんぢらあし
きものなから善賜をその子にあたふるをしる。ましてや天に
いますなんぢらの父ハもとむるものによきものをあたへざ
らんや 十二 このゆゑにすべて人にせられんとおもふごとく
なんぢらも人にもそのごとくせよこれ律法と預言者な
るなり 十三 せまき門よりいれよほろびにいたる路ハひろ
しその門ハおほきなりこれよりいるものおほし 十四 生命にい

たゞるみちハせまくその門ハしひさしその路をこゝるもの
まれなり（十五）いつわりの預言者といましめよこのものハ綿羊
のそぶりをまねてきたれども内ハあらき豺狼なり
十六 このゆへその果によりて志るべし誰かいばらより葡萄をと
りあざみより無花果をとることをせん 十七 すべて善樹ハよ
き果をむすびあしき樹ハあしきみをむすべり 十八 よき樹ハ
悪果をむすぶことあたはずあしき樹ハよきみをむすぶことあたはざ
るなり 十九 およそよきみをむすばざる樹ハきられて火に
なげいれらる 二十 このゆへにその果によりてこれをしるべ
し（二十一）われをよびて主よ主よといふものことごとく天國に

いるにあらずたゞてんにいるものはわが天にいます父の
旨を為すもののみなり 二二 その日おほくの人われに主よ
主よわれら主の名によりてをしへ主の名によりて鬼をおひ主の
名によりて多の異能をなせしにあらずやといふものおほか
るらん 二三 そのときこのものにつげて我嘗てなんぢらを
しらず悪をなすものよわれをはなれされといはん 二四 この
わがことばをきゝてそのことばをきゝておこなふものを磐
のうへに家をたてたるかしこき人にたとへん 二五 雨ふりお
ほみづいで風ふきてその家をうてどもたふれざりしことなし
これいはを根基となしたればなり 二六 すべてわがこのことを

ことをきゝておこなはざるものを沙(すな)のうへに家(いへ)をたつる
おろかなる人(ひと)にたとへん 二七 あめふりおほみづいでかぜふき
てその家(いへ)をうてばつひにたふれ傾覆(たふれ)てそのたふれおほいなり
二八 耶穌(いゑす)これらのことを言竟(いひをはり)たまへるときおほくあつまりたる人(ひと)
々そのをしへをおどろきあへり 二九 それは學者(がくしや)のごとくならず
き權威(けんゐ)をもてるもののごとくをしへたまへばなり

第八章 一 耶穌(いゑす)やまをくだりしときおほくの人々(ひと〴〵)これにしたがひし
が 二 一人の癩病(らいびやう)のものきたりて拜(はい)していひけるは主(しゆ) [illegible]
みこゝろならばわれをきよくなしうべし 三 耶穌(いゑす)手(て)をの
べふれていひけるはわれこのむなり潔(きよ)くなれといひけれ

バらいびやうだちにきよまれり耶蘇これにいひけるは
慎て人につぐるなかれたゞゆきておのが身を祭司にみせこの
つモーゼが命ぜしそなへものをさゝげてかれらに證據と
せよ○五耶蘇カベナウムにいりしとき百夫の長きたりねがひ
ふていひけるは六主よわがしもべ癱瘋をやみて家にふしゐ
てたるはぶゝるやめり七耶蘇いひけるはわれゆきてこれを
いやすべし八百夫のかしらこたへけるは主よわれあなた
をわが家裏にいれまつるはおそれおほしたゞ言をいだ
したまはゞわが僕はいえん九それはわれも人の權威の下にあ
るものにてわがもとにも兵卒ありてこれにゆけとい

へゑ申さ、この道をまきゝつる我しもべまこと道と
なせといへばなすなり行が思ふなり 十 耶蘇これをきゝて
おやしみふかくへるくみな人々にいひけるハ。わが誠にいふなん
ぢらはつけんイスラエルのうちにもまだかいまふこゝろる篤信は
あらざるなり 十一 なを道なんぢらはつけんおほくのひとびと東
よりも西よりもきたりてアブラハム イサク ヤコブともに天國
にまじはり 十二 國の諸子はそとのくらきにおひいださるそこには
てこのなげしをしり切齒するこゝとわらしん 十三 耶蘇ひやくまんの長に
はけなんぢが信仰のごとくなんぢに成べしといひたまへく
その時その僕いいえけり 十四 耶蘇ペテロの家にいりそ

のはゝおやの熱とわづらひふしゐたるを見て　十五　その手に
さわりければそのねつさりぬ。婦おきてかれらに供事　十六
ひくれたるとき人々鬼につかれたるものをおほくつれ
きたりければ耶蘇ことばにて鬼をおひいだし病あるもの
をことごとくいやせり　十七　預言者イザヤによりてみづからわれ
らの恙をうけわれらの病をおふといひたまひしことのかな
はせんがためなり○　十八　さて耶蘇おほくの人々はおのれをと
りまくをみて門徒に命じむかふの岸へはやくわたらんとしたまひ
ける　十九　ある學者きたりていひけるハ師よいづこへゆき
たまふともしたがはん。耶蘇これにいひけるハ狐ハあ

あなあり そらの鳥ハすあり されど人の子ハまくらするところ
なし また でしのひとりいひけるハ主よまづゆきて父
をはうむることをわれにゆるせ 二二 耶蘇いひけるハわれに
したがへ死たるものハそのしにたるものをはうむらせよ
二三 耶蘇ふねにのりければ門徒たちもこれにしたがふ 二四 こ
のときおほいなる颶風おこりて舟をおほふばかりなる浪
たちしに耶蘇ハいねたり 二五 でしたちこれにちかづきてお
こしいひけるハ。主よすくひたまへわれらほろびんとす 二六
耶蘇かれらにいひけるハ信仰うすきものよなんぞおそる
るやといひておきて風と海とをいましめければおほいにな

ざやかになりぬ 二七 人々あやしみていひけるハこハいかな
る人ぞこの風も海もしたがひたり 二八 耶穌むかふの岸
のきしなるガダラ人の地にいたりたまへるに鬼につかれたるもの
ふたりのもの墓よりいでゝこれをむかふ 彼輩ハ
すこぶるはげしくしてそのみちを人のすぐることあたはざり
しほどなり 二九 よばはりさけびていひけるハ神の子耶穌よ我ら
なんぢとなんの與かあらんやいまだ時いたらざるに我ら
をせめんとてここにきたりしか 三十 それよりとほくはなれて豕のおほ
くのむれ食しゐけるが 三一 鬼ども耶穌にねがひていひけるハ
もしわれらをおひいださんとならバ豕のむれにいることを

をゆるせ三二のまてらはゆはにといひければ鬼いでゝぶたのむ
れにいりしはすべての群さんまりこのけゝ海にいり水におぼ
れり 三三 牧者どもむらにはにげゆきてこのことく鬼につか
れしもののことをつげしかば 三四 耶蘇にあはんとて邑
のものこぞりていできたりこの人を見てこの境をいでんこ
とをねがへり

第九章 耶蘇ふねにのりかへりて故邑にいたりければ 一 癱
瘋にて床にふしたるものとひとびと舁きたりけり耶蘇このもの
が信ずるをみてちゆうぶのものにいひけるは子よこゝろ
やすくあれなんぢの罪ゆるされたり 二 ある學者たちこゝろ

のうちにいひけるハこの人ハけがしごとをいふなり　耶穌
そのおもひをしりていひけるハなんぢらハなにゆゑ心に
惡をおもふやなんぢの罪ゆるされたりといふと起てあ
ゆめといふといづれがやすきぞ　然ど人の子ハ地にてつみを
ゆるすの權あることをなんぢらにしらせんためにとて　癱
瘋のものにおきてねどこをとりて家にかへれといひけれバ
おきてその家にかへりゆきぬ　人々これを見ておそれかゝる
のごとき權をひとにあたへし神をあがめたり　耶穌こゝ
よりすゝみゆきてマタイといへる人の稅關にざしけるを
見ていひけるハわれにしたがへといひけれバ起てしたがへり　耶

穌のまへいへにて食するとき税吏つみある人おほくきたりて耶穌およびそのでしとともにざしけるが　十一パリサイの人これをみてそのでしにいひけるはなんぢらの師はなにゆゑに税吏や罪ある人とともに食するや　十二耶穌きゝていひけるはすこやかなるものは醫のたすけをもとめずたゞ病あるもののみこれをもとむ　十三なんぢら矜恤をこのみて祭祀をこのまずといふ此はいかなることぞゆきてまなぶべしそはわがきたるはたゞしき人をまねくためにあらず罪あるひとをくいあらためさせんがためなりしそのときヨハネのでし耶穌にきたりていひける

われらとパリサイの人ハしバしバ斷食するに師のでしハだんじきせざるハなにゆゑぞ耶穌こたへていひけるハ新郎の友その新郎とともにをるうちハかなしむことをえんや將來新郎をひきとらるゝ日きたらんそのときにハ斷食すべきなりたれもあたらしき布をもてふるき衣をつゞくるものハあらじぞ補しところのものハかへつて衣をやぶりその綻いよいよおほきくなるべしまたあたらしき酒をふるきかはぶくろにいるゝものハあらじもししかせバ嚢さけ酒もこぼれいでゝそのふくろもまたむなしくならん新嚢ハあたらしきさけをいれなバふたつながらたもつ

べし」と。耶蘇のまだこのことをいへるときある宰きたり
拜していひけるはわがむすめいまはや死ぬ。きたりてその
御手をそれにつけたまはゞ生べし。十九耶蘇たちてかれにしたが
ひその門徒どももまたゆく。二十十二年血漏をわづらひたる婦
うしろよりきたりてその衣のすそにさはれり。二十一そはひそかにこ
ころにたゞまさにすそにさはるとも愈んとおもへばなり。二十二耶蘇ふりか
へり婦をみていひけるは。むすめよ心やすかれ。なんぢの信
仰なんぢをいやせり。をんなそのときより愈ぬ。二十三い
えそ宰のいへにいりて笛ふくものおよびおほくの
なきいるゝくをみて二十四いひけるは退むすめはしぬる

にあらずたゞいねたるのみとひと〴〵耶蘇をあざわらふ 二五
このものどもをいだしゝのちいりてその手をとりしに女おきあが
り 二六 このきこえあまねくその地にひろまりぬ 二七 耶蘇こゝ
をさるときふたりの瞽者したひてよばはりけるはダビデ
の子よわれらをあはれみたまへ 二八 耶蘇いへにいりしにめ
しひきたりけれバこれにいひたまひけるはわれよくこのこ
とをなしうると信ずるやといひけるに主よしかり 二九 耶蘇
かれらの目に手をつけてなんぢらの信ずるごとくなんぢ
らになるべしといひけれバ 三十 その目ひらけゝり耶蘇きびし
くいましめてこれにいひけるはつゝしみて人にしらする

なにとれにさうれどもこのもてにいでゝあまねくその地に耶蘇の
名をきゝたまひけり。三二 めしひのいやるしきひとびと鬼につかるゝの
つうぞくある瘖瘂を耶蘇につれきたりしに、三三 鬼おひいださ
れておしものいひけり。衆人あやしみいひけるは、イスラヱルの
うちにかゝることいまだみえざりき。三四 パリサイのひとびと
いひけるは、この鬼の王のちからによりておにをおひいだせる
なりと。三五 耶蘇あまねくむらざとをめぐりその會堂にてを
しへ天國の福音をのべつたへ、民のうちなるもろもろ
ての病もろもろのわづらひをいやせり。三六 衆人のなやむのなき
羊のごとくなやみまよひ流離するありしゆゑにこれを見てあ

あはれみたまふ 三七 そのときでしたちにいひけるハ收穫ハお
ほくはたらく人ハすくなし 三八 ゆゑにその穡主にたのみてか
りいるゝものをおくらんことをねがふべし

第十章 一 さて耶蘇その十二でしをよびよせけれバけがれたる
鬼をおひいだしまたもろ〳〵のやまひもろ〳〵のわづらひを
いやす權をたまへり 二 それ十二使徒の名ハさのごとし 首
なハペテロとなづけたまひしシモン その兄弟アンデレ
ゼベダイの子ヤコブ そのきやうだいヨハネ 三 ピルボ バルトロマイ
トーマス 稅吏マタイ アルパイの子なるヤコブ タツダイとなづく
るレツバイ 四 カーンのシモン イスカリオテのユダ これはそれ

ち耶穌をうらさせしものなり○九耶穌この十二をつかはさんとして命じいひけるハ異邦の途にゆくなかれまたサマリヤ人のむらにもいるなかれ六ただイスラエルの家のほかれたる羊にゆけ七ゆきて天國ちかきにありとのべつたへよ八病のものをいやし癩病をきよくし死たるものをよみがへらせ鬼をおひいだすことをせよ。なんぢら價なしにうけたれバまた價なしにほどこすべし九なんぢら金または銀またハ錢をたくはふるなかれ十たびぶくろ二のしたぎ履ハ杖もまたすなかれそハはたらくものハその食物をうるハ宜なりけれバ十一おほよそ郷邑にいりてもそのうちの好人をたづ

づねそこをいづるまではそこにとゞまれ 十二 人のいへにいらバ
その平安をとへ 十三 その家もしやすきをうべきものならバ
なんぢらのねがふ平安ハそのいへにいたるべし。もしやすきを
受べからざるものならバなんぢらの祈ふやすきハなんぢ
らにかへるべし 十四 およそなんぢらを接ずなんぢらの言を
きかざるものあらバその家またハその邑をさるとき足の
ちりをはらへ 十五 われまことになんぢらにつげん審判の日
いたりてハソドムとゴモラの地ハこの邑よりもなほやすか
らん〇 十六 われなんぢらをつかはすハ羊を狼のなかにいる
るがごとし ゆゑに蛇のごとくさとく鴿のごとくおとなし

このゆゑにつゝしみて人にこゝろせよ。それ人なんぢらを集議所にわたしまたその會堂にてむちうつべければなり。またわが縁故によりて侯伯および王のまへにひかるべし。これかれらと異邦人に證をなさんがためなり 十九 人なんぢらを解さばいかになにといはんとおもひわづらふなかれ。そのときいふべきことはなんぢらに賜るべし 二十 これなんぢらみづからいふにあらずなんぢらの父の靈そのうちにありていふなり 二十一 兄弟はきやうだいを死にわたし父は子をわたし子はふたおやを訴へこれをころさしむべし 二十二 またなんぢらわが名のためにすべての人ににくまれん。され

終(をはり)まで忍(しの)ぶものハすくはるべし 二三 この邑(むら)にて人(ひと)なんぢらをせめなバほかのむらにのがれよ われまことになんぢらにつげん。なんぢらイスラエルのむら〳〵をめぐりつくさざるうちに人(ひと)の子(こ)ハきたるべし 二四 でしハ師(し)よりまさらず しもべハ主(あるじ)よりまさらざるなり 二五 でしハその師のごとく僕(しもべ)ハそのあるじのごとくならバ足(たり)ぬべし。もし人(ひと)あるじをよびてベルゼブルといはヾましてその家(いへ)のものをや 二六 このゆゑにかれらをおそるゝことなかれ。おほはれて隱藏(かくれ)たるものあらはれざるものなくかくれてしられざるものなけれバなり 二七 われ暗中(くらき)においてなんぢらにつげしことを明處(あかるき)にてのべよ。

耳(みゝ)をつけてきゝしことを屋上(やのうへ)にいひひろめよ 二八 身(み)をころしゝて霊魂(たましひ)をころすことあたはざるものを懼(おそ)るゝなかれ。唯(たゞ)なんぢらたましひとからだとを地獄(ぢごく)にほろぼしうるものをのみおそれよ 二九 二羽(は)の雀(すゞめ)ハ一銭(せん)にてうらるゝにあらずやしかるになんぢらの父(ちゝ)のゆるしなくバそのいちも地(ち)におつることなかるべし 三十 なんぢらのかしらの髪(け)までもことごとくかぞへらるゝ 三一 ゆゑにおそるゝなかれなんぢらハおほくの雀(すゞめ)よりもまさるなり 三二 されバおほよそ人(ひと)のまへにわれをあらはすごとくいはんものをわれも天(てん)にいますわが父(ちゝ)のまへにこれをあらはさん 三三 人(ひと)のまへにわれをいなまんものをわれも天にいますわが父のまへにこれをいなまんもの

をまたわれも天にいますわが父のまへにてこれをしらずと
いふべし〇 三四 地におだやかをいださんためにわれきたれ
りとおもふなかれ泰平(おだやか)をいださんとにはあらで刃(やいば)をいださ
んためにきたれり 三五 それわれがきたるは人をその父(ちゝ)にそむ
かせ女(むすめ)をその母(はゝ)にそむかせ媳(よめ)をその姑(しうと)にそむかせんがた
めなり 三六 人の敵(かたき)はその家(いへ)のものなるべし 三七 われよりも
父母(ちゝはゝ)をいつくしむものはわれにかなはざるものなり。われ
よりも子女(むすこむすめ)をいつくしむものもわれにかなはざるものな
り 三八 その十字架(じふじか)をとりてわれにしたがはざるものもわれに
は宜(ふさは)ざるものなり 三九 その生命(いのち)をうるものはこれをうしな

ひ我ためにいのちをうしなふものハこれを得べし 四十 なん
ぢらを接るものハわれをうくるなりまた我をうくるもの
ハわれをつかはせしものをうくるなり 四十一 預言者なるをも
てそのよげんしやを接るものハよげんしやのむくいをう
け義人なるをもてそのたゞしき人をうくるものハたゞし
き人の報賞をうくべし 四十二 わが門徒なるをもてそのちひさき
ひとりのものにひやゝかなる水一杯をもてのまするもの
ハ誠になんぢらにつげんこのものハそのむくいを失ハじ

第十一章

耶穌その十二でしに命ずることをはりてさり道
をとき、ひとびとをすゝめんがためにこのまちの諸邑にゆけり さ

てヨハネ獄にてキリストのなせしことをきゝてそのでし二人
をこのきミにつかはして 三 いはせけるハ来るべきものハなん
ぢなるかまたハわれら他にまつべきかと 四 耶蘇こたへて
いひけるハなんぢらが聞ところみるところのことを
ヨハネにゆきてつげよ 五 瞽者ハみ跛者ハあゆミ癩病ハきよ
まり聾者ハきゝ死たるものハいきかへらされ貧者ハふく
いんをきかせらる 六 おほよそわれのためにつまづかざるも
のハ福なり ○ 七 このものらのさるのち耶蘇ヨハネのことを
ひと〴〵にいひけるハなんぢら何をみんとて野にいでし
や風にうごかさるゝ葦なるか 八 さらばなにをみん

んとていでしや美服をきたる人なるか。やはらかきころもをきたるものハ王宮にあり 九 さらばなにをみんとていでしや預言者なるか。然りわれなんぢらにつげん、これハよげんしやよりもまされたるものなり 十 それなんぢにさきだちて道をそなふるわが使者を[illegible]なんぢのまへにおくらんと録されたるハ[illegible]是なり 十一 まことになんぢらにつげん婦のうみたるもののうちいまだバプテスマのヨハネより大なるものおこらざりき。されど天國のいとちひさきものもかれよりハおほいなるなり 十二 バプテスマのヨハネのときより今にいたるまで人々はげみて天國をとらんと

をそがけミたるものハこれをとりさる 十三 それすべての預言者と律法のよげんしたるハヨハネのときまでなれバなり 十四 もしなんぢらうけがふことをえバこのきたるべきエリアハこれなり 十五 耳ありてきくゆるものハきくべし○

十六 われこの世をなににたとへんや童子ちまたにすわりその侶をよびてわれら笛ふけどもなんぢらおどらず哀をあらはせどもなんぢら胸うたずといふに似たり 十八 それヨハネきたりて食ことも飲ことをせざれバ鬼につかれたるものなりと人人いへり 十九 人の子きたりてくらふことをし飲ことをすれバ食をたしミ酒をこのむ人ミつぎとり罪あるもの

友ありといふされども智慧ハちゑの子に義とせらるゝな
り○二十 そのとき耶穌おほくの異能をなしたまひたる諸邑
のものおらためざるによりて責いひけるハ 二一 わざは
ひなるかなコラジンよ禍なるかなベツサイダよなんぢら
のうちになせし異能をもしツロとシドンになせしならば
このまちハそのむかし麻衣をき灰をかむりてくいあらためしなる
べし 二二 されどなんぢらにつげん審判の日にハツロとシドン
の刑罰ハなんぢらよりもなほやすからん 二三 またでに天にま
であげられしカペナウムよまさに陰府におとさるべしそハな
んぢらに行しことなるわざをもしソドマになせしならば

今日までも存りをりしならん 二四 されどなんぢらにつげん
審判の日にはソドムの地はなんぢらよりもなほ易かるべし
○二五 そのときイエス應へていひけるは天地の主なる父よ汝は
このことを智者さときものにはかくして赤子にあらはしたまふた
まふを謝す 二六 ちゝよ然りかくのごときは聖旨にかなへ
るなり 二七 父はわれに萬物をあたへたまへり。ちゝのほかに
子をしるものなく また子およびこの子のあらはさんとするもの
のほかは父をしるものなし○二八 すべて勞たるものおよび
重をおへるものはわれにきたれ われなんぢらをやすませ
ん 二九 われはこゝろ柔和にして謙遜ものなればわがくびき

を負てわれにまなべなんぢらこゝろに平安をうべし 三十 それ
わが軛はやすくわが荷はかろければなり

第十二章 そのころ耶蘇あんそくにちに麦田をすぎしにその
でしたち飢て穂をつみはじめたり 二 パリサイの人これをみて
て耶蘇にいひけるはなんぢのでしは安息日になすまじきこ
とをなせり 三 こたへていひけるはダビデおよび従にあり
しものゝ饑しときなしたることをいまだよまざるや 四 すなは
ち神の殿にいりて祭司のほかはおのれおよびともなる
ものもくらふまじきそなへの餅をとりくらひ 五 またあんそ
くにちに祭司は殿のうちにて安息日を犯せどもつみな

きことは律法においてよまざるか 六 われなんぢらにつげん殿よりもおほいなるものこゝにあり 七 われ矜恤をこのみて祭祀をこのまずといふはいかなることかをしらば罪なきものをつみせざるべし 八 それ人の子はあんそくにちの主たるなり 九 かくてそこをさりてかれらの會堂にいりしに 十 一手なへたる人ありければかれら耶穌をうつたへんとてこゝろみにとひけるは安息日にいやすはよろしきかと 十一 このときかれらにいひけるはなんぢらのうちにひとりの羊をもてるものありてもしその羊あんそくにち坑におちいらばいかでこれをとりあげざることのあらん 十二 人はひつじよりまさること

いくばくまさりぞや されば安息日に善をなすハよし 十三 つひに
その人に なんぢの手をのべよといひければ のばせり また
たちまち他方の手のごとく愈 十四 パリサイのひとびといでて 耶蘇を
ころさんとはかりけり 十五 耶蘇これをしりてそこをさりしに
おほくの人々これにしたがへり すべて疾病あるものをいやせるが
いやし 十六 これを人にあらはすことなかれと戒たまふ 十七 これ
預言者イザヤのいひしことをなしとげんとてなり 十八 いはく わがえらびしわが
僕 わがこゝろにかなひたるわが愛ものなり わが
靈をかれにくだすべし かれ異邦人にことわりをしめすべし 十九 かれハ
爭ことなく 喧ことなく 人ちまたにおいてそのこゑをきかず

ことなし 二十 眞道をして勝をえしむるまでハいためる葦を
をることなくけぶれる麻をけすことなし 二一 異邦人もまたさ
その名によるべしとのぞみをもたんためなり○ 二二 こゝに
ま鬼につかれたるめしひの瘖なるものを耶蘇のもとにつ
れきたりけれバこの瘖のおしをいやしてものいひみる
やうになせり 二三 衆人ことごとくあやしみていひけるハこれダビデ
の子ならずや 二四 パリサイの人きゝていひけるハこの
人ハおにのかしらベルゼブルをつかふにあらざれバ鬼をお
ひいだすことなし 二五 耶蘇そのこゝろをしりてこれにいひ
ひけるハすべてあひあらそふ國ハほろびまたあひあらそ

そふ邑(いう)や家(いへ)はたゝつくことぞ 二十六 サタンもしサタンをおひい
だすならばみづからあひあらそふなり。さらばその國(くに)いかで存(た)
たんや 二十七 もしわれベルゼブルによりて悪鬼(あくき)をおひいださ
ばなんぢらの子弟(こども)はたれによりておひいだすや。それゆゑにかれ
らはなんぢらの裁判人(さばきびと)となるべし 二十八 もしわれ神(かみ)の靈(みたま)によ
りておにをおひいださばなんぢらは神(かみ)の國(くに)はやくもなんぢら
にいたれり 二十九 まづ勇士(ますらを)をまづしばらざればいかでその家(いへ)
にいりてそのたからをうばふことをえんや縛(しば)りてのちはその
いへをうばふべし 三十 われとともならざるものはわれにそむ
き われとともに斂(をさ)めざるものはちらすものなり 三十一 この故(ゆゑ)に

なんぢらにつげん人々のすべておかすところのつみと神
をけがすことハゆるさるべしされどひと〴〵の聖霊をけがすこ
とはゆるさるべからず
三二 言をもて人の子にさからふもの
はゆるさるべしされどことばをもて聖霊にさからふものハ今
世においても来世においてもゆるさるべからず
三三 あ
るひハ樹をもよしとしその果をもよしとせよ。あるひハ樹
をもあしゝとしその果をもあしゝとせよ。そハ樹ハその果
によりてしらるればなり
三四 あゝ蝮のすゑよなんぢら悪にし
ていかで善をいふことをえんや。そハ心にみつるより口に
いはるゝものなれバなり
三五 よき人ハこゝろの善庫よりよ

きものをいだし 悪人ハそのあしきくらより悪ものをいだせり〇三六 われなんぢらにつげんすべて人のいふところの虚言もさばきの日にこれをうつたへざるを得じ。三七 それなんぢそのいふところのことばによりて義とせられまたそのいふところのことばによりて罪ありとせらるゝなり〇 三八 このときある學者とパリサイのひと〴〵こたへていひけるハ師よ奇蹟をなしてわれらにみせんことをなんぢに請 三九 こたへてこれらにのたまひけるハ 奸悪なる世ハしるしをもとむされど預言者ヨナのしるしのほかハしるしをあたへられじ。四〇 それヨナが三日三夜うをのはらのうちにありしごとく人の子

もみつかみよは地のうちにあるべし 四一 ニネベの人さばきの
日にはともにたちて今の世のつみをさだめん。かれらはヨナ
のをしへによりて悔改たり。それヨナよりおほいなるもの
こゝにあり 四二 南の女王さばきの日にはともにたちていまの
世のつみをさだめん。かれは地の極よりソロモンの智慧をきゝ
にきたれり。それソロモンより大なるものこゝに
あり 四三 あくき人よりいでゝかわきたるところをめぐり安
息をもとむれどもえずしていひけるは 四四 わがいでし家に
かへらん、きてはきたりしは空虚にしてはききよめかざり
たるをみる 四五 遂にゆきて他のおのれよりあしき七の悪鬼を

たゞひとつところにまいりてこゝに居べ その人ののちのありさまハまへよりなほあしくなるべし。このあしき世もまたかくのごとくなるらん 四六 耶蘇ひとびとにかたりをするときその母と兄弟このまゝにものいはんとてそとにたちけるが 四七 あるひと耶蘇にいひけるハなんぢの母ときやうだいなんぢにものいはんとてそとにたてり 四八 耶蘇つげしものにこたへていひけるハわが母ハたれぞわが兄弟ハたれぞや 四九 手をそのへその門徒をさしていひけるハ。これわがはゝわがきやうだいなり 五十 そハなにぞわが天にいます父の旨をおこなふものハこれぞわが兄弟わが姉妹わが母なるとぞなり

第十三章 この日耶穌いでゝうみべに坐せしに おほくの人
人この處にあつまりきたりければ耶穌はふねにのりてざし
すべての人々はきしにたてり 三 耶穌たとへをもてさま〴〵
のことをひと〴〵にかたりぬ 種まくもの まきにいでしが 四
播るときみちのほとりにおちしたねあり そらの鳥きたり
てついばみつくせり 五 また土うすき磽地におちしたねあ
りたゞちにはえいでたれども 六 日のいでしときやかれて
根なきがゆゑにかれたり 七 また棘中におちしたねあり。
いばらそだちてこれをふさぎけるに 八 また沃壌におちしたね
あり實をむすべることあるひは百倍あるひは六十倍ある

ひハ三十倍せり 九 耳ありてきこゆるものハきくべし 十 門
徒たちきたりてこのせまいひけるハなにゆゑ譬をもてこの
せらにかたりたまふや 十一 こたへていひけるハなんぢらにハ
ハ天國の奧義をしることをあたへ、たまへどもこのくにびとにハあ
たへ、たまはざるなり 十二 それもてるものハ予られてなほあ
まりあり 無有ものハそのもてるものをもとらるべ
し 十三 このゆゑに視てもみず 聴てもきかざるがゆゑ
にたとへをもてこのせまにかたる 十四 イザヤの預言に
なんぢらハきけどもさとらずみれどもみず 十五 そハこの民の
ますて見つやまのてきてころろまてさとり悔改てすくはれんや

ふまんことをおそれその心をとじかくし耳をおほひ目をとぢこ
めたるなりといひしはこのことなり　十六　されどなんぢらの目ハミな
んぢらの耳はきくがゆゑにさいはひなり　十七　まことに
なんぢらにつげんおほくの預言者と義人はなんぢらが見
るところをみんとしたりしが見ることをえずなんぢらがき
くところをきかんとしたりしが聞ことをえざりき　十八　ゆゑ
はなんぢら播種のたとへをきけ　十九　天國のをしへをきゝて
さとらざればあしきものきたりてその心にまかれたるた
ねをうばふこれ路のほとりにまきたるたねなり　二十　磽地に
まかれたるたねはこのをしへをきゝてすみやかによろこ

びらくれても 二 おのれは根なければえだもしのぎをしくへのた
めには患難あるひはせめくるしむことのおこるときにはたちまち
ち道はつまづくものなり 三 またはなにかのなやみはまねきた
る種はこれをしへときけどもこの世のこゝろづかひと
貨財のまどひはをしへをふさぎてみのらざるものなり
沃壤にまかれたるたねはこれをしへをきゝてさとり實
をむすぶことあるひは百倍あるひは六十倍あるひは三十
倍をなすものなり() 四 またたとへをとりてはなしていひ
けるは天國は人はたけによきたねをまくにゝたり 五
ひとゞのいねたるうちにその敵きたりて麥のなかにこれを

むぎとまきてさりけり　二六 苗はえいでゝみのりたるときにからすむぎもあらはれたり　二七 あるじの僕きたりていひけるは主よはたけには美種をまかざりしや。いかにしてからすむぎあるや　二八 あるじはいひけるは敵人これをなせり、しもべ主にいひけるは、しからばわれらゆきてこれをぬきあつむるをよしとするか　二九 否なんぢらからすむぎを抜あつめんとて麥をもともにぬくべし　三十 收穫までふたつながらそだてあげ。かりいれのとき先からすむぎをぬきあつめそれをやかんためにこれをつかね、麥をばわがくらにをさめしめよといはん　三一 またたとへをこれらにしめしいひけるは

天國(てんごく)ハからしだねのごとし。人(ひと)これをとりてそのはたけにまけバ 三二 よろづの種(たね)よりハちいさけれども長(ちやう)じてハほかのくさよりおほいにしてそらの鳥(とり)きたりそのえだにやどるほどの樹(き)となるなり○ 三三 またたとへをこの人々にかたりけるハ。てんごくハ餅(パン)だねのごとし。婦(をんな)これをとり三斗(さんど)の粉(こ)のなかにかくせばことごとくふくれいづるなり 三四 耶蘇(いゑす)たとへをもてもつてこれらのことを衆人(ぞく)にかたりたまへり。譬(たとへ)にあらざればこれにかたりたまはず 三五 これ預言者(よげんしや)によりていはれたる、たとへをまうけて口(くち)をひらき世(よ)のはじめよりかくれたることをいひあらはさんといへるにかなはせんためなり○ 三六 つ

ひぬ耶穌ひとびとをかへして家にいりしにそのでしきたりて
いひけるハはたけのこのしゝむぎのたとへをわれらに解た
まへ 三七 こたへていひけるハよきたねをまくものハ
人の子なり 三八 はたけハこの世界なり。よきたねハくにの天國
の諸子なり。このしゝむぎハ悪魔のこどもらなり 三九 これをまく
く敵ハあくまなり。かりいれハ世のをはりなり。かるものハ
天のつかひたちなり 四〇 このしゝむぎのあつめて火にやくる
るごとくこの世のをはりにおいてもこのごとくなるべし
四一 人の子そのつかひたちをつかハしてその國のうちよ
りもろ〱のつまづきとなるものまた惡をなす人をあつめて

四二 これらを爐の火になげいるべし。そこにてなげきと切齒あ

るべくあらん 四三 このとき義人はそのちゝの國において日

のごとくにかゞやかん。耳ありてきかるゝものはきくべし○

四四 また天國はたとへばこのかくれたる寳のごとし。人みいださ

ばこれを秘しよろこびのあまりその所有をことごとくうりてそ

の田をかふなり○ 四五 また天國はよき珍珠をもとめん

とするあきびとのごとし。四六 一のあたひたかき珍珠をみいだ

さばそのもちものをことごとくうりてこれを買なり○ 四七 ま

た天國は海にうちいれてさまぐの魚をとる網のごとし 四八

みちぬればきしにひきあげ坐てそのよきものをうつは

まいましきものをすつるなり　四九 世のをはりにおいてもか
くのごとくなるらん。天のつかひたちいでゝ義者のなかよ
りあしきものをとりわけ　五〇 爐の火になげいるべし。
そこにて哀哭はがみをすることあらん○五一 耶蘇かれらにい
ひけるハこのことゞもをさとるか悟しやかれらいひけるハ主よ
しかり　五二 耶蘇かれらにいひけるハされバてんこくについ
てをしへられたる學者ハあたらしきものとふるきものと
をその庫よりいだす家のあるじのごとし○五三 耶蘇このた
とへなどいひをはりてこゝをさりぬ　五四 そのふるさとにいた
り會堂にてをしへしかバひとびとあやしみていひけるハこの人

の智慧(ちゑ)と異能(ふしぎなるわざ)はいづこよりきたるや 五五 これ木匠(たくみ)の子(こ)にあらずやその母はマリアその兄弟はヤコブヨセシモンユダにあらずや 五六 その妹(いもうと)たちはみなわれらとともにあるにあらずやさればこの人(ひと)のすべてこれらのことはいづこよりきたりしや 五七 つひに厭(いと)てこゝろをまよはす耶穌(いゑす)これにいひけるはよげんしやはその故土(ふるさと)そのいへのほかはおいてたふとまれざることなし 五八 このところにて信(しん)ぜざることによりておほくのふしぎなるわざをなしたまはざりき

第十四章

その頃分封(かたわけ)のきみヘロデ耶穌(いゑす)のうはさをきゝて

二 そのしもべにいひけるハこれバプテスマのヨハネなりかれよみがへりたり。ゆゑにふしぎなるわざをおこなふなり
三 前(さき)にヘロデそのきやうだいピリツポの妻(つま)ヘロデヤのことによりてヨハネをとらへ、しばりて獄(ひとや)にいれおきたり。四 こハヨハネヘロデにこのをんなをめとるハいましめしことありといひしによる
五 このときヨハネをころさんとおもへども民(たみ)これを預言者(よげんしや)とおもへるによりてのぞみを抑へたりしが
六 ヘロデ誕生(たんじやう)の日(ひ)をいはふときヘロデヤのむすめその坐上(ざしやう)にて舞(まひ)をまひヘロデをよろこばせければ。七 いかなるものなりとも求(もとむる)まゝにまかせてあたへんとヘロデこれをちかひたり
八 むすめは

その母のをしへによりバプテスマのヨハネの首を盤に
のせてわれにたまはるべしといふ 九 王うれひけれどもすでに
誓たると席につらなるもののためにあへてふるゝことを命
じ 十 さぶらひ人をつかはし獄においてヨハネのくびをき
らせ 十一 その首をぼんにのせてむすめにあたへければ女
はこれをそのはゝにさゝげたり 十二 ヨハネのでしたちきた
りて屍をとりこれをはうむりゆきて耶蘇につぐ 十三 耶蘇こ
れをきゝてくどさけ舟にのりてそこをさりさびしきところ
ろにゆきたまひしが衆人きゝて歩行にてこれにおひつく
り 十四 耶蘇いでゝおほくの人をみてこれをあはれみその

病るものをいやせり 十五 日くるゝときその弟子きたりてい
ひけるは。こゝは寂寞ところにして時もはやおそし。むらく
へゆきてみづからの食をもとめさせんためにひとびとをさら
しめよ 十六 耶穌これにいひけるは人々かのぞくもおよばずな
んぢらこれに食をあたへよ 十七 こたへけるはこゝにはた
ゞ五の餅とふたつの魚あるのみ 十八 耶穌いひけるはそれを
こゝにもちきたれと 十九 遂にひとびとに命じてすわらしめ五
のパンと二のうをとり天をあふぎて謝しパンをさきて
でしにあたふ。門徒これをひとびとにあたへぬ 二十 皆くらひて
飽そのあまりたるくづをひろひしに十二の筐にみちたり

二一 くらひしものハ婦女こどものほかおほよそ五千人なりき。二二 やがて耶蘇ひとびとをかへさんとしてその門徒をしひて舟にのせむかふのきしへさきにわたらしむ 二三 かくしてひとびとをかへしければ祈禱せんとてひそかに山にのぼり日くれてひとりそこにいませり 二四 ふねハ海中にありて逆風のために波にたゞよはさる 二五 夜の四時ごろ耶蘇うみのうへをあゆみてこれにいたりしに 二六 門徒そのうみのうへをあゆめるをみておどろきこハ變化のものなりといひておそれさけびたり 二七 耶蘇やがてこれにいひけるハこゝろやすかれわれなりおそるゝなかれ 二八 ペテロこたへてい

ひけるハ主よもしなんぢならバわれに命じてみづのうへをあゆみてなんぢのもとにいたらしめよ 二九 來といひたまひけれバペテロふねよりおりて耶穌のもとにいたらんとて浪のうへをあゆみたれど 三十 風のはげしきをみておそれしづまんとするとき主よわれをたすけたまへといふ 三一 耶穌やがて手をのべてとらへていひけるハ信仰のうすきものよなんぞうたがふや 三二 ともに舟にのりけれバ風しづまりぬ 三三 ふねにをりしものちかよりてをがみ拜していひけるハまことになんぢハ神の子なり○ 三四 つひにわたりてゲネサレの地にいたりしが 三五 そのところのひと〴〵耶穌をしりてあまね

ねく四方に人をつかはしてすべて病のものをたづさへきた
らしむ 三六 たゞその衣のすそにさはらしめんことを耶蘇にねが
へり さはるものはみなすこやかになりたり

第十五章 ときにエルサレムの學者とパリサイのひと耶蘇にきた
りていひけるは 二 なんぢの門徒はいにしへの人のつたへし誡
をおかすはなにゆゑぞ そは食するときにその手をあらはざ
ればなり 三 こたへてこれにいひけるは なんぢらはまた
なんぢらのつたへによりて神の誡をおかすはなにゆゑぞ 四
それ神いましめて なんぢの父母をうやまへ また父母をの
のしるものはころさるべしとのたまへり 五 然るになん

ぢらはいひてまうす人ちゝはゝにむかひなんぢをやしな
ふべきものは禮物なりといはゞその父母をうやまはずと
もよしとす　かくてなんぢらは遺傳によりて神のおきてをむなし
くせり　七 偽善者よイザヤはよくなんぢらにつきてよげん
しいはく　八 この民はくちさきにてわれにちかづき唇にてわれをたふとむ
まへどもその心はわれにとほざかれり　九 人のいましめを敎
しへとなしていたづらにわれを拝すといへり　十 耶蘇ひと
びとをよびてこれにいひけるはきゝてさとれ　十一 口に入
るものは人をけがさず口よりいづるものは人を
けがすなり　十二 門徒きたりて耶蘇にいひけるはパリサイの人

このことばをきゝていらひ棄るをなんぢしるや 十三 こたへ
ていひけるはわが天の父のうゑざるものはことごとくぬかるべ
し 十四 このものらをすておけ瞽者のてひきする瞽者なり。めし
ひもし瞽者のてびきせばふたりとも溝におちいるべし 十五
ペテロ耶穌にまうしていひけるはこのたとへをわれらにと
きたまへ 十六 耶穌いひけるはなんぢらもいまださとらざる
か 十七 まださとらずや口にいるものは腹をとほりてかはやにおつる
をいまださとらざるか 十八 口よりいづるものはこゝろより出
これ人をけがすものなり 十九 それこゝろよりいづるところ
の悪念 凶殺 姦淫 苟合 盗竊 妄證 謗讟 二十 これらは人をけがすものにて

ものなりされども手をあらはずしてくらふハ人をけがさ
ず 二一 耶穌こゝをさりてツロとシドンの地にゆきけるに 二二 その
地にすめるカナンの婦いでゝよばゝりいひけるハ主よ
ダビデのすゑよわれをあはれみたまへわがむすめ鬼につ
かれていたくくるしめり 二三 耶穌ひとこともこたへたまは
ざりしかバその門徒きたりこふていひけるハわれらのあ
とより喊叫なれバこれをさらせたまへ 二四 こたへていひ
けるハイスラエルの家のまよへる羊のほかハつかはさ
れざるぞ 二五 婦きたり拝していひけるハ主よわれをたすけた
まへ 二六 こたへけるハ兒女のパンをとりて犬になげあたふ

るハよろしからず 二七 をんないひけるハ主よしかりされど
いぬもその主人の膳よりおつるくづをくらふなり 二八 つひ
に耶蘇こたへていひけるハをんななんぢの信仰ハおほい
なりねがひのごとくなんぢに成べし このときよりその女
いえたり〇 二九 耶蘇こゝをさりガリラヤのうみべにきたり山
にのぼりて坐せり 三〇 おほくのひとびと跛者めしひ瘖者かた
ハおよびさまざまのやまひあるものをともなひきたり耶蘇
のあしもとにおきければ是をことごとくいやしぬ 三一 こゝ
においておしハものいひ殘疾ハいえあしなへハあゆみ
瞽者ハみえたるをひとびと見てあやしみイスラエルの神をあ

ぐみたり 三二 耶蘇そのでしを招ていひけるハわたくしこの衆
人をあはれむ。このものどもハすでに三日われとともにありてく
らふものなし飢させてかへらしむることをこのまずおそら
くハ途間にてたふれん 三三 そのでしこのものにいひけるハ野に
てこのおほくの人にあくほどの餅をいづこよりえん
や 三四 耶蘇かれらにいひけるハパンいくつあるやかれら曰
るハ七とすこしの魚あり 三五 耶蘇ひとびとに命じて地にすわ
らしめ 三六 七のパンとうをを取りて謝しこれをさきてその門
徒にあたへ弟子これをひとびとにあたふ 三七 みなくらふてこ
ころ飽たりあまりの屑をひろひしに七つのかごにみてり

三八 これを食るものハをんなこどものほかに四千人ありき
三九 耶蘇ひとぐをさらしめ舟にのりてマグダラのさかひに
いたれり

第十六章

パリサイとサドガイの人きたりて耶蘇をこゝろみん
とて天のしるしをしめしたまへといひけれバ 二 こたへて
いひけるハなんぢら暮にハゆふやけなれバ晴なら
んといひ 三 朝にハあさやけしてくもれバ今日ハ雨
ならんといふ偽善者よそらのけしきをわかつことをしり
て時のしるしをわかちあたはざるか 四 姦悪なる世ハしる
しをもとむれどもよげんしやヨナの体徴のほかハしるしを

あたへられじとかれらをはなれさりぬ（二）五 そのでしむかふの岸にいたりしに餅（パン）をたづさふることをわすれたり 六 耶穌かれらにいひけるハこゝろしてパリサイとサドガイの人のパンだねをつゝしめよ 七 門徒（でし）たがひに論（ろん）じていひけるハわれらパンをたづさへざりしゆゑならん 八 耶穌これをしりていひけるハ信仰（しんかう）うすきものよなんぞたがひに餅（パン）をたづさへざりしことをろんずるや 九 いまださとらざるか五千人（ごせんにん）にいつゝのパンをあたへしときいくかごひろひしや 十 また四千人（しせんにん）になゝつのパンをあたへしときいくかごひろひしやなんぢらこれをおぼえざるか 十一

バリサイとサドガイの人(ひと)のパンだねをつゝしめとハ餅(パン)につきていへるにあらざるとなんぞさとらざる 十二 こゝにおいて門徒(でし)そのパンだねにあらでパリサイとサドガイのひとのをしへを謹防(つゝしめ)といへるなるをさとれり ○十三 耶穌(いゑす)ピリッポのカイザリヤのうちにいたりしときそのでしにとふていひけるハひと〴〵人(ひと)の子をたれといふや 十四 こたへていひけるハある人(ひと)ハバプテスマのヨハネあるひとハエリヤあるひとハエレミヤまたハ預言者(よげんしや)のひとりなりといへり 十五 かれらにいひけるハなんぢらハわれをといひて誰(たれ)とするぞ 十六 シモンペテロこたへけるハなんぢハキリスト活神(いけるかみ)の子なり 十七 耶穌(いゑす)こたへて

てこたへていひけるハヨナの子シモンなんぢハさいはひなり そハ血肉(けつにく)なんぢにしめせるにあらず天(てん)にましますわが父(ちゝ)なり 十八 われまたなんぢにつげんなんぢハペテロなりわが教會(けうくわい)をこのいしのうへにたつべし陰府(よみ)の門(もん)もこれにかつことあたはざるべし 十九 またわれ天國(てんごく)の鑰(かぎ)をなんぢにあたへんなんぢがちにおいて繫(つな)ぐところ天(てん)においてもつなぎなんぢが地(ち)において釋(とく)ところハてんにおいてもとくべし 二十 つひにその門徒(でし)をいましめけるハわれをキリストなりと人(ひと)につぐることなかれ 二十一 このときより耶蘇(いえそ)そのでしにおのれのエルサレムにゆきて長老(としより)さいしのをさ學者(がくしや)たちよりおほく

のころさるゝことをうけ第三日(みつか)によみがへるべきことを示(しめ)しはじむ 二二 ペテロ耶穌(いゑす)をひきとめて主(しゆ)よさうぞこのことなんぢにきたるまじといひければ 二三 耶穌(いゑす)ふりかへりてペテロにいひたまひけるはサタンよわがうしろにしりぞけなんぢはわれに礙(つまづき)なるものなりそはなんぢは神(かみ)のことをおもはずしてたゞ人(ひと)のことをおもへり 二四 このとき耶穌(いゑす)そのでしにいひけるはもしわれにしたがはんとおもふものはおのれをすてゝその十字架(じふじか)を負(おひ)てわれにしたがへ 二五 それいのちを保全(まつたく)せんとするものはこれをうしなひわがためにその生命(いのち)をうしなふものはいのちをうべければなり 二六 も

し人せかいぢうをうるともそのいのちをうしなはゞな
んの益あらんやまた人なにをもてその生命にかへんや 二七
それ人の子はちゝの榮光をもてそのつかひたちとともに
きたらんそのときおの／＼の行によりてむくゆべし 二八 まこ
となんぢらにつげん人の子その國をもてきたるをみる
までこゝに立ものゝうちにしなざるものあるべし

第十七章 一 六日のゝち耶穌ペテロヤコブその兄弟ヨハネをと
もなひ人をさけてたかき山にのぼりたまひしが 二 かれら
のまへにてそのすがたかはりその面は日のごとくかゞや
きその衣はしろくひかり 三 モーセとエリアあらはれて

耶蘇とともにありぬ 四 ペテロこたへて耶蘇にいひける
は主よわれらこゝにをるは善しみこゝろにかなはゞわれ
らは三の廬をつくらせたまへ一は主のため一はモーセ
のため一はエリアのためにせん 五 かくいふうちにかゞや
ける雲かれらをおほふ声雲よりいでゝいひけるは
わがこゝろにかなふわが愛子なりなんぢらこれにきくべ
し 六 門徒これをきゝておほいにおそれたふれふしたり 七
耶蘇きたりてこれらに手をつけ起よおそるゝなかれとい
ひければ 八 その目をあげけるにたゞ耶蘇のほかひとりもみ
ざりけり（ ）九 山をくだるとき耶蘇かれらに命じて人の

子のよミがへるまでハなんぢらの見しことを人につぐべ
からずといへり
十 そのでしたちとふていひけるハさらバエリア
ハさきにきたるべしと學者のいふハなにゆゑぞ
十一 耶穌こたへ
ていひけるハ實にエリアハきたりて萬事をあらたむべ
し
十二 されどわれなんぢらにつげんエリアハすでにきたれり
しに人これをしらずたゞ任意にこれをあしらへり。かくの
ごとく人の子もまたかれらよりくるしミをうくべし
十三 こ
こにおいて門徒バプテスマのヨハネをさしていひたまへる
をさとれり。
十四 かれらおほくの人のをるところにきたり
しにあるひとり耶穌のもとにきたり曲跽
十五 いひけるハ主よ

わが子をあはれみたまへ癲癇にてしば〳〵火またハ水にたふれたりけるなり 十六 これをなんぢの門徒につれゆきたれどいやすことを得ざりき 十七 耶穌こたへていひけるハあゝ信なきまがれる世なるかないつまでなんぢらとともにをらんやいつまでなんぢらを忍ばんやその子をわがもとにつれきたれ 十八 つひに耶穌おにをいましめたまひければ鬼いでゝその子このときよりいえたり 十九 そのときでしひそかに耶穌にきたりていひけるハわれらおひいだすことあたはざりしハなにゆゑぞ 二十 耶穌これにいひけるハなんぢらの信なきのゆゑなりまことになんぢ

らにつげん、もし芥種のごとき信あらバこの山にこゝより
かしこへうつれといふともうつるべし、またなんぢ
らはあたはざることなかるべし　二一　されどこのたぐひは祈
禱と斷食にあらざれバいづることなし　○　二二　ガリラヤを周
流るとき耶穌かれらにいひけるハ人の子ひとの手にわたさ
れ　二三　ころされて第三日によみがへるべし門徒これをきゝ
てはなはだうれへり　○　二四　かれらカペナウンにきたれる
とき稅金をあつむるものどもペテロにきたりていひける
ハなんぢらの師ハをさめきんをいださゞるか　二五　しかり
といひてペテロいへにいりしとき耶穌まづこれにいひける

さてシモンになんぢハいかにおもふや世界の王たちハ運上およひ人税をたれよりとるぞおのれの子よりかほかのものよりとるの 二六 ペテロこのこたへにいひけるハほかの人よりとるなり耶蘇このこたへにいひけるハさらバ子ハゆるさるゝなり 二七 されどもかれらをつまづかせざるためになんぢ海にゆきて釣をたれよはじめにつる魚をとりてその口をひらかバ金ひとつをえべしそれをとりてわれとなんぢのためにこれをに納よ

第十八章 そのときでし耶蘇にきたりていひけるハ天國において大なるものハたれぞや 二 耶蘇をさなき子をよびこれを

のなかにたゝせて　三 いひけるハ我まことになんぢらに告ん
もしあらたまりて孩提のごとくならずバてんこくにいる
ことをえじ　四 されバおほよそこのをさなごのごとくみづか
らへりくだるものハこれ天國においておほいなるものな
り　五 またわが名のためにかくのごときひとりのをさなご
を接ものハわれを接るなり　六 されどわれを信ずるこの
小子のひとりをつまづかするものハ磨石をそのくびにか
けられて海のふかきにしづめられんかたなほ益あるべし
七 この世ハわざはひなるかなそハつまづきのきたることをも
まぬかざるなり礙こゝハかならずきたらん。されどつまづきをき

たゞしそのものハ禍なるかな八もしなんぢの手なんぢの足お
のくせをつまづかさばきりてこれをすてよ兩手兩足ありて
つきざる火になげいれられんよりハ跛またハうでなくして
生にいるハよきなり九もしなんぢの眼なんぢをつまづかさ
ばぬきいだしてこれをすてよ兩眼ありてぢごくの火に
なげいれられんよりハ一眼にて生にいるハよきなり
〇十なんぢらこのちひさきものゝひとりをもつゝしみて
輕視なかれ我なんぢらにつげんこのものらが天のつかひハ
天にありて天にいますわが父のかほをつねにみるなり
十一それ人の子ハほろびたるものをすくはんためにきたれる也

十二 なんぢらいかにおもふや人もし百匹のひつじをもたんにその一ぴきまよひなば九十九を山におきてまよひしひとつをたづねざらんや 十三 もし尋てこれにあはゞまことになんぢらにつげんまよはざる九十九のものよりもなほその一ぴきをよろこぶなり 十四 かくのごとくこのちひさきものゝひとりのほろぶるは天にいますなんぢらの父のこゝろにあらざるなり 十五 もし兄弟なんぢに罪ををかさばその獨なるときにゆきていさめよもしなんぢのことばをきかばその兄弟をうべし 十六 もしきかずば兩三人の口によりておよそすべてのことばをさだめんがためにひとりふたり

ともなひゆけ 十七 もしかれらにもきかずば教會につげよ。もしけうくわいにきかずばこれを異邦人または税吏のごときものとすべし 十八 我まことになんぢらにつげん、おほよそなんぢらが地において繫ところは天においてもつなぎ、なんぢらが地において釋ところは天においてもとくべし 十九 また我まことになんぢらにつげん、もしなんぢらのうち二人のもの地においてこゝろをあはせ何ごとにてももとめば天にいますわが父はかれらのためにこれを成たまふべし 二十 そはわが名のために二三人のあつまるところにはわれもそのうちにあればなり ○ 二十一 そのときペテロ耶穌にきたり

ていひけるハ主よいくたびまでわが兄弟のわれにつミををかさバ
これをゆるすべきや七たびまでか 二二 耶穌これにいひ
けるハなんぢにいふ七次とハいはず七たびを七十倍せよ 二三
このゆゑに天國ハ王その家來と會計をなさんとせる
がごとし 二四 會計をはじめしとき一萬金のおひめある
ものを王にひきよせたりしに 二五 つぐのひうるものなかりけれバ
主その身その妻孥とあらゆるもちものをうり
うりてつぐのはせよといひけり 二六 その臣ひれふしていひけるハ請
わがためにいま寛したまへことごとくつぐのふべし 二七 こゝにおいてその
臣のけらいの主あはれみてこれを釋しそのおひめをゆるせしが

たり 二八 その臣いでゝおのれより銀一百のひきおひしたる
友にあひければこれをとらへ喉をしめひきおひをかへせ
といふ 二九 その友はしもに俯伏てねがひいひけるはわれ
を寛しうせよさらばつくのふべし 三十 しかるにこれをうけ
がはずしてゆきその負債をつくのふまでこの臣を獄にいれ
ぬ 三一 傍の友そのありしことを見てはなはだしくかなしみ往
てことごとくをその主につげしかば 三二 主この臣をよびて
いひけるはあしき臣よなんぢわれにもとめしによりてわれそ
のひきおひをことごとく免したり 三三 われがなんぢをあはれみ
しごとくなんぢも友をあはれむべきはあらずや 三四 そ

の主いかりてひきおひたる債をことごとく償までこれを獄吏にわたせり
三五 もしおのおのその心より兄弟のあやまちをゆるさずばわが天の父もまたなんぢらにかくのごとくなしたまふべし

第十九章

一 耶穌これらのことをいひをはりてガリラヤをさりてヨルダンのむかふなるユダヤの境にいたりける 二 おほくの人々これにしたがひしかばそこにてそのやまひを醫たまへり
三 パリサイの人々きたりて耶穌をこころみていひけるは人なにの故にてもその妻をいだすはよきか 四 こたへていひけるは元始に人をつくりたまひしものはこれを男女につくれり 五 このゆゑに人ちちははをはなれて

その妻(つま)なるおもひ二人(ふたり)のもの一體(いつたい)となるといへるとはいま
だよみかねたるこの 六 されバこそ二(ふた)つはあらで一體(いつたい)なり神(かみ)のお
あはせたまへるものは人(ひと)これをはなつべからず 七 耶蘇(いえそ)はい
ひけるはさらバ離縁状(りえんじやう)をわたして妻(つま)をいださしめよとモーセが
命(めい)ぜしはなにゆゑぞや 八 このゆゑにいひけるはモーセはなんぢ
らの心(こゝろ)のつれなきによりて妻(つま)をいだすことをゆるしたる
なりされど元始(もとはじめ)はかくあらざりき 九 またなんぢらにつげ
んなに淫事(いんじ)のゆゑならでその妻(つま)をいだしほかの婦(をんな)をめど
るものは姦淫(かんいん)をおこなふなり。またいだされたる婦(をんな)をめど
るものもかんいんを行(おこな)なり 十 でしたち耶蘇(いえそ)にいひけるは

その人つまにおいてかくのごとくハ娶ざるにしかず 十一 この
ことばハいひけるハこのことばハ人みなうけいるゝことあた
はずたゞ稟賦たるもののみこれをうくべし 十二 それ母
のたいよりうまれつきたる寺人ありまた人にせられたる
寺人ありまた天國のためにみづからなせる寺人ありこれ
をうけいるゝことをうるものハ納べし 〇 十三 そのときひと
びと耶穌の手をつけていのらんことを求ておさなごをつれ
まつりきたりけれバ門徒これをとがめたり 十四 耶穌いひけ
るハ孩提をゆるせわれにきたることをいましむるなかれ
天國ハかゝるもののごときものゝなり 十五 おさなごたちに手を

らつは手をつけてこゝをさりぬ○十六ある人きたりてこれにいひ
けるは善師よわれかぎりなき生をえんがためにはなにの
よきことをなすべきぞ十七これにいひけるはなにゆゑにわれ
をよきといふやひとりのほかに善ものはなしすなはち神
なりもしいのちにいらんとおもはゞ誡をまもるべし十八この
れらいひけるは何ら。耶蘇いひけるはころすなかれ姦淫すて
るなかれぬすむなかれいつはりの證をたつるなかれ十九な
んぢの父と母とをうやまへまたおのれのごとくなんぢの隣を
あいすべし二十少者これにいひけるはこれらはわれいとけ
なきよりまもれるものなりなほの虧たるところわれにあ

るや二一耶蘇いひけるハ完全ならんとおもはゞ
往てなんぢが所有をうりてまづしきものに施さバ天
においてなんぢ財あらんきたりてわれにしたがへ　二二わか
きものこのことばをきゝてうれひさりぬそのもの産業おほ
いなりければなり○二三耶蘇その弟子にいひけるハまこと
になんぢらにつげん富るものハ天國にいることかたし　二四また
なんぢらにつげんとめるもの神の國にいるよりハ駱
駝の針のあなをとほるハなほやすし　二五門徒これをきゝて
いたくおどろきいひけるハさらバ誰かすくひをうべき
や　二六耶蘇これをみていひけるハこれ人にハあたはざる

ところなりされど神(かみ)にはあたはざるところなし〇 二七 この
ときペテロこたへて耶穌(いえす)にいひけるはわれら一切(いつさい)をすてゝ
なんぢにしたがへり。されバなにを得(う)べきぞ 二八 耶穌(いえす)かれ
らにいひけるはまことになんぢらにつげんわれにし
たがへるなんぢらは世(よ)あらたまり人(ひと)の子(こ)その榮(さかえ)の位(くらゐ)にざ
するときなんぢらも十二(じふに)の位(くらゐ)にざしてイスラエルの十二(じふに)の
支派(わかれ)をさばくべし 二九 またそわが名(な)のために家宅(いへ)あるひは
兄弟(きやうだい)あるひは姉妹(しまい)あるひは父(ちゝ)あるひは母(はゝ)あるひは妻(つま)ある
ひは子(こ)あるひは田疇(たはた)などをすつるものは百倍(ひやくばい)をうけてかぎ
りなき生(いのち)をつがん 三十 おほくの先(さき)なるものはあとなり後(あと)

あるものはさきとなるべし

第二十章 一 それ天國ハあさまだきいでゝ葡萄園にはたらくものをやとふ主人のごとし 二 はたらくものに一日に銀一枚をあたへんと約束をなしゝのちをぶだうぞのにつかはせり 三 また九時ごろいでゝいちにむなしく立るものをみて 四 なんぢらもぶだうぞのにゆけ相當のあたひをあたへんとのたまひければかれらもゆけり 五 また十二時と三時ごろいでゝまへのごとくなせり 六 五時ごろいでゝまたほかのものゝ立るものにあひていひけるハなんぞ終日こゝにむなしくたつや 七 これにこたへていひけるハ誰

われらをやとふものなきによりてあるじのかれらにいひけるは
なんぢらも葡萄園にゆけさうたうの價をうくべし 八 日くる
るころぶだうばたけのあるじその家宰にいひけるははた
らきたるものどもをよびて後にやとひたるものをはじめと
し先のものにまであたへとらせよ 九 五時ごろにやとは
れたるものどもきたりて銀一枚づゝをうけたり 十 さきのも
のどもきたりてまさるはおほくうくるならんとおもひし
にまた銀一枚づゝをうく 十一 これをうけて主人をうらみつ
ぶやきけるは 十二 この後至者のはたらきたるは一時ばかり
なるに終日くるしみを負あつさにあへるわれらとひとし

くことなせり　あるじその一人にこたへていひけるハ
友よわれなんぢに不義をせざるなり　なんぢハ銀一まいのやく
そくをなしたるにあらずや　十四 なんぢのものをとりてゆけ
われ此のちのものにもなんぢのごとくあたふべし　十五
わがものをわがおもふまゝにするハよからざるや　わが
善によりてなんぢの目あしきか　十六 このごとく後のもの
いさきに先のものハあとになるべし。そハよばるゝものハ
おほしといへどもえらばるゝものハすくなし　十七 耶穌
エルサレムにのぼるとき途間にて衆をさけなかに十二門徒をと
もなひてこの途にていひけるハ　十八 みよわれらエルサレムにのぼり

人の子は祭司のをさと學者たちにわたされんこのものらこれを
死罪にさだめ 十九 またこれを凌辱むちうち十字架につけんために
異邦人にわたさるべししかして第三日によみがへるべし ○ 二十 その
のときゼベダイの子たちの母その子とともに耶蘇にきたり拜
しそのものをもとむることありければ 二十一 これにいひけるは
なにをねがふや。耶蘇にいひけるはこのふたりのわが子を
なんぢの國において一人はなんぢの右ひとりはなんぢの
左にすわることを命ぜよ 二十二 耶蘇こたへていひけるはなんぢ
らは求しところをしらず、なんぢらはわがのまんとする杯
をのみまたわがうけんとするバプテスマをうけうるやかれ

らいひけるハよくさくべし。耶蘇かれらにいひけるハまこと
になんぢらハわがさかづきをのまんわがうくるバプ
テスマをうくべし。されどわが右左にすわることハわが賜
べきにあらずただわが父にそなへられたるものにあたへ
らるべし
二四 十人のでしこれをきゝてふたりの兄弟をいきど
ほれり
二五 耶蘇これをよびていひけるハ異邦の領主ハ
その民をつかさどり大なるものどもハこれらのうへに権
をとる。これなんぢらが知ところなり
二六 されどなんぢらの
うちにてハ然あるべからず。なんぢらのうちに大ならんと欲も
ふものハなんぢらのつかふるものとなるべし
二七 またなに

んぢらのうちに首(うへ)たらんとおもふものはなんぢらのしもべ
となるべし 二八 このごとく人(ひと)の子(こ)のきたるも人(ひと)をつかはん
ためならずかへつて人(ひと)につかへまつりおほくの人(ひと)に
かはりて生命(いのち)をあたへその贖(あがなひ)となさんためなり 二九 この者
らエリコをいでしときおほくのひとびと耶穌(いゑす)にしたがへり
三十 ふたりの瞽者(めしひ)みちのほとりにすわりしが耶穌(いゑす)の
とほるときゝてさけびいひけるはダビデのこ主(しゆ)よわれらを
あはれみたまへ 三一 衆(ひとびと)これをせめていましむれども
愈(いよいよ)さけびいひけるはダビデの子(こ)主よわれらをあはれみ
たまへ 三二 耶穌(いゑす)たちとまりてこれをよびいひけるはなんぢら

らわれになにをせられんとねがふや 三三 耶穌にいひけるは
主よわれらが目のひらかれんことをねがふ 三四 耶穌あはれみて
その目に手をつけければただちに見ることをえ耶穌にした
がへり

第二十一章 一 このもの橄欖山のベツバゲにいたりエルサレムにちかづ
けるとき耶穌ふたりのでしをつかはさんとして 二 このもの
はいひけるはなんぢら對のむらにゆけやがてつなぎたる
驢馬のその子とともにあるをみんそれをときてもちきたれ
ひきこしたまへ 三 もしなんぢらに何ごとのいふものあらば主の用
ありといへさらばただちにこれをつかはすべし 四 預言者

のごとくなんぢの王は柔和にして驢馬にのるまたろ
ばの子にのりなんぢにきたるとシヲンの女につげよ 五 と
いへるはこのかなえせんためにこのくなせるなり 六 門徒ゆきて
耶蘇のめいぜしごとくなし 七 驢馬とその子をひききたり
おの〳〵の衣をそのうへにおきければ耶蘇これにのり 八
衆おほくはそのころもを途にしきあるひは樹枝をきりて
みちにしきぬ 九 その前にゆき後にしたがふひと〴〵よばひ
ひけるはダビデの子ホザナよ主の名によりてきたるもの
はさいはひなり至上ところにはホザナよ（）十 耶蘇エルサレム
にいりきたるときみやここぞりてさわぎたちいひけるはこれ

たゞぞや 十一 衆ハいひけるハこハガリラヤのナザレよりいでた
るよげんしや耶蘇なり○ 十二 いゑす神のみやにいりてその
うちなるすべての賣買するものをおひいだし兌銀者のだ
い鴿をうるものゝこしかけをたふし 十三 のたまひける
ハわが殿ハ祈禱のいへととなへらるべしとしるさる。しつの
るハなんぢらこれをぬすびとの巣となせり 十四 瞽者おしな
つのひとぐ殿にいりて耶蘇にきたりけれバこれをいやし
ぬ 十五 さいしのをさと學者たちそのなしたまへる奇事をと
またこどもらのみやにてよびてダビデの子ホザナとよぶ
いふをきゝていかりてとふくゝ 十六 耶蘇にいひけるハこのまへる

ごりよこゝろをきこしや耶蘇こたへていひけるはあつまり嬰兒ちのみ子のくちに讃美をそなへたりとしるされしをいまだよまざるか遂にこの連らをすてゝみやこをいでゝベタニヤにゆきそこにやどれり○十八翌朝みやこへかへるとき飢ければ十九みちのほとりにある一の無花果のきをみてそのところにきたりしに葉のほかになにもあらざりしかばいまよりのちいつまでも果をむすぶことをえざれといひたまひければ無花果たちどころにかれぬ二十門徒これをみてあやしみいひけるはいちじくのきのかくいのにえやきや二十一耶蘇こたへてこの連らにいひけるはまことにまことに

なんぢらにつげんもし信仰ありてうたがはずばたゞにこの無花果におけるごときのみならずこの山に命じてゆりうつされて海にいれよといふともまたなるべし 二二 なんぢら信じていのらばねがふところことごとく得べし 二三 いゑす殿にいりてをしへたるとき祭司のをさおよび民の長老だちきたりいひけるはなんぢの權威をもてこのことをなすや誰このけんゐをなんぢにあたへしや 二四 耶穌こたへてかれらにいひけるはわれもまた一言なんぢらにとはんそれにそのこたへをつげなばわれもまた何のけんゐをもてこのことを行ふといふことをなんぢらにいふべし 二五 ヨハネのバプテスマはいづこ

よりぞ天よりか人よりかこの事をたがひに論じいひけるは
もし天よりといはゞさらばなにゆゑ信ぜざるやといはん
二六 もし人よりといはゞわれら民をおそるゝそはみなヨハ子
を預言者とおもへばなり 二七 つひにこたへていふ
耶蘇の道もまたいひけるはわれもなにの権威をもてこの事を
なんぢらにこのつげじ 二八 なんぢらいかにおもふやあ
る人ふたりの子ありしが長子にきたりていひけるは子よ
けふわが葡萄園にゆきてはたらけ 二九 こたへていなといひ
しがのちに悔してゆきたり 三十 また次子にきたりてまへのごとくいひ
けるにこたへて君よわれゆくべしといひしがつひにゆか

さりき二このふたりのものいづれか父のむねをなしゝ
ぞやかれらいひけるハ長子なりイエスかれらにいひけるハまこと
になんぢらにつげん税吏および娼妓ハなんぢらよりさき
に神の國にいるべし 三二 それヨハネたゞしき道をもて
きたりしになんぢらこれを信ぜずみつぎとりあそびめハ
これを信じたり。なんぢらこれを見てもなほ悔あらためずしてこの
道を信ぜざりき ○ 三三 また一のたとへをきけ。ある家のある
じぶだうぞのをつくり籬をめぐらしそのなかに酒搾を
ほり樓をたて農夫にかしてほかのくにへゆきし 三四 果期
ちかづきければその果をとらんために僕を農夫のもとへ

まつくのおほせあり 三五 農夫どもそのしもべたちをとらへ、一人を
むちうち一人をころし一人をいしにてうてり 三六 またほか
の僕をまへよりもおほくつかはしけるにまたおなじくまへの
ごとくなせり 三七 わが子はうやまふならんといひて終にそ
の子をつかはせしに 三八 のうふどもその子をみてたがひに
いひけるはこれ嗣子なりいでこれをころしてその遺業を
とらるべしと 三九 すなはちこれをとらへ葡萄園よりおひい
だしてころせり 四〇 されバぶだうゑんの主きたらんとき
はこの農夫をなになすべきや 四一 こたへて耶穌にいひける
はこれらの惡人をいたくうちほろぼし期にかなひてその

果をときにおさむるほかの農夫にふたゝびかりてちかしあたふべ
し 四二 耶蘇このものにいひけるは聖書に工匠のすてたる石は
いへのすみの首石となれりこれ主のなしたまへることに
しておのれらの目にはあやしとするところなりとあるを
をいまだよまざるか 四三 この故にわれなんぢらにつげん神
の國をなんぢらよりうばひその果をむすぶ民にあたへら
るべし 四四 この石のうへにおつるものは壞この石ひとのうへにお
つればそのものをくだくべし 四五 祭司のをさたちおよび
パリサイの人このたとへをきゝておのれらをさしていへる
をしりて 四六 耶蘇をとらへんとおもひはかりしかどたゞ民を

おそれたりそハひとびとのかれを預言者とおもへバなり

第廿二章

耶蘇こたへてまた譬をもてかたりけるハ 二 天國ハある王その子のために婚筵をまうけしがごとし 三 こんえんに請おけるものをむかへんために僕たちをつかはせしにかれらきたることをこのまず 四 またほかのしもべをつかはしていひけるハわが筵をそなへたりわが牛および肥畜をもほふりてことごとくそなへたれバ婚筵にきたるべしとまねきたるものにいへ 五 されどもこの者らかへりみずしてさりぬその一人ハおのれの田にゆきひとりハおのれの貿易にゆけり 六 ほかのものどもハその僕

をとらへはづかしめてころせり　七　わうこれをきゝていかり
軍勢をつかはしてそのころせるものをほろぼしまたその
邑をやきたり　八　こゝにおいてその僕どもにいひけるはこ
んえんのまうけはそなはれども請たるものハ客となるにたら
ざるものなれば　九　衢にゆきてあふほどのものを婚筵にま
ねけ　十　そのしもべ途にいでゝよきものをもあしきものを
もあふほどのものをことごとくあつめければこんえんのき
やく充満をり　十一　わう客をみんとていりけるにひと
りの禮服をきざるもののあるをみて　十二　これにいひけるは友
よいかなればれいふくをきずしてこゝにきたるぞと。かれ黙

然(され)たらバ 十三 つひに王(わう)しもべにいひけるハこの者の手足(てあし)をしば
りてそとの幽暗(くらき)になげいだせそこにてこゑしこまく切歯(はがみ)
することあらん 十四 それよばるゝものハおほしといへど
えらまるゝものハすくなし ○ 十五 このときパリサイの人(ひと)い
でゝいかにしてかの者をいひあやまらせんとおもひはかり
十六 その徒弟(でし)とヘロデの黨(たう)をつかはしていはせけるハ師(し)よ
なんぢハ眞(まこと)なるものなり。まことをもて神(かみ)のこゝろをおしふ
また誰(たれ)にものさしよらざることをみてハしるそハ貌(かほ)によ
りて人(ひと)をとらぶことなり 十七 されバ人税(じんぜい)をカイザルにをさ
むるハよきやあしきやなんぢいかにおもふかわれらにつ

けよ耶蘇その惡をしりていひけるハ偽善者よなんぞわ
れをこゝろむるや 十九 にんぜいの銀錢をわれにみせよとて彼
らデナリ一ツを耶蘇にもちきたりしに 二十 かれらにいひけれバこ
の像と號ハたれのぞ 二一 かれらこたへてカイザルなりといふこゝにお
いて耶蘇これにいひけるハさらバカイザルのものハカイザル
にかへしまた神のものハ神にかへすべし 二二 かれらこれをき
ゝて奇として耶蘇をさりゆけり○ 二三 復生なしといひなせ
るサドカイの人この日いゑそにきたりとふて 二四 いひけるハ
師よモーセのいへるハ人もし子なくしてしなバ兄弟その妻
をめとりて子をうみきやうだいのあとを嗣べしと 二五 こ

さてわれらの中(うち)にきやうだい七人(しちにん)ありしが兄(あに)めとりて死(しに)
こなきゆゑにその妻(つま)をおとうとにのこせり 二六 その二(に)も
の三(さん)その七(しち)までこれ然(しか)せり 二七 のちつひに婦(をんな)もまたしにけり
二八 よみがへるときはこのもの七人(しちにん)のうち誰(たれ)のつまとなる
べきやこれらみなこの婦を娶(めとり)しものなればなり 二九 耶蘇(いえす)こたへ
てこれにいひけるはなんぢら聖書(せいしよ)をも神(かみ)のちからをもしら
ざるによりてあやまれり 三〇 それよみがへるときはめ
とらず嫁(とつ)がずてんにある神(かみ)のつかひたちのごとし 三一 死(しに)しも
のゝよみがへることについては神(かみ)のつげたま
ひし言(こと)は 三二 われはアブラハムの神(かみ)イサクの神ヤコブの神

なりとあるをいまだよまざるやそも〱神はしにたるもの神(かみ)にあらず生(いけ)るもののかみなり 三三 ひと〴〵これをきゝてその訓(をしへ)をおどろけり○ 三四 耶蘇(いゑす)サドカイの人(ひと)をして口(くち)をふさがしめたりときゝてパリサイの人(ひと)ひとつところにあつまりけるが 三五 その中(うち)なるひとりの教法師(けうぼふし)いゑすをこゝろみんためまうしていひけるは 三六 師よおきてのうちいづれの誡(いましめ)かおほいなる 三七 耶蘇(いゑす)これにいひけるはなんぢ心(こゝろ)をつくし精神(せいしん)をつくし意(こゝろばせ)をつくし主(しゆ)なるなんぢの神(かみ)をあいすべし 三八 これ第一(だいいち)にして大(おほい)なるいましめなり 三九 第二(だいに)もまたこれにおなじおのれのごとくなんぢの隣(となり)をあいすべし 四十 すべての律法(おきて)と

預言者ハこのふたつのいましめによれり ○ 四一 パリサイの
人のあつまれるときに耶蘇これにとふていひけるハ 四二 な
んぢらキリストについていかにおもふやこれたれの子なる
や。こたへて耶蘇にいひけるハダビデの子なり 四三 これにい
ひけるハされバダビデ聖霊に感じてなにゆゑこれを主と
となへしや 四四 主わが主にいひけるハわれなんぢ
の敵をなんぢの足のしたにふくまでハわが手の右にざせ
よと。されバダビデすでにこれを主ととなへたれバいかで
その子ならんや 四六 たれ一言これにこたふることあたはざれバ
この日より敢てまたとふものなかりき

第廿三章 そのとき耶穌ひと〴〵と門徒とをよびつけていひけるハ
二 學者(がくしや)とパリサイのひと〴〵ハモーセの位(くらゐ)にざをしむ 三 ゆゑにすべ
てかのものらがなんぢらにいふところを守(まも)りておこなふべし。さ
れどかのものらが行(おこなひ)ところをならふべからず。そハかのものらハい
ふのみにしておこなはざればなり 四 またかのものらハ重(おも)きのに
負(おひ)がたき荷(に)をくゝりて人(ひと)の肩(かた)におかせおのれハひとつの
指(ゆび)をもてこれをうごかさんとせざるものなり 五 このものらの行(おこなひ)
ハすべて人(ひと)にみられんがためにするなり。その佩經(ふざ)をひ
ろくしその衣(ころも)のすそをおほいにし 六 また筵席(ふるまひ)のかみざ會(くわい)
堂(だう)のうはざ 七 市上(まち)のあいさつ人々(ひと〴〵)よりラビラビといはるゝ

らぶんらゝとこのむ 八 なんぢらはラビのとなへをうくることなかれそはなんぢらの師はひとりすなはちキリストなりなんぢらはみな兄弟なり 九 また地にあるものを父となのふることなかれなんぢらの父はひとりすなはち天にいますものなり 十 また導師のとなへをうくることなかれそはなんぢらのだうしはひとり即ちキリストなり 十一 なんぢらのうち大なるものはなんぢらのしもべとなるべし 十二 おほよそみづからを高くするものはひくくせられみづからを卑くするものはたかくせらるべし ○ 十三 あゝなんぢらわざはひなるかな偽善なる學者とパリサイの人よそはなんぢら天國を人

のまへにとぢてみづからいらずそのいらんとするものもい
るをもゆるさゞればなり 十四 噫なんぢらわざはひなるかな
偽善なるがくしやとパリサイの人よなんぢら寡婦の家
をのみいつはりてながき祈をなすことによりてなんぢら
なほも重刑をうくべければなり 十五 わざはひなるかなぎぜ
んなる學者とパリサイのひとよなんぢらはあまねく水陸
をへめぐり一人をもおのが宗旨にひきいれんとくるしみすでにつひに
ひきいるればこれをなんぢらよりも倍したる地獄の
子となせり 十六 あゝなんぢらわざはひなるかな瞽者なるて
びきよなんぢらはいふ人もし殿をさしてちかはゞ事なし

殿のこがねをさしてちかふものハそむくべからずとおもへり
おろしてめしひなるものよ金とこがねをきよくする殿
とハいづれかまさるべき 十八 また人もしまつりの壇をさ
してちかふはなにごとなし、そのうへの供物をさしてちかはゞ
そむくべからずと 十九 愚にしてめしひなるものよそなへも
のと供物ときよくする祭壇といづれかまさるべき 二十
それまつりのだんをさして誓ものハまつりの壇およびそ
のうへのすべてのものをさしてちかふなり 二十一 また殿をさ
してちかふものハ殿およびそのうちにいますものをさし
てちかふなり 二十二 また天をさしてちかふものハ神の寶座お

よびそのうへにざするものをさしてちかふなり ○ あゝなんぢらわざはひなるかな偽善なる學者とパリサイのひとよなんぢら薄荷茴香馬芹の十分の一をとりさだめておきてのもつともおもき義と仁と信をすてたりもしくは[illegible]こをおこなふべきものなりこのほかもまたすつべからざるものなり 二四 めしひなるてびきよなんぢらは蠓をこしいだして駱駝をのむものなり 二五 わざはひなるかな偽善なるがくしやとパリサイのひとよなんぢらはさかづきと盤のそとをばきよくしてうちは貪欲と淫欲をもてみてり 二六 めしひなるパリサイの人よなんぢらまづ杯とさらのうちをきよくせ

よきことバその外面(そと)をきよまるべし〇 二七 あゝなんぢら
禍(わざはひ)なる哉ぎぜんなる學者(がくしや)とパリサイのひとよなんぢらハ
しろくぬりたる墳墓(つか)ににたりそとハうるはしく見ゆれど
も内(うち)ハ骸骨(がいこつ)とさまざまの汚穢(けがれ)にてみつ 二八 このごとくなん
ぢらもまた外(そと)ハたゞしく人(ひと)にみゆれども内ハ僞善(ぎぜん)と不(ふ)
法(ほふ)にてみつ 二九 あゝなんぢらわざはひなるかなぎぜんなる
學者(がくしや)とパリサイのひとよなんぢらよげんしやの墓(はか)をたて義(ぎ)
人の碑(ひ)をかざり 三十 まをしいふわれらもし祖先(せんぞ)のときにあ
らバよげんしやの血(ち)をながすにくみせざりしならんと 三一
されバなんぢらハ預言者(よげんしや)をころせしものゝ裔(すゑ)なることを

みづから證をたて 三二 なんぢらせんぞの量をみたせ へびよまむしのたぐひよ。なんぢらいかでか地獄のけいばつをまぬかれんや 三四 このゆゑにわれなんぢらに預言者と智者と學者とつかはさんなんぢらはあるひとはこれをころしまた十字架につけあるひとはその會堂にてこれをむちうちあるひとは邑より邑へおひくるしめん 三五 それ義なるアベルの血よりみやとまつりの壇のあひだにてなんぢらがころせしバラキアの子ザカリアの血にいたるまで地にながしたる義人の血はきたりてなんぢらにむくいきたらんがためなり 三六 われまことになんぢらにつげん。このことごとくこの代にむくいきたるべし 三七 あゝ

エルサレムよエルサレムハよげんしやをころしなんぢにつかハさるゝものを石にてうつものよ母雞の雛をつばさの志たにあつむるごとくわれなんぢの子どもをあつめんとせしこといくたびぞやされどなんぢらハこのまざりき
三八 視よなんぢらの家ハあれちとなりてのこされん
三九 われなんぢらにつげん主の名によりてきたるものへ福ありとなんぢらのいはんときいたるまでハ今よりわれをみざるべし

第廿四章

耶蘇みやよりいでけれバそのでしきたりて殿宇をかれにみせんとしたりしに
二 耶蘇これらにいひけるハなんぢらこのすべてを見ざるかわれまことになんぢらにつ

けんこのところにハ一のいしも石のうへにのこらずくづされて
ハのこらじ 三 耶蘇かんらんざんに坐したまへるとき門徒
ひそかにきたりていひけるハいつ是のときこれらのことある
やまたなんぢのきたる兆と世のをはりの兆ハいかなる
るぞやわれらにつげたまへ 四 耶蘇こたへてこれにいひ
けるハなんぢら人にあざむかれざるやう慎よ 五 そハおほ
くの人わが名をおかしきたりわれハキリストなりといひて
おほくの人をあざむくべし 六 またなんぢら戦といくさの
風聲をきかんされどつゝしみておそるゝことなかれこれら
のことハかならずあるべきなりされども末期ハいまだいたら

らば七民おこりてたみをせめ國ハくにをせめ饑饉疫病地
震ところ〴〵にあるなるべし八これみなわざはひのはじめな
り九そのときひとなんぢらを患難にわたしなんぢらをころ
すべしまたなんぢらわが名のために萬民ににくまれん十
このときおほくのもの疑うつたがひにわたしたがひにう
らむべし十一また偽よげんしやおほくおこりておほくの人
をあざむかん十二また不法みつるによりておほくの人の愛
情ひやゝかなるべし十三されどをはりまで志のぶものハ
すくはるゝことをえん十四また天國のこのふくいんを萬民
に證せんためにあまねく天下にいひろめられん。志かる

のち末期いたるべし
十五 このゆゑに預言者ダニエルによりて
いはれたるところの殘暴にくむべきものの聖處にたつを見
ば（讀ものよくおもふべし）
十六 そのときユダヤにをるものは
山にのがれよ
十七 屋上にをるものはその家のものをとらんと
てくだるなかれ
十八 たにをるものはその衣をとらんとて
かへるなかれ
十九 その日にはらめるものと乳をのまする
婦はわざはひなるかな
二十 なんぢら冬または安息日に
にぐることをまぬかれんためにいのれ
二十一 そのとき大なるなや
みあり かくのごとき災難は世のはじめよりいまにいたる
までなかりき またのちにもあらじ
二十二 その日をちぢめ

なくせられずば一人だにすくはるゝものなからん。されど
えらまれしもののためにはその日ハすくなくせらるべし 二三
そのときもしキリストこゝにありかしこにありとなんぢ
らにいふものあるとも信ずるなかれ 二四 それ偽キリストに偽
預言者だちおこりておほいなる休徴とふしぎなるわざとを
おこなひえらまれたるものをも欺惑ことをえべくばとあ
ざむくべければなり 二五 わがあらかじめなんぢらにこゝまでと
告 二六 もしキリスト野にありといふものあるともいづるなか
れ室にありといふものあるとも信ずるなかれ 二七 それ電の
ひがしよりいでゝ西にまでひらめくのごとく人の子もき

あるべけれバなり 二八 それ屍のあるところにハ鷲あつまら
ん 二九 このなやみの日ののちたちまち日ハくらく月ハひ
かりをうしなひ星ハそらよりおち天勢ふるひうごくべし 三〇 その
ときに人の子のしるし天にあらはるまた地上にある諸族ハ
なげきかなしみつゝ人の子が權威とおほいなる榮光をも
て天の雲にのりきたるをみん 三一 またその使者たちをつかハ
し喇叭のおほいなる聲をいださしめて天のこの極よりか
のきはまで四方よりそのえらまれしものをあつむべし
三二 それ無花果樹によりてたとへをまなぶべし その枝
すでにやはらかにして葉めぐまバ夏のちかきをしる 三三 この

くのごとくなんぢらもすべてこれらのことを見ば時ちか
く門ぐちにいたれるとしるべし 三四 まことになんぢらにつげ
ん これらのことことごとく成までこの民はうせざるべし 三五
天地はうせんされどわがことばはうせじ 三六 その日その時
をしるものはたゞわが父のみ天の使もたれもしらざるなり
ーー 三七 ノアのときのごとく人の子のきたるもまたかくのごとし
三八 それ洪水のまへノアが方舟にいる日までひとびと飲食嫁
娶りなどして 三九 洪水のきたりてことごとく滅すま
でしらざりきこのごとく人の子もまたきたらん 四十 その
ときふたり田にあらんに一人はとられひとりはのこさ

るべし二人のをんな磨ひきをしをらんにひとりハとられひ
とりハのこさるべし 四二 このゆゑはなんぢらの主いづれの
ときにきたるかをしらざればおこたらずしてまもれ 四三 なん
ぢらこれをしれもし家のあるじ賊いづれのときにきたるやの
をしらバそのいへをまもりてやぶらせまじ 四四 さればなん
ぢらもまた預備せよ。おもはざるときに人の子きたらんと
すればなり 四五 時にあたりて糧をこのものらにあたふるた
めに主がそのしもべどものうへにたてらるる忠義にして智
きしもべハたれなるその 四六 そのあるじのきたらんときかくの
ごとくつとむるをみらるゝ僕ハさいはひなり 四七 まことになんぢに

ことになんぢにつげん その全業をみなこれにつかさどらすべし 四八 もしそのあしき僕おのがこゝろにわが主のきたるはおそからんとおもひ 四九 その傍輩をうちたゝきて酒にゑひたるものどもとともに飲食しそめなば 五〇 そのしもべの主おもはざるの日おもはざるのときにきたりて 五一 これをきりころしそのむくいを僞善者とおなじうすべし。そこにはてかなしみ切齒することあるべし

第廿五章 そのとき天國はともしびをとりて新郎をむかへにいづる十人のむすめになぞらふべし 二 そのうちの五人はかしこく五人はおろかなり 三 おろかなるものはその燈をと

とゞるはあぶらをたづさへざりしが 智ものはそのともしびとゝもにあぶらを器にたづさへたり 五 はなむことおそかりければみな假寐してねむりけり 六 夜なかのおほさけびてはなむこきたりぬいでゝ迎よとよぶこゑありければ 七 この童女どもみなおきてそのともし火をとゝのへたるは 八 愚なるものこのさときものにいひけるは われらの燈きえんとすればねがはくはなんぢらの油をすこしわけあたへよ 九 このさときものこたへていひけるは すこしくなんぢらとわれらはおそらくは足まじ なんぢら賣者にゆきておのがためにかへ 十 このもの買んとてゆきしとき新郎きたりければそなへしもの

へたるものハこれとゝもに婚筵にいりしかバ門ハとぢらる
れたり　十一　のちにてのちその餘のむすめきたりていひけるハ
主よ主よわれらのためにひらきたまへ　十二　こたへてわれま
ことになんぢらにつげん　われハなんぢらをしらずといへる
十三　さればおこたらずして儆醒なんぢらその日その時を
しらざればなり○十四　また天國ハある人のたびだちせんとし
してその僕らをよび所有をこれにあづくるがごとし　十五　お
のおのゝ智慧にしたがひてあるものにハ銀五千あるもの
にハ二千あるものにハ一千をあたへおきたゞちに旅だち
せり　十六　五千の銀をうけしものハゆきてこれをもちてのし

ほかに五千をえたり　二千をうけしものもまたほかに二千(せん)をえたり　十八 しかるに一千(せん)をうけしものはゆきて地(ち)をほりその主(しゆ)のかねをかくせり　十九 ほどへてのちそのしもべたちの主(しゆ)かへりきてかれらと會計(くわいけい)せしは　二十 五千(ごせん)のぎんをうけしものそのほかに五千(ごせん)の銀(ぎん)をもちきたりて主(しゆ)よわれに五千(ごせん)のぎんをあづけしがほかに五千(ごせん)のぎんをまうけたりといひけるは　二十一 主(しゆ)これにいひけるはあゝ善(ぜん)にして忠(ちう)なるしもべぞなんぢわづかなることに忠(ちう)なり。われなんぢに多(おほく)のものをつかさどらせんなんぢの主(あるじ)のよろこびにいれよ　二十二 二千(にせん)の銀(ぎん)をうけしものもきたりて主(しゆ)よわれに二千(にせん)のぎんをあづけ

しがほかに二千(せん)の銀(ぎん)をまうけたりといひければ 二三 主(しゆ)これ
にいひけるハあゝ善(ぜん)かなちゆうなるしもべぞなんぢ寡(わづか)な
ることにちゆうなり我(われ)なんぢにおほきものをつかさどら
せんなんぢのあるじの歓楽(よろこび)にいるべし 二四 また一千(いつせん)のぎんを
うけしものきたりていひけるハ主(しゆ)よなんぢハきびしき人(ひと)
にてまかざるところより穫(かり)ちらさゞるところより斂(あつむ)ることを
しれハしる 二五 ゆゑにおそれてゆき主(しゆ)の一千(いつせん)のぎん
を地(ち)にかくしおけり今(いま)なんぢなんぢのものを得(え)たり 二六 その
の主(しゆ)こたへていひけるハ悪(あく)かつおこたる僕(しもべ)ぞなんぢわ
が播(まか)ざるところよりかり散(ちら)さゞるところよりあつむるこ

とせざるをしるか 二七 しからばわがかねを兌換舗にあづけおくべきなりしかバわがかへりきたるとき本(もと)と利(り)とをうくべし 二八
このゆゑにこの者の一千(いつせん)のぎんをとりて十千(まんせん)の銀(ぎん)あるものに
あたへよ 二九 それもてるものハあたへられてなほあまり
あり無有(もたぬ)ものハそのもてるものまでもうしなふべけれバなり
三十 無益(むえき)なるしもべをそとのくらきにおひやれそこにて哀(かな)
哭(しみ)はがみすることあらん ○ 三一 人(ひと)の子(こ)おのれのゑいくわう
をもてもろもろの聖使(きよきつかひ)をひきゐきたるときハその榮光(えいくわう)のく
らゐにざすべし 三二 萬國(ばんこく)の民(たみ)をそのまへにあつめ羊(ひつじ)をかふもの
の綿羊(めんやう)と山羊(やぎ)とをわかつがごとくこれをわかち 三三 めん

やうをその右にやぎをその左におくべし 三四 うして王その
みぎなるものにいはん。わが父にめぐまれたるものよ、きたり
つそて創世よりこのかたなんぢらのためにそなへられたる
國を嗣 三五 それはなんぢらわが飢しときわれにくらはせ渇しと
きわれにのませ旅せしときわれをやどらせ 三六 裸なりしと
きわれにきせ病しときわれをみまひ獄にありしときわれを
まきてとひつればなり 三七 ここにおいて義ものこれにこたへてい
はん。主よいつなんぢのうゑたるをみて食せまゐらせのどかはきた
るに飲せしや 三八 いつ主のたびしたるをみてやどらせまゐら
はだかなるに衣しや 三九 いつ主のやまひまたは獄にあるをみて

なんぢらにいへりしや 王こたへていひけるはいたん誠
はなんぢらにつげん およそなんぢらわがこの兄弟のいと
ちひさきものゝひとりにおこなへるはすなはちわれに行
しなり 四一 つひにまた左にをるものにいはん 罰せらるべき
ものよわれをはなれて惡魔とそのつかひのためにそなへおく
たるきえざる火にいれよ 四二 それなんぢらわが飢しときわ
れにしよくをあたへず渇しときわれにのませず 四三 旅せしときわれを
やどらせず裸なりしときわれにきせず病またひとやにお
りしときわれを顧ざればなり 四四 こゝにおいてかれらもまた
こたへていはん 主よいつなんぢの飢または渇または旅しまたは

裸なる病める獄にあるを見て事へざりしや 四十五 そのとき王こたへていはんまことになんぢらにつげん。この至微もののひとりにおこなはざりしはすなはちわれにおこなはざりしなり 四十六 かれらはかぎりなき刑罰にいりたゞしきものはかぎりなき生命にいるべし

第二十六章 さて耶蘇この言をいひをはりてその弟子にいひけるは 二 二日ののち逾越節あるはなんぢらがしるところなりそは人の子は十字架につけられんためにわたさるべし 三 このときさいしやうおよび民の長老たちカヤパといへる祭司のをさのやしきの庭にあつまり 四 詭計

さくにて耶穌をとらへころさんとともにはかりいひける
に 五 まつりの日にはなすべからずおそらくは民のうちに
亂おこらん ○ 六 耶穌ベタニヤの癩病シモンのいへにおはしま
せるとき 七 ある女蠟石のうつはものにあたひたかき
香膏をいれて耶穌の食するときにきたりその首にそゝ
ぎしかば 八 でしたちこれをみていきどほりていひけるは
この糜費のことをなすはなにゆゑぞや 九 これをうらば
ばあまたの金をえてまづしきものにほどこすことをえん
十 耶穌しりてこれにいひけるはなんぞこの婦をなやま
すや彼はわれに善事をおこなへるなり 十一 まづしきものは

ハつねになんぢらとともにあれどわれハつねになんぢらと
ともにあらざるなり 十二 かれがこのにほひあぶらをわが體にそ
そぎしハわが葬のためになせるなり 十三 まことになんぢ
らにつげん天の下いづくにてもこの福音のひろまる
ところにハこの女のなせしこともその記念のた
めにかたりつたへらるべし ○ 十四 そのとき十二門徒のひとり
なるイスカリオテのユダといへるもの祭司のをさたちのもと
にゆきていひけるハ 十五 われなんぢらにこのひとをわたさば
なにほどをあたふるやかれら銀三十まで約したり 十六 この
ときより耶蘇をわたさんと機をうかゞひぬ ○ 十七 たねいれ

ぬ節のいはひのはじめの日なし耶穌にきたりいひけるはなんぢの
すぎこしの食をなんぢのためにいづこにそなふべ
きや 十八 耶穌いひけるはみやこにゆき某にいたりていへ師
いふわがの時ちかづきけりわれわが弟子とともに逾越のいはひを
なんぢが家にてなすべしと 十九 弟子は耶穌の命ぜしごとく
すぎこしの食をそなふ 二十 日くるるとき耶穌じふ
にでしとともに席につき 二十一 食するときいひけるはまことに
なんぢらにつげんなんぢらのうち一人われをわたさく
あるなり 二十二 うれへていたくうれひておのおの耶穌にいひいでけ
るは主よわれなるかと 二十三 こたへていひけるはわれとゝもに

手を盃につくる者はすなはちわれをわたすものなり 二四 人の子はおのれについて録されたるごとく逝ん。されど人の子をわたすものはわざはひなるかな。その人うまれざらましかばかへつて幸ありしならん 二五 かれをわたすユダこたへていひけるはラビわれなるや。かれはいひけるはなんぢのいへるごとし 二六 かれら食するとき耶蘇パンをとりて祝しこれを擘でしにあたへていひけるは取てくらへ。これはわが身なり 二七 またさかづきをとりて謝しこれにあたへていひけるはなんぢらみなこの杯よりのめ 二八 これ新約のわが血にしてつみをゆるさんとておほくの人のためにながすそと

こゝろのまゝなり　われなんぢらにつげん今よりのちわれ
なんぢらとともにあたらしきものをわが父の國にてのまん日ま
ではふたゝびこの葡萄の樹のみをのまじ ○ 三十 かれら
歌をうたひてのち橄欖山にゆけり 三十一 そのとき耶蘇
かれらにいひけるは今夜なんぢらみなわれにつきてつま
づかん　そはわれ牧者をうたば群のめんやうちらんと志るさ
れたればなり 三十二 されどわれ復生てのちなんぢらにさきだ
ちてガリラヤにゆくべし 三十三 ペテロこたへて耶蘇にいひけるは
いへ衆なんぢについて躓くともわれはつひにつまづかじ 三十四
耶蘇かれにいひけるはわれまことになんぢにつげん

よひ雞なかざるまへになんぢ三次われをしらずといはん 三五
ペテロいひけるはわれ主とともにしぬるともな
んぢをしらずといはじ門徒もみなかくいへり 三六 そのとき
耶穌かれらとともにゲツセマネといふところにいたりて門
徒たちにいひけるはなんぢらこゝにとゞまれわれかしこにゆ
きていのらん 三七 ペテロおよびゼベダイのふたりの子をたづ
さへ憂愁かなしみをもよほし 三八 このときかれらにいひけるはわが
心いたくうれひて死るばかりなりこゝにとゞまりてわれとと
もに目をさましをれ 三九 すこしくすゝみゆきて俯伏いのりい
ひけるはわが父よもしかなはゞこの杯をわれよりはなち

たまへされどわがこゝろのまゝをなさんとするにあらずたゞ
聖旨にまかせたまへ 四〇 きたりて門徒にきたりそのいねた
るを見てペテロにいひけるはかくのごとく一時もわれとともに目
をさますことあたはざるか 四一 まどひにいらぬやう儆
醒しいのれそのたましひはねがへども肉體はよわき
なり 四二 ふたゝびゆきてまた祈禱いひけるはわが父よもし
わがのまでこのさかづきをのぞきさることあたはずばみこ
ころにまかせたまへ 四三 きたりてまたこの門徒の寝たるを
みるごとくこの門徒の目つかれたるなり 四四 この門徒をすておきて
またゆきて第三次もおなじことばをもていのれり 四五 ついに

その門徒(でし)にきたりていひけるハ今(いま)ハいねてやすめ時(とき)ハちか
づけり人(ひと)の子(こ)ハつみびとの手(て)にわたされん 四六 起(おき)よわれらゆくべ
し我をわたすものちかづきたり○ 四七 このことばいへるとき
十二(じふに)のひとりなるユダ剣(つるぎ)と棒(ぼう)とをもちたるおほくの人々(ひとびと)
とともに祭司のをさらと民(たみ)の長老(ちやうらう)のもとよりきたれり 四八 耶蘇(いえそ)を
わたすものかれらに號(しるし)をあたへていひけるハわが接吻(くちづけ)せ
る者(もの)ハそれなりこれをとらへよ 四九 たゞちに耶蘇(いえそ)にきた
りてラビやすきこといひてこれにくちつけせり 五十 耶蘇(いえそ)かれに
いひけるハ友(とも)よなんぢのきたるハなにのためぞや。つひにこのものども
みきたり手(て)を耶蘇(いえそ)にかけてとらへぬ 五一 耶蘇(いえそ)とともにあり

しものゝひとり手をのべ劔をぬきてさいしの長のしもべをうちてその耳をそぎおとせり 五二 耶蘇これにいひけるハなんぢのつるぎをもとにおさめよ。すべて劔をとるものハつるぎにてほろぶべし 五三 なんぢいま十二軍餘の天使をわがちゝに求てうることあたはずとなんぢおもふや 五四 もし然せバかくあるべきことをしるせし聖書はいかでかなはんや〇 五五 このとき耶蘇ひとびとにいひけるハつるぎと棒とをもちてぬすびとをとらふるごとくしてわれをとらへにきたるか。われ日々なんぢらとともに殿にざしてをしへしになんぢら我をとらへざりし 五六 されどかくのごとくなる

いへる預言者の志るされたるところに應成せんためなり。つひにてしたちみな耶蘇をすてゝにげさりぬ〇
五七 耶蘇をとらへたるものこれをひきて學者と長老のあつまれるところの祭司のをさカヤバのいへにゆく
五八 ペテはとほくながらなほ耶蘇にしたがひ祭司のをさの庭にまでいたりその結局をみんとて内にいりしもべとともにざせり
五九 さいしのをさたちおよび長老すべての議官ともに耶蘇をころさんとして妄證をもとむれどもえず
六〇 おほくのいつはりの證者きたれどもなほえず後にいつはりのあかしびと二人きたりていひけるは
六一 この人さきにいへることありき

よく神の殿をこぼちて三日のうちにこれを建おくるといへ
しと　六二　さいしのをさ起ていゑそにいひけるはなんぢこたさ
ふることなきかこの人々のなんぢにたつる證據はいかにと
六三　いゑそは黙然たり。さいしのをさこたへていゑそにいひける
はなんぢキリスト神の子なるやいなやなんぢを活神にちかは
せてわれにつげしめん　六四　耶穌これにいひけるはなんぢ
いへるごとし。かつまたなんぢらにつげんこのゝち人の子
大權のみぎりにざし天の雲にのりてきたるをなんぢらみる
べし　六五　こゝにおいて祭司のをさそのころもを裂ていひけ
るはこの人はけがしごとをいへり。なんぞほかにしようこて

をもとめんや。なんぢらも今その褻瀆たることをきく 六六 な
んぢらいかにおもふや。かれらこたへていひけるハこれ
死におよべり 六七 こゝにおいてかれらその面につばきし、こ
つ拳にてうてり。また或人ハこれをたゝきいひけるハ 六八
キリストよなんぢをうつものハ誰なるかよげんせよ○
六九 ペテロはそとに坐しゐけるにある婢きたりてなんぢも
ガリラヤの耶穌とともなりしといひければ 七十 ペテロすべての
人のまへにてこれをうけがはずしていふ。なんぢがいふ
ところをしらずといへり 七一 いでゝ門ぐちにいたれると
きまた他の婢かれをみてそこにをるものにいひける

けくゞたらぞして誓てわれその人をしらずと 七三 しばらくありて
かたはらに立たるものすゝみよりてペテロにいひけるは
まことになんぢもその黨のひとりなりそはなんぢの口音
なんぢをあらはせり 七四 こゝにおいてペテロはのゝしりつ
ちかひてわれその人をしらずといひしがやがて雞なきぬ
七五 ペテロ耶蘇のにはとりなかざるまへになんぢ三次われを
しらずといはんといひたまへる言をおもひいだしそとにゆき
いたく悲慘なげけり

第廿七章

平旦になりてすべての祭司の長と民のとしより

共にはかりて耶蘇をころさんとし 二 そこでこの是を縛ひきゆきて方伯のポンテオピラトにわたせり ○ 三 こゝにかのおいて耶蘇をわたせしユダこの是の死にさだめられしをみて悔その銀三十をさいしの長老たちにかへして 四 いひけるハ無辜の血をわたしわれ罪ををかしぬといひけるにかれらハわれらにおいてなんぞ與らんやなんぢみづから當べしとて 五 ユダそのぎんを殿になげすてゝさりゆきてみづからくびれたり 六 さいしのをさたちこの銀をとりていひけるハこれハ血のあたひなれバ賽錢のなかにいるべからずとて 七 ともにはかりこの銀をもて旅客をほうむるために陶工

のはたけをかへり 故にそのはたけはいまにいたるまで血田と
なづけらる 九 ここにおいて預言者エレミヤによりいはれしこ
とばはイスラエルの民にねぶもられ價られしものゝあ
たひの銀三十枚をとり 十 主のわれに命ぜしごとくやきもの
しのはたけを買ぬとあるにかなへり（） 十一 さて耶穌つかさ
のまへに立つかさ耶穌にとふていひけるはなんぢはユダヤ
びとの王なるかと耶穌これにいひけるはなんぢのいふごと
し 十二 祭司のをさ長老たちこれをうつたふれどもなにの
こたへもせず 十三 ここにおいてピラトこれにいひけるはこ
の人々なんぢにたてつる證のかくおほいなるをなんぢきかの

ざるこの 十四 方伯のいとあやしとおもふまでに耶蘇ひとことも
こたへせざりき 十五 このまつりの日ごとに方伯より民のねが
ひにまかせてひとりの罪人をゆるすその例あり 十六 ときにしるし
バラバといへる人のなだかきざいにんありければピラト民
のあつまりしときこのものどもにいひけるはバラバかあるひはきり
ストととなふる耶蘇なるか。なんぢらたれをゆるさんとお
もふや。こはかれ媢嫉によりて耶蘇をわたしゝことをしればなり
○十九 方伯さばきの座にをるときその妻いひつかはし
しけるはこの義人になんぢのかゝはることなかれ。そはわれき
けふ夢のうちにこの人のためにおほいにくるしみたり 二十 祭司の

されど長老たちバラバをゆるし耶穌をころさんことをねがふべく
と民にすゝむ 二十 方伯こたへてこれらにいひけるはふたり
のうちいづれをわれがなんぢらにゆるさんことをのぞむや
といひしにバラバとこたふ 二十二 ピラトいひけるはさらばキリストと
となふる耶穌はわれなにをなすべきか。衆いふ十字架につ
けよと 二十三 つかさいひけるはこのものなにの悪事をなせしや この
ものゝますますさけびて十字架につけよといふ 二十四 ピラトその
言の益なくしてたゞ乱のおこらんことをしり水をとりて
ひとぐのまへにて手をあらひいひけるはこのたゞしき人の
の血はわれつみなしなんぢらみづからこれを當るべし 二十五 た

みなこたへていひけるハその血ハわれらとわれらの子
孫にかゝるべし 二六 こゝにおいてバラバをかれらにゆる
し耶蘇をむちうちて十字架にかけんためにわたしけ
り 二七 つかさの兵卒ハいゑすをたづさへ公廨にいたり組中
をそのもとにあつめ 二八 いゑすのころもをはぎとりてむらさきの
袍をきせ 二九 いばらの冠をあみてその首にかむらしめまた
葦をみぎの手にもたせかれらそのまへにひざまづき嘲弄し
ていひけるハユダヤびとの王やすこやかなれ 三十 またかれに唾しそ
の葦をとりてそのかうべをうてり 三一 てうろうしをはりて
そのうちぎを褫ぎもとのころもをきせて十字架につけんと

かれをひき行く　そのいでしときクレネ人シモンといふものにあひければ強てこれにその十字架をおはせさせき○三三　かれらゴルゴタ譯ばすなはち髑髏といふところにきたり　三四　醋に膽をあはせて耶穌にのませんとしたりしに嘗てのむことをせざりき　三五　かくて耶穌をしふじかにつけしのち鬮をとりてそのころもを分ちこれは預言者のことばにかれらたがひにわが衣をわけわが裏衣をくじにせしといひしにかなへり　三六　兵卒こゝにざして耶穌をまもりをれり　三七　また罪標にこれはユダヤびとの王いゑすなりとしるしてその首のうへにかけ置　三八　そのとき二人のぬすびと耶穌とゝもに

ひとりハその右ひとりハその左に十字架につけらる〇 三九
ゆききのものは耶蘇をのゝしり首をふりていひけるハ 四十 殿
をこぼちて三日にこれをたつるものよみづからをすくへ
なんぢもし神の子ならば十字架よりおりよ 四一 祭司の長がく
しや長老たちもまたおなじく嘲弄していひけるハ 四二 人をも
すくひておのが身をすくひあたはずもしイスラヱルの王たら
ばいま十字架よりくだるべしさらバわれらこれを信ぜん
四三 かれハ神によりたのめり神もしかれをいつくしまバ今
すくふべしそハおのれハ神の子なりといひしなり 四四
ともに十字架につけられたる盗もおなじく耶蘇をのゝし

まりに　晝のまふましまへ三時にいたるまでそのくにあま
ねく黒暗となる　四六 三時ごろ耶蘇おほごゑにエリエリラマ
サバクタニとよばはりぬ。これを譯ばわが神わが神なんぞ
われをすてたまふやといへるなり　四七 そこにたちゐたるも
のゝうちある人これをきいてこの人エリヤをよぶなりと
いふ　四八 そのうちの一人たゞちにはしりゆきて海絨をとり醋をふ
くませこれをよしにつけて耶蘇にのましむ　四九 餘人いひける
は俟エリヤきたりてこの人をすくふや否こゝろむべし○　五十
耶蘇また大聲によばはりて氣たえにけり　五一 みやの幔うへよ
りしもまでさけて二となりまた地ふるひ磐さけ　五二 墓ひら

けてさきだてば いねふせる聖徒の身おほくよみがへり耶穌のよ
みがへるのち 五三 墓をいでゝ聖城にいりおほくのひとにあ
あらはれたり○ 五四 百夫の長とゝもに耶穌をまもりたるも
の地震およびそのありしことをみて甚おそれいふまことに
は神の子なりといへり○ 五五 このところに遙にのぞみおる
るおほくの婦ありしがかれらはガリラヤより耶穌にしたがひ
ひつかへしものどもなり 五六 そのうちにありしものはマグダラ
のマリアとヤコブヨセの母なるマリアとゼベダイの子
たちの母とあり○ 五七 日くれて耶穌のでしなるヨセフとい
へるアリマタヤの富人きたりてピラトにゆき耶穌のからだを

ねがひしかバピラトその屍をわたせと命ず○ヨセフ
そのからだをとりてきよき布につゝみ 六十 これを磐にほり
たるおのれがあたらしき墓におさめおほいなる石をはかの門
にまろばしてさる 六十一 マグダラのマリアとほかのマリアとそ
のはかにむかひて坐しそこにをれり○六十二 預備日の翌日すなはち
のさいしをさとパリサイのひとだちピラトのもとにつどひきたりて
いひけるハ 六十三 主よわれらおもひいだせり。この偽者いきてを
りしとき三日の後よみがへらんといひし 六十四 このゆゑに
命じて三日まで墓をかためしめよ。おそらくハその
のでし夜きたりてこれをぬすみ死よりよみがへりたりと

民はいよいよまよふならバ後のまどひハ先よりもいやまさるべし 六五 ピラトこれにこたへていひけるハ守兵ハなんぢらにあり ゆきてそのおもひのまゝにこのつかをまもれよ 六六 こゝにおいてかれらゆきて石に封印しまもるものをもつて墓をかためたり

第廿八章

安息日をはりてのち七日のはじめの日よあけがたにマグダラのマリアあるひはほかのマリアその墓をみんとてきたりしに 二 おほいなる地震ありて主のつかひ天よりくだりて墓のもんより石をまろばしそのうへに坐せり 三 その容貌ハいなづまのごとくその衣服ハゆきのごとくしろかりし 四 守兵これをおそれてふるひて死たるもののごとくなりぬ

五 天使こたへてをんなにいひけるはなんぢらおそるゝこ
となかれわれなんぢらが十字架につけられし耶蘇をたづ
ぬることをしる 六 このところにあらずそのいひしごとく
復生たりなんぢらきたりて主のおくのところを見よ 七
いそぎゆきてその門徒につげよかれは死よりよみがへりな
んぢらにさきだちてガリラヤにゆけりこのところにおいてなん
ぢらかれをみるべしわれこれをなんぢらに告ぬ 八 をんなたちお
それながらもいとよろこびて急ぎはかをさりその門徒につ
げんとはしりゆけり 九 でしらにつげんとてゆくとき耶蘇これに
まへにあふて安かれといひたまひければ婦たちきたりその足

をいだきて拝しぬ 十 耶穌かれらにいひけるはおそるゝな
ゆきさりてわが兄弟にガリラヤにゆけとつげよ そこにて
かれらわれをみるべし ○ 十一 婦のさりしのち守兵のうちあるもの
どもみやこにいりすべてありしことを祭司のをさたち
につげしかば 十二 かれらと長老あつまりてともに議りおほくの
かねを士卒にあたへていひけるは 十三 なんぢらいふべしお
いねたるときその門徒よるきたりてこれをぬすめりと 十四
このこともし方伯にきこゆるともわれらこれをすゝめて
なんぢらに憂慮なからしめん 十五 こゝに銀子をとりていひふ
くめられたるごとくなしたりし於是このことばきこえし今

日にいたるまでユダヤ人のうちにいひつたへられたり
其十一のでしガリラヤにゆきて耶穌のこれらに命じたま
ふところの山にいたり
十七
耶穌をみて拜せりされどうたがへ
るものもありき
十八
耶穌きたりてこれにいひけるは
は天のうち地のうへのすべての權をわれにたまはれり
十九
このゆゑになんぢらゆきて萬國の民にバプテスマを施こ
しこれを父と子と聖靈の名にいれてしるしし
二十
すべての
をしへてなんぢらに命ぜしことをまもれとこれらにをしへ
よそれわれは世のをはりまでつねになんぢらとともにを
るなりアーメン

馬太傳福音書終

新約全書馬可傳福音書

第一章

神の子耶穌キリストのふくいんのはじめなり 二
預言者のしるして。視よわれわがつかひを
つかはさん。これなんぢのまへにてその道をそなふべし 三 野
によばはる人のこゑあり。いはく主のみちをそなへそのみち
をまつすぐにせよと 四 ヨハネ野において バプテスマ
をほどこし罪のゆるしをえさせんがために悔改のバプテスマ
をのべつたへたり 五 ユダヤのちまた中およびエルサレムの人々
うちつれきたりておのおのその罪をいひあらはしヨルダムとい
ふ河にてバプテスマをうく 六 ヨハネハ駱駝のけごろもを着て

しハ皮帯をむすび蝗蟲と野蜜をくらへり 七 この人のべつたへけるハ我よりまさるものわが後にきたらん われハ屈てその履のひもをとくにもたらず 八 われハ水をもてなんぢらにバプテスマをほどこせしが かれハ聖靈をもてなんぢらにバプテスマをほどこすべし 九 そのころ耶穌ガリラヤのナザレよりきたりヨルダンにてヨハネよりバプテスマをうけ 十 やがて水よりあがるとき天わかれて聖靈鴿のごとくそのうへにくだるをみたり 十一 また天より聲ありていふ。なんぢハわが愛子わがよろこぶところのものなりと ○十二 かくて靈たゞちに耶穌を野にゆかしむ 十三 かれ四十日

のよをりサタンにこゝろみられ獸とゝもにをりしが天のつかひたちこれにつかへぬ○ 二四 ヨハネのとらへられしのち耶蘇ガリラヤにいたり神の國の福音をつたへいひけるハ 十五 期ハみてり神の國ハちかづけり汝等心をあらためて福音を信ぜよ○ 十六 耶蘇ガリラヤのみづうみのほとりをあゆめるときシモンとその兄弟アンデレーのみづうみに網うてるをみる。このものらハ漁者なり 十七 耶蘇このものらにいひけるハ我にしたがへ。われなんぢらを人をすなどるものとせん 十八 このものたちハ其の網をすてゝこれにしたがへり 十九 こゝよりすこしすゝみゆきゼベダイの子ヤコブとそのきやうだ

いヨハネの舟(ふね)にありてあみをつくろふをみて 二十 ただちにこれらをよびたまひしかバその父(ちち)ゼベダイを傭人(やとひびと)とともにふねにのこして、かれにしたがへり ○ 二一 かれらカペナウムにいたる耶穌(いゑす)すなはち安息日(あんそくにち)に會堂(くわいだう)にいりてをしへをなせしに 二二 人々(ひとびと)そのをしへにおどろきあへり。それハ學者(がくしや)のごとくならず權威(けんゐ)をもてるもののごとくをしへたまへバなり 二三 その會堂(くわいだう)にけがれたる鬼(おに)につかれたる人(ひと)ありて 二四 さけびいひけるハあゝナザレの耶穌(いゑす)よわれらハなんぢとなんの與(あづか)りあらんや。なんぢきたりてわれらをほろぼさんとするか。なんぢハ誰(たれ)なるかわれしれりすなはち神(かみ)の聖(せい)なるものなり 二五 耶穌(いゑす)

これを責てのたまひけるハ聲をいださずこの者をはなれいで
よ　二六　汚たるあくまその人をひきつけさせ大聲にさけびて。
出でさりたり　二七　衆みなおどろき相かたりていひけるハこれ
何ごとぞやこれハいかなるあたらしき教ぞや。けがれたる鬼
さへけんゐをもて命じけれバしたがへり　二八　こゝにおいて
耶蘇のきこえあまねくガリラヤの四方にひろがりぬ◯二九　の
ちやがて會堂をいでヤコブおよびヨハネとともに
シモンアンデレーの家にいりたりしに　三十　シモンのしうとめ熱
をやみてふしゐけれバある人たちこれを耶蘇につぐ
三一　耶蘇ゆきてその手をとりこれをおこしけれバ熱たちまち

わさりぬ。かくてその婦(をうな)かれらに供事(つかへ)たり 三二 ゆふぐれ日(ひ)の
いるころ人々(ひと〴〵)すべての病(やまひ)をわづらへるもの鬼(おに)につかれた
るものを耶蘇(いえそ)にたづさへきたる 三三 その邑(まち)こぞりて門(かど)にあ
つまれり 三四 耶蘇(いえそ)さまざまのやまひをわづらへるおほくの人(ひと)
人(びと)をいやし。またおほくの鬼(おに)をおひいだし鬼(おに)のものいふこ
とをゆるさゞりき。そは鬼(おに)かれを知りたるによりてなり。
三五 夜(よ)あけざるまへに耶蘇(いえそ)たちてさびしき人(ひと)なきところにゆきそこ
にて祈禱(いのり)せり 三六 シモンおよびかれとともにありしものども
かれの跡(あと)をおひゆき 三七 かれにあひていひけるは衆(ひと〴〵)みな
なんぢをたづぬ 三八 耶蘇(いえそ)かれらにいひけるは、ちかきさとへ

ばのぶるためになんぢらもともに近郷のむら〳〵にゆかん
われこれがためにきたれるなり　三九 耶穌あまねくガリラヤの
くにを經めぐりその會堂にてをしへ鬼をおひ
いだせり○四十 癩病のものの一人これにきたりて曲跽ねがひ
いひけるはなんぢもし聖旨にかなはゞわれをきよく
なしうべし　四一 耶穌あはれみて手をのべこれにつけて。わが
こゝろにかなへり潔なれと　四二 いふやいなやたゞちに癩病を
はなれてその人きよまれり　四三 耶穌きびしくこれを戒つゝし
みてなにごとも人につぐるなかれたゞゆきておのが身を祭
司にみせそのきよめられしためにモーセが命ぜしところ

のものを獻てかれらに證據となせといひてさらしめたり
四五 されどもかれいでゝ先くのことを大にいひつたへかたりひろめければ耶穌このゝちあらはに城にいりがたくたゞ人なきところに居たりしがひとびと四方よりかれにきたりき

第二章

數日のゝち耶穌またカペナウムにきたりしに 二 かれの室にをることきこえければたゞちにおほくの人々つどひきたり門にたつべき場處さへもなきほどなりき。耶穌かれらにをしへを宣 三 こゝに癱瘓をやめるものを四人にかゝせ耶穌にきたらせるものありしが 四 群集によりてちかつ

づきがたかりけれバ、かれのをるところの屋蓋をとりひらきて
きてちゆうぶの人をねどこのまゝつりおろせり 五 耶蘇そ
の信仰をみてちゆうぶのひとにいひけるハ子よなんぢの
罪ゆるされたり 六 數人のがくしやそこに坐しゐけるが心
のうちにおもひけるハ 七 この人ハなにゆゑかく悪口をい
ふぞ神にあらずしてたれか罪をゆるすことをえん 八 耶蘇
ただちにかれらが心のうちにかくのごとくに論ずる
をみづからそのこゝろにさとりてこれらにいひけるハなん
ぢらなんぞ心のうちにこれらをろんずるや 九 癱瘓の
人になんぢの罪ハゆるされたりといふと起てなんぢの

ねどこをとりてゆけといふといづれやすきや 十 それ人の子地にてつみをゆるすその権威あることをなんぢらに志らせんとて遂にちゆうぶのくゞに 十一 われなんぢに告ぐおきて臥床をとりなんぢの家にかへれといひければ 十二 その人たちまちおきてねどこをとり衆人のまへにいでぬ。ひとびとみなおどろき神をあがめていひけるはわれらいまだかくのごときことを見しことなし○ 十三 耶穌またうみべにゆきしに人々みなそのもとにきたりければこれらを教へ給ひこゝよりすゝみてアルパヨの子レビといふもの税吏のやくしよにざしゐけるを見てわれにしたがへといひければ、かれ起てあと

かくて耶蘇そのいへにて食するときおほくの税吏つみあるひと〴〵耶蘇および門徒ともに坐せり。これらのものおほくありて耶蘇にしたがひぬ 十六 學者とパリサイの人々は耶蘇が税吏および罪あるひと〴〵とともに食するをみてその弟子にいひけるはなにゆゑ税吏つみあるひと〴〵ともに食飲するや 十七 耶蘇きゝてかれらにいひけるは康強なるものは醫者のたすけをもとめず病あるものこれをもとむるなりわれきたりしは義人をまねくためにあらず罪人をくいあらためさせんがためなり○ 十八 ヨハネのでしおよびパリサイの人つねに断食することありけるがひと〴〵きたりて耶蘇に

きたりいひけるハヨハネのでしとパリサイのでしハ断食(だんじき)するにあんぢの門徒(でし)ハなにゆゑだんじきせざるや 十九 耶穌(いえす)のたまひけるハ新郎(はなむこ)の友(ともだち)そのまなむてともにをるうちハ断食(だんじき)することをうべきや。うべからず新郎(はなむこ)ともにをるうちハだんじきすることをえず 二十 将來(のち)にいたらバはなむこをとらるゝ日(ひ)きたらんその日(ひ)ハだんじきすべきなり 二一 あたらしき布(きれ)をふるき衣(きもの)にぬひつくるものあらじ。もし然(しか)せバそのあたらしきにかぎなくるもの舊(ふるき)をほころばしてそのやぶれうくつてあしくなるべし 二二 また新酒(あたらしきさけ)をふるきかはぶくろにつめしものあらじ。もしそのせバあたらしきさけハそ

の嚢をやりさき酒ながれいでゝ、そのふくろもそこなふべく
し。あたらしき酒ハあたらしきふくろにいるべきもの
なり○ 二三 さて耶穌あんそく日にむぎのはたけをとほりし
にその門徒あゆみつゝ麥の穗をつみはじめければ 二四 パリ
サイの人々かれにいひけるハみよなんぞ安息日にせまじきことを
をせらんハなにゆゑぞ 二五 耶穌こたへけるハダビデおよび從
にありしものと乏くして飢しときなしたることをいまだ
讀ざるその 二六 すなはち祭司のをさアビアタルのとき神殿にい
りてたゞ祭司のほかのハくらふまじき供物のパンをくらひ
ともにありしものにもあたへたり 二七 またかれらにい

ひけるハ安息日ハ人のためにまうけられたるものにあらずして人ハあんそくにちのために設られたるものにあらず。されば人の子ハあんそくにちの主たるなり

第三章 耶穌また會堂にいりしに一の手なへたる人ありけるが 二 ひとびと耶穌をうつたへんとして。このときこの人をあんそくにちにいやすや否とうかゞへり 三 いゑすを手なへたる人にいひけるハ中にたちよ 四 またひとびとにいひけるハ安息日にハ善をなすと惡をなすと生をたすくると殺といづれをなすべき。このとき默然たり 五 耶穌いかりをふくミてみまはし。このひと〴〵がこゝろの頑硬なるをうれひ手なへた

る人になんぢの手をのべよといひければ、かれその手をの
ばせしにたゞちに他(ほか)のてのごとくいえたり 六 パリサイの人(ひと)
いでゝいろはして、の耶穌(いえす)をころさんとたゞちにヘロデの
黨(ととう)にあひはかりぬ〇 七 耶穌(いえす)そのでしとともに海邊(うみべ)にしり
ぞきしにおほくの人々(ひとびと)ガリラヤよりこれにしたがふ。また
ユダヤ 八 エルサレム イドマヤ ヨルダムのあなたまたツロとシドン
のほとりよりおほくのひと〴〵耶穌(いえす)のなせしことをきゝて
かれにむらがりきたる 九 耶穌(いえす)ひと〴〵の群集によりておし
なやまさるゝことなからんために小舟(こぶね)をまうけてそなへお
けとその門徒(でし)にいへり 十 これ耶穌(いえす)おほくのひと〴〵を愈(いや)せ

ーまかりてまゝくて疾あるひとゞ手をてこのみにさはらんと
て擁擠ゆゑなり 十一 また汚たる鬼この身をみてそのまへ
にひれふしさけびて。なんぢは神の子なりといひしを 十二
耶蘇この事をば我とあらはすなとなくきびしくいまし
めたり○ 十三 耶蘇やまにのぼりてその意にかなふところの
ものを名しかばきたりて彼につけり 十四 ここにおいて十二
人をたてゝおのれとともにおき。また教をのぶるためにつ
かはし 十五 これらに病をいやし鬼をおひいだすの権威をさづく
十六 まづそのうちシモンをペテロとなづけ 十七 ゼベダイの子ヤコブと
その兄弟ヨハネこのふたりをボアネルゲとなづく。これを譯

バ雷の子ありまたアンデレ ピリポ バルトロマイ マタイ
トーマ アルパヨの子ヤコブ タッダイ カナンのシモン 十九 また
イスカリオテのユダこれは耶蘇をわたせしものなり（） 二十 て
かのもの家にいりしにおほくの人々またきたりあつま
りければ食をするいとまもなかりき 二十一 その親屬きゝてこれ
は狂氣せりといひてとらへんとてきたる 二十二 また
エルサレムよりくだれる學者たちもいひけるはベルゼブルにより
つかれたりかれは鬼のかしらによりて鬼をおひいだすなり
といへり 二十三 耶蘇かれらをよび譬をもていひけるはサタン
いかでサタンをおひいだしえんや 二十四 もし國おのれにわかる

てわかれあらそはゞその國たつべからず 二五 また家おのれまじはりてわかれあらそはゞその家たつべからず 二六 もしサタンおのれにさからひ起てわかれあらそはゞ彼たつべからず。かへつて終あるべし 二七 たれにても勇士のいへに入てそのだうぐをうばはんとせば先つよきものをしばらざればうばふことあたはじ縛てのちその家をうばふべし

二八 われまことになんぢらにつげん人のすべての罪とけがすことばの褻瀆はゆるさるべけれど聖靈をけがすものは永ゆるさるべからず。かへつてながき刑罰にあづからん 三十 かくいへるはひと〴〵耶穌をあしきたまにつかれたりといひしゆゑ

ゆゑなり〇三一 その兄弟と母ときたりて戸外にたち人をつ
かはして耶穌をよばしむ 三二 おほくのひと〴〵耶穌をめぐり
て坐したりしがこれにいひけるは視よなんぢの母と兄弟
そとにありてなんぢをたづぬ 三三 耶穌こたへていひけるは
わが母わがきやうだいはたれぞや 三四 かくてまはりに坐せ
る人々をみまはしていひけるはわが母わが兄弟をみよ 三五
それ神の旨をおこなふものはこれわが兄弟わが姉妹わが
母なり。

第四章 耶穌またうみべにて教訓をはじめしにおほくの人
人つどひきたりければこれ舟にのりて坐しまへてのひ

ひとびとは海にそふてきしにたちけり 二 このときたとへをもておほくのことをこのものらにをしへ教ていひけるは 三 きけよ種まくものまかんとて出 四 まけるときある種はみちのほとりにおちしがそらの鳥きたりてこれをくらへり 五 あるたねは土うすき磽地におちしがつちふかゝらねばたゞちにもえいでたれども 六 日いでしのちやけ根なきがゆゑにこのかれけり 七 あるたねは棘中におちしがいばらそだちてこれを蔽けるが實をむすばざりき 八 またあるたねは沃壌におちしがその苗もえいでゝのびたり實をむすべることあるひは三十倍あるひは六十倍あるひは百倍せり 九 またいひ

らハいひけるハ耳ありてきこゆるものハきくべし○十衆
人のをらざりしとき耶穌のそばにありしものと十二
の門徒とこのたとへをとひしかバ 十一 耶穌これにいひけ
るハ神のくにの奥義をなんぢらはしることをたまへど
他のものにはすべてたとへをもてす 十二 これかれらがみる
とき視てもみえずきくとき聴てもさとらざれバその罪のゆるし
をえざらんためなり 十三 またこれらにいひけるハなんぢら
この譬をしらざるか しからバいかにしてすべてのたとへを
識ことをえんや 十四 その播者ハことバをまくなり 十五 道のま
うへそ路のほとりにおちしものハ人ことバをきゝしとき

たゞちにサタンきたりてその心にまかれたることばをう
ばひとるなり 十六 また磽地にまかれたるものは人ことばを
きくときたゞちによろこびてこれを受けされどもおのれ
に根なきゆゑたゞしばしのみ後みちのために患難ある
ひは迫害にあふときはたゞちにつまづくものなり 十八 また
いばらのなかにまかれたるものは人ことばをきけども 十九
この世の思慮と貨財のまどひさまざまの情欲いりきたり
つきて道をふさぐによりつひに實をむすばざるものなり 二十
沃壌にまかれたるものは人ことばをきゝてこれをうけ或
いさんじふ倍あるひは六十倍あるひは百倍のみをむす

ふものあり〇二一またかれらにいひけるハ燈をもちきたり
て斗のしたあるひハ牀のしたにおくものあらんや。これを
燭臺のうへにおくにあらずや 二二 隱てあきらかにならざるハ
なくつゝみてあらはれざるものハなし 二三 耳ありてきくも
るものハきくべし 二四 またかれらにいひけるハ聽ところを
つゝしめよなんぢらがはかるところの量をもてなんぢら
もはからるべし。きゝたるなんぢらにハなほ加られん 二五 そ
もてるものハなほあたへられもたぬものハもてるものを
もとらるゝなり〇 二六 またいひけるハ神の國ハ人たねを地
にまくがごとし 二七 日夜おきふしするうちに種めばえいでゝ

それぞれのその然ゆゑとしるぞ 二八 その地はおのづから實をむすぶものにして初めは苗つぎには穗いでほのあかうに熟したる穀をむすぶ 二九 あるはみのまかうるときいたるにいたりてたゞちに鎌をいれかりとるなり ○ 三十 まことのひかるは神の國へいりにあづかりし人あまのたぐひとなりて此地をたもくへん 三一 一粒のうるはしきたねのごとし。この地を地にまくときはよろづの種よりもちひさけれど 三二 あるはこれを播てそえのびいでよろづの野菜よりいおほきくなりておほいなる枝とのびしそらの鳥そのかげにすむほどになるなり ○ 三三 耶穌このまへのきゝうるところにあてがひておしへうる譬をも

たとへならではかたらず、たゞそのでしとひとりゐるときにのみことごとくこれを解きかせり

三五 さてその日のくれがた耶穌のたまはく、むかふの岸へわたらんといひければ、門徒たちひとびとをかへらせ、耶穌の舟にありしをそのまゝつれゆきしに、またほかの小舟もともにゆけり

三七 時におほかぜおこり、浪うちこみて殆どふねにみてり

三八 耶穌とものかたに枕していねたりしが、門徒かれの目をさましていひけるは、師よわれらがほろぶるをもかへりみたまはざるか

三九 耶穌おきて風をいましめ、海にしづまりておだやかなれ

まれといひければ風やみておほいになぎけり早うくてこの
ときいひけるはなにゆゑかくおそるゝやなんぢらなん
ぞ信なきや 四一 かれらはなはだしくおそれて互にいひけるは
かぜと海さへもしたがふこれ誰なるぞや

第五章 この時海をわたりてガダラびとの地につき 二 ふね
より耶蘇のあがれるとき悪鬼につかれたる人たゞち
に墓間よりいでゝこれに遇 三 このひとははかのなかをすまゐの
とせり。しばしば桎梏とくさりをもてつなげども鏈をうちき
りまたあしかせをうちくだくによりこれを繋うるものなくま
たたれもこれを制しうるものなかりき 五 夜もひるもつね

に山とはかのあひだにおいてさけびまた石をもておのれの身をきず
つけぬ　六　かれはるかに耶穌(いゑす)をみてはしりきたりこれを拝(をがみ)
し　七　おほごゑによばはりけるは至上神(いとたかきかみ)の子い゛ゑすよわれ
なんぢとなんのかゝはりあらんやわれ神(かみ)によりて求(ねがは)くはわれ
をくるしむることなかれ　八　これ耶穌(いゑす)あくきよ人(ひと)よりいで
よといひしによりてなり　九　耶穌(いゑす)これになんぢの名(な)はなに
ととひしかバこたへけるはわれらの多(おほき)がゆゑにわが名(な)をレギヨン
といふ　十　またしきりにこの土地(とち)よりわれらをおひいだすなかれ
と耶穌(いゑす)にねがひたり　十一　こゝにおほくの豕(ぶた)のむれ山(やま)にえ
さをくらひをりしが　十二　すべての悪鬼(あくき)これにねがひていはく

らをおくりて豕にいらせよといひければ 十三 耶蘇たゞちさうらはゆるせり汚たるおにその人よりいでゝぶたに入しかばおほよそ二千匹ほどの群はげしくかけくだり山坂より海におちてうみにおぼれしぬ 十四 牧者どもにげゆきてこのことを邑まちむらにいひつげければ人々そのありしことをみんとて出 十五 いゑそにきたりて悪鬼にとりつかれたるもの即ちレギヨンともちたりし人の衣服をつけたゞしうあるこゝろさて坐しゐけるとておそれあへり 十六 このことを見しものども悪鬼にとりつかれたりしものゝことゝ豕のことをとりつげしかば 十七 やがて耶蘇にその境をいで

んことをねがひぬ　十八 耶蘇ふねにのらんとせしとき悪鬼に
とりつかれたりしものともにをらんことをねがひけれど
も　十九 耶蘇ゆるさずしてこれにいひけるはなんぢの家にかへ
り親屬にゆきて主のなんぢに行しおほいなることゝなん
ぢをあはれみしことを告よ　二十 このものゆきて耶蘇のおのれに
なしたまへる大なることをデカポリスにてのべければ衆人み
なおどろきあへり○二十一 耶蘇ふねにのりてまた海のむかふに
わたりしに大勢のひとびとうみべにあつまる耶蘇はうみに
ありしに　二十二 會堂のつかさヤイロといふ人きたり耶蘇
をみてその足もとにふし　二十三 切にねがひいひけるはわが

いとけなき女志ぬるばかりなりぬこれをすくはんため
きたりて手をうちかけたまへさらばむすめハいきべ
し 二四 耶穌これとともにゆくときおほぜいの人々うちつれて志
たがひておしあへり 二五 こゝに十二年血漏をわづらひたる
をんなあり 二六 この婦おほくの医者のためになやまされくる
しめられその所有をもことごとくつひやしけれどもすこしの
益もなくかへつてあしくなりしが 二七 耶穌のことをきゝて群
集のあつまりしうちのうしろよりきたりその衣にさはれり 二八
これそのころもにだにさはらばたすかるべしといへるな
り 二九 かくて血のいづることしたちまちとまりおのづから疾い癒

しとその身よりおぼえたり 三十 耶穌みづから能力のおのが出よ
をしりてふりかへり大勢のひとびとのうちへむきていひけるは
わが衣にさはりしものはたれなるぞと 三十一 門徒これにいひけ
るはおほくの人々のなんぢにおしあふをみながらたれか捫
りしものはたれぞといひたまふや 三十二 耶穌このことをなせる
婦をみんとみまはしけれバ 三十三 をんな恐懼をのゝきかのくわ
身にせしことをしりきたりてかれのまへに俯伏して
ことごとくありのまゝをつげしに 三十四 耶穌これにいひけるはむすめ
よなんぢの信なんぢをすくへり安然にしてゆけなんぢの
やまひいえよ 〇 三十五 耶穌このことをいひをるうちに會堂

のつかさの家よりひと〲きたりていひけるハなんぢの女(むすめ)すでにしにたりなんぞ師をわづらはすや 三六 耶蘇(いゑそ)たゞちにそのつげしことをきゝ會堂(くわいだう)のつかさにいひけるハおそるなかれたゞ信(しん)ぜよ 三七 耶蘇(いゑそ)ヘテロとヤコブおよびそのきやうだいヨハネのほかハ誰(たれ)をもともにゆくことをゆるさざりき 三八 すでにくわいだうの宰(つかさ)のいへにきたりてひと〲の忙亂(さわぎ)いたくなきさけぶをみる 三九 いりてかれらにいひけるハなんぞさわぎかつ哭(なき)やむすめハ死(しぬ)るにあらずたゞいねたるのみと 四〇 かれら耶蘇(いゑそ)をあざわらふ。耶蘇(いゑそ)すべてのひと〲をいだし女(むすめ)のちゝはゝとそのともなへるものどもをひき

これ女のふしたるところにいり　むすめの手をとりてこれにいひけるはタリタクミこれを譯ばむすめよわれなんぢに命ずおきよといふ義なり　四二　たゞちに女おきてあゆめり、このれんとし十二歳なり、これら甚おどろきぬ　四三　耶穌このことを人にしらするなかれときびしく戒めまた食物をあたへよと命じたり

第六章

耶穌こゝをさりてふるさとにいたりしにその門徒もこれにしたがひぬ　二　安息日におよびけれバ會堂にてをしへしかバおほくの衆人これをききてあやしみいひけるはさしてこの人はかくのごときことあるての誰よりこの智慧

をさづけられてこのくふしぎなるわざをもその手よりなせ
るや 三 この人は木匠にあらずやマリアの子ヤコブ ヨセ ユダと
シモンの兄弟にしてその姉妹もこゝにわれらとともにお
るにあらずやつひに人々これにつまづけり 四 耶穌これに
いひけるは預言者はそのふるさとその親戚その室家の
ほかにおいてはたふとまざることなし 五 耶穌こゝに
てわづらふものに手をつけてたゞ數人をいやせしほかのふ
しぎなるわざをおこなひえざりき 六 かれらの信
ぜざるをあやしみ卒にむらむらをへめぐりてをしへなせ
り 七 こゝに十二のでしを召てこの弟子を二人づゝつのた

さんとしてこれに悪鬼をおふの權威をさづけまた
かれらに命じけるハひとつの杖のほかハ旅のよういに
なにをもたづさふべからずすなはち旅袋ももちひずまた金をもたずたゞ履
をはきふたつの衣をきることなかれ 十 またかれらにいひけ
るハ何處にても人の家にいりたらバそのところをさるまで
ハそこに居れ 十一 もしなんぢらを接ずなんぢらにきかざる
ものあらバそこをさるとき證のためにあしの塵をはら
へ我まことになんぢらにつげん審判の日にあたりてソドム
とゴモラハこの邑よりもなほやすかるべし 十二 でしたちハ
でゝ人々にくゐあらたむべきことを説ひろめ 十三 また多くの

くの悪鬼をおひいだし。またおほくの病るものにあぶらを
つけていやしぬ○十四 耶蘇の名ひろがりければヘロデ王これを
ききていひけるハバプテスマをほどこせしヨハネいきかへ
へれるゆゑさふしぎあるわざをあらはるなり 十五 ある人ハこれ
をエリアなりといひ或ハいにしへのよげんしやのごとき
預言者なりといふ 十六 ヘロデこれをききていひけるハこれ
わが斬しところのヨハネなり、かれよみがへりたるなり 十七
さきにヘロデその兄弟ピリポのつまヘロデヤのことにより
て人をつかはしヨハネをとらへて獄につなげるに。それヘロデ
がこの嫁をめとりしと 十八 ヨハネいさめてなんぢきやうだ

にの妻をいるゝハよろしからずといひしによりてなり
ヘロデヤこれをうらみてころさんとおもひしかどあたはざ
りき 二十 ヘロデハヨハネを義(ただしく)なる善(ぜん)なるひとゝしりてうや
まひかれを保護(まもり)かれにきゝてかれのことをおこ
なひかつ歓喜(よろこび)てかれにきくことをせり 二十一 かくてヘロデその
誕生(たんじやう)の日(ひ)もろ〳〵の大臣(だいじん)せんにんの長(をさ)およびガリラヤの尊貴(たふとき)
ひと〴〵にふるまひをなせる機會(をりよき)の日(ひ)いたりければ 二十二 ヘロデヤ
のむすめきたりて舞(まひ)をなしヘロデとその席(せき)につらなれる
人々(ぞく)をたのしましむ。王(わう)そのむすめにいひけるは何(なに)にても
わがまへにねがへなんぢがのぞむところのものは我(われ)なんぢにさ

あたふべし 二三 またちかひておほよそなんぢがもとむるものハわが領分(りやうぶん)の半(なかば)にいたるともなんぢにあたへんといふ 二四 女(むすめ)いでゝそのはゝになにと求(もとむ)べきやといひければ母(はゝ)そなんぢハバプテスマのヨハネが首(くび)といへり 二五 むすめたゞちにいそぎ王(わう)にきたり求(もとめ)てバプテスマのヨハネがくびと盤(ばん)にのせてたゞいまわれにたまへといふ 二六 王(わう)はなはだうれひけれどもすでに誓(ちかひ)たると同席(どうせき)のもののゆゑをもてこれをこばむことをこのまず 二七 王(わう)たゞちにヨハネの首(くび)をもちきたれと命(めい)じて兵卒(へいそつ)をつかはしければかれゆきて獄(ひとや)にてかいくびをきり 二八 その首(くび)を盤にのせてもちきたり女(むすめ)にあ

たまものとしてこれをその母にわたせり ヨハネの門徒
たちこのことをきゝてきたりその屍をとりて墓にはうむ
りぬ○ 三十 使徒たち耶穌にあつまりておこなへることゝを
しへしこととことごとくこれにつぐ 三一 耶穌かれらにいひ
けるハひとびとをさけてなんぢらもまたらく寂寞と
ころにゆきてやすまん。これ往來のものおほくして食する
ひまもなかりしゆゑなり 三二 かれら人をさけ舟にてさび
しきところへゆけり 三三 そのゆくをみてひとびとおほく耶穌
をしりてむらむらより歩行にてかれらのゆかんとする
ところへさきだちゆきて耶穌にあつまれり○ 三四 耶穌いで

ておほくの人をみるにこのものらハ牧もののなき羊のごときも
のなるによりてこれを憫みおほくのことををしへぬ
三五 時すでに晩くなりけれバそのでしたちきたりい
ひけるハこゝハさびしきところにして時もはやおそし 三六
衆人のくらふべきもののなきゆゑにそのみつうの四周の
むらざとへゆきて餅をもとめんがためこれをさらし
めたまへ 三七 耶穌こたへけるハなんぢらこれに食をあたへよ、
よでしたちいひけるハわれらゆきて銀二百のパンをかひ
ひとびとにあたへてくらはしむべきかと 三八 耶穌これにい
ひけるハ餅いくつあるゆきてこゝろみよと観てそのうへ

…えいつゝのパンと二のうをなりといふ　耶穌すべての
人をくみ〳〵にして青草のうへにすわらしめよと命じけれ
バ　四〇　あるひハ百人あるひハ五十人づゝならびて坐せり　四一　耶
穌そのいつゝの餅とふたつの魚をとり天をあふぎ謝して
パンをさき門徒にあたへてひとびとのまへにおかしむ。また
ふたつのうをを衆人びとにわけあたへぬ　四二　ひとびとくら
ひて飽そのパンとうをの餘屑をひろひしに十二のかごに
みちたり　四四　餅をくらひたるをとこおよそ五千人ありき○
四五　たゞちに耶穌そのでしをしひて舟にのせむかふのきし
なるベツサイダへまづわたらしめ己ハひとびとをかへらしむ

四六 衆人(ひとびと)をかへしゝのちいのりのために山に御ゆけり 四七 日くれて
ふね(舟)はうみのなかにあり耶蘇(いえす)はひとりをかのうへにましけり 四八
風(かぜ)さからふによりて門徒(でし)たちのふねをこぐにつかれたる
を見て暁(あかつき)の四時(よじ)ごろ耶蘇(いえす)うみのうへをあゆみきたりかれ
らをすぎゆかんとせしに、四九 門徒(でし)そのうへをあゆめるをみて変(へん)
化(げ)のものならんとおもひさけびたり 五〇 それでしらみなこれ
を見ておそれしゆゑなり。耶蘇(いえす)たゞちにこのものらにかたり
ていひけるは心(こゝろ)やすくあれ我なりおそるゝことなかれ 五一
つひにふねにのぼりしかば風(かぜ)やみぬ。かれらこゝろのうちに
おどろきあやしめることはなはだし 五二 これそのこゝろ

の愚頑なるよりてパンの奇跡をも悟らざりしなり〇 す
でにわたりてゲネサレといふ地にいたりて ふながかりせり
五四 この輩舟よりいでしにやがてひとぐ耶穌をしりて 五五 あ
まねくそのあたりの地へはせゆき病るものを ねどこのまゝ
にてになひ耶穌のいますところときゝしにて こゝまで
つけぬ 五六 およそ耶穌のいたるところあるひは郷あるひ
は邑あるひは村その街市にやめるものをおきて この者に そ
の衣のすそにだにさはらせたまへとねがへり。さてみなたち捫
ほどのものはみないえたり

第七章 パリサイの人とある學者たちエルサレムよりきたりて

耶穌(いえそ)のもとにあつまり 二 かれの門徒(でし)のうちにきよからざる手(て)すなはちあらはざる手(て)にてパンを食(しよく)するもののあるをみてこれをとがめたり 三 そはパリサイのみならずユダヤの人々(ひとびと)はみないにしへの人(ひと)のつたへをまもりてその手(て)をきよくあらはざれば食(しよく)せず 四 市(いち)よりかへりきたりてあらはざれば食(しよく)せずこのほか杯(さかづき)まん銅(あかゞね)および牀(とこ)をあらふなどさま〴〵のつたへをうけまもれり 五 こゝにおいてパリサイの人(ひと)とがくしやたち耶穌(いえそ)にとひけるはなんぢのでしられゆゑ古人(むかしのひと)のつたへにしたがはずしてあらはざる手(て)をもてパンをしよくするや 六 耶穌(いえそ)こたへていひけるはイサ

がイサヤは偽善者なるなんぢらをさしてよく預言せり。そのしるせしことばに。この民はくちびるにてわれをうやまへども。その心はわれにとほざかれり 七 人のいましめを教となしていたづらにわれを拜むといへり 八 そはなんぢらは神のいましめをすてて人のつたへをまもれり。すなはち鍋さかづきをあらひおほくこのごときことをおこなふ 九 またこれにいひけるはなんぢらおのれの遺傳をまもらんとてよくも神のいましめをすつ 十 モーセいひけるはなんぢら父母をうやまへ。またちゝあるひははゝをのろふものはころさるべしと 十一 されどなんぢらはいふ。もし人ちゝ

あるひハはゝにむかひてなんぢをやしなふべきものハコルバン即ちそなへものなりといはゞつくださずともよしと
十二 ゆるして人のその父あるひハ母のためになにごともなさることをなんぢらゆるさぞ 十三 このなんぢらハそのつたへなるところの遺傳をもて神のことばをむなしうせり。またおほくこの類のことゞもおこなへり○ 十四 耶蘇また人々をよびてこれらにいひけるハなんぢらミなわがことばをきゝてさとき 十五 そとより人にいるものハ人をけがすことあたはずされど人よりいづるものハ人を汚なり 十六 きくべき耳あるものハきくべし○ 十七 耶蘇ひとぐをはなれて室にいりし

はそのでし譬のこゝろをとひしに[illegible]かれらにいひける
はなんぢらもなほさとらざるか　およそ外より人にいる
ものは人をけがしあたはざることをしらざるか　十九　それそ
のこゝろにいらず腹にいりて厠におつ。すべてくらふと
ころのものきよまるなり　二十　またいひけるは人よりいづるも
のはこれ人をけがす　二十一　人のこゝろよりいづるものは悪念
姦淫　苟合　兇殺　二十二　盗竊　貪婪　惡慝　詭譎　邪侈　嫉妒　謗讟　驕傲　狂妄
なり　二十三　これらのあしきことはみな内よりいでゝ人をけがす
ものなり　○　二十四　耶穌こゝをさりてツロとシドンのさかひ
にゆき家にいりて人にしらせざらんことをねがひしが

くことあたはざりし 二五 それは悪鬼につかれたるちいさき女をも
るをんな耶蘇のことをききてきたりその足もとにふした
てすはよりくあり 二六 この婦はサイロピニシヤにうまれしギリシヤ
のものなりしが悪鬼をそのむすめよりおひいだしたまへ
んことを耶蘇にねがへり 二七 耶蘇これにいひけるは先こども
もに飽しむべしこどものパンをとりて犬になげあたふるはよか
らず 二八 をんなこたへていひけるは主よしかりされどいぬ
も案のしたにありて兒曹のたくづをくらふなり 二九 耶蘇
をんなにいひけるはこのことばによりてゆけ悪鬼はな
んぢのむすめよりいでたり 三十 婦そのいへにかへりしにお

くきすでにいでゝ女の牀にふしたるを見し〇耶穌ツロとシドンの地をさりてデカポリスのちをすぎガリラヤのうみにいたれば三二ひとびと聾のどもるものを耶穌につれきたりて手をつけたまはんことをねがひければ三三耶穌ひとびとをはなれてかれをはなくつれゆき指をその耳にさしいれまた唾してその舌にさはり三四うち天をあふぎ嘆じその人にむかひてエッパタといふ。これをとけばひらけよとの義なり。三五たちまちそのみゝひらけ舌のもちゆるみてたゞしくものいへり三六耶穌これを人につぐるなかれとこれをいましむれどいましむるほどますますいひふらしぬ三七衆はなはだし

くわしくきゝていひけるハこの人のなせしところことごとく
善あるひハつんぼをきこえさせあるひハ唖者をものいはせ
しめたり

第八章 そのころあつまれる人々はなはだおほかりしがな
にの食物もあらざりけれバ耶穌そのでしをよびていひけ
るハ 二 われこのおほくのひとびとをあはれむ。すでに三日わ
れとゝもにありしゆゑ今なにもくらふものなし 三 もし飢
しなからそのいへにかへさバ途間にてたふれなん。そのうちにハ
遠處よりきたれるものあれバなり 四 そのでしたちこた
へけるハ[illegible]

より得んや耶穌これにとひけるはパンいくつあるや
七とこたふ　六　耶穌ひと〴〵に命じて地にざせしめ七のパン
をとりて謝しこれを擘ひと〴〵のまへにおかしめんがため
その門徒にあたへければすなはち人々のまへにおけり　七
またちひさき魚をわづかにもてり。これをも祝してひ
とびとのまへにおけといふ　八　ひと〴〵これをくらひて飽そ
のくづをなゝつの籃にひろへり　九　これを食るものおほよ
そ四千人なり。すなはち耶穌これをかへしぬ）　十　耶穌たゞ
ちにそのでしとともに舟にのりてダルマヌタのさかひにゆき
しにパリサイの人いでくこれをこゝろみんがため天よりの

しるしをもとめて詰(なじ)らむ 十二 耶穌(いゑす)こゝろのうちにふかく歎(たん)
息(そく)していひけるはこの世(よ)の人なんぞしるしをもとむるや
まことになんぢらにつげん 休徴(しるし)はこの世(よ)のひとゞもに
あたへらるべからざれど 十三 耶穌(いゑす)これらをはなれてまたふねに
のりてむかふのきしにわたりき○ 十四 さて門徒(でし)パンをたづさ
ふることをわすれたゞ一(ひとつ)のパンのほか舟(ふね)にありき 十五 耶穌(いゑす)こ
れらをいましめていひけるはこゝろしてパリサイの人(ひと)のパ
ンだねとヘロデの餅(パン)だねとをいましめよ 十六 門徒(でし)たがひに論(ろん)
じていひけるはわれらパンをたづさへざりしゆゑなるらん 十七
耶穌(いゑす)これをしりてこれらにいひけるはなんぞたづさへぬ餅(パン)

をたづさへざりしことをろんずるやいまださとらずしらざるか
なんぢらのこゝろなほにぶきか 十八 目ありてみえざるか耳あ
りてきこえざるか またおぼえざるか 十九 われ五千人にいつ
つのパンをさきわかちしときその餘屑をいくつのかごにひろひ
しや。かれらいひけるは十二なり 二十 また四千人に七つのパン
を擘わかちしときそのくづを幾籃ひろひしや。こたへける
は七籃なり 二一 耶穌かれらにいひけるはなんぞいまださとらざるや
〇 二二 耶穌ベツサイダにいたりけるにひと〴〵瞽者をつれきたり
またこれに手をつけたまはんことをねがへり 二三 耶穌めし
ひの手をとりてむらのそとにつれいでその目につばきし

て手をこの者につけ問ひけるは何か見ゆるや 二四 めしひ目を
あげていひけるは我人々のあるくを見るに樹のご
とし 二五 つひに耶穌ふたゝび手をこの者の目につけその目
をあげさせければこの者いえてすべての物あきらかにみ
えたり 二六 耶穌この者をその家にかへらせいひけるはこ
の村にいるなかれ又この村のものにもつぐるなかれ〇
二七 耶穌その弟子とともにピリッポのカイザリヤのむらむらにゆ
く途間にてその弟子にとふていひけるは人々は我を
いひて誰とせるかの 二八 こたへけるはあるひとはバプテスマの
ヨハネあるひとはエリヤあるひとは預言者のひとりなり

といへり又耶蘇かれらにいひけるハなんぢらハ我をとい
ひて誰とするやペテロこたへけるハなんぢハキリストなり
三十 耶蘇これらのことをいましめてわがことをたれにもつぐるな
とかれらに命じたり○三一 また人の子のかならずおほくのくる
しみをうけ長老さいしのをさ學者どもにすてられころ
されて三日のゝちによみがへることをこれらにしめし
たまへり 三二 あきらかにこのことを示したまひしかバペテロ
耶蘇をひきていさめんとせしハ耶蘇ふりかへりその門徒
をみてペテロをいましめいひけるハサタンよわがうしろ
にしりぞけなんぢハ神のことをおもはずかへつて人のこ

らるゝなり〇二四ひと〴〵とその門徒をともによびよせてのたま
はいひけるはもしわれにしたがひきたらんとおもふものは己を
すてその十字架をおひてわれにしたがへ。二五それ生命をま
つたうせんとするものはこれをうしなひ。わがため福
音のためにいのちをうしなふものはこれをうくべければな
り二六もし人せかいぢゆうをうるともその生命をうしなはゞ
なんの益あらんや二七また人なにをもてそのいのちにか
へんや二八淫乱なるこの世においてわれとわがことばをはぢ
づるものをば人の子もまた聖使とともに父の栄光をもて
きたるときこれをはぢとすべし

第九章 耶穌また彼らにいひけるハまことにまことに汝らにつげん ここにたつもののうちに神の國のけんゐをもてきたるをみるまでハ死ざるものあり○ 二 さて六日の後耶穌ペテロヤコブヨハネとをともなひ人をさけてたかき山にのぼりたまひしが彼らのまへにてそのすがたかはりて 三 その衣ハかゞやきてしろきことはなはだしくして雪のごとし世上の布さらしもかくしろくハなしあたハざるべし 四 エリヤ モーセとともにこれにあらはれて耶穌とかたりあへり 五 ペテロこたへて耶穌にいひけるハラビよわれらここにをるハ善ことなりわれら三つの廬をつくらせたまへ一つ

主のため一ツハモーセのため一ツハエリヤのためにせん 六 こハそのいふところをしらざりしなりこのとき甚おそれしによる。七 このとき雲きたりておほひ聲雲よりいひけるハこれわが愛子なりこれにきくべし 八 やがて門徒みまはしけれバ耶蘇と神の子のほかハひとりをもみざりき（一）

九 やまをくだれるとき耶蘇これにいましめて人の子のよみがへるまでハなんぢらの見しことを人につぐるなかれといへり 十 門徒たちこのことをまもりてたがひに論じいひけるハよみがへるといふハなんのことぞ 十一 そのとき耶蘇にとふていひけるハエリヤハ前にきたるべしと學者の

[illegible]耶穌こたへていひけるハ實にエリヤ
ハさきだちきたりて萬事(ばんじ)をあらたむ。また人(ひと)の子(こ)についてハ
そのさまぐのくるしミを受(うけ)かろしめらるべきことの
きしるされたり 十三 されどわれなんぢらにつげん エリヤハ
すでにきたりしに その事についてしるされたりしごとく人(ひと)
人(ひと)ごゝろのまゝにこれをあしらへり ○ 十四 耶穌(いえす)でしたちの
もとにきたり。おほくの人々(ひとびと)のこれをとりかこめると
學者(がくしや)だちのこれと論(ろん)じをりしをみたり 十五 衆(ひとびと)たゞちにその
是をみておどろきはしりよりて禮(れい)をなせり 十六 耶穌(いえす)がくし
やにとひけるハ門徒(でし)となにごとを論(ろん)ずるや 十七 ひとゞのう

ち一人(あくにん)ありけるハ師よりもなほいたらぬ悪鬼(あくき)にぞなりつくの
まさるわか子となんぢにつきそひけり 六 わかきのもりつ
くときハこれをあげたふされ沫(あわ)とふき歯(は)をくひしばりていくのちえ
つるなり。このことをおひいだされんことをこれなんぢの門徒(でし)に
ういひしかどそのものあたはざりき 十九 耶穌(いえす)このことにこたへて
いひけるハあゝ信(しん)なき世(よ)なるかなわれいつまでなんぢら
とゝもにをらんや何時(いつ)までなんぢらを忍ばんや。この
ものをわがもとにつれきたれ 二十 このものその子(こ)をつれきたりしに
あくき耶穌(いえす)をみてたちまちこのものを拘攣(ひきつけ)しむ。この子地(ち)にたふ
れころびてあはをふきたり 二十一 耶穌(いえす)その父(ちゝ)にとひけるハ

いくのころよりかくなりしや父いひけるハいとけなきころ
よりなり 二二 悪鬼(あくき)しばしばこれを火(ひ)のなかあるひハ水(みづ)のなかの
になげいれてころさんとせり。なんぢもし爲(なす)ことをえバわ
れらをあはれみてたすけよ 二三 耶穌(いゑす)これにいひけるハなんぢ
ぢもし信(しん)ずることをえバ信(しん)ずるものにはなにごとかなし
えざることなし 二四 その子(こ)のちゝたゞちに聲(こゑ)をあげなみだを
をながしていひけるハ主(しゆ)よわれ信(しん)ず、わがしんなきをたすけ
けたまへ 二五 耶穌(いゑす)ひとゞのはしりあつまるをみて悪鬼(あくき)をせ
めいひけるハ啞(おし)にしてつんぼなるあくきよ我(われ)なんぢにめ
いぜ出(いで)てふたゝびこれにいるなかれ 二六 悪鬼(あくき)さけびておほ

いまこの事をひきつけしめていでしかバ、かれ死（しに）たる者（もの）のごとく
なりぬ人々（ひと〴〵）これをみてハ死（しに）たりといふ 二七 耶蘇（いえす）その手（て）をと
りておこしければ、かれ起（たて）り○二八 いえす家（いへ）にいりしにその
門徒（でし）ひそかにとひけるハわれらこれをおひいだすことあ
たハざりしハなにゆゑぞ 二九 耶蘇（いえす）これにいひけるハこの
たぐひハ祈禱（いのり）と斷食（だんじき）にあらざれバおひいだすことあたハ
ざるなり○三十 かれらこゝをさりてガリラヤをすぐでゆくこ
と耶蘇（いえす）ひとのしることをこのまざりき 三一 そハそのでしにをし
へて人（ひと）の子（こ）ハひとの手（て）にわたされかれらころさるべし殺（ころ）さ
れてのち第三日（みつかめ）によみがへるべしとかたりたまひ門徒は

とおそれたり○ 三三 さて耶穌カペナウムにいたり室にをりて門徒にいひけるはなんぢら途間にてなにをたがひに論ぜしや 三四 でし默然たり其途間にてたがひに論じ誰かおほいなるべきとのあらそひありければなり 三五 いゑす坐してその十二をよびていひけるはもし首たらんとおもはゞものはすべての人の後となりすべての人のつくのだまびとなるらん 三六 また孩提をとりてかれらのなかにたゝせこれをいだきかれらにいひけるは 三七 おほよそわが名のためにかくのごときをさなごのひとりをうくるものは即ち

われをうくるなり、またわれを接ものハすなはちわれをうくるにあらず我をつかはせしものを接るなり○三八ヨハネかれにこたへていひけるハ師よわれらハしたがはざるもののなんぢの名によりて悪鬼をおひはらひつるを見しがわれらハそのしたがはざるゆゑにこれを禁たり三九耶穌いひけるハその人をとゞむるなかれそハわが名によりてふしぎなるわざをおこなひて輕易にわれをそしりうるものハあらじ卌われらに敵たらざるものハわれらにつくものなり卌一なんぢらをキリストに屬ものとしてわが名のために一杯のみづをもてもなんぢらにのましむるものへわれ誠になんぢらにつげん

その人ハむくいをうしなハざる事あり　まことに。およそ我
を信ずるちひさきもの ひとりをつまづかするものハその
の首に磨をかけられて海になげいれられんこそその人の
ためにハよかるべし
四三 もしなんぢのうで手なんぢをつ
まづかさバこれをきりされ兩手ありて地獄すなはちきえ
ざる火にゆかんよりハ殘缺にていのちにいるハなんぢの
ためによきことなり
四四 かしこにいるものゝ蟲つきず火き
えず
四五 もしなんぢのあしなんぢをつまづかさバこれ
をきりされ兩足ありてぢごく即ちきえざる火になげいれ
られんよりハ跛にて永生にいるハなんぢのためによきな

に 四六 かしこにいるものゝうじつきず火きえず 四七 もしなん
ぢの一眼なんぢをつまづかさばこれをぬきいだせりやう
がんありて地獄の火になげいれられんよりはかためにて
神の國にいるはなんぢのためによきなり 四八 彼處にいるも
のゝうじつきず火きえず 四九 それすべての人は鹽をつくる
ごとく火をもてせらるべし。すべての祭物はしほをもて鹽つけ
らる 五十 しほはよきものなりされど鹽もしその味をう
しなはゞなにをもてこれにあぢをつけんや。なんぢら心の
うちに鹽をたもて。またたがひに睦やはらぐべし。

第十章 耶穌こゝをさりヨルダンのあなたをへてユダヤのさか

りけれバ恆のごとくこれに教誨をなしたまへり 二 パリサイの人きたりてこれをこゝろみて人その妻をいだすハよろしきかといひけるに 三 こたへていひけるハモーセハなんぢらになにを命ぜしや 四 このものいひけるハモーセハ離縁状をかきあたへてこれを出すことをゆるせり 五 耶穌こたへてこのものにいひけるハモーセハなんぢらのこゝろ剛硬なるによりてこのおきてをしるしたるなり。されど開闢のはじめ神ひとを男女につくりたまへり 七 このゆゑに人ハその父母をはなれてその妻にあひて 八 ふたりのもの一體となるべしされバ

二つにはあらずいつたいなり 九 このゆゑに神のあはせたまへるものは人これをはなるべからず ○ 十 室にありて門徒たちまたこのことをとひければ 十一 耶穌これにこたへていひけるはおほよそその妻をいだしてほかのものをめとるものはその妻に對して姦淫をおこなふなり 十二 また婦もしその夫をいだしてほかのに嫁ぐものは姦淫をおこなふなり ○ 十三 耶穌にさはらんがため人々をさなごをつれきたりければ門徒たちそのつれきたるものをいましめたり 十四 耶穌これをみていとけなきをふくみてのきたるをいひけるは 是くのごときもののわがもとにきたるを禁ることなかれ 神の國

はをさなごのごとくなるものなり まことになん
ぢらにつげん おさなごのごとくに神の國をうけざ
るものはこれにいることを得ざるなり 十六 またをさなごを
いだきて手をそのうへにおきこれを祝せり ○ 十七 耶穌み
ちにいでけるにある人はしりきたりてひざまづきとひける
は善師よわれかぎりなきいのちを嗣ためになにをなすべ
きとの 十八 耶穌これにいひけるはなんぞわれを善といふやひ
とりのほかに善ものはなしすなはち神なり 十九 いましめは
なんぢがしるところなり姦淫するなかれ殺なかれ盗なかれ
偽のあかしをたつるなかれ掠騙るなかれなんぢの父と母

をうやまへ　二十　こたへていひけるハ師よこれらをわれわかき
けなきよりまもれるものなり　二一　耶蘇この事をきゝていひくし
こいひけるハなんぢなほひとらを歡ゆきてそのもちもの
を賣まづしきものにほどこせさらバ天におゐて財あらん
志かしてきたりて十字架をとりてわれにしたがへ　二二　この事て
のことばをきゝてこのわかき人うれひてさりぬこの人ハおほくの
産業をもてるゆゑなり　二三　耶蘇その弟子たちに
門徒にいひけるハ財をもてるもの神の國にいりがたし
まことにいふなり　二四　またしてのことばをおしへけるハ耶蘇またいはく
たとへていひけるハ小子よたくはへを恃むもの神の

くにゝはいるハいかはかりかたからん 二五 富めるものゝかみのくにゝはいるよりハ駱駝の針のあなをとほるハなほやすし 二六 でしたち聞おどろきたがひにいひけるハさらバ誰がすくひをうくべきや 二七 耶穌このことをきゝていひけるハそれ人にハあたはざるところなれど神においてハそのことゞも神ハあたふるところなりけれバなり 二八 こゝにおいてペテロ[illegible]いひけるハ我ら一切をすてゝなんぢにしたがへり 二九 耶穌こたへていひけるハまことになんぢらにつげん是福音のためにハ家宅あるひハ兄弟あるひハ姉妹あるひハ父あるひハ母あるひハ妻あるひハ兒女あるひハ田疇をすつる

ものは 三十 この世まで百倍をうけざるものなし即ちいへきや
うだい姉妹ぞくこどもたはたけをくるしきとくもまうけま
さのちの世までかぎりなきいのちをうけん 三十一 されどおほ
くの先なるものは後になり後なるものは先となるべし
し〇 三十二 さてかれらエルサレムにのぼる道にて耶蘇でし
たちのさきにすゝみければでしたちおどろき跡におそれてつきしが
又耶蘇十二の徒をまねきて将に我身のうへにおよばんとす
ることをかたりはじめたまひけるは 三十三 いまわれらエルサレムにの
のぼり人の子は祭司のをさと學者たちにわたされん かの
ものらは死罪にさだめて異邦人にわたすべし 三十四 またこれをあざけり朝

みがへるべし○三五ゼベダイの子ヤコブとヨハネ耶蘇にきたり
きていひけるハ師よわれらがもとむることをねがはくハ
われらに成したまへ三六このものらにいひけるハなんぢらはわが
なにをなさんことをねがふや三七このものらいひけるハなんぢ
榮をえんときわれらのひとりをその右にひとりをその左に
ざせしめよと三八耶蘇このものらにいひけるハなんぢらハ求と
ころをしらざるぞ。なんぢらわが飲ところの杯をのみわがうく
るところのバプテスマをうけうるや三九このものいひけるハ能
なしうべし。耶蘇このものにいひけるハなんぢらハ實にわがのむ

ところのさかづきを飲またわがうくるところのバブテスマ
をうくべし 四十 されどわがみぎひだりに坐することハわがの
予ふべきにあらず唯そなへられたるものにあたへらるべし
四一 十人のでしこれをききてヤコブとヨハネをいきどほりす
四二 耶穌これをよびていひけるハ異邦人の君とみゆる
ものハその民ををさめまた大なるものどもハこれらのう
へ権をとるこれなんぢらがしるところなり 四三 されどな
んぢらのうちにてハ然すべからずなんぢらのうち大ならん
とおもふものハなんぢらのつかふるものとなるべし 四四
またなんぢらのうち首たらんとおもふものハすべての人

の志もべとならんそく人の子のきたるも人につかへらるゝた
めにあらずかへつて人(ひと)につかへ又おほくのひとにか
はりその命(いのち)をあたへて贖(あがなひ)となさんためなり○四十六かくてか
れらエリコにいたり耶穌(いゑす)そのでしとおほくの群集(ぐんじゆ)のひ
とびとゝともにエリコをいづるときテマイの子なるバルテマイ
といふ瞽者(めしひ)みちのかたはらにざして乞(こひ)をなしけるが四十七ナザレ
の耶穌(いゑす)ありときゝてよばゝりいひけるハダビデの子いゑ
すよわれをあはれみたまへ四十八おほくの人々(ひと〴〵)これハしづま
れといましめけれどもいよ〳〵よばゝりてダビデの子よわ
れをあはれみたまへといひければ四十九耶穌(いゑす)たちとまりてこの

これをよべと命じければ人々めしひをよびてこれにいひけるハ心をやすんぜよ起て耶穌なんぢをよぶ 五十 瞽者そのうはぎをすてゝたちて耶穌にきたれり 五一 耶穌こたへてこれにいひけるハなんぢ我になにをせられんとねがふやめしひいひけるハ主よみえんことをねがふ 五二 耶穌これにいひけるハ往なんぢの信仰なんぢをすくへり。たゞちにめみゆることを得ていゑすにしたがひて路をゆけり

第十一章

こゝにかれら橄欖山のベツバゲとベタニヤにいたりエルサレムにちかくなりけるとき耶穌ふたりの門徒をつかはさんとして

二 これにいひけるハなんぢら對面なるむらにゆけ。そこに

まつハやがて人のいまだのらざるところのつなぎおく驢馬の子をみるべし。それをときてひきたるべし 三 もしたれかなんぢらにとなにゆゑそのあるやといふものあらバ主の用なりといへバたゞちにそれをこゝにおくるべし 四 かのもの出ゆきて門のそとの岐路につなげる驢の子をみてこれをときけれバ 五 そこにたてる人々のうちあるものかれらにいひけるハこの驢馬のこをときていかにするや 六 でし耶蘇の命ぜしごとくいひしかバ遂にゆるしたり 七 門徒ろバのこを耶蘇にひきたりておのが衣をそのうへにおきけれバ耶蘇これにのり 八 ひとびとおほくハそのころも

を路上にしきあるひハ樹のえだをきりてみちにしき 九 この
前にゆき後にしたがふひとびとよびていひけるハホザナ
主の名によりてきたるものハ福なり 十 主のなによりて
きたるわれらの父なるダビデの國ハさいはひなり至上と
ころにホサナよ ○ 十一 耶穌エルサレムにいりて聖殿にいりて
ことごとくみまはし時すでに暮におよびければ十二とも
にベタニヤにゆけり ○ 十二 明日かれらベタニヤよりいでし
とき耶穌うゑたり 十三 はるかにその葉あるいちじくの樹をみて
その樹になにかのあらんとてきたりしに葉のほかになにも
えざりき これ無花果のときにあらざるゆゑなり 十四 耶穌に

あらざれといふ。門徒これをきゝけり ○ 十五 これらエルサレムにいたり耶蘇みやにいりてそのうちにある買賣するものをみやよりおひいだし兌銀者のだい鴿をうるもののこしかけをたふし 十六 うつはものをもてみやをとほることをゆるさず 十七 またかれらにをしへていひけるはわが殿はばんこくのひとの祈禱のいへととなへらるべしとしるさるゝにあらずや。しかるになんぢらはこれを盗賊の巣となせり 十八 がくしやと祭司のをさこれをきゝていかにして耶蘇をほろぼさんとはかりしがこれをおそれたり。それは衆みなそ

のをしへにおどろきたればなり○十九 日くれて耶穌みやこをいでゆけり 二十 翌朝このみちをいちじくの樹をすぐるにその根よりことごとくかれたるをみる 二一 ペテロおもひいでゝ耶穌にいひけるハラビみよ詛しところのいちじくハかれたるぞ 二二 耶穌こたへていひけるハ神を信ぜよ 二三 まことになんぢらにつげん誰にてもそのこゝろにうたがふことなくそのいふところの言ハかならずなるべしと信ドこの山にうつりて海にいれといふそのことのごとく成べし 二四 このゆゑにわれなんぢらにつげんおよそ祈禱のときそのねがふところのものハかならずうべしと信ぜば

し人とあらそふことあらばこれをゆるせ。それは天にいます
なんぢらの父もなんぢらもまたその過をゆるさんため
なり 二六 もしなんぢら免さずば天にいますなんぢらのちゝ
もまたなんぢらのあやまちをゆるしたまはじ○ 二七 うちつれ
またエルサレムにいたり耶穌みやにあゆめるとき祭司のを
さ學者および長老どもきたりて 二八 これにいひけるはなんぢ
の權威をもてこのことをなすや誰がこのことをなすべき
ためなんぢにこのけんゐをあたへしや 二九 耶穌こたへて
かれらにいひけるはわれも一言なんぢらにとはんこたへよ

こたへよ。さらバわれなんぢらになにの権威をもてこれを
なすかといふことをつげべし 三十 ヨハネのバプテスマは天より
か人よりかわれにこたへよ 三一 かれらたがひに論じいひけ
るハもし天よりといはゞさらバなにゆゑかれを信ぜざる
かといはん 三二 もし人よりといはゞかれら民をおそれる
なり。それハ民ミなヨハネを預言者とせしによる 三三 つひにこ
たへてしらずといふ。耶穌こたへていひけるハわれも何の
けんゐをもてこれをなすかをなんぢらにつげじ

第十二章

耶穌たとへをもてこれらにかたりけり。ある人ぶだう
ぞのをつくり籬をめぐらし酒榨をほりものみをたて農

[illegible]

たけの果をうけんために僕をのうふのもとにつかは
せしけるに 三 農夫どもこれをとらへうちたゝきてむなし
くかへらしめたり 四 また他のしもべをつかはせ
しにのうふどもこれを石もてうち首にきずつけ恥かしめ
てかへらしむ 五 またほかのものをつかはせしにこれをも
ころせり。またほかのおほくをつかはせしにあるひは撲ある
ひハころしぬ 六 こゝにひとりの愛子ありけるがこのわが
子ハうやまふならんといひて卒にその子をつかはせしに
七 のうふら互にいひけるハこハ嗣子なりいでこれをころさ

んさらバ産業ハわれらのものとならん 八 すなハちとらへてこれをころし葡萄園のそとにすてたり 九 しからバぶだうばたけの主なにをなすべきぞかならずきたりて農夫どもをうちほろぼし葡萄ばたけをほかの人にあたふべし 十 工匠のすてたる石ハすみの首石となれり 十一 これ主のなしたまへることにしてわれらの目にあやしとするところなりとあることばをいまだよまざるか 十二 かれらこの譬ハおのれらをさしていひたりとさとり耶蘇をとらへんとせしかども衆をおそれて耶蘇をさりゆけり○ 十三 かれら耶蘇をそのことばによりて咎のもとをえんとしてパリサイの人とへロデの

ものども耶穌のもとにきたりいひけるハ師よなんぢハ眞なるものなりまた誰をもはゞからざることをわれらハ志る。そハ貌によりて人をとらずまことをもて神のみちをしふれバなり。人税をカイザルにをさむるハよきや否われらをさむべきかをさめざるべきかの 十五 耶穌そのまことならざるを志りてこれらにいひけるハなんぞわれをこゝろむるやデナリをもちきたりてわれにみせよ 十六 これをもちきたりければ耶穌これらにいひけるハこの像と號ハたれのぞ。こたへてカイザルなりといふ 十七 耶穌いひけるハカイザルのものハ

カイザルにかへしまつり神のものはかみにかへすべしかれらきゝて
これを奇(あやし)とせり○大復生(よみがへり)なしといひなせるサドカイの人き
たりて耶蘇(いゑす)にとひけるは九師よむかしモーセがかきお
けるは人のきやうだいもし子(こ)なくして妻(つま)をのこし死(しな)バ
そのきやうだいこのつまをめとりて兄弟(きやうだい)のあとをたつべ
しと廿こゝに七人(しちにん)のきやうだいありしが長子(ちやうし)つまをめと
り子(こ)なくしてしに二第二(だい)のものそれを娶(めと)りてまた子(こ)なくして
死(しゝ)二だい三(さん)もまたおなじくして七人(しちにん)ことごとくこれをめとりたれども子(こ)
なくしてつひにはこの婦(をんな)もしねり二復生(よみがへり)のときこれらのうちたれが
へるバかれんハたれの妻(つま)となるべき。かれハ七人(しちにん)かお

ひけるハなんぢらハ聖書をも神のちからをもしらざるよ
よりてあやまれるなるぞや 二五 それ死よりよみがへるとき
ハめとらず嫁がず天にあるつかひたちのごとし 二六 しにし
ものゝよみがへることにつきてハモーセの書しばの篇に
神かれにかたりてわれハアブラハムの神イサクの神ヤコブ
の神なりといひたまひしをなんぢらよまざるか 二七 神ハし
にしものゝ神にあらず生るものゝ神なりなんぢらはいたくあ
やまれり 二八 學者のひとりかれらの議論をきゝて耶穌のよ
くこたへしをしりきたりかれにとひけるハすべて

のいましめのうちいづれ首なるや 二九 耶穌これにこたへけ
るハすべての誡のうちのはじめハイスラエルよきけ主なるわれら
の神ハたゞひとつの主なり 三十 なんぢ心をつくし精神をつ
くし意をつくし力をつくし主なるなんぢの神をあいすべ
しこれおきての首なり 三一 だい二もまたこれとおなじ。おの
れのごとくなんぢのとなりを愛すべしこれより大なるお
きてなし 三二 かのがくしや耶穌にいひけるハ善かな師よなんぢ
神ハたゞひとつにしてほかにこのみなしといひしハまことに
なり 三三 またこゝろをつくし智慧をつくし精神をつくしち
からを盡てこれをあいしまたおのれのごとく隣をあいハ生

ろハすべての燔祭と禮物よりもまさるなり。耶蘇そのさと
三四道理とこたへることをさとられていひけるハなんぢ神の
國よりとほからず。そのゝち敢ていひさからふものなかり
き○三五耶蘇みやにありて教諭をなせるときこた
へていひけるハなんぞ學者ハキリストをダビデの子といふ
や三六そはダビデ聖靈にかんじてみづからいふ。主わが主に
いひけるハわがなんぢの敵をなんぢの足のしたにおくま
でハわが手のみぎに坐せよと三七ダビデみづからこれを
主ととなへたり。されバいかでその子ならんや。おほくの
人々よろこびて耶蘇にきくことをなせり○三八耶蘇をしへ

なみせるときのまつりはいひけるにあたらしき衣服をきてある
き市上にて人のあいさつを會堂のうはざ筵席のうはざとこ
のむ 四〇 またやもめ嫠婦のいへを呑つくしてことさらながきいのりをなせ
る。かくのごとき者を謹防よ。かれらのつみはことにおもからむ
重し ○ 四一 耶穌さいせんのはこにむかひて坐し人々の錢
をはこにいるゝところをみたまひしにおほくのものおほく
くなげいれたり 四二 ひとりの貧しきやもめきたりてレプタふた
つをなげいれたり。これは四厘にあたれり 四三 耶穌その弟
子をよびていひけるは誠になんぢらにつげん
はこになげいれしすべての人々よりもこのまづしき嫠婦

ハおほくあるがいれたりそれハかれらハみなその饒餘ところをもていれてこのをんなハその不足(ともしき)ところよりそのすべてのもちものすなはち全業(ぜんげふ)をことごとくいれたればなり

第十三章(だいじふさんしやう)

一 いゑそ聖殿(みや)よりいでければひとりの門徒(でし)いゑそにいひけるハ師よみたまへこの石(いし)この殿宇(いへ)いかにさかんなるぞや 二 耶蘇(いゑそ)こたへていひけるハなんぢこの大(おほい)なるいへをみるか一(ひとつ)のいしも石(いし)のうへにまろばされずしてハのこらじ 三 いゑそ橄欖山(さん)にてみやにむかひ坐(ざ)したまひしにペテロ ヤコブ ヨハネ アンデレー等(ら)ひそかにとひけるハ 四 いづれの時(とき)にてこのことあるやまたすべてこのことのならんときハい

かゝる兆あるやとまうしけれバつげたまはく 五 耶穌こたへてかれらにいひけるハ人にあざむかれざるやうつゝしめよ そハおほくの人わが名をかたりきたりて我ハキリストといひておほくのひとを欺惑べし 七 なんぢら戰といくさの風聲をきくときおそるゝなかれ。この事これらのことかならずあるべきなり。されども末期ハいまだいたらず 八 民ハおこりてたみをせめ國ハくにを攻ところどころに地震あり饑饉みだれあり。これらハ苦難のはじめなり 九 なんぢらみづからつゝしめよ。そハなんぢら集議所にわたされまた會堂にてむちうたれ又なんぢらわが為につかさと侯

ちよび王のまへにひきださるべし是ハかれらにあかしをなさんためなりまづ福音は諸族
づ萬民にいひひろめざるをえぞ 十一 人なんぢらをひきわたさ
さば以前よりなにをいはんとそのまゝおもひわづらふ
なかれたゞなんぢらそのとき賜ところのことをいふべし。
そハものいふものハなんぢらにあらず聖靈なり 十二 きやう
だいハ兄弟を死にわたし父ハ子をわたしまた子ハそのちゝ
はゝにさからひてこれを死しめん 十三 またなんぢらハわが名
によりてすべての人ににくまるべしされどをはりまで志
のぶものハすくはるゝことを得ん 十四 よげんしやダニエルが
いひしところの殘暴にくむべきもの立べからざるところ

ろにたちをらバ（讀ものよくおもふべし）そのときユダヤにをるものハ山にのがれよ 十五 屋上にをるものハいへにくだるな、またうちの物をとらんとてその家にいるなかれ 十六 田にをるものハその衣服をとらんとてかへるなかれ 十七 その日にハはらめるものと乳をのまする婦ハわざはひなるかな 十八 なんぢら冬にあふことをまぬかれんためにいのれ 十九 その日にハなやみあらん、かくのごとき患難ハ神のものをつくりはじめたまひし開闢よりいまにいたるまであらざりき。また後にもあらじ 二十 もし主その日をすくなくしたまはでバ一人だにすくはるゝものなかるべしされど主のえら[illegible]

のえらまれしものゝためにかみはその日を減じしたまふ
べし 二一 そのときもしキリストこゝにありかしこにありと
なんぢらにいふものあるとも信ずるなかれ 二二 それ偽キリスト
にせ預言者おこりてしるしとふしぎなるわざをおこなひ
揀選たるものをもあざむくことをえばあざむくべければ
なり 二三 なんぢら慎よわれあらかじめなんぢらにことごとく
これを告 二四 そのときこのなやみののち日はくらく月はひ
かりをうしなひ 二五 天の星はおち天のいきほひ震動べし 二六
そのときひとびとは人の子のおほいなる權威と榮光とをもて
雲のうちにあらはれきたるをみん 二七 まさにそのとき人の子

そのつかひたちをつかはして地のはてより天のはてまで
四方よりえらまれしものをあつむべし 二八 なんぢ
ら無花果樹よりてたとへをまなぶべし。その枝すでにやはらか
くなりて葉めぐめば夏のちかきをしる 二九 かくのごとくな
んぢらもまたこれらのことを見ば時ちかく門にちかまい
たるとしるべし 三十 我まことになんぢらにつげんこれらのこ
とことごとく成まではこの民はうせざるべし 三一 天地はうせ
んされどわがことばハ廢ず 三二 その日そのときをしるもの
ハたゞわが父のみなり天にあるつかひも子もたれもしる
ものなし 三三 [illegible]

たびせんとしてその權を志もべどもに委ねおの〳〵になすべき事をさしづけ又閽者にはおこたらずまもれと命じて家をさるひとのごとし　三五　このゆゑになんぢらもおこたらずしてまもるべしそハ家のあるじあるひハ夕あるひハ夜半あるひハ鶏なくころあるひハ早晨にかへるやをしらざれバなり　三六　おそらくハおもはざるの時きたりてなんぢらがねむれるをみん　三七　わがおこたらずしてまもれとなんぢらにつぐるハあまねくすべての人につぐるなり

第十四章

一　さて逾越なるすなはちたねいれぬパンの節の二日まへ

ハ祭司のをさとがくしやだち詭計をもて耶蘇をとらへてころ
さんとし二いひけるハまつりの日ハなすまじくばお
そらくハ民のうちに乱おこらん○三耶蘇ベタニヤの癩病
シモンのいへにて食しゐたまへるときあるをんな蠟石の
うつはにあたひたかきナルドのあぶらをもりてき
たりその盒をやぶり耶蘇のかうべにあぶらをそゝぎたり
四ある人だちたがひにいかりをふくみいひけるハこの膏
をつひやすハなにゆゑぞや五これをうらバ三百あまりの
デナリをえてまづしきものにほどこすことをえんとてその
婦をとがめけるハ六耶蘇いひけるハ

なんぞこのをんなをなやますや　われに善事をおこなへり
なり　七　まづしきものはつねになんぢらとともにあれば　な
んぢら意にまかせてかれらをたすくることを得べし　されど
われはつねになんぢらとともにあらず　八　このをんなは力をつ
くしてなせり。そはあらかじめわれを葬ためわが身にあぶ
らをそそぎしなり　九　われまことになんぢらにつげん　天の
下いづくにてもこの福音のひろめらるるところにはこの
をんなのなせしこともまたその記念のためにいひつたへ
らるべし　十　さて十二の弟子のひとりなるイスカリオテのユダ耶穌
をわたさんとて祭司の長にゆきしに　十一　この事をきき

きてよろこび銀子をあたへんと約せしかバユダハ耶穌を
わたさんと機をうかゞひつゝ○十二除酵餅のはじめ
の日すなはちすぎこしの羔をころすべき日でし耶穌にい
ひけるハすぎこしの食をいづく◉きそなへまゐらすべき
べきぞの十三耶穌ふたりの門徒をつれなさんとしてこゝろよい
ひけるハみやこにゆけらバ水をいれたる瓶をもてる人
にあふべしつきてしたがへ十四そのいるところの家のある
じに師のいはくわがでしとともにすぎこしを食すべき客房ハ
いづこにあるやといへ十五さすれバかれ陳設たるおほいな

つるごとく遇しのちすぎこしのそなへをなせり○十七日く
れて耶蘇じふにの門徒とともにきたれり 十八 このものら席につ
きてしよくするとき耶蘇いひけるはまことにわれなんぢ
らにつげんわれとともに食するなんぢらのうち一人われ
をうるべし 十九 このものらうれひておの〱耶蘇にいひいでけ
るはわれなるかの。またほかのひとりもいひけるはわれなる
か 二十 耶蘇こたへていひけるは十二のうちのひとりわれと
ともに手を盂につけるものこれなり 二十一 人の子はおのれに
ついて録されたるごとく逝ん、されど人の子をうるものの

いざはひなるかな。その人はうまれざりしならば幸ありし
ならん 二二 かれら志よくせるとき耶穌パンをとりて祝して
これを擘これをあたへていひけるは取てくらへこれ
わが身なり 二三 また杯をとりて謝しこれをあたへければ皆
このさかづきよりのめり 二四 耶穌いひけるはこれは新約の
わが血にしておほくの人のためにながさるゝところのわが
なり 二五 われまことになんぢらにつげん今よりのちあたらし
きものを神の國にてのまん日まで葡萄にてつくれるも
のをのまじ○ 二六 かれら歌をうたひて橄欖山にゆけり 二七 耶
穌いひけるは、今夜みんな[illegible]

ん[illegible]羊[illegible]
しるされたればなり 二八 されどわれよみがへりてのちなんぢ
らにさきだちてガリラヤにゆくべし 二九 ペテロ耶穌(いえす)にいひけ
るハたとひみな礙(つまづく)ともわれハつまづかじ 三十 耶穌(いえす)これにいひ
けるハわれまことになんぢにつげん今日(けふ)このよ鷄(にはとり)ふたゝ
びなかぬまになんぢ三次(みたび)われをしらずといはん 三一 かれます
たゝりうくしいひけるハわれなんぢとともにしぬるとも
なんぢをしらずとはいはじ門徒(でし)らもみなかくいひけり 三二 かくて
みなきつるゲツセマネといふところにいたり耶穌(いえす)そのでしにい
ひけるハ祈禱(いのり)あひだこゝにざせよ 三三 つひにペテロヤコブ

ヨハネをともなひゆき甚しくうれひこゝろをなやまし
三四 これらにいひけるはわが心いたくうれひて死るばかりな
りなんぢらこゝにとゞまりて儆醒しをれ 三五 耶穌すこしすゝみ
ゆきて地にふしいのりていひけるはもしかなはゞこの時を
さらしめたまへ 三六 またいひけるはアパ父よなんぢはおい
てのことあたはざるなし。この杯をわれよりとり
たまへされどわがおもふところをなさんとするにはあらず。
なんぢのおもふところをなさせたまへ 三七 耶穌きたりてこの
弟子らのいねふると見ペテロにいひけるはシモンなんぢはね

いらぬやうにめをさましいのれ心ハまことにすゝめ
ども肉體よわきなり 三九 またさりゆきておなじことばをいひて
いのり 四十 返てまたこのものゝいねたるをみる。このものゝ
その目つかれたるなり。耶蘇にいかにこたふべきやをしら
ざりき 四一 三次きたりてこのものにいひけるハ今ハいねてや
すめ充分なり時いたれり人の子ハつみびとの手にわたさる
るなり 四二 起よいざゆくべしわれをわたすものちかづ
けり○ 四三 このいへることばのたゞちに十二のひとりなるユダ
つるぎと棒とをもちたるおほくの人々ともにさいしの
をさ學者および長老のもとよりきたる 四四 耶蘇をわたすも

のこの者ハ號をなしていひけるハわが接吻するものハそれなりこれをとらへてしかとひきつれよ 四五 きたるやたゞちにすゝみて耶蘇にちかくよりラビラビといひてくちつけせり 四六 ひとびと手を耶蘇にかけてとらふ 四七 かたはらにたてるものの一人つるぎをぬきて祭司の長のしもべをうちその耳をきり落せり 四八 耶蘇こたへてかれらにいひけるハ刃と棒とをもちぬすびとをとらふるごとくしてわれをとらへにきたるのが我日々なんぢらとともに殿にてをしへしにはなんぢらわれをとらへざりきされどこハ聖書にかなはせんがためなり 五十 門徒みな耶蘇をすてゝにげさりぬ 五一 ある若者

つましが逮捕のものどもこれをとらへければ 五二 うすぎぬのやぐをすてゝはだかにてのがれさりぬ○ 五三 ひとびと耶蘇をさいしの長につれゆきけるに祭司のをさ長老およびがくしやだちことごとくうちつどひたり 五四 ペテロとほくはなれて耶蘇にしたがひ祭司のをさの庭のうちまでいり僕とともにざして火にあたりをれり 五五 さいしのをさおよび議官みな耶蘇をころさんとして證をもとむれどもえず 五六 おほくのひと耶蘇にいつはりのあかしをいひたれどもその證あはず 五七 ある人々たちていつはりのあかしの

しといひいだしけるハ 五八 われ手をもてつくりたるこの聖
殿をこぼち三日のうちに手をもてつくらざる別のみやを
たてんといひしをきけりと 五九 かくいひしがその證
またあはざりき 六〇 祭司のをさ中にたちて耶穌にとひいひ
けるハなんぢこたふることなきかこの人々のなんぢにた
つる證據ハいかに 六一 いゑす黙然としてなにもこたへざり
けれバ祭司の長またとひていひけるハなんぢハ頌
べきものゝ子キリストなるか 六二 耶穌いひけるハなんぢら人の
こ大權の右にざし天の雲のうちにのりきたるをみん
ちるゝなるべし 六三 こゝにおいて祭司の…

その褻瀆たることハなんぢらもきゝけるところなりなんぢらいかにおもふや。このものこぞりて耶穌を死ハあたるべきものとさだめたり 六五 あるものハこのものに唾しまたその面をおほひ拳にてたゝきいひけるハ預言せよ。またしもべどもも手のひらにてこのものをうてり 六六 ペテロ下庭にをりしにさいしのをさのある婢きたりて 六七 その火にあたりをるペテロを熟々このものをみていひけるハなんぢもナザレの耶穌とともにありしといひければ 六八 ペテロうけがはずしていひけるハことをしらずまたなんぢがいふところのことをさとりえざ

るあのりつゝくして庭門(にはぐち)にいでければにはとりなきぬ　六九　その婢(をんなめ)
このひとをみてかたはらにたてるものゝまへにいひけるはこの
人(ひと)もかの黨(ともがら)のひとりなり　七十　ペテロまたうけがはずでしばら
くしてかたはらにたてるものまたペテロにいひけるはな
んぢまことにかのともがらの一人(ひとり)なり。そハなんぢハガリラヤ
の人(ひと)なりその口音(くちなまり)これはあらはる　七一　こゝにおいてペテロ誓(ちかひ)
てわれ神(うへ)のたゝりをうくるともなんぢらがいふその人(ひと)を
しらずハあらざるなりといひしが　七二　このとき鶏(にはとり)ふたゝびな
きけれバペテロ耶穌(いゑす)のにはとりふたゝびなくまへに三次(みたび)

第十五章（だいじふごしやう）

平旦（よあけ）にはおよびたゞちに祭司（さいし）のをさ長老（としより）がくしやたち
すべての議官とともにはかりて耶穌（いゑす）をしばりひきつれ
てピラトにわたせり 二 ピラトこれにとひけるハなんぢハ
ユダヤびとの王（わう）なるや。耶穌（いゑす）こたへけるハなんぢのいへる
ごとし 三 さいしの長（をさ）おほくのことをもてこれをうつたふ
四 ピラトまた耶穌（いゑす）にとふていひけるハなにもこたへざる
か。このものらがなんぢにつきて證（あかし）をたてしことハいかばかりぞ
や 五 ピラトのあやしとおもふまでに耶穌（いゑす）なにごともこたへざ
りき 六 さてこのまつりにはひとびとの求（もとめ）にまかせてひとり

の四人をゆるすの例あり 七 ときにバラバといへるものあり
おのれとともに謀叛せしともがらとおなじくつながれゐ
たりしがこのうちハそのむほんのとき人をころせしものど
もあり 八 ひとびと聲をあげてよばはり恒例のごとくせんこ
とをねがひくるを 九 ピラトこたへていひけるハユダヤ
びとの王をなんぢらにゆるさんことをのぞむや 十 こ
れピラトさいしの長たちのねたみによりて耶蘇をわたし
たりとしればなり 十一 祭司のをさ民どもをバラバをゆるさ
んことをねがへとすゝむ 十二 ピラトまたこたへていひけるハ
なんぢらハさらバユダヤびとの

らまたさけびてこれを十字架につけよといふ 十四 ピラトこの
かれらにいひけるハこのひとなんの悪事をなせしや。これらます
ますさけびてこれをおふとりに釘よといふ 十五 ピラト民の
よろこびをえんとしてバラバをこれにゆるし耶穌を
むちうちてこれを十字架につけんためにわたせり 十六 兵卒
ともこれを公廳につれゆき組中をよびあつめ 十七 これにむ
らさきの袍をきせいばらのかんむりをあみてこうむらしめ
たり 十八 かくていひけるはユダヤびとの王やすかれ 十九 かく
葦をもてその首をたゝきこれに唾しひざまづきて拜しぬ 二十

てうろうしをはりて紫のころもをはぎもとの衣をきせてじふじかにつけんとてひきゆきしが 二十一 アレキサンデルとルフスの父なるクレネのシモンといへるものいなかよりきたりてそのところをとほりかかりければ強てこれに耶蘇の十字架をおはせたり 二十二 耶蘇をゴルゴダととけば即ちされかうべといへるところにつれきたり 二十三 没薬と酒をまじへてのませんとしたりしがこれをうけざりき 二十四 耶蘇をじふじかにつけしのち誰なにをとらんと鬮をとりてその衣服をわかちて 二十五 あさの第九時なりいゑそを十字架につけ 二十六 その罪標とユダヤびとの王とかきつく 二十七 ふたりの盗

ハその右ひとりハその左に[illegible]二八聖
書に。この事ハ罪人とともにかぞへられたりといひしにかな
へり 二九 ゆききのもの耶蘇をのゝしり首をふりていひける
ハああゝ聖殿をうちこぼちて三日にたつるものよ 三十 みづ
からをすくひて十字架とおりよ 三一 祭司のをさ學者どもも
おなじく嘲弄してたがひにいひけるハ人をすくひてみづ
からをすくひあたはず 三二 イスラエルの王キリストハ今おふど
このよりくだるべし。さらばみまもりてこれを信ぜん。またと
もにおふど架につけられたるものどもこれをのゝしれ
り 三三 第十二時より三時にいたるまであまねく地のうへく

ちくなりぬ 三四第三時はいゑすおほごゑによばゝりてエリエリ
ラマサバクタニといふ。この言を譯ばわが神わが神なんぞ我を
すてたまふやといへるなり 三五そこにたちゐたる者のう
ちある人このことをきゝてこれはエリヤをよぶなりといふ
三六ひとりはしりゆきて海絨をとり醋をふくませこれを葦
につけてこれにのましめいひけるは俟エリヤきたりてこ
れをすくふや否こゝろむべし○三七耶穌おほいなる聲をは
なしていきを絶 三八みやの幔よりさきまでさけて二つとな
れり 三九耶穌にむかひてたちたる百人の長このくるしみて氣

またとほくよりのぞみたるをんなたちもありしそのうちにある
ものハマグダラのマリアおよびちひさきヤコブとヨセの母(はゝ)
なるマリアまたサロメなり 四一 かれらハ耶穌(いえす)のガリラヤにゐ
ましゝときしたがひつかへしものどもなり。また
このほかのものもこれとゝもにエルサレムにのぼりしおほくの
をんなゐたりき ○ 四二 この日(ひ)ハそなへ日(び)すなはちあんそくにち
のまへの日(ひ)なりしゆゑ 四三 日(ひ)くるゝとき尊貴(たふとき)しふぎやくな
るアリマタヤのヨセフといへるものきたれり。この人(ひと)ハ神(かみ)の
國(くに)をのぞめるものなり。かれあへてピラトにゆきて耶(いえ)
穌(す)のしかばねを求(もと)めたり 四四 ピラト耶穌(いえす)のすでにしねるをあ

やゝ百人のかしらをよびてこれに死てより時をへたる
やいなやをとひ 四五 ひやくにんの長よりきゝてこれをしり
屍をヨセフにあたふ 四六 ヨセフ枲布をかひもとめきたりて
耶穌をとりおろしこれをそのぬのにてつゝみ磐にほりた
る墓におき石をそのはかのもんにまろばしおけり 四七 マグダラの
マリアおよびヨセの母なるマリアその屍をおきしところ
をみたり

第十六章

安息日すぎて マグダラのマリアとヤコブの母なるマリア
およびサロメ香料をかひとゝのへ耶穌にぬらんとてきたる

石をその門よりまろばしさるものあらんか。これその石はなはだおほいなるなり 四 かくてかれら目をあぐれバ石のすでにまろびあるを見る 五 墓にいりて白ころもをきたるわかきもの右のかたにざせるを見ておどろきあやしめるに 六 少者これにいひけるハおどろきあやしむななんぢらハ十字架につけられしナザレの耶穌をたづぬ。かれハよみがへりてこゝにあらずかれをおきしところを見よ 七 且ゆきてその門徒とペテロにつげよかれハなんぢらにさきだちてガリラヤにゆけり。なんぢらかしこにて

こゝにて見べし。まへにかれそのなんぢらにいひしがごとくし 八
うちふるひて、墓よりにげはしりけり。このころ戰慄こゝろおどろきさまよひて
一言をも人にいはざりき。これおそれしがゆゑなり ○ 九
いゑそ七日のはじめの日よあけごろよみがへりてまづ
マグダラのマリアにあらはれたる。さきにいゑそ耶穌この婦より七の悪鬼
をおひいだせり 十 耶穌とともにありしものら哭かなしめ
るときこの婦きたりてこれらのことを告 十一 このものら耶穌
の活てこのをんなにみえたまひしことをきゝしが信ぜざ
りき 十二 このゝちかれらのうち二人のものいなかへゆきけ
るが途にて耶穌かたちをかへて貌あらはれたまひければ

どもまたこれをも信ぜざりき○十四またそのゝち十一ので
しの食しをるところにあらはれてかれらが信なきとそのこ
ころの剛硬をいましめたまへり。これハ耶穌のよみ
がへりたまへるのち其をみしものゝいふところを信ぜざ
るがゆゑなり 十五 耶穌かれらにいひけるハあまねく世界を
めぐりて凡ての人にふくいんをのべよ 十六 信じてバプテ
スマをうくるものハすくはれ信ぜざるものハ罪にさだめ
らるべきなり 十七 しんずるものにハ左のごとき奇跡あひしたがふ
べし。わが名によりて悪鬼をおひいだし。ことなるくにの方

言をいひ。まさに蛇をとらへ毒をのむとも害なく。また手をやまひのものにつけなバたちまち愈ん○十九かくて主ハこのことをかたりをはりしのち天にあげられ神のみぎにざしぬ二十門徒たちあまねく福音をのべつたへ主もまさにはたらきをあそばせそのともなふところの奇跡をもて道のあかしをなしたまへりアーメン

新約全書馬可伝終

第一章 われらの中にあつく信ぜられたることを始より
親しくみて道につかへたるもの二われらにつたへしごと
く記載んとおほくの人々これを手にとれるゆゑに。三貴き
テヨピロよわれも原よりすべての事をつまびらかに考覈
ふれバ。次第をたゞしてなんぢに書おくり四なんぢをしへ
られしところの確實をさとらせんとおもへり○五ユダヤ
の王ヘロデのときにアビアの班なる祭司ザカリアといへる
ものあり。その妻ハアロンの裔にて名をエリサベツといふ六
ともに神のまへにて義人なり。すべて主の誡命と礼儀を

このけるなくおこなへり 七 エリサベツ姙るなきがゆゑよりかれらに子なかりし。また二人とも年も老ぬ 八 ザカリアその班次にあたりて神のまへに祭司の職をおこなふとき 九 祭司の例にしたがひ。籤をとりて主のみやにいり香を焼ことを得たりき 十 香をたきけるときに衆のひとびとはみな外にありていのれり 十一 主のつかひ香壇のみぎにたちてザカリアにあらはれしかば 十二 ザカリアこれをみてあわてゝおそる 十三 天使かれにいひけるはザカリアよおそるゝなかれなんぢのねがひきこえたれば なんぢの妻エリサベツ男子をうまんその名をヨハ子となづく

のまへに大ならんまた葡萄酒と濃酒とをのまじ。母の
胎よりうまれいでゝ聖霊に充さる十六またイスラエルの民
のあまたのひとを主なるその神に歸服せしめければなり
十七かれエリアの心と才能をもて主のさきにゆかん。これ父
のこゝろに子を慈ませ。逆ものを義人の智にしたがはせ。主
のためにあらかじめなる民を備んとなり十八ザカリア天使に
いひけるは。われもおいて年よりて妻もまた年邁されば
何によりてこのことをしらんや十九天使こたへていひける
はわれはガブリエルとて神の前にたつものなり。なんぢに

かたりてこのよろこびの音(おとづれ)をつげんために奉使(つかはされ)たれば
二十 その時(とき)いたりてかならず應驗(なる)べきわがことばを信(しん)ぜざる
によりて。なんぢおしとなりてこのことの成(なる)日(ひ)までものいふ
ことあたはじ 二一 民(たみ)ザカリアをまちゐて。その神殿(みや)のうちに
ひさしくをるをあやしむ 二二 ザカリアいでゝものいふことあたは
ざりしかば。その聖殿(みや)のうちにて異象(いしやう)(コトナルアラハレ)をみたることを
さとりたり。ザカリアひとびとに首(うなづき)をもてしめし。つひに瘖(おし)
となりき 二三 その職事(つとめ)の日(ひ)みちければ家(いへ)にかへりぬ 二四 この
後(のち)その妻(つま)エリサベツはらみてかくれゐたりしこと五(ご)ケ月(げつ)に
二五

六ヶ月にあたりガリラヤのナザレとなづけたる邑の
二七 ダビデの家のヨセフといへる人に所聘たる處女へ。神よりガブリ
エルといふ天使をつかはされたり。その處女の名ハマリアと
いへり
二八 つかひこの處女にきたりいひけるハ。めぐみ
をうけたるものよ主なんぢと偕にいませり。なんぢハ女のうちにて
福なるものなり
二九 處女そのことばを訝このあいさつハいか
なることぞとおもへり
三十 天使いひけるハ。マリアよおそるゝ
なかれなんぢハ神よりめぐみをえたり
三一 なんぢはらみて
男子をうまん。その名を耶蘇となづくべし
三二 かれ大なる

ものとなりて至上者の子ととなへられん。また主なる
神その先祖ダビデ王の位をかれにあたへたまひて 三三 ヤコブの
家をかぎりなく支配すべく。またその國をはることあら
ざるべし 三四 マリア天使にいひけるは。われいまだ夫に適ざる
にいかにしてこのことあるべきや 三五 天使こたへていひける
は。聖霊なんぢに臨りいと高きものゝ大能なんぢをおほ
はん。このゆゑになんぢがうむところの聖なるものは神
の子ととなへらるべし 三六 それなんぢの親戚エリサベツもま
た年おいて男子をはらめり。素うまずめなるものとい
三七

けたまふ。まことにこれ主の使女なり。なんぢのいへるごとく
我にあらまほし。天使つひにかれをさりけり○ 三九 そのころ
マリア起てすみやかに山地なるユダのむらにゆき 四十 ザカリア
の家にいりてエリサベツにあいさつをなしけるに 四一 エリサベツ
マリアのあいさつをきゝしかバ。その胎孕はらのうちにて
跳動たり。エリサベツ聖霊にみたされ 四二 こゑをあげて呼いひ
けるハ。女のうちにてなんぢハさいはひなるものなり。また
姙しものもさいはひなり 四三 わが主の母われに
きたる。これなにによりてかゝることを得し 四四 それなんぢ

のあいさつの聲わが耳にいりしとき。そらみ子よろこびてわが腹内にをどりて 四五 主のことを信ぜしものはさいはひなり。それは主のうけたまひしごとくことごとくなるべければなり 四六 マリアいひけるは。わがこゝろ主をあがめ 四七 わがたましひはわが救主なる神をよろこぶ 四八 これその使女のいやしきをも眷顧たまふが由なり。いまよりのち萬世までも我をさいはひなるものととなふべし 四九 それ權能をもちたまふもの我におほいなることをなせり。その名はきよく 五十 そのあはれみは世々かれらを敬畏ものゝよ

[illegible]

五三 飢るものを美食にあかせ。富るものをむなしくかへらせたまふ 五四 アブラハムとその子孫をながくあはれむことをわすれずして 五五 その僕イスラエルを扶持たまへり 五六 これわれらの先祖にいひたまひしがごとくなり。マリア
エリサベツとともに三ヶ月ばかりをりてのち家にかへりき。 五七 さてエリサベツ産期みちて男子をうめり 五八 その
隣里のものおよび親戚のものども主がエリサベツにあはれみなる慈悲をたれたまひしことをききてともによろこべり 五九
第八日はおよびければうまれし子に割礼せんとてきたる。

その父の名によりザカリアとなづけんとせしに 六十 その母こたへて、あらずヨハネとなづくべしといひければ 六一 かれらエリサベツにむかひていひけるは、なんぢが親戚のうちにはこの名をなづけしものなし 六二 かくてかれその父に頭にて示意、いかゞなづけんとおもふかと問たるに 六三 ザカリア寫字板を請てその名はヨハネなりとかきしるせしかば皆あやしめり 六四 ザカリアの口たゞちにひらけて舌とけものいひて神をほめたり 六五 その隣里にすみたる人々みなおそれをりぬ。またこのことをあまねくユダヤ

主の手これとともにありし　六七 父ザカリア聖靈にかんじてかれ
預言していひけるハ　六八 主なるイスラエルの神ハ讚美べきかな。
これその民を眷顧てあがなひをなし　六九 われらのために
拯救の角をそのしもべダビデの家におこしたまへり　七十 いに
しへより聖なる預言者の口をもていひたまひしがごとく
七一 われらの敵またすべてわれらを惡むもの
手よりいだす拯救なり　七二 これ仁惠をわれらの先祖にほど
こしまたその聖約をおぼえしとなり。これわれらの先
祖アブラハムにちかひしところの誓にして　七四 われらを敵の

手よりすくひ。われらの生涯を七五聖と義にありておそれ
なく主に服事しめんとなり七六をさなごよなんぢは至上者
のよげんしやととなへらるべし。そはなんぢ主にさきだちて
ゆきて。その路を備んとすればなり七七神のふかき憐憫により。
その罪をゆるされてすくひをうべきことを。その民にしめさん
ためなり七八そのあはれみによりて旭のひかり。うへより七九
幽暗と死蔭にすわるものをてらし。われらの足をみちび
きてやすらかなる路にいらせんとてのぞめり○八十かくて
をさなる子はやゝ成長し精神ますます強健にしてイスラエル

よりいでたり 二 この戸籍しらべハクレニオ スリヤをさめし
ときの初次におこなはれたりしなり 三 人みなこせきに
つかんとておの〳〵その故邑にかへりたり 四 ヨセフもダビデの
宗族また血統なればこせきにつかんとて 五 すでに孕るその
所聘の妻マリアとゝもにガリラヤのむらナザレよりいでゝ
ユダヤにのぼり。ダビデのむらベツレヘムといふところにいた
れり 六 こゝにをりて産期みちければ 七 冢子をうみそれを布
につゝみて槽に臥せたり。これ客舎にかれらのをるところ
なかりしゆゑなり ○ 八 このあたりに羊を牧ふものありける

が野にをりて夜間その群をまもりゐしに 九 主の天使きたりて主の榮光かれらをめぐりてらしければ。牧者おほいにおそれけり 十 天使かれらにいひけるは。おそるゝことなかれ。われ萬民にかゝはるおほいなるよろこびの音をなんぢらにしめすべし 十一 それ今日ダビデの邑においてなんぢらのために救主うまれたまへり。これ主なるキリストなり 十二 なんぢら布につゝみし嬰兒の槽に臥たるをみん。これその徵なり 十三 忽然あまたの天軍あらはれ天使とゝもに神を讚美ていひけるは 十四 天上ところにはえいくわうあり

るべいざベツレヘムにゆき主のしめしたまへる。そのありし
ことをみんとて 十六 いそぎいたりマリアとヨセフと槽に
ふしたる嬰兒にたづねあへり 十七 すでに見てこの子に
つき。天使のつげられしことをつげひろめければ大きく
ものみな羊をかふものゝいはれることを奇とせり 十九 マリアハ
すべてこれらのことを心にとめておもひめぐらせぬ 二十 羊
をかふものその見聞せるところ悉くおのまゝにかたられ
しごとくなるにより神をあがめつゝ讃美てかへりけり
○ 二十一 子に割礼をおこなふべき八日の日みちければ。その

いまだ胎にやどらざるさきに天のつかひの稱しごとく名
を耶穌となづけり○二二モーセの例にしたがひて潔日みち
けれバちゝはゝをさなごをひきゐて主にさゝげんがためヱルサレム
にのぼれり二三これ主のおきてにはじめにうまるゝ男子ハ
主の聖ものとよばるべしとしるされたるがごとし二四また
主のおきてに斑鳩ひとつがひ或ハ雛鴿ふたつをそなふべし
といへるにしたがひて祭をなさんとしつ○二五さてヱルサレム
にシメオンといへる人ありこのひと義にして虔誠ありて
イスラエルの民のなぐさめられんことをまてるものなり。

て神殿にいりし兩親その子耶穌をいだきそのならはしに
したがひて行はんとてきたりしに 二八 シメオンをさなご
を抱いだき神を讚美いひけるは 二九 主よいまその所言にした
がひて僕を安然に世を逝せたまふ 三十 わが目すでに萬民
のまへに設たまひし救をみたり 三一 これ異邦人をてらさん
光なり 三二 またなんぢの民イスラエルの榮なり 三三 その父母は
をさなごにつきていはれたることを奇をりぬ 三四 またシメオン
かれらを祝てその母マリアにいひけるは。この嬰兒はイス
ラエルのおほくの人の顛てまた興らんことゝいひさらひ

をうけん。その號はそしらる 三五 これおほくの心のおもひの顯露れんがためなり。また劍なんぢがこゝろをも刺透べし ○三六 アセルの支派パヌエルのむすめなるアンナといへる預言者あり。かれは甚としよりなり。その處女なりしとき夫に適て七年ともにをりき 三七 この老女はよはひおよそ八十四歳の嫠なりしが。神殿をはなれずして夜もひるも禁食と祈禱をなして神につかへたり 三八 このときこの老女もかたはらにたちて主を讃美し。またエルサレムにて贖をのぞめるすべての人にこの子のことをかたれり ○三九 主のおきてを志

に智慧みち神の恩寵そのうへにありき○四一さてその
ふたおや年ごとに逾越の節にエルサレムへゆきしが四二かれの
十二歳のときまたいはひの例にエルサレムにのぼ
り四三節日をはりてかへりゆきけるにその子耶穌はエルサレム
にとゞまりぬ。しかるにヨセフと母これをしらず四四同行人
のうちにあるべしとおもひ一日程をゆきて親戚しるべの
うちにたづねしが四五あはざりければこれをたづねて
エルサレムにかへり四六三日ののち聖殿にてあひたるに。このとき
教師のうちに坐しゐて聴かつ問ゐたり四七聞ものこと

その智慧とその應對とをあやしとせり 四八 兩親これを
みておどろき母これにいひけるは子よ何ぞわれらに
如此なせしや。なんぢの父とわれとうれひてなんぢ
をたづねたりき 四九 耶穌これにいひけるは。なにゆゑわれを尋
ぬるや。われはわが父の事をつとむべきをしらざる 五〇
や。されど兩親はそのいはれることをさとらざりき 五一 耶穌これと
ともにくだりて。ナザレにいたりてこれらにしたがひをりき。
その母これらのすべてのことをこゝろにとめぬ 五二 耶穌
ちゑもよはひもいやまさり。神と人とにますます愛せ

ユダヤの方伯となり。ヘロデハガリラヤの分封君となれり
その兄弟ピリポハイツリアおよびテラコニテの地の分封君
となり。ルサニアハアビレネの分封君となれり 二 アンナス
とカヤパ祭司の長となりしとき。ザカリアの子ヨハネ
野にありて神の命令をうけ 三 ヨルダンの邊なるすべ
ての地にきたり。罪の赦をえさせんがために悔あらた
めの「バプテスマ」を宣つたへたり 四 預言者イザヤのことばを
しるしたる書に。野によばる人のこゑあり。いはく主の道
をそなへ。そのみちすぢを直せよ 五 すべての谷はうめ

られ。すべての山崗ハたひらげられ。屈曲たるハなほく。
崎嶇ハやすくせられ
六 人々みな神のすくひをみることを
得んとあるがごとし
七 於此「バプテスマ」をうけんとてきたれる
衆にヨハネいひけるハ。あゝ蝮蛇のすゑよ。誰がなんぢらに
きたらんとする怒をさくべきことをつげしや
八 さらバ悔改
にかなふ果をむすぶべし。なんぢら心にわれらが祖に
アブラハムありとおもふことなかれ。われなんぢらにつげん。
神ハ能この石をアブラハムの子となしむべし
九 いまや
斧を樹のねにあてらる。ゆゑにすべて善果をむすばざる
十 [illegible]

けるハふたつの衣服をもてるものハもたぬものにわけあ
たへよ食物をもてるものも亦志かすべし 十二 税吏も「バプ
テスマ」をうけんとてきたりいひけるハ。師よわれらハなに
をなすべきぞ 十三 答ていひけるハ。定例の税銀のほかにおほ
くとることなかれ 十四 兵卒もまたとふていひけるハわれらハ
なにをなすべきや 答ていひけるハ。人を強暴しあるひハ誣
ふることなかれ。うるところの給料をもて足
りとすべし〇 十五 民まちをりしときなれバ衆みなこころ
にヨハネをキリストなるやいなやと忖度せりしに 十六 ヨハネこれ

ま答いひけるハ。我まことに水をもて「バプテスマ」をなんぢらに
おこなへり。われより能力あるものきたらん。われハその
履帯をとくにもたらざるもの。かれハ聖霊と火をもて「バプテスマ」をなん
ぢらにおこなはん 十七 手に箕をもちてその禾場をきよ
め麦ハあつめてその蔵にいれ。殻ハきえざる火にてやく
べし 十八 ヨハネまた多端をもてすゝめをなし。福音を民に
のべつたへたり 十九 さて分封君なるヘロデその兄弟ピリポの
妻ヘロデヤの事およびおこなふところのすべての悪ことゝを
ヨハネにいましめられけれバ 二十 なほも悪事をくはへんヨハネ

狀にてそのうへにくだりぬ また天より聲あり云なんぢハ
わが愛子わが喜悦ところのものなり○二三時に耶穌ハ
約そ三十にして福音を宣はじむ ひとびとハヨセフの子とおも
はれたまへり。ヨセフの父ハヘリ 二四 その父ハマツタテ その父ハ
レビ その父ハメルキ その父ハヤンナ その父ハヨセフ 二五 その父ハ
マタテヤ その父ハアモス その父ハナオム その父ハヱスリ その父ハ
ナムガイ 二六 その父ハマアツ その父ハマタテヤ その父ハセメイ その父ハ
ヨセフ その父ハユダ 二七 その父ハヨハンナ その父ハレサ その父ハゼル
バベル その父ハサラタヱル その父ハネリ 二八 その父ハメルキ その

父ハアッデ その父ハコサム その父ハヱルマダム その父ハヱル
二九 その父ハヨセ その父ハヱリヱセル その父ハヨホレム その父
ハマッタテ その父ハレビ 三十 その父ハシメオン その父ハユダ その
父ハヨセフ その父ハヨナン その父ハヱリアキム 三一 その父ハメレア
その父ハマイナン その父ハマタッタ その父ハナタン その父ハ
ダビデ 三二 その父ハヱッサイ その父ハオベテ その父ハボアス その
父ハサルモン その父ハナアソン 三三 その父ハアミナタブ その父ハアラムそ
の父ハヱスロン その父ハパレス その父ハユダ 三四 その父ハヤコブ その父
ハイサク その父ハアブラハム その父ハテラ その父ハナコル 三五 その父

その父ハラメク 三七 その父ハマトサラ その父ハエノク その父ハヤレド
その父ハマレレエル その父ハカイナン その父ハエノス その父ハセツ
その父ハアダム。アダムハもとより神の子なり

第四章 さて耶穌せいれいにみちてヨルダンよりかへり。
霊にみちびかれ野にゆきて 二 四十日悪魔にこゝろみらる。
この諸日なにをもくらはずして四十日をはりてのちに饑ゑさ
り 三 悪魔これにいひけるハ。なんぢもし神の子ならバ
この石に命じて餅とならしめよ 四 耶穌こたへけるハ人ハ餅
のみにて生るものにあらず。たゞ神のすべての言に

よるしと録されたり　五悪魔またこれをたかき山につれゆき。一瞬間に天下の萬國をしめして　六いひけるは。このすべての權威と榮華をなんぢにあたへん。それこれはわれにまかされたれば。わが所欲ものにこれをあたふべし　七ゆゑになんぢもしわがまへに拜跪ばことごとくなんぢの屬となるべし　八耶蘇こたへけるは。サタンよわがうしろにしりぞけ。なんぢの主なるなんぢの神にひれふしこれにのみつかふべしとしるされたり　九悪魔また耶蘇をエルサレムにつれゆき聖殿のいただきにたたせていひけるは。なんぢもし神の子

ちに命じてなんぢをまもらせん

ざるやうかれら手にてささぐべしとしるされたる 十二 耶蘇こたへけるは。主なるなんぢの神をこころむべからずといひあけり 十三 悪魔この誘試ことごとくをはりて志ばらくかれをせまるのをはなれたり 十四 耶蘇せいれいの能をもてガリラヤにかへりしに、その聲名あまねくまはりの地にひろがりぬ 十五 かくてかれらが會堂にてをしへをなし衆人にあがめられをえたり〇 十六 その長育しところなるナザレにきたり。常例のごとく安息日に會堂にいりて聖書をよまんとてたちけれバ 十七 預言者イサヤの書をあたへしに。耶蘇

その書をひらきてかく録れたるところを見いだせり
十八 主の靈われにいませ。ゆゑに貧きものに福音をつたへんことをわれに膏をそゝぎて任ず。心の傷るものを醫し。まことに囚人にゆるさんことゝ瞽者に見させんことをしめし。まことに壓制らるゝものをはなち 十九 主の禧年を宣ひろめんがためにわれをつかはせり 二十 耶穌書をまき。その役者にあたへて坐しけるに會堂にあるものみな目をとゞめて視ゐたり 二一 耶穌かれらにいひけるは。この録されることば今日なんぢらのまへに應驗り 二二 衆かれ

らにいひけるは。なんぢらかならずこれらの諺をひきて。醫者みづからをいやせ。これまできゝしところの此カペナウムにて行しことを自己の家郷なるこの土にもなすべしといはん。又いひけるは。これまことになんぢらにつげん。預言者そのふるさとにてそれ敬重らるゝものはあらず。
二五 われまことをもてなんぢらにつげん。エリヤのとき三年と六ヶ月天とぢて遍地おほいなる饑饉なりし。その時イスラヘルのうちおほくの嫠ありしかど
二六 エリヤはその一人へもつかはされずたゞシドンなるサレプタのひとりの

嫠はつかはされざり 二七 また預言者エリヤのときにイスラエルのうちにあまたの癩者ありしかどそのひとりだに潔られず。たゞスリヤのナーマンのみきよめられたり 二八 會堂にありしものこれをきゝてあまりにいきどほり 二九 起て耶蘇を邑のそとにいだし、あげおとさんとてその邑のたちたる山のいたゞきまでひきゆけり 三十 志かるに耶蘇かれらの中をとほりてさりぬ 三一 ガリラヤのカペナウムといへるまちにいたりて安息日ごとに衆ををしへしに 三二 そのことば權威ありければ、ひとびとそのをしへにおどろけり○ 三三 會

與あらんや。なんぢきたりてわれらをほろぼさんとす。われは
なんぢの誰なるをしる。すなはち神の聖なるものなり
三五 耶穌これを責ていひけるは。聲をいだすことなかれ。そこ
を出よ。惡鬼つひにその人をひとびとのなかにたふし傷せ
していづ 三六 衆みなおどろきたがひにかたりいひけるは。權威と
能力をもちてけがれたる鬼に命ぜしかば出きたれり。是いか
なる道ぞや 三七 こゝに耶穌のきこえ遍くそのほとりの地にひろ
がりぬ○ 三八 耶穌會堂をいでてシモンの家にいりしにシモン
の妻母あつき熱病をわづらひゐたりき 三九 ひとびとこれがため

は耶穌にねがひけれバ。そのかたはらにたちて熱をせめ
しに熱しりぞけり。婦はたゞちに起てかれらに供事ふ
四〇 日のいるときさま〴〵の病をわづらひたるものをもてる
人々みなそれを耶穌につれきたりければ。一々そのうへに
手をおきていやせり 四一 悪鬼もまたあまたの人々をいで
さりさけびて。なんぢは神の子キリストなりといへり。しか
るにこれをせめてものいふことをゆるさゞりき。悪鬼その
キリストなるをしれるなり 四二 あくるあさ耶穌いでゝ人なき
ところにゆきけれバ。衆たづねきたりてその離去ことを

神の國の福音をのべ[illegible]めよ奉使るまでなり 四 かくてガリラヤの諸會堂にて道をのべつたへたり

第五章

ひとびと神のことばをきかんとて擠擁けるとき耶蘇ゲネサレの湖のほとりにたちて 二 いそに二艘のふねあるを見る漁のものは舟をはなれて網をあらひをりけり 三 その一艘なるシモンの舟なりしが耶蘇これにのり。請て岸よりすこしくはなれさせたまふ。坐して舟中よりひとびとをしふ 四 教をはりてシモンにいひけるは澳へいでゝあみを下してすなどれ 五 シモンこたへけるは。師よわれら終夜ほねをおりしかど

所得なかりき。されどなんぢの言にしたがひて網をおろさん 六 既におろして魚を圍ることはなはだおほく網さけかかりければ 七 いま一艘なるふねの侶をまねきて來たすけしめしに。このもちきたりしとき。そのうを二艘のふねに滿てしづまんばかりなりし 八 シモン ペテロこれをみて耶穌の足下にふして。主よわれを離れたまへ。われは罪人なりといへり 九 これシモンおよび偕にありしものの悉くすなどりしところの魚の夥しきにおどろきけるなり 十 シモンの侶なるゼベダイの子ヤコブとヨハネもまた然り。耶穌シモンにいひけるは。

ある邑にをりしとき身こと〴〵く癩病をやめるものあり。耶蘇をみてひれふしねがひいひけるハ。主もし聖旨にかなふときハわれをきよくなし得べし 十三 耶蘇手をのべかれに按て。わがこゝろにかなへり潔なれといひければ。たゞちに癩病いえさりけり 十四 耶蘇かれを戒ていひけるハ。人につぐることなかれ。たゞ往てあのれを祭司にみせ。かつきよめられしためにモーセが命ぜしごとく獻物をなし。證據をかれらにせよ 十五 されども耶蘇の聲名ます〳〵ひろがりて群衆あるひハ教をきかんとし。あるひハ病をいやされんとてあつま

まりきたれり十六耶穌つねに人なきところにしりぞきて祈禱たまひき○十七あるひ耶穌をしへをなせるときパリサイのひと〲教法師ガリラヤの諸郷ユダヤエルサレムよりきたりてこゝに坐しぬ。このときの病をいやすべき主の能あらはれたり十八あるひと癱瘋をやめるものを牀にのせてかききたり。これを家にいれ耶穌のまへにおかんとおもへども十九群集にて舁いるべきかたなかりければ屋上にのぼり瓦をとりのけて。その人をねどこのまゝ衆人のなかへ縋おろし。耶穌のまへにおけり二十耶穌その信あるをみてやまひ

いふものハ誰ぞ、神よりほかに罪をゆるすことを得ん二二耶穌そのおもひをしりて答いひけるハ、なんぢらこころのうちに論ずるや二三なんぢの罪ゆるさるゝといふと起てあゆめといふといづれかやすき二四それ人の子地にて罪をゆるすの權威あることをなんぢらにしらせんとて、つひに癱瘋の人に。なんぢにいふ起てねどこをとりて家にかへれといひけれバ二五そのひと衆のまへにてたゞちにおきて臥たるねどこをとり。神を稱讃ておのがいへにかへりぬ二六衆みなおどろきて、神をあがめかつおそれて

畏懼ていひけるハ。われら今日ふしぎなることを見たり

○二七 このゝち耶蘇いでゝレビといへる稅吏の稅關に坐しゐけるをみて。われにしたがへといひければ 二八 レビ一切をすてゝちあきさ起てしたがへり 二九 レビおのれの家にて耶蘇のために豐盛なる筵をまうけしに。稅吏また他のひとぐもともに筵に坐せるものおほかりけるが 三十 そのところの學者とパリサイのひと耶蘇の門徒につぶやきいひけるハ。なんぢらみつぎとり並つみある人々とともに飲食するハなにゆゑぞ 三一 耶蘇こたへていひけるハ。康强なるものハ醫者のたすけ

ためなり 三三 かれら耶蘇にいひけるハ。ヨハネの徒ハしば〳〵
禁食また祈禱をなせり。パリサイのでしもまた然す。しかる
になんぢの門徒ののむことくらふことをなすハ何ゆゑぞ
三四 耶蘇いひけるハ。新郎の友そのはなむこと一處にをる
うちハこれに禁食をなさしむることを得んや 三五 のち新郎
とらるゝ日いたらん。その日にハ禁食すべきなり 三六 譬
をもていひけるハ。新衣をきりとりて舊衣をつくろふもの
あらじ。もししかせバ。新衣をそこなひかつあたらし
きよりとりたる布ハふるきものとあはざるべし 三七 又あたらしき

酒をふるき革袋にいるゝものあらじ。もしさもせば。あたらしき酒ハそのふくろを裂もれいでゝ且ふるぶくろもそこなふべし 三八 あたらしき酒ハあたらしきふくろにいるべきものぞ。かくてこそ兩ながら存すなり 三九 ふるき酒をのみて立刻にあたらしきさけを欲ものハあらじ。これふるきぞもつとも好といへばなり

第六章 逾越節の二日此のちはじめのあんそくにち耶蘇むぎのはたけをとほりしに。そのでし麥の穂をつみこれを手にてもみくらひしかバ。あるパリサイの人かれら

しものゝ饑(うゑ)しときなしたることをいまだ讀(よま)ざるか 四
すなはちかれ神(かみ)の殿(でん)にいりて祭司(さいし)のほかくらふまじき
供(そなへ)のもちひをとりてくらひ且(かつ)ともにありしものにもあた
へたりと 五 またいひけるは人(ひと)の子(こ)は安息日(あんそくにち)にも主(しゆ)たるなり
〇六 またほかのあんそくにちに耶穌(いえす)會堂(くわいだう)にいりてをしふ。
こゝに右(みぎ)の手(て)なへたる人(ひと)ありけるが 七 學者(がくしや)とパリサイの
ひと。耶穌(いえす)これを安息日(あんそくにち)にいやしをなさんかとうかゞひぬ。それ
かれをうつたへんとおもへばなり 八 耶穌(いえす)そのこゝろを志(し)りて
手(て)なへたる人(ひと)におきて中(なか)にたてよといひければ。そのひと

起(おき)てたちたり九 耶蘇(いゑす)いひけるハ。われなんぢらにとはん。安息日(あんそくにち)に善(よき)をなすと悪(あしき)をなすと。また生(いか)すと殺(ころす)といづれかなふべき十 つひにひと〴〵をみまはして。その人(ひと)に手(て)をのべよといひければ。かれそのごとくせしに。手(て)またもとのごとく愈(いえ)てかたの手(て)のごとくなれり十一 かれらおほいに怒(いかり)ていかに耶蘇(いゑす)をなさんとかたりあへり○十二 そのころ耶蘇(いゑす)いのりのために山(やま)にゆきてよもすがら神(かみ)にいのりせり十三 夜(よ)あけて耶蘇(いゑす)でしをよび。そのうちより十二人(にん)をえらみてこれを使徒(しと)となづく十四 即(すなは)ちペテロとなづけたまひしシモンその兄弟(きやうだい)

十六ヤコブの兄弟(きやうだい)のユダとイスカリオテのユダなり。この
ユダは耶穌(いえす)をうりわたせるものなり 十七 耶穌(いえす)これらと
ともにくだりきたりたひらかなる地(ところ)にたちしに。おほくの門徒(でし)
とおびたゞしきひと〴〵 ユダヤの四方(よも)また エルサレム および
ツロ シドンの海邊(うみべ)よりきたりあつまりて或(あるひ)はその教(をしへ)をき
かんとし。あるひは病(やまひ)をいやされんことをねがへり 十八 また
悪鬼(あくき)にくるしめられしものもありしがこと〴〵くいやされたり
十九 衆(ひと〴〵)みな耶穌(いえす)にさはらんとせり。これ能力(ちから)のその身(み)より
いでゝかれらをこと〴〵く醫(いや)せばなり ○ 二十 耶穌(いえす)目(め)をあ

げ門徒(でし)をみていひけるハ。なんぢら貧者(まづしきもの)ハさいはひなり。神(かみ)の國(くに)ハすなはちなんぢらのものなるべけれバなり。二一 なんぢらいま饑(うゑ)るものハさいはひなり。飽(あく)ことを得(う)べけれバなり。なんぢらいま哭(なげく)ものハさいはひなり。わらふことをうべけれバなり。二二 人(ひと)の子(こ)のためよ人(ひと)なんぢらをにくみ。またとほざけ罵言(のゝしり)なんぢらの名(な)を悪(あし)としてすてなバなんぢら福(さいはひ)なり 二三 その日(ひ)ハよろこびおどれ。なんぢら天(てん)よおいて賞賜(むくい)おほいなれバなり。その祖(せんぞ)が預言者(よげんじや)よなしたりしもかくのごとし 二四 なんぢら富(とめる)ものハわざはひなるかな。

はひなるかな哀なかんとすれバなり
二六 すべての人なんぢら
をほめなバ。なんぢらわざはひなるかな。その祖がいつはり
の預言者になしたりしもかくのごとし
二七 されど聴ところの
なんぢらにつげん。その仇を愛し。なんぢらをにくむ
ものを善し
二八 詛ものゝために祝し虐遇ものゝために祈禱せ
よ
二九 人なんぢの頬の右方をうたバ左方の頬をもむけ
よ。なんぢの外服をとらバしたぎをも禁ざれ
三十 すべてなん
ぢに求ものにあたへ。なんぢの物をとらんものにまた
索るなかれ
三一 おのれ人にせられんとするごとく人にも

そのごとくせよ。三二 おのれを愛するものをあいするハなにの賞賜あらんや。悪人にそもおのれを愛するものハあいするなり 三三 おのれに善をなすものに善をなすハなにのむくひあらんや。悪人もまさしくそのごとく行なり 三四 なんぢら償ることを得んとおもふ人に借ハなにのむくひあらんや。悪人もそのごとく償をえんとてまさしく悪人にかすなり 三五 なんぢら仇を愛し。まさしく善をなし何をものぞまずして借あたへよ。さらバその賞賜ハおほきなり。しか至上者の子となるべし。それ至上のものハ恩をしらざるもの

三六

三七 人を議ことなかれ。さらバなんぢらもさばかれず。人をつみするなかれ。さらバなんぢらも罪せられじ。ひとをゆるせ。さらバなんぢらもゆるさるべし 三八 人にあたへよ。さらバなんぢらも予らるべし。うまく量をよくしておしいれ撼りあふるゝまでにしてなんぢらの懐にいれん。なんぢらはかるところのその量にてまた人にはからるべし〇三九 また譬をもてかれらにいひけるハ。瞽ハめしひのてびきをなし得るや。あひともに溝壑におちいらざらんや 四十 でしハその師にまさらず。あらゆるもの全備なるものハ

その師(し)のごとくなるべし 四一 なんぢ兄弟(きやうだい)の目(め)にあるちりをみて
おのれの目(め)にある梁木(うつばり)をさとらざるはなんぞや 四二 いかでおの
れの目(め)にあるうつばりをみずして兄弟(きやうだい)にむかひ。兄弟(きやうだい)よ
なんぢの目(め)にある物屑(ちり)をとらせよといふことを得(え)
んや。偽善者(ぎぜんしや)よまづおのれの目(め)より梁木(うつばり)をとれ。さらば
兄弟(きやうだい)の目(め)にあるちりをとることあきらかにみゆべし 四三 それ
悪果(あしきくだもの)をむすぶは善樹(よきき)にあらず。またよきみを結(むす)ぶはあしき
樹(き)にあらざるなり 四四 すべてその樹(き)はその果(み)によりてしらる。荊棘(いばら)より
無花果(いちじく)をとらず。また蒺藜より葡萄(ぶだう)をとらず 四五 善人(よきひと)は

らわがいふことをおこなはずして何ぞわれを主よ主よと
となふるや 四七 すべてわれに就りわがことばをききて行ふものを
たとへてなんぢらにしめさん 四八 その人は家をたつるに土を
ふかくほりていしずゑを磐上におけるがごとし。洪水のとき
横流そのいへを衝ともうごかすことあたはず。これ基礎
をいはほのうへにおけばなり 四九 聴ておこなはざるものはいし
ずゑなく家を土のうへにたつる人のごとし ながれこれを
うつときはそのいへたゞちにたふれ。その頽壊まことおほいなる
べし

第七章 耶穌これらすべての言を民にきかしをはりてカペナウムにいりしに 二 ある百夫の長その愛する僕やみてしぬばかりなりければ 三 耶穌のことをききてユダヤの長老どもをつかはしてきたりて僕をすくひたまはんことをねがへり。かれら耶穌に就きたりにもとめいひけるは。このことを求むるひとはよきひとなり。 五 そは民を愛しわれらのために會堂を建たり 六 耶穌かれらとともにゆきてはやその家にちかづけるとき。百夫のかしら友どちをつかはしていはせけるは。主よみづからを勞動したまふなかれ。そは家裏にいれ

は愈ん八そはわれ人の權威のしたに屬るものなるにわが
下にもまた兵卒ありてこれにゆけといへばゆき。かれにきたれ
といへばきたる。わが僕にこれをなせといへばすなは
ち行ふがゆゑなり九耶穌きゝてこれを奇しとしたがへる人々を
かへりみていひけるは。われなんぢらにつげん。イスラエルの
中にてもいまだかゝる篤信にあはざりき十つかはされたる
ものの家にかへりて病たりし僕をみるにすでに全快を
なせり○十一翌日耶穌ナインといへる邑にゆきけるに。あまた
くの門徒および群衆もともにゆけり十二邑の門にちかづき

しゝとき舁いだされる死人あり。その母ハ嫠にてこれひとりの子なり。邑のひとびとおほくこれにともなふ。十三 主やもめをみてあはれみ。哭なかれといひて 十四 ちかよりて。その櫬に手をつけゝれバ。舁ものどもとゞまれり。耶穌いひけるハ。少者よわれなんぢにいふ。おきよ 十五 死たるもの起てろものいひそむ。耶穌これをその母にわたせり 十六 ひとびとみなおそれて神をあがめいひけるハ。大なる預言者われらのうちに興る。神その民をかへりみたまへり 十七 耶穌のこのきこえユダヤの國中またあまねく四方にひろがり

來るべきものハなんぢなるか。またハわれら他にまつべきかと。二十 そのふたり耶穌にきたりていひけるハ。バプテスマのヨハネわれらをなんぢにつかハしていはしむ。きたるべきものハなんぢなるか。またハわれら他にまつべきかと。二一 このとき耶穌おほくの病あるひとなやみ。および悪鬼にとりつかれたるものとをいやし。またおほくの瞽にみゆることをあたへたり。二二 耶穌かれらにこたへていひけるハ。なんぢらが見るところ聞ところをヨハネにゆきてつげよ。それめしひハ見。あしなへハあゆみ。癩者ハきよまり。聾者ハきゝ。

死しものハいきかへされ。まづしきものハ福音をきかせらる
二三 およそわがためにつまづかざるものハさいはひなり 二四
ヨハネの使者さりしのち。耶穌ヨハネのことを人々に
いひけるハ。何をみんとて野にいでしや。風にうごかさるゝ
葦なるか 二五 さらバなにをみんとていでしや。
やはらかきころもをきたる人なるか。文繡をきておごれる
ものハ王の宮にあり 二六 さらバなにをみんとて出しや。
預言者なるか。然りわれなんぢらにつげん。これ預言者よ
りもまされるものなり 二七 それなんぢにさきだちてそ

婦のうめるもののうちにいまだ「バプテスマ」のヨハネより
おほいなる預言者ハなし。されど神の國のちひさきもの
もこのものよりハ大なるなり
二九 ヨハネにきゝける庶民および税吏
ハその「バプテスマ」をうけて神を義とせり
三十 パリサイの人および
教法師ハその「バプテスマ」をうけず。みづから暴て神の旨に
そむきたり
三一 さればこの世代のひとびとをなにゝなぞらへ。
また何にたとへんや
三二 かれらハ市に坐したがひによびてわれ
ら笛ふけどもなんぢらおどらず。悲歌をうたへどもなんぢ
ら哭ずといふににたり
三三 それ「バプテスマ」のヨハネきたりて餅を

もくらはず酒(さけ)をものまざれバ悪鬼(あくき)にとりつかれたるものな
りとなんぢらいへり 三四 人(ひと)の子(こ)きたりてくらふことをし飲(のむ)こ
とをすれバまた食(しよく)をこのみ酒(さけ)をこのむの人(ひと)みつぎとり
罪人(つみあるひと)の友(とも)なりとなんぢらいへり 三五 されど智慧(ちゑ)ハもろもろの子(こ)
に義(ただしき)とせらる○三六 あるパリサイのひと耶穌(いゑす)を請(まねき)てともに食(しよく)
せんことをねがひけれバ。耶穌(いゑす)パリサイの人(ひと)の家(いへ)にいりて
食(しよく)につけり 三七 邑(まち)のうちに悪行(あしき)をなせる婦(をんな)ありけるが
耶穌(いゑす)がパリサイのひとの家(いへ)に坐(ざ)するをしりて臘石(らふせき)の盒(はこ)に
にほひあぶらをもちきたり 三八 耶穌(いゑす)のうしろに立(たち)あしも

三九 耶蘇(いゑす)をまねきたるパリサイのひとこれをみて心(こゝろ)のうち
にいひけるハ。この人(ひと)もし預言者(よげんしや)ならバさハりしをんなの
誰(たれ)なるか。いかなる婦(をんな)なるをしらん。このをんなハ悪行(あくぎやう)
をなせるものなり 四十 耶蘇(いゑす)これにこたへていひけるハ。シモン
われなんぢにいふことあり。こたへけるハ。師(し)よいひたまへ 四一
耶蘇(いゑす)いひけるハ。ある債主(かしぬし)にふたりの負債人(おひびと)ありてひとりハ
金五百(きんごひやく)ひとりハ五十(ごじふ)をかりしに 四二 償(つぐのひ)のてだてなかりけれバ。そのかし
ぬしこの二人(ふたり)をゆるしけり。さらバ二人(ふたり)のうちそのかし
ぬしを愛(あい)することいづれかおほき。我(われ)にきかせよ 四三 シモン

こたへけるハ。われおもふにゆるさるゝことのおほきものならん。耶穌(いゑす)いひけるハ。なんぢがおもふところハたがはざるなり
四四 つひに婦(をんな)をかへり見(み)てシモンにいひけるハ。このをんなをみるか。われなんぢの家(いへ)に入(いる)になんぢハわが足(あし)に水(みづ)をあたへざりき。このをんなハ涙(なみだ)にてわがあしをうるほし。かしらの髪(け)をもてぬぐへり
四五 なんぢハわれに口(くち)をつけず。このをんなハわがこゝに入(いり)しときよりわが足(あし)に口(くち)をつけてやまず
四六 なんぢハわが首(かうべ)にあぶらをぬらざりき。このをんなハわがあしに香膏(にほひあぶら)をぬれり
四七 このゆゑにわれなんぢにいはん。このをんなのおほくの罪(つみ)ハゆるされたり。これによりてその

ゆるさるゝ四九ともに坐せるものども心のうちにいひけるハこの
人ハこれ何人なれバ罪をもゆるすぞ五十耶蘇をんなにいひけ
るハなんぢの信なんぢをすくへり安然にしてゆけ

第八章 このゝち耶蘇諸邑諸村をへめぐりて神のくにの
福音をのべつたへたまふ。十二の門徒もともにしたがひぬ二
また前に惡鬼をられひとりしもの。病をいやされたるをんな
などもしたがひけり。すなはち七の惡鬼をおひいだされし
まれるマグダラといふマリア三またヘロデの家宰クーザの妻
ヨハンナ。またスザンナ。このほかあまたの婦ありてみなその

所有をもて耶蘇につかへまつりき〇四 おほくのひとびと諸邑
よりいできて耶蘇のもとにあつまりければ譬をもていへり
五 種まくものたねをまかんとていでぬ。播るとき路旁にお
ちし種あり。ふみつけられまた空の鳥これをくら
へり 六 また石上におちしたねあり。おひいでて槁たり。
これ潤なきがゆゑなり 七 また棘のなかにおちし種あり。
いばらもともにそだちてこれを蔽へり 八 また沃壤におち
したねあり。生いでて實をむすべること百倍せり。是を
いひたまひてよばはりけるは。耳ありてきこゆるものはきく

ど他のものにはたとへをもつてせり。これ視てもみえず聽
てもさとらざるためなり　十一　それこのたとへの釋はかくなり
神の道なり　十二　みちのほとりにおちしはきゝしのち惡魔
のきたりてそのこゝろより道をとりさるものなり。かれは人の
信じてすくはれんことを恐る　十三　いはのうへにおちしは
きくときよろこびてこれをうくれども根なければ
信ずることしばしのみ。こゝろみにあふときは道をそ
むくものなり　十四　いばらのなかにおちしはきゝて徃この
世の諸慮と宴樂とにおほはれてみのらざる

ものなり十五よきちにあるはしん正しき善こゝろにてことばをきゝ。これをまもり忍て實をむすぶものなり○十六燈をともし器にてこれをおほひ。あるひは床下におくものなし。入きたるものゝその光をみんために臺のうへにおくべし十七隱てあらはれざるものなく。藏てしられずあらはれいでざるものなし十八この故になんぢら聽ことをつゝしめ。有者はあたへられ。無有者ハもちたりとおもふところのものをもとらるべし○十九このとき耶穌の母と兄弟きたりけれど群集によりてちかづくことあたはず

ていひけるハ。神のことバをききてこれを行ものハすなハ
ちわが母わが兄弟なり○二一ある日耶穌でしとともに舟に
のりて。かれらに湖のむかふへわたるべしといひけれバ。す
なハちこぎいだせり 二三 ふねのはしるとき耶穌いねたまへり。
颶風みづうみにふきあれし舟ハ水みちんとして危かり
しが 二四 門徒きたりて耶穌をさましいひけるハ。師よ主
われらほろびなんとす。耶穌おきて風と浪とをいましめ
けれバ。止ておだやかになりぬ 二五 耶穌いひけるハ。なんぢら
の信いづこにあるや。かれらおどろき且あやしみてたがひ

にいひけるは。二五 何人なるぞや。かぜとみづとに命ぜしかば、またしたがへり。二六 かくてガリラヤにむかへるガダラ人の地につきしぞ。二七 きしにあがりしとき。あるひとり邑よりいでゝ耶穌にあふ。このものはひさしく悪鬼にとりつかれ。衣をきず家にもすまず。たゞ塚にのみをりき。二八 耶穌を見てさけび。その前にひれふし、あらき聲によばゝりけるは。至高神の子耶穌よ、われなんぢとなにの與あらんや。なんぢに求むわれをくるしむることなかれ。二九 これ悪鬼に人よりいでよと耶穌が命じたるによりてなり。うきのとりつかれ

耶穌これに問ていひけるハ。なんぢが名ハなにといふや。こた
へけるハ。レギヨン。これおほくの悪鬼の入たるが故なり
三一 悪鬼耶穌にねがひけるハ。命じて底なきところにゆかし
むることなかれ 三二 ここにおほくの豕のむれ山に草をくひをり
しが。かれらその豕にいらんことをゆるせと求ければ。これを
ゆるせり 三三 悪鬼その人よりいでて豕にいりしかば。その群は
げしくかけくだり。山坡より湖におちておぼれる 三四 牧者
どもそのありしことをみてにげゆき。これを邑までむらむら
につげたり 三五 衆そのありしことを見んとていでて耶穌のも

とにきかせたまはゞ。悪鬼のはなれし人きものを著てしづかなる心にて耶蘇のあしもとに坐するをみておそれあへり三六悪鬼にとりつかれありし人のすくはれしさまを見たるもの。其をかれらにつげゝれば三七ガダラ四方のおほくのひとびと耶蘇にこゝをさらんことをねがへり。これおほいなるおそれありしがゆゑなり。耶蘇舟にのりてかへりぬ三八悪鬼のはなれたる人。耶蘇とともにをらんことを求けるに。耶蘇これをさらしめて三九家にかへり神のなんぢに行しおほいなることを人につげよといひければ。遂にさりて耶蘇のおのれになしゝ

いへる人あり。こハ會堂のつかさなり。年およそ十二歳なる
ひとりの女ありて死ぬるばかりなりけれバ。きたり耶穌の
あしもとにふしてその家にきたりたまはんことをねがへり。
耶穌のゆくとき衆これにおしあへり 四三 婦あり十二年血漏を
わづらひ醫者のためにその業をことごとくつひやしけれど。
たれにもいやされ得ざりしが 四四 耶穌のうしろにきたりて。
そのころもの裾にさはりけるにただちに血のいづることと
まりぬ 四五 耶穌いひけるハ。われにさはりしものハたれぞや。衆
ハみなことにさはれるものなしといへり。ペテロおよび偕

にあるものどもいひけるハ。師よひとびとなんぢにおしあひせまるに我にさはるものハたれぞといひたまふか。四六耶穌いひけるハ。われにさはるもののあり。能力のわが身よりいづるをおぼゆれバなり。四七その婦みづからかくせぬをしり。戰慄きたりてまへにふし。さはりしゆゑとそのたゞちに愈るとをひとびとのまへにつぐ。四八耶穌いひけるハ。女よ心やすかれなんぢの信なんぢをすくへり。安然にしてゆけ。四九かくいへるときに會堂のつかさの家より人きたりて宰にいひけるハ。なんぢのむすめはや死にたり。師をわづらはすなかれ。五十耶穌これをきゝ

めの父母のほかなれバともに入ことをゆるさゞりき 五二 衆
みな女のためになきかなしミけるが。耶蘇いひけるハ哭な
かれ死たるにあらず寝たるのミ 五三 かれらその死たるを志
れバこれをあざわらへり 五四 耶蘇ひとぐをみないだしてむすめ
の手をとり。むすめ起よとよびいひければ 五五 その魂かへりて
たちまちおきたるに。耶蘇命じて食をあたへしむ 五六 父母
はおどろきぬ。耶蘇この行しことを人につぐることなかれといまし
めたり

第九章

一 耶蘇十二のでしをよびあつめ。すべての悪鬼をいだし

病をいやす能力と權威をさづけたり二また神の國をつたへ
病者をいやさせんために三かれらを遣さんとしていひける
は。路資になにをもたづさふるなかれ。杖またおびぶくろ。くひもの。金
ふたつの衣をももつことなかれ四いづれの家にいるともそこ
にとゞまりて。またそこよりされ五なんぢらを不接ものあら
ば。その邑をいづるときかれらに證のため足より塵をはらへ
六門徒いでゝあまねく諸郷にゆき福音をつたへ。かつやまひを
いやせり○七つけりのちの君ヘロデ耶穌のなせし諸事をきゝて
まどへり。ある人々これをヨハネの復活せるなりといひ八ある

けるハ。我これヨハネの首をきれり。如是ことのきこゆるもの
ハ誰なるや。ヘロデこれをみんとほつしぬ〇十使徒たちかへ
りきたりてその所行しことを耶蘇につぐ。耶蘇かれらを
ともなひて潛にベツサイダといへる邑のほとりなる野に
しりぞきしに十一ひとびとしりて隨ひけれバこれを接て神の
國のことをかたり。また醫をもとむるものをいやせり〇十二日か
たぶきて十二の弟子きたりて耶蘇にいひけるハ。こゝハ野
なれバ衆人をさらせ。四圍のむらざとへゆきて宿をとり
食を覓ることをなさしめよ十三耶蘇いひけるハ。なんぢらこれ

に食をあたへよ。こたへけるハ。これらハたゞ五の餅と二のうをを
あるのミ このおほくの人のためにゆきて買にあらざれバ
かれらに食物ハなし 十四 こゝにありし男おほよそ五千人なりき。
耶穌でしにいひけるハひとびとを五十人づゝならべ坐せしめよ。
十五 門徒そのごとくなしそれらをみな坐せしめたり。十六
耶穌いつゝの餅とふたつのうをゝとり。天をあふぎ祝して
これをさきり。門徒にあたへてひとびとのまへにおかしむ 十七 皆
くひあきて餘のくづを十二の筐にひろひけり ○ 十八 耶穌ひとり
のがれをりしとき祈禱しゐたりしが門徒もともにをりけり。

ハいにしへの預言者のひとりのよみがへれるなりと 二十 耶穌
いひけるハ。なんぢらハわれをたれとおもふや。ペテロこ
たへけるハ。神のキリストなり 二一 耶穌きびしくいましめて
このことを何人にもつぐるなかれと命じ 二二 またいひ
けるハ人子ハおほくのくるしみをうけて長老
祭司のをさ學者どもにすてられ。ころされて第三日に
よみがへるべし 二三 また耶穌ひとびとにいひけるハ。もし我にした
がハんとおもふものハ己にうちかち日々その十字架をおひて
われにしたがへ 二四 その生命をまったうせんとおもふものハこ

れをうしなふ。わがためにいのちをうしなふものはこれを保全すべし 二五 人もし全世界を利するとも自己をうしなひみづからをほろぼさばなんの益あらんや 二六 それわれとわが道をはづるものをば。人子もまさにおのが榮光と父と聖使のゑいくわうをもてきたるときこれをはづべし 二七 われ誠はなんぢらにつげん。こゝに立ものゝうちに神の國をみるまで死なざるものあり○ 二八 此ことをいひけるのち八日ばかりすぎて耶蘇ペテロ ヨハネ ヤコブをともなひ祈禱せんとて山にのぼれり 二九 いのれるときにその顔のかたちかはりてその

三一 耶穌のエルサレムにてまさに世をさらんとすることをかたる
三二 ペテロおよびともにありしものどもいたくねむりたりしが。めざめて耶穌の榮光またともにたてる二人をみたり
三三 このふたりの耶穌とわかるるとき。ペテロ耶穌にいひけるハ。師よこゝにをるハ善。われら三の廬をつくらせたまへ。一ハなんぢのため一ハモーセのため一ハエリアのためにせん。これその言ところをしらざりしなり
三四 かくいへるとき雲きたりてかれらをおほへり。その雲にいりしとき門徒たちおそれぬ
三五 聲くもよりいでゝいひけるハ。これわが愛子なり。

これにきくべし 三六 聲やみしまへばたゞ耶穌ひとりをみたり。門徒ハ口をとぢて見しことを當時たれにもつげざりき

○三七 翌日やまよりくだりければ。おほくのひとびと耶穌をむかふ 三八 そのうちのある一人よばはりていひけるハ。師よねがはくハわが子を眷顧たまへ。これハわがひとり子なるに 三九 悪鬼のためにとりつかれてハ忽然さけび。泡をふきひきつけられて傷ひ。はなるゝことまれにのみし 四十 われこれを逐いだすことをなんぢの門徒にもとめしかどあたはざりき 四一 耶穌こたへていひけるハ。あゝ信なきまがれる世なるかな。われなんぢらのうち

けがれたる鬼をせめてその子をいやし父にあたへたり 四三 衆
みな神のおほいなる能をおどろき耶穌のなせしことをあや
しめるときに耶穌でしにいひけるは 四四 この言をなんぢら耳
にをさめよそれ人の子は人の手にわたされん 四五 かれらこ
のことばをさとらざりし悟ざるやうかくされたるなり。
かれらもまたおそれてこのことをとはざりき ○ 四六 門徒ら
ちの中たがひにたれか大ならんとのあらそひありけるぞ
四七 耶穌その心のおもひをしりて孩子をとりそばにたゝせ 四八
かれらにいひけるはわが名のためにこのをさなごを接るもの

いまそかりちをうくるなり。我(われ)をうくるものハわれを
つかはしゝものをうくるなり。すべてなんぢらのうち最微(もつともちいさき)
ものぞこれおほいならん 四九 ヨハネこたへていひけるハ師よな
んぢの名(な)によりて鬼(おに)をおひいだせるものを見(み)たりしがわれ
らとともなハざるゆゑにこれを禁(とゞめ)たり 五十 耶穌(いえす)いひける
ハ。禁(とゞむ)ることなかれわれらに敵抗(てきかう)ざるものハわれらに順從(つく)も
のなり○五一 耶穌(いえす)天(てん)にのぼるの期(とき)いたりけれバ。エルサレムにゆ
くこゝろざしをかたくさだめたり 五二 使者(つかひ)をさきにつかはしけ
れバかれらゆきて耶穌(いえす)に預備(そなへ)んがためサマリア人(びと)のむらに
五三

てわれらエリアのなせしごとく天より火をよびくだしかれ
らをほろぼさんとせ。欲か 五五 耶蘇かへりみてこれを責いひ
けるハ。なんぢらの心いかなるかを自己しらざるなり 五六 ひとの
子ハ人のいのちを滅ためにきたらず。すくはんため
なり。遂にほかのむらにゆけり○ 五七 路をゆくときあるひと
耶蘇にいひけるハ。主よいづくにゆきたまふともつれしたがは
ん 五八 耶蘇かれにいひけるハ。狐ハ穴ありそらの鳥ハ巣あり。
されども人子ハまくらするところなし 五九 またある一人にいひけ
るハ。我にしたがへ。かれいひけるハ。主よまづゆきて父をはうむるこ

とぞあれよゆるせ 六十 耶穌いひけるハ。死たるものよその死し
ものを葬らせ。なんぢハゆきて神の國をひろめよ 六一 またある
ひとりいひけるハ。主よなんぢよしたがハん。まづゆきて家人よ
わかれをつぐることをゆるせ 六二 耶穌いひけるハ。手を犂よつ
けてうしろをかへりみるものハ神の國よかなハざるもの
なり

第十章 このゝち。主また七十人をえらみてこれを両個づゝよし
たち。みづからいたらんとする諸邑諸地へさきへつかハさ
んとそ。かれらよいひけるハ。收穫ハおほく工人ハすくなし。

家主 … 家所 …

るゝがごとし四嚢また旅ぶくろ履をもちゆくことなかれみち
にて人に問候をするなかれ五人の家にいらバまづその家
の平安ならんことをねがへ六もしこゝに安然の子あらバなん
ぢらが祈るあんぜんハその家にとゞまらん若なからバそ
のいのる安然ハなんぢらに帰べし七その家にとゞまりて供ると
ころのものハこれを飲食せよそハはたらくものハその工銭
をうるハ宜なるべきなり家より家にうつることをせざれ八邑に
いらんに接るものあらバそのなんぢらの前にそなふるもの
を食せよ九邑のうちなる病のものをいやせまた衆に神の

國をなんぢらにちかづけりといへ 十 もし邑にいらんに接る
ものなくバ衢にいでていへ 十一 われらにつきたるなんぢらが邑
の塵はなんぢらにむかひてはらひ去ん。されども神の國のちか
づけるをしれ 十二 われなんぢらにつげん、その日にいたらばソドム
の刑罰はこの邑よりもなほやすかるべし 十三 あゝ禍なるかな
コラジンよ。あゝわざはひなるかなベツサイダよ。なんぢらのうち
になせし異能をもしツロとシドンになさばかれら
ははやく麻をき灰をかむり坐して悔改しなるべし 十四 審判
にはツロとシドンの刑罰はなんぢらよりもなほやすかるらん

らを棄るものハわれをすつるなり。我をすつるものハわれを
遣たるものをすつるなり〇十七 七十人よろこびかへりていひ
けるハ。主よ悪鬼さへもなんぢの名によりてわれらに服
せり 十八 耶穌いひけるハ。われ電のごとくサタンの天よりおつる
を見し 十九 われなんぢらに蛇蠍をふみ。また敵のすべての權
をおさふる權威をさづけたり。なにものもなんぢらを害する
ものなし 二十 しかれども悪鬼のなんぢらに服せるをよろこび
とするなかれ。なんぢらが名の天にしるされしをよろこび
とすべし 二一 このとき耶穌こころによろこびていひけるハ。天地の

主なる父よこの道を智者と達者とにかくして赤子にあら
はしたまふことを謝す父よ然それかくのごとき意旨
にかなへばなり 二二 父ハ萬物をわれにあたふ。父のほかに子ハ
られなりとしるものなく。また子および子のあらはさせしとこ
ろのもののほかに父ハられなりとしるものなし 二三 耶蘇でし
をかへりみてひそかにいひけるハ。なんぢらが見るところのこ
とをみるその目ハさいはひなり 二四 われなんぢらにつげん。
おほくの預言者および王もなんぢらが見るところのことを
みんとせしかども見ざりき。なんぢらが聞ところのことをきかん

くべきや
二六 耶穌いひけるハ。律法ハ志るされしハ何ぞ。なんぢいかによむぞ
二七 答ていひけるハ。なんぢ心をつくし精神をつくし力をつくし意をつくして主なるなんぢの神を愛すべし。また己のごとく隣をあいすべし
二八 耶穌いひけるハ。なんぢのこたへ然り。これをおこなハゞ生べし
二九 されどみづからを罪なきものとせんとして耶穌にいひけるハ。わが隣とハたれなるぞ
三十 耶穌こたへていひけるハ。ある人エルサレムよりエリコにくだるとき強盗にあへり。ぬすびとその衣服を剝とりてこれをうちたゝき志なぬばかりになしてさりぬ
三一 のくるとき

にある祭司この路よりくだりしがこれをみすぐしにして
ゆけり 三二 またレビの人もこゝにいたりすゝみ見ておなじく
すぎゆけり 三三 あるサマリアのひと旅してこゝにきたり。これ
をみて憫 三四 ちかよりてあぶらと酒とその傷にさし。これをつ
みておのが驢馬にのせ旅邸につれゆきて介抱せり 三五 次日い
づるとき銀二枚をいだし館人にあたへて。この人をかいほ
うせよ費もしまさらばわれかへりのときなんぢに償べし
といへり 三六 さればこの三人のうちいづれかぬすびとにあひ
しものゝ隣なるとなんぢおもふか 三七 かれいひけるは。その人

いりけるに。マルタといへる婦これをむかへてみづからの家に
まいらせぬ 三九 その姉妹にマリアといへるものあり。耶穌のあ
しもとにすわりてその道をきけり 四十 マルタ供給のことに
おほくして心いりみだれ。耶穌にちかよりていひけるは。主
よわが姉妹われを一人のこしてはたらかしむるをなに
ともおもひたまはざるか。かれに命じてわれをたすけしめよ 四一 耶穌
こたへていひけるは。マルタよマルタよなんぢ多端によりておもひ
わづらひてこころづかひをせり。されどなくてかなふまじ
きものは一なり。マリアはすでに善業をえらみたり。これはう

かれより奪べからざるものなり

第十一章　耶穌あるところにて祈禱しけるにをはりしとき。ひとりの門徒いひけるは。主よヨハネそのでしにをしへしごとくわれらにもいのることををしへたまへ 二 耶穌いひけるは。いのるときはかくいふべし。天にましますわれらが父よ。ねがはくは聖名をあがめさせたまへ。聖國をきたらせたまへ。聖旨の天に成ごとく地にもなさせたまへ 三 われらのなくてならぬ食を毎日にあたへたまへ 四 罪をわれらにおかすものをもすべてゆるせばわれらが罪をもゆるしたまへ又

ある人よなかにその友へゆきて。友よわがともだち途間より
きたりしに供べきものなきゆゑ三の餅をかせよといはん
に七内にをるものこたへて。われを煩すなかれ。すでに門の
閉されともに兒どもゝ牀にあれば。おきてあたふることあた
はずといふものあらんや八われなんぢらにつげん。その友なるに
より起てあたへざれども迫切にこふがゆゑにその需にしたがひ
おきてあたふべし九われなんぢらにつげん。求よさらばあた
へられん。尋よさらばあひ。門をたゝけよさらばひらかるゝことを
得ん十それもとむるものは得。たづぬるものは遇。もん

を叩ものハひらかるれバなり 十一 なんぢらのうち父たるものの誰かその子の餅をもとめんに石をあたへんや。魚をもとめんにそれにかへて蛇をあたへんや 十二 卵をもとめんに蠍をあたへんや 十三 されバ爾らあしきものなるも善賜をその兒子にあたふるをしる。まして天にいます爾らの父ハもとむるものに聖靈をあたへざらんや○ 十四 耶穌ものいはぬ悪鬼をおひいだしけれバ。悪鬼いでゝ瘖者ものいひしかバ。人々おどろけり 十五 その中なるもの云けるハかれハ悪鬼の王ベルゼブルによりて悪鬼をおひいだせるなり 十六 またあるひとびと耶穌をこゝろみんとて。天よりの異兆をもとめたり 十七

づからわかれあらそはゞその國いかで立んや。それなんぢら
我をいひてベルゼブルによりて悪鬼をおひいだせりといへり
十九 もしわれベルゼブルによりて悪鬼をおひいださば。なんぢらの子弟
ハなにによりて悪鬼をおひいだすや。それゆゑかれらハなんぢら
の裁判人となるべし
二十 もしわれ神の指をもてあくきを
おひいだすならバ神の國ハすでになんぢらにきたれり
二一 勇士よろひをきて邸をまもるときハ。その所有あんぜんな
り
二二 もしこれよりつよきものきたりて。それに勝ときハその
たのみとせる鎧をうばひ。その贓をわかつべし
二三 われとともなら

ざるものハこれにそむき。われとゝもに斂ざるものハちらすなり○二四 あくき人よりいでゝ早るところをめぐり安をもとむれども得ずしていひけるハ。わが出し家にかへらん 二五 既にきたりしに。そのはききよまり修飾るを見 二六 つひにゆきてかのおのれよりなほあしき七の悪鬼をともなひいりてこゝに居む。その人の後のありさまハまへよりなほあしかるべし 二七 この語をいへるとき群集のなかより一婦こゑをあげていひけるハ。なんぢをはらみし腹となんぢのすひし乳ハさいはひなり 二八 耶穌こたへけるハ。然されど神の道を

るしをもとむるとも預言者ヨナの奇蹟のほかはしるしは
あたへらるまじ 三十 それヨナがニネベの人にしるしとなりし
ごとく人の子はいまの世にしるしとなるべし 三十一 南方の女
王さばきの日にともに起ていまの世のひとの罪をさだめん。
かれは地のはてよりソロモンの智慧をきかんとてきたれり。
それソロモンよりまさるものこゝにあり 三十二 ニネベの人さ
ばきの日にともにたちていまの世の人のつみをさだめん。
かれらはヨナの勧言によりてくいあらためたり。それヨナ
よりまさるものこゝにあり 三十三 燈をともして隱處ある

ひを升のしたにおくものなし入きたるものゝその光をみ
んために燭臺のうへにおくなり三四身のあかりハ目なり。なん
ぢの目あきらかなれバ全身あかるし。その目あしけれバ
なんぢの身もくらし三五故になんぢにある光のくらからぬ
やうにつゝしめよ三六もしなんぢの全身あきらかにしてくら
きところなくバ燈のかゞやきてなんぢをてらすごとく全
あきらかなるべし○三七耶蘇ものいふときあるパリサイの人
ともに食せんことを請けれバ入て食につけり三八その食す
るさきに洗ことをせざりしをみてパリサイの人あやしめ

四十 おろかなるものよ。外をつくりしものはまた内をもつくら
ざりしや。四一 なんぢら所有ものをもてほどこせ。さらばなん
ぢらのためにはすべてのものは潔まるなり 四二 禍なるかななんぢら
パリサイの人よ。薄荷芸香およびすべての野菜十分の
一をとりをさめて義と神を愛することを廢。これおこな
ふべきことなり。かれもまたすつべからざるものなり 四三 わ
ざはひなるかななんぢら。パリサイの人よ會堂の高座、市上
のあいさつをこのめり 四四 わざはひなるかななんぢら
かくれたる墓のごとし。そのうへをあるくひとびとこれを

しらざるなり
四五 ある教法師こたへていひけるは。師よこの言は
われらをもはづかしむ
四六 耶穌いひけるは。なんぢらもわざはひ
なるかな教法師よ。たへがたき荷を人におはせ。みづから指ひ
とつをもその荷につけず
四七 禍なるかな。なんぢらは預言者の墓を
建。なんぢらの祖はこれをころせり
四八 實になんぢら祖のそのなせ
る事をこのむ證明をなせり。それかれらはこれを殺。なんぢ
らはその墓をたつ
四九 このゆゑに神の智いへることあり。わ
れ預言者および使徒をかれらにつかはさんにその中のある
ものをころし。あるものをばくるしむべしと
五十 創世よりこの

まころされたるザカリアの血にまでいたる。われ誠になんぢら
につげん。これをこの代にたゞすべし 五一 なんぢらわざはひなる
かな。教法師よ知識の鑰をとりてみづからいらず。かついら
んとするものを阻めり 五三 このことをいへるとき學者と
パリサイのひとびとふかくいきどほりをふくみて多端のことを
とひかけ 五四 その口よりいづることばをとらへて訴ん
としてうかゞひをり

第十二章 そのとき數萬のひとびとあひふみあふほどにあつま
まり。耶穌まづ門徒にいひけるは。なんぢらパリサイの人の餅

だねをつゝしめよ。これ偽善なり二それ掩蔵てあらはれざる
ものなく隠瞞て志られざるものなし。ゆゑに三なんぢ
らがくらきにのべしことハ明處にきこゆべし。密室にて
耳につきいひしことハ屋上よりひろめらるべし四わが友よなん
ぢらにつげん。身體をころして後になにをも為あたはざる
ものをおそるゝなかれ五われおそるべきものをなんぢらに
しめさん。殺しゝのちに地獄になげいるゝ權威をもてる
ものをおそれよ。われ誠になんぢらにつげん。これをおそ
るべし六五の雀ハ二錢にてうらるゝにあらずや。しかるに神に

はおほくの雀よりもまさるなり八また我なんぢらにつげん。
われを人のまへにあらはすものをば人の子もまた神の
使者のまへにあらはすべし九 われを人のまへに不認もの
は神の使者のまへに彼もまたのらるべし十 おほよそ人の
子をそしるものはゆるさるべけれども。聖靈をけがすものは
ゆるさるべからず十一 人なんぢらを會堂または有位および權
あるもののまへに曳つれなば。いかにこたへ何をいはんとお
もひわづらふなかれ十二 その時にいふべき言は聖靈なんぢら
に示めすべし○十三 ひとびとのうちよりひとり耶穌にいひ

けるハ。師よわが兄弟に遺業をわかちわたすやうにいひつく
まへ。四 耶穌いひけるハ。人よ誰がわれをたてゝなんぢらの裁判
人または物をわかつものとなせしぞ 十五 耶穌ひとびとにいひけるハ。
こゝろしてそ貪心をつゝしめよ。それ人のいのちハ所蓄のゆたか
なるによらざるなり 十六 またたとへをかたりていひ
けるハ。ある富人その田畑よくみのりければ。みづからおもひい
ひけるハ。わが産業をおさむるところなきをいかにせん 十八 また
いひけるハ。我かくなさん。わが倉を毀ちさらに大なるをつくりて。
またそこにわが産と貨をそこにおさむべし 十九 かくて霊魂によろ

神これにいひけるハ。愚なるものよ今夜なんぢがたましひとら
るゝことあるべし。さらバなんぢのそなへたりしものハ誰が
ものとなるや。二一 おほよそおのれのために財をたくはへ。神につ
いて富ざるものハこのごとくなり 二二 耶蘇その門徒にいひ
けるハ。是故にわれなんぢらにつげん。なんぢら生命のために
なにをくらひ。身體のためになにを著んとておもひわづら
ふなかれ 二三 いのちハくひものよりたふとく。からだハ衣よりも
たふとし 二四 鴉をおもひみよ。稼もせず穡もせずくらもなやも
あらず。されども神ハなほこれらをやしなふ。ましてなんぢ

らハ鳥よりもたふときこといくばくぞや 二五 なんぢらのうち誰かよく思慮てそのいのちを寸陰ものべえんや 二六 されバ最小ことすらあたはざるに何ぞそのほかをおもひわづらふや 二七 百合花ハいかにしてそだつかをおもへ。勞ず紡がざるなり。われなんぢらにつげん。ソロモンの榮華の極のときだにもこの花のひとつにおよばざりき 二八 神ハけふ野にありてあす爐になげいれらるゝ草をも如此よそほひたまへバましてなんぢらをや。あゝ信仰うすきものよ 二九 なんぢらなにを食ひなにを飲んともとむるなかれ。また罣慮ことなか

ことゞもある三一たゞ神の國をもとめよ。さらバこれらのものハなんぢらに加へらるべし三二ちひさき羣よおそるゝなかれ。なんぢらの父ハよろこびて國をなんぢらにあたへたまはん三三なんぢらの所有をうりて施濟おのがためにつねにふるびざる財布をとゝのへて盡ざるたからを天にそなへよ そこハ盗もちかよらず蠧もそこなはざるなり三四なんぢらの財寶のあるところにハなんぢらの心もまたそこにあるべし三五なんぢら腰に帯して燈をともしてをれ三六しゆじん婚筵よりかへりきたりて門をたゝくときすみやかにひらかんとてあるじを待

ひとのごとくせよ 三七 主人きたりてその儆醒しをるを見る
ハこの僕ハさいはひなり。まことにわれなんぢらにつげん。
主人みづからこしに帯し。しもべを食につかせすゝみてこれに
供事すべし。三八 あるひハ二更あるひハ三更に主人きたりて
かくのごとくなるを見るハこの僕ハさいはひなり 三九 なんぢらこれ
をしるべし。もし家のあるじ盗いづれの時にきたるべきを
しらバその家をまもりてやぶらせまじ 四〇 されバなんぢら
もあらかじめそなへせよ。おもはざるときに人の子きたら
んとすれバなり 四一 ペテロいひけるハ。主よこのたとへハわれら

よびて食物を

こそくる忠義(ちうぎ)にして智(さとき)つかさはたれなるか 四三 その主(あるじ)きたるときにかくのごとくつとむるを見(み)らるゝ僕(しもべ)はさいはひなり 四四 我(われ)まことになんぢらにつげん。その所有(もちもの)をみなかれに督(つかさど)らすべし 四五 もしその僕(しもべ)こゝろのうちにわがあるじはきたることおそからんとおもひ。その僕婢(しもべしもめ)どもをうちたゝき食飲(くひのみ)してうへ酒(さけ)にゑひそめんには 四六 その僕(しもべ)の主(しゆ)おもはざるの日(ひ)しらざるの時(とき)にきたりてこれを斬刑(きりころし)そのむくいを不信者(ふしんじや)とおなじうすべし 四七 僕(しもべ)あるじのこゝろをしりながら預備(そなへ)せず。その心(こゝろ)にしたがはざるものはうたるゝことおほかる

らん。四八 しらずしてうたるべきことをなせしものハ扑るゝこ
とすくなかるらん。おほくあたへられしものハおほく求らる
べし。おほくあづけおきしハこれよりおほくもとむべし ○四九 我
れ火を地になげいれんためにきたれり。われなにをか欲す
でにこの火の燃たらんことなり 五十 我うくべきのバプテスマあり。
その成らるゝまでハわがいかばかりいたましきぞや 五一 なんぢハ安
全を地にあたへんとてきたるとおもふや。われなんぢらに
つげん。しからずかへりて分争なり 五二 いまよりのち一家に五
人あらバ三人ハ二人にてきたいし二人ハ三人にてきたいして

五四 耶穌また人々にいひけるは。雲の西より起るを見ばたゞちに雨ふらんとなんぢらいふ。はたしてしかり 五五 南より風ふけば暑からんとなんぢらいふ。はたしてしかり 五六 偽善者よ天地の色象をばしることをしりてこの時をばしりあたはざるはなんぞや 五七 またなんぞみづから公義をさだめざるか 五八 なんぢ訟るものと共に有司に往くとき途中にて心をつくしてかれよりゆるされんことをもとめよ。おそらくは訟るものなんぢを裁判人に曳。さいばんにんなんぢを吏にわたし。しかしてなんぢを獄にいれん 五九 われなんぢにつげ

ん一錢ものこさず償までハなんぢそこをいづることを得
ざるなり

第十三章 一 そのころあつまりたるものゝうちにピラトがガリラヤ人の血をその供物にまぜしことを耶蘇につぐるものあり 二 耶蘇こたへてかれらにいひけるハ。なんぢらこのガリラヤ人いろ〳〵のごうらく害されしゆゑにすべてのガリラヤ人よりもなほ罪あるものとおもふや 三 われなんぢらにつげん。あらずなんぢら悔改ずバみななんぢらもおなじくほろぶべし 四 シロアムの塔たふれて壓死されし十八人ハエルサレムに住るすべてのひと〴〵より

し。六 またこのたとへをいへり。ある人その葡萄園にうゑおきたる無花果樹ありしが、きたりてこれに果をもとむれどもえざりければ、七 その園丁にいひけるは、われ三年きたりてこの無花果樹にこのみをもとむれども得ず。これを斫たふせ、なんぞいたづらに地をふさぐや。八 こたへけるは、主よ、これその周圍をほりてこれに糞するまで今年もゆるせ。九 のちに果をむすばゞよし。もし結ばずばのちにこれを斫べし。○十 耶穌安息日にある會堂にてをしへしに、十一 十八年あひだわづらはされたる婦あり。かゞまりて

すこしも伸ることあたはざりき 十二 耶穌これをみてよび。
婦よなんぢハその病よりはなたれたりといひて 十三 手ををん
なみにおきけれバただちにまのびて神を讃美けり 十四 會堂
のつかさ耶穌の安息日にいやしたることを怒。こたへて
ひとびとにいひけるハ。事をなすべきの日六日あれバその中
にきたりていやさるべし。安息日にはせざれ 十五 主これにこた
へていひけるハ。僞善者よなんぢらおのおの安息日にその
その牛や驢をとき廐よりひきいだして水をのませ
ざるか 十六 ましてこのをんなハアブラハムの裔なるを 十八

ぬ。またひと〴〵ハそのなせしこのうへなきことどもを
よろこべり 十八 耶蘇またいひけるハ神の國ハなにゝなずら
へまたなにゝたとへんや 十九 ひとつぶの芥種のごとし。人こ
れをとりてその園にまけバ長生ておほいなる樹となり。
そらの鳥その枝にやどれり 二十 またいひけるハわれ神
の國をなにゝたとへんや 二一 餅だねのごとし。婦これをと
りて三斗の粉のなかにかくせバことごとくふくれいだせ
り○ 二二 耶蘇をしへつゝ各城各郷をすぎエルサレムにむかひ
て旅だちせり 二三 あるひといひけるハ。主よすくはるゝものそ

少きや。二〇 耶蘇かれらにいひけるは。窄門にいるために力をつくせ。われなんぢらにつげん。入んことをもとめてあたはざるものおほし。二五 家の主おきて門をとぢしのちになんぢらそとにたちて門をたゝきて。主よ主よわれらにひらけといはんに主こたへて。われなんぢらが何處よりきたりしをしらずといはん。二六 しかるときにわれらなんぢのまへに食飲し。なんぢまたわれらの衢にをしへをなしたまひしといひいださん。二七 主こたへて。われなんぢらにつげん。いづくよりきたりしかしらず。なんぢら悪をなすものよわれをはなれよといはん。二八 な

哀哭切歯することあるべし 二九 またひと〴〵西やひがし北や
みなみよりきたりて神の國に坐するなり 三〇 それ後のも
のはさきに先のものはあとになるべし ○ 三一 この日あるパリ
サイのひときたりて耶穌にいひけるはヘロデなんぢを殺
さんとするゆゑここを離ゆけ 三二 こたへていひけるはなんぢ
らゆきてその狐につげよ われけふあすも悪鬼をおひい
だし病をいやし第三日はこのことををへらん 三三 されども今日
明日また次日もわれはなほゆくべし そは預言者はヱルサ
レムのほかにてころさるることあらねばなり 三四 あゝヱルサレムよ

エルサレムよ預言者をころしなんぢにつかはされしものを石
にてうちころすものよ母鷄の雛をつばさのしたにあつむるご
とくわれなんぢの赤子をあつめんとせしこといくたび
ぞやなんぢら欲まざりき
三五 みよなんぢらの家は墟となりて
のこさるべし。まことにわれなんぢにつげん主の名によりて
きたるものは福なりとなんぢらいはんときいたるまでわ
れを見ざるべし

第十四章

耶穌あんそくにちに食事のためある宰なるパリサイの
人の家にいりしに。人々かれをうかゞひけり。そのまへに腹脹

かれら默然たり。耶穌その人をとらへ醫してこれをさら
しめ五かれらにこたへていひけるハ。なんぢらのうちたれか
驢あるひハ牛などの阱におちいらんに安息日なるもすみ
やかに曳出さゞるや六かれらこの言につきてこたふること
あたハざりき○七このときその席にまねかれたるひとびとの
首位をえらぶを見て。耶穌たとへをもてかれらにいひける
ハ八なんぢ人に婚筵にまねかれんとき首位に坐することなか
れおそらくハなんぢより尊人まねかれなバ九かれとなん
ぢを請しものきたりてこの人に坐をゆづりましといはんさ

らばなんぢゆきて末位(ばつざ)にゆくべし 十 このゆゑになんぢ請(まねか)れんときはゆきて末位(ばつざ)に坐(ざ)せよ。まねきしものきたりて友よ首位(じやうざ)にすゝめよとなんぢにいはゞ同席(どうせき)のものゝまへになんぢたふとまるべし 十一 おほよそみづから高(たか)ぶるものは卑(くだ)され。みづからへりくだるものはたかくせらるべし 十二 またこれを請(まねけ)るものにいひけるは。なんぢ午餐(ひるげ)あるひは晩餐(ゆふげ)をまうくるとき朋友(とも)兄弟(きやうだい)親戚(しんるい)またとめる鄰(となり)のひとをまねくなかれ。おそらくはかれらもまたなんぢをまねきてその報答(むくい)をなさん 十三 なんぢ筵(ふるまひ)をなさば貧乏(まづしきもの)廢疾(かたわ)跛者(あしなえ)瞽者(めしひ)

なんぢにむくいあるべきなり 十五 ともに食せるものゝ一人これをきゝて耶蘇にいひけるは。神のくにゝて食するものはさいはひなり 十六 耶蘇これにいひけるは。ある人おほいなる筵をまうけて多の賓をまねけり 十七 ふるまひのとき僕をその請たるものにつかはして。まづそのもの既そなはりたればきたるべしといはせけるに 十八 かれらこぞりておなじく辭はじめぬ。そのはじめのもの彼にいひけるは。われ田地をかひたればゆきて視ざるをえず。ねがはくはわれをゆるしたまへ 十九 また一人のものいひけるは。われ五耦の牛をかひたればこれを試るにゆかん。

ねがはくはわれをゆるしたまへ 二十 またひとりのものいひけるは
われ妻（つま）をめとりたり。このゆゑにゆくことをえざるなり 二十一
その僕（しもべ）かへりてこのことを主（あるじ）につげしらせぬ。あるじ怒（いかり）てそ
のしもべにいひけるは。はやくゆきて邑（まち）の衢巷（ちまた）にゆきて。まづし
きもの。かたはもの。あしなへ。めしひ。などをここにつれきたれ
二十二 僕（しもべ）いひけるは。主（しゆ）よ命（おほせ）のごとくなせり。されどなほあまりの
坐（ざ）あり 二十三 主（あるじ）しもべにいひけるは。道路（みち）や藩籬（まがき）のほとりにゆき
強（しひ）てひとびとをつれきたりてわが家（いへ）にみたしめよ 二十四 われなんぢ
らにつげん。かの請（まね）きたるひとびとはひとりだにわが餐（ふるまひ）をあぢ

その父母妻子兄弟姉妹。またおのれの生命をもにくむもの
にあらざれバわが門徒となることをえず二七またその十字架
をおはずしてわれにしたがはざるものハわがでしとなることを
をえず二八なんぢらのうち城をきづかんとおもふものハまづ坐してその
つひえこのことの竣までに足やいなやを計ざらんや二九おそ
らくハ基をすゑてこれをなしあたはずバ見ものことごとく
あざけりいひて三〇この人ハ築かけてなしとげざりしといはん
三一また王いでゝほかの王と戰はんとするにまづ坐してこの一萬人を
もてかれが二萬人の敵をふせぐべきやいなやを籌ざらんや三二もし及ば

べ敵なればむしろ使をつかはして和睦をもとむべし 三三 されバかくのごとくなんぢらその所有をこと〴〵くすてざるものはわが門徒となることをえず 三四 塩はよきものなり。されど塩もしその味をうしなはばなにをもてこれに味をつけんや 三五 田にも糞にも益なく外にすてらるなり。耳ありてきくものはきくべし

第十五章

さて税吏と罪あるものども耶穌にきかんとてちかくよりしかバ 二 パリサイの人と學者つぶやきていひけるは。この人はつみあるひとにまじはりてともに食せり 三 耶穌この

きてそのうしなひし羊をみるまでたづねざらんや 五 たづね
得ばよろこびてこれをおのれの肩にうけ 六 家にかへりてその友
とその鄰のひとびとをよびあつめていはん、ともにおほいによ
ろこべ我うしなへる羊をえたればなり 七 我なんぢらにつげん
かくのごとくひとりの罪人くいあらためなば悔あらたむる
におよばざる九十九の義人よりはなほ天にてよろこび
あらん 八 また婦のもちてゐる金錢十枚をもちその一枚を
うしなはんに。燈火をともして室を掃除しこれをさがすまで
いねんごろにたづねざらんや 九 たづねえばその友とその鄰

のひとぐをよびあつめていはん。われとともによろこべわが
うしなへる金銭をえたればなり 十 われなんぢらにつげん。
かくのごとくひとりの罪人くいあらたむるが神の使のまへ
によろこびあるべし○十一 またいひけるは。あるひと子ふたり
あり 十二 そのおとうと父にいひけるは。父よわがうくべき業をわ
れに分あたへよ。父そのしんだいをわかちあたへぬ。これが
十三 幾日も經ざるにおとうとそのしんだいをことごとくあつ
めて遠國へたびだちせしが放蕩にしてその分資をうしなふ
そこにて耗せり 十四 ことごとくつひやせしとき。あまねくいる
饑饉 [illegible] 十五

を野につかはせり 十六 かれ豕の食ところの豆莢をもておの
が腹をみたさんとおもふほどなりしかどもこれにあたふ
る人なかりし 十七 みづから省悟ていひけるハ我が父のところにハ食
物あまれる傭人のいくばくかあるに我ハ飢てしなんと
す 十八 起て我が父にゆきていはん。父よ我ハ天となんぢのまへに
罪を犯しゝかバ 十九 なんぢの子ととなふるに足ざるものな
りなんぢの傭人のひとりのごとく我をなしたまへと 二十 すなは
ち起てその父にゆけり。なほ遠くありしにその父かれを見
てあはれみはしりゆきその頸をいだきて接吻しぬ 二一 子

ちゝにいひけるハ。父よわれ天となんぢのまへに罪ををかし
いまよりなんぢの子ととなふるにたらざるなり 二二 父その志もべに
いひけるハ。いとも美服をもちきたりてこれに衣せ。
その指に環をはめ。そのあしに履をはかせよ 二三 また肥たる犢
をひききたりて宰れ。われら食してたのしまん 二四 これわ
が子死てまた生うしなひてまた得たればなりとてかれらと
ともにたのしみはじむ 二五 そのあには田にありしがかへり
て家にちかづき樂と舞のおとをきゝて 二六 その僕のひとりをよび
てこれ何ごとぞととひたるに 二七 志もべいひけるハ。なんぢのお

よその父いでゝかれをなだめしかバ 二九 父にこたへていひけるハ。わ
れ多年なんぢにつかへていまだなんぢのいましめにそむかず。
されどもわが友とたのしむために羔をもあたへしことな
三十 しかるに妓のためになんぢの業をつひやしたるこのなん
ぢの子かへれバこれがために肥たるこうしをほふれり 三一 父かれ
にいひけるハ。子よなんぢハつねにわれとともにあり。すべてわが
所有ハみななんぢのものなり 三二 なんぢのおとうと死て
またく生かへりうしなふてまた得たるがゆゑにわれらよろこびて
樂むハ當然のことなり

第十六章 耶穌またそのでしにいひけるは。ある富るひとにばんとうありけるが主の所有をつひやしぬと主人へうつたへられ 二 主人ばんとうをよびていひけるは。なんぢにつきてきこゆるところは何ぞや。いまやなんぢをばんとうとなしおかざればその會計なることがらをつばらに辨よ 三 ばんとうこゝろのうちにおもへらく。主人わがやくめをとりあげなばなにをなさん。われ鋤をとるほど力なく施を乞もはづかし 四 我やくめをとかれんときはこれらの家にむかへらるべき所為をしまへりとぞ 五 つひにあるじの負債人をことごとくよびて

るに。なんぢの券書をとりいそぎ坐して五十とかけよ。七また一人にいひけるは。なんぢの負債はいかほどあるや。こたへていふ小麥百斛なり。かれにいひけるは。なんぢの券書をとりて八十とかけよ八あるじその所為のたくみなるによりてこの不義なるばんとうをほめたり。それこの世の子どもらはこの世におい てハ光明の子どもらよりもはるかに巧なり九われなんぢらにつげん。不義のたからをもておのが友をえよ。こハとぼしからんときかれらなんぢを永遠宅にむかへんがためなり十小事にたゞしきものは大事にもたゞしく小事

まことしからざるものは大事にもまことしからざるなり十一ゆゑにも
しなんずら不義のたからにまことしからずば。たれかまこと
の財をなんずらにあづけんや十二なんずらもし人のものに
不義ならば。たれかなんずのものをなんずにあたへんや十三
一人のしもべはふたりの主人につかふることあたはず。それこ
れをにくみてかれを愛し。あるひはこれを重んじかれを軽
んずればなり。なんずら神と財とにかねつかふることあたはず十四
欲ふかきパリサイのひとびとこのことをきゝて耶蘇をあざ
けり十五耶蘇かれらにいひけるは。なんずらは人々のまへにおのが

るものなり十六律法と預言者はヨハネまでなりそのゝち
神のくにのべつたへらる。ゝな用力てこれにいらんとす
なり十七天地のうせるハ律法の一畫のおつるよりもやすし十八おほ
よそ己の妻をいだして他のものをめとらバ姦淫をおこなふなり
また夫よりいださるゝ婦をめとるものも姦淫をおこなふ
なり○十九こゝにとめる人あり紫袍と細布をきてひゞにおご
りたのしめり二十またラザロといへる貧者あり。ひしこく腫物
さぎろそ富るひとの門にありき二十一その案よりおつる餘屑に
てやしなはれんとねがへりまた犬きたりてそのしゆもつを

を舐ぬ 二二 まづしきもの死しけれバ、天のつかひきたりて
アブラハムの懐におくられけり、富人も志にてほうむられし
が 二三 地獄にくるしミてその目をあげ。はるかにアブラハムとその
ふところにあるラザロを見て 二四 さけびいひけるハ父アブラハム
よこれをあはれミてラザロをつかはしてその指のさきを水
にひたしてわが舌をひやさしめたまへ。われこの火燄のなか
にくるしめバなり 二五 アブラハムいひけるハ。子よなんぢハいきてゐ
りしときになんぢの福をうけ。またラザロハその苦をうけ
たりしをおもへ。いまかれハ慰られなんぢハくるしめらる

ざるためにわれらとなんぢらとのあひだに限(さかひ)あらしむる
おほいなる淵(ふち)あり 二七 こたへけるは。さらば父(ちゝ)よねがはくはわが
父(ちゝ)の家(いへ)へラザロをおくりたまへ 二八 そはわれに五人(にん)の兄弟(きやうだい)あり。
まさにかれらがこの苦(くるしみ)のところにきたらざるためにラザロを
證據(しようこ)をなさしめよ 二九 アブラハムいひけるは。かれらにはモーセと
預言者(よげんしや)あればこれにきくべし 三十 こたへけるは。しからず父(ちゝ)
アブラハムよもし死よりかれらにゆくものあらば悔改(くいあらたむ)べし
三一 アブラハムいひけるは。もしモーセと預言者(よげんじや)にきかずばたとひ
死よりよみがへるものありともその勸(すゝめ)をうけざるべし

第十七章(だいじふしちしやう)

耶穌(いゑす)でしにいひけるハ。躓(つまづき)きたることハなからざるべきされどそのときをきたらするものハ禍(わざはひ)なるかな。二この小子(ちいさきもの)のひとりをつまづかするよりハ磨石(ひきうす)を頸(くび)にかけられて海(うみ)になげいれらるゝこそよからまし。その人(ひと)のためによかるべし三なんぢらを謹慎(つゝしめ)よ。もし兄弟(きやうだい)なんぢに罪(つみ)をおかさバこれを諫(いさめ)よ。もし悔(くい)なバゆるせ。四もし一日(いちにち)に七次(なゝたび)つみをなんぢにおかして一日(いちにち)になゝたびなんぢにむかひてわれ悔(くい)ぬといはゞゆるすべし○五使徒(しと)主(しゆ)にいひけるハ。われらに信(しん)をまさせよ。六主(しゆ)いひけるハ。なんぢらもしからしだね一粒(ひとつぶ)ほどの信(しん)あらバこの桑樹(くはのき)にぬけ

りかへりきたるときすみやかにゆきて食につけといふものあら
んや 八 かへつていはずやわが食をそなへわが食飲をなすま
で帯をしめてわれにつかへて後なんぢくひのむべしと 九 僕あ
るじの命ぜしことにしたがへばとて主かれに謝すべきかしから
ずとわれはおもへり 十 このごとくなんぢら命ぜられしことをこ
ゑなしたるときもわれらは無用のしもべなりなすべきことをなした
るのみといへ 十一 耶穌エルサレムにゆくときサマリアとガリラヤの
うちをとほり 十二 ある村にいりしとき十人の癩者ありて
みちにあひはるかにたちて声をあげていひけるは 十三 師耶穌

よわれらをあはれみたまへ 十四 耶蘇かれらを見ていひけるは。ゆきておのれを祭司にみせよ。かれらゆくうちに潔られけり 十五 そのひとり己がいやされたるを見てかへりきたり大聲にて神をあがめ 十六 耶蘇のあしもとにひれふして謝せり。かれはサマリア人なり 十七 耶蘇こたへていひけるは。きよめられしものは十人にあらずや。その九人はいづくにあるか 十八 この異邦人のほかに神をあがめんとてかへりくるものあらざるか 十九 またかれにいひけるは。起てゆけなんぢの信仰なんぢをすくへり（） 二十 神の國はいづれの時きたるかとパリサイのひと

べきものにもあらぞ、それ神の國ハなんぢらのうちにあり
二二 まさ門徒よいひけるハ、なんぢら人の子の一日を見まく欲
ふ日きたらん。されども見ざるべし 二三 人々なんぢらにこゝに
みよかしこにみよといはん、されども往なかれ志たがふなかれ
二四 それ電光の天のあなたよりひらめき天のこなたにひかる
がごとく人の子もその日にかくあるべし 二五 されど人の
子かならずまづおほくの苦をうけ、またこの世の人にすて
られん 二六 ノアの時にありしごとく人の子のときにも志か
あるべし 二七 すなはちノア方舟にいりし日までひとびと

食飲嫁娶などしたりしが洪水きたりてことごとくをほろぼせり 二八 またロトの時にもかくありき。ひとびと喰飲貿易樹藝構造などしたりしに 二九 ロトソドマよりいでたりし日。天より火と硫をふらせてことごとくをほろぼせり 三十 人の子のあらはるる日にもまたかくあるべし 三一 その日には人いへのうへにあらばその器具いへにあるともこれを取んとてくだるなかれ。また田畑にあるものもおなじくかへるなかれ 三二 ロトの妻をおもへ 三三 おほよそその生命をたもたんとするものはこれを失ひ。もしその生命をうしなはんものは

磨(うす)ひきをするをんなは一人(ひとり)はとられまた一人(ひとり)はのこさるべし 三六 かれらこ
たへていひけるは主(しゆ)よこのこと何處(いづく)にあるやかれらにいひけ
るは屍(しかばね)のあるところにはまた鷹(たか)あつまるらん

第十八章(だいじふはちしやう)

耶蘇(いえす)また人(ひと)のつねにいのりして懈怠(おこたる)まじきことをしめさんとて。
たとへをとりてかれらにかたりけるは 二 あるまちに神(かみ)をおそれず
人(ひと)をもはゞからざる裁判人(さいばんにん)ありけるが 三 その邑(まち)にやもめをんな
ありてつねにきたり仇(あだ)よりわれをすくひたまへといひてうれはしくせ
しに 四 かれ久(ひさ)しくうけがはざりしかど。その後(のち)こころのうち
におもひけるは。われ神(かみ)をおそれず人(ひと)をもはゞからざれど 五 こ

め嫠(やもめ)われをわづらはせば かれが絶(たえ)ずきたりてわれを聒(かしまし)
さすることなからしめんためにかれをすくはん 六 主(しゆ)いひけるハ不義(ふぎ)なるさい
ばんにんのいひしことをきけ 七 まして神(かみ)を晝夜(ちうや)いのるとこ
ろのえらびたるものをながく忍(しのぶ)ともつひにすくはざらん
や 八 われなんぢらにつげん。神(かみ)ハすみやかにかれらをすく
はん。されど人(ひと)の子(こ)きたらんとき信(しん)を世(よ)にみんや〇 九 また
みづから義(ぎ)とおもひ人(ひと)をかろしむるあるものに耶穌(いえす)この
たとへをかたりき 十 二人(ふたり)いのらんとて殿(みや)にのぼりしがその
ひとりハパリサイの人(ひと)ひとりハ税吏なりき 十一 パリサイの人(ひと)たちて

謝す 十二 われ七日間にふたゝび禁食し すべてもてるものゝ十分の一をさゝげたり 十三 税吏ははるかにたちて天をもあふぎえずその胸をうちて 神よ罪人なるわれをあはれみたまへといへり 十四 われなんぢらにつげん このひとはかの人よりは義とせられて家にくだれり。それすべてみづからを高ぶるものは卑くせられ。みづからをへりくだるものはあげらるべし 十五 耶蘇のさはらんがために人々をさなごをつれきたりしに 門徒ら見てこれをいましめたり 十六 耶蘇をさなごをよびて門徒にいひけるは 嬰孩をわれにきたらせよ これを禁る

なかれ。神の國はかゝるものハこのかのごとききものなり 十七 まことになんぢらにつげん、おほよそ嬰孩のごとくに神の國をうけざるものハこれに入ることをえざるなり 十八 ある宰とふていひけるハ。善師よかぎりなき生を嗣ためにわれなにをなすべきや 十九 耶穌かれにいひけるハ、なんぞわれを善といふや。一のほかに善者はなし。すなはち神なり 二十 誡ハなんぢが知ところなり。姦淫するなかれ殺なかれ竊なかれ妄證をたつるなかれ。なんぢの父と母とをうやまへと 二一 こたへけるハ、これらのことハ幼よりまもれるものなり 二二 耶穌これを聞

しかしてきたり我にしたがへ 二三 かれはなはだ富めるものなりし
かゞこれをきゝて甚うれひけり 二四 耶蘇そのいたく憂ひしを
みていひけるは、富めるものゝ神の國にいるは難かな 二五
富めるものゝ神の國にいるより駱駝の針のあなをとほるは
なほやすし 二六 これをきけるものどもいひけるは、さらば誰
かすくひをうくべきや 二七 耶蘇いひけるは、人のなしがたき
ところは神のなしうるところなり 二八 ペテロいひけるは、我ら
一切をすてゝなんぢにしたがへり 二九 耶蘇かれらにいひ
けるは、まことになんぢらにつげん、およそ神の國のた

めに家あるひハ父母あるひハ兄弟あるひハ妻あるひハ児女をすつるものハ今世にて幾倍をうけ来世にハかぎりなきいのちをうけざるものなし○三一 耶穌じふにの門徒をよびてこれらにいひけるハ。われらエルサレムにのぼる。人の子についても預言者のしるされしことハ皆とげらるべし 三二 それ人の子ハ異邦人にわたされ戯弄くるしめられ唾せらるべし 三三 かれらまた鞭撲てこれをころさん。また第三日によみがへるべし 三四 門徒これらの語をすこしもさとらず。まことにこのいへることハかれらに隠されたり。またそのいはるゝ言

きゝてこれなにごとぞといひければひとびとナザレの耶蘇の
まゐるなりと告 三八 瞽者よばゝりいひけるはダビデの子耶蘇よ
われをあはれみたまへ 三九 さきだちゆくものども默止と
これをいましむれどもますますダビデの子よわれをあはれみ
たまへとよばゝりけり 四十 耶蘇たちとゞまりかれをつれきた
れと命じ瞽者ちかよりければ 四一 耶蘇かれにとひけるはなん
ぢわれはなんぢに爲られんとねがふやとかれいひけるは主よ見え
んことをねがふ 四二 耶蘇かれにいひけるは見ることをうけよ
なんぢの信なんぢをすくへり 四三 かれたゞちに見え神をあがめ

て耶穌にしたがひぬ民これを見て神をあがめたり

第十九章

一 耶穌エリコにいりてすぎゆくとき 二 ザアカイといふ人あり税吏のかしらにて富めるものなり 三 耶穌をいかなる人なるか見んとおもへども身量ひくければ大衆なるによりて見ることをえざりき 四 かれを見んとてはしりゆき桑樹にのぼれり耶穌そのみちを過んとせるゆゑなり 五 耶穌ここにきたりあふぎてかれを見いひけるは 六 ザアカイよいそぎくだりきたれ今日われなんぢの家にやどらん かれいそぎくだりよろこびて耶穌をむかへたり 七 衆人これを見て怨言いひける

訟て人よりとりたるところあらバ四倍ましてこれをつぐ
のふべし 九 耶蘇かれにいひけるハ今日この家すくひをうること
を得たり。それこの人もアブラハムの裔なれバなり 十 それ人の
子ハうしなひしものをたづねて救んためきたれり 十一 衆
この言をきけるときまた譬をまうけていへり。これエルサレム
にちかくなれバひとびと神の國たゞちに顯明べしとおもへバなり
十二 ある貴者かれが領地をうけてかへらんとて遠國
へゆくとき 十三 十人の僕をよびてかれらに金十斤をあたへ
ていひけるハ。わがくるまで商賣せよ 十四 その國民かれをう

らみてあとより使をつかはしいひけるは。われらこの人を王とすることをこのまず 十五 領地をうけてかへりしとき。おのおのしやうばいしてなにほどの利をえたるをしらんとて金をあづけおきたる僕どもを召と命じぬ 十六 はじめの一人きたりていひけるは。主よなんぢの一斤は十斤の利をえたり 十七 主人いひけるはよし善僕よなんぢはわづかのものに忠なれば十の邑をつかさどるべし 十八 またつぎの一人きたりていひけるは。主よなんぢの一斤は五斤の利をえたり 十九 主人いひけるは。なんぢも五の邑をつかさどるべし 二十 また一人きたりていひ

りなんぢ置ざるものをとり播ざるものを穫ひとなれバな
り 二二 主人いひけるハ。あしき僕よなんぢの口によりて
なんぢを鞫べし。なんぢわれハ厳ものにて置ざるものをと
り播ざるものをかると知る 二三 しかるに何ぞわがきたるときに
本と利をえんがためにわが金を為替坐にあづけざりし
や 二四 遂にかたはらに立るものにいひけるハ。このひとの一斤
をとりて十斤のもてるものにあたへよ 二五 ひとびと主人に
いひけるハ。主よその人すでに十斤をもてり 二六 主人いひ
けるハ。われなんぢらにつげん。それもてるものハあたへられ。

あらぬはもの〻その所有ものまでもとらるべし 二七 又わが敵なる者たちわが支配をこのまざるものをこゝにつれきたりてわがまへにころせ 二八 耶穌このことをいひしのち衆にさきだちてエルサレムにのぼりけり 二九 橄欖となづくる山によまるベツパゲとベタニヤにちかづけるときその門徒ふたりをつかはしていひけるは 三十 對面のむらへゆけ。彼處にいらば人のいまだ乗ざるところのつなぎたる驢駒にあふべしそれを解てひききたれ 三一 もしたれかなんぢらになにゆゑ解やととふものあらばかくこたふべし。主の用なり 三二 奉遣

ぞ驢駒をとくやといひしぞ 三四 こたへて主の用ありといひ
て 三五 これを耶穌にひきたり。おのが衣をそのこまにおきて
耶穌をそのうへにのせ 三六 耶穌ゆきけるとき衆そのころも
を路上にしきけり 三七 耶穌エルサレムにちかづき橄欖山をくだ
らんとするとき。大衆のでしらみなよろこびその見し
ところの奇跡およびその能によりて大聲に神を讃美
していひけるは 三八 主の名によりてきたる王はさいはひなり。天
にありては和平あり。いとたかきところには榮光あるべし
三九 おほぜいのうちよりあるパリサイのひと耶穌にいひける

へ。師よなんぢの門徒をいましめよ 四十 うまらよこたへける
ば。われなんぢらにつげん この輩もし默止なば石さけぶべし
四一 まちにちかづけるとき城中をみてこれがために哀哭い
ひけるは 四二 もしなんぢだにも今このなんぢの日において
なんぢの平安にかかはることをしらば福なるにいま
なんぢの目よりかくれたり 四三 なんぢの敵なんぢのまはり
に壘をきづき四方よりかこみせめ 四四 なんぢとその中なる
児女をうちたふし石をも石のうへにのこさざる日きたる
らん。これなんぢその眷顧たまふの時をしらざればなり
四五 耶蘇宮にいりてその中にて賣買するものをおひいだし

るされたるに汝らこれを盗の巣となせり 四七 耶蘇日
ごとに殿にてをしへたまふ。祭司のをさ學者たみの尊者ど
もこれを殺んとはかれども民こゝろをかたむけその
をしへをきゝければ 四八 なすべきことをしらざりき

第二十章

一 そのころ耶蘇みやにて民ををしへ福音を宣し
とき。祭司長學者長老とゝもにちかより耶蘇にいひ
けるは、なんぢ何の權威をもてこのことをなすや誰がこ
の權威をあたへしやわれらにつげよ 三 こたへていひけ
るは。われもまた一言なんぢらにとはん。まづわれにつげよ

四ヨハネのバプテスマは天よりか人よりか 五かれらたがひにいひけるハ。もし天よりといはゞ彼らがなんぞかれを信ぜざりしやといはん 六もし人よりといはゞ民みなヨハネを預言者と信ずればおそらくは民われらを石にて撃んとて 七つひにこたへていづれよりなるかしらずといへり 八耶穌かれらにいひけるハ。われもなんの權威をもてこれを爲かなんぢらにつげじ ○九またたとへを民にかたりけり。あるひと葡萄園をつくり農夫にかして久しく他國へゆきしが 十期いたりけれバ葡萄園の果をうけとらんために

しにこれをもうちたゝき辱しめてむなしくかへらせさ
り 十二 また三次めのしもべをつかはせしにこれをも傷ておひいだ
しければ 十三 ぶだうばたけの主いひけるハわれいかになさ
ん、わが愛子をつかはすべし。これをみバ恭敬ならん 十四 農
夫どもこれをみてたがひに議しいひけるハ。これハ嗣子なり
いざかれをころさん業をわれらのものになすべしとて
十五 かれを葡萄園のそとにいだして殺せり。しからバ葡萄
園のあるじいかにかれらを處べきや 十六 彼きたりてこの
農夫どもをほろぼしぶだうばたけを他人にあづくべし。

人々これをきゝていひけるハ然ハあらざれ 十七 耶蘇かれら
をみていひけるハ匠人のすてたる石これぞ屋隅の首石
となれりとしるされしハなんぞや 十八 この石のうへにおつるも
のハ壊この石人のうへにおちなバそのものハつぶるべし 十九 祭司
のをさ學者どもそのおのれをさしてこの譬をいひしをしりた
るをしりこのとき耶蘇をとらへんとせしかども民をお
それたり 二十 またあそちこれをうかゞひその言をとりて方伯
の政事の權威にわたさんとしてみづから義人といつはれる
二十一 偵者をつかはせり。就て耶蘇にとひけるハ師よわれら

をさむるハ宜やいなや 二三 耶穌その詭譎なるをしりていひける
ハなんぞ我をこゝろむるや 二四 デナリをわれに見せよ。この像と
號ハたれなるや。こたへてカイザルなりといふ 二五 耶穌いひける
ハ。さらバカイザルのものハカイザルにをさめ神のものハ神
にをさめよ 二六 かれら民のまへなるその言をとらへえざりつ
その答を奇とおもひて默然たり ○ 二七 復生ことなしと
いふサドカイの人きたりて耶穌にとひけるハ 二八 師よモーセ我
らに書おけるハ。もし人のきやうだい妻ありて子なく
して死なバ兄弟その妻をめとり子を生てその嗣をつがせ

べしと二九いへば七人の兄弟あらんに長子つまをめどり子
なくして死に三十だい二のものこの婦をめどり子なくして
死に三一だい三もこれをめどり七人おなじくこれをめどり
子なくして死三二つひに婦も死たり三三さらば七人ともに子
の婦を妻とせしゆゑに復生たるときは誰の妻となる
べきぞ三四と耶穌にいへるにいひけるハこの世の子ハめとりとつぐ
ことあり三五かの世にいり死より復生するものハ娶嫁
こと三六なしこれまた死ることあるべからざるがゆゑなり。そ
ハ天の使とひとしく復生の子にて神の子なればなり

あらはせり。三八それ神は死たるものゝ神にあらず生るも
のゝ神なり。それ神のまへにはみな生るものなればなり。三九その
學者うちこたへていひけるは。師よよくいへり四十このゝちあへて
耶穌にとふものなかりき○四一耶穌かれらにいひけるは。ひ
と〴〵いかなればキリストをダビデの裔といふや四二四三ダビデみづ
から詩の篇に。主わが主にいひけるは。われなんぢの敵をな
んぢの足凳となすまでわが手のみぎに坐すべしといへ
り四四されバダビデこれを主ととなへたれバいかでその裔
ならんや四五民みなこれをきけるときその弟子にいひけ

かれ、四六 長服をきてあるくことをこのみて市上にて人のあいさつ會堂の高坐ふるまひの上坐をよろこぶ學者をつゝしめよ 四七 かれらは嫠をんなの家をのみていつはりてながき祈をなすなり。罪せらるゝこともおもし

第二十一章

耶穌目をあげ富るひとぐの捐輸をさいせんばこにいるゝを見る 二 またあるまづしき嫠婦のレプタふたつをいるゝをみていひけるは 三 まことに誠になんぢらにつげん。このまづしき嫠はすべてのものよりも多くいれたり 四 それかれらはみなその羨餘あるところより神のそなへものにいれ。かれは不足[illegible]

ものをさめて修飾ることをかたりしに 六 耶穌いひけるハ。なんぢらのミるところのものハ石を石のうへにのこさずくづさるゝ日いたらん 七 かれらとふていひけるハ。師よいづれのときにこの事あらん。正にこのことのきたらんとき いかなる兆あるや 八 耶穌いひけるハ。なんぢらつゝしミて まどハさるゝことなかれ。それおほくのものわが名をおかしきたりて。我ハキリスト なり 時ハちかよれりと いはん。されどなんぢら之にしたがふなかれ 九 戰みだれをきくとき おそるゝなかれ。これらのことのさきにあるハ止をえざることなり。されど末期ハい

まづまつりやうあしきぞ十まさしくそひけるに。民いたみをせめ國は
くにゝをせめ十一各處におこりたる地震饑饉疫病おこり。また
おそるべきこととゝもおこりたる異象天よりあらはるべし十二
そのことより先にひとゞくなんぢらをとらへ窘迫會堂お
よび獄にわたすべし。わが名のためにまた王および侯のまへにひきゆく
べし十三されどもなんぢらがこの事にあかし證となるなり十四ゆゑ
になんぢら先なにをいはんとおもひわづらふまじきことを
心にさだめよ十五それはなんぢらに仇するもの辨駁
または敵對することをえざるべき口と智とをわれなんぢら
へし。なんぢらは父母兄弟親戚朋友などより

わが名のためにひと〴〵に憎まれん 十八 されどなんぢらの首髪
ひとすぢもうしなはじ 十九 なんぢら忍耐てその生命をま
つたうせよ 二十 なんぢら軍勢にエルサレムのかこまるゝをみるとき。
その亡ちかきにあると志るべし 二十一 その時ユダヤにをるものは山に
のがれよエルサレムにをるものはいでよ郷下にをるものはエルサレム
にいるなかれ 二十二 これ刑罰の日にして志るされたることのみ
な應らるゝ日なり 二十三 その日には懐孕と哺乳者もわざはひな
るかな。これ地におほいなる災ありて怒この民におよぶ
べければなり 二十四 ひと〴〵刀刃にたふれまたとらはれて諸

國にひかれエルサレムは異邦人の時みつるまでハいはうじんに蹂躪るべし 二五 また日月星に異象あるべし。地にては諸國の人かなしみ海と波との瀾渚によりてうろたへ 二六 ひとびとおそれつゝ世界にきたらんとすることを俟なやむべし。これ天のいきほひ震動さるべければなり 二七 そのときひとびとも人の子の權威とおほいなる榮光をもて雲にのりきたるを見るべし 二八 これらのことの成そめんときにハ起てなんぢらの首をあげよ。そハなんぢらの贖ちかづけばなり 二九 耶蘇たとへをかれらに語けるハ。無花果とすべての樹をみよ 三十 すでに萌

ちかきを志れ
三二 まことに我なんぢらにつげん。この事ことごとくなるまでハこの世ハ逝ざるべし。
三三 天地ハ逝るべし。されどもわが言ハ逝ることあらじ
三四 なんぢらこころせよ慎よ おそらくハ飲食にふけり世事にまとはれ。なんぢらのこころ昏迷なりておもひよらざるときにこの日なんぢらに臨ん
三五 これ機檻のごとくあまねく地のうへに居ものにのぞむべし
三六 このゆゑになんぢら徹醒てこののちきたらんとするすべてのことを避れ人の子のまへに立うるやうにつねにいのれ
三七 耶穌ひるハ殿にて教し夜ハいでて橄欖といい

いふ山に宿りきぬ 三八 庶民らみなかれにきかんとて朝まだく殿にきたれり

第二十二章 逾越といへる除酵餅節ちかづけり 二 祭司のをさ學者らいかにして耶穌をころさんとうかゞふ。それ民をおそれたり 三 さてサタン十二のうちのイスカリオテととなへるユダにいりぬ 四 かれ祭司のをさたちと庶司どもにゆき。いかにして耶穌をわたさんとかたりければ 五 かれらよろこびて銀子をあたへんと約せり 六 ユダうけがひてひとびとの居ざるときに耶穌をわたさんと機をうかゞへり 七 さて除酵餅

らず食せんために逾越をそなへよ 九 かれらこたへけるは
何處にこれをそなへんとおもふや 十 耶蘇いひけるは城下
にいらば水をいれたる瓶をもてる人なんぢらに遇べし
その入ところの家にまでしたがひゆきて 十一 家のあるじに師
なんぢにいふ。われ門徒とともに逾越を食ふべき客房は
いづこにあるやといへ 十二 さすれば彼なんぢらにかざりたる
樓ざしきをみせるべし。そこに備よ 十三 かれらゆきて耶蘇
のいひたまひしごとく遇しかば。すぎこしのそなへ
をなせり 十四 時いたりければ耶蘇食につきたまふ。また使徒も

とりにつきさり十五耶穌かれらにいひけるハ我くるしみを
うくるまへになんぢらとともにこの過越を食せんことを
大にねがへり十六われなんぢらにつげんこれを神の國に
應成までハまたこれを食せじ十七耶穌杯をとり謝し
ていひけるハこれをとりてたがひにわけよ十八われなん
ぢらにつげん。神の國のきたるまでハ葡萄よりつく
りしものを飲じ十九また餅をとり謝してこれをさき
にあたへていひけるハこれハなんぢらのためにあたふる
わが身體なり。われを記んためにこれをなせ二十また食

をわたすものゝ手ハわれとともに案にあり
二二 人の子ハか
ねてさだめられるごとく逝ん。されども人の子を
わたすものハわざはひなるかな
二三 衆このことをせんもの
ハ誰なるかとたがひにとひぬ
二四 またかれらのうちにて
長たるものハ誰なるかと互のあらそひありき
二五 耶蘇か
れらにいひけるハ、異邦人の王ハその民を志たがへ。また其
のうへに權をとるものハ恩をほどこすものと稱らる
二六 され
どもなんぢらハ如是すべからず。なんぢらのうち大なる
ものハつかふるもののごとく首たるものハつかふるもののごとく

なりべし。二七 食につけるものと役事ものといづれかおほいな
る。食につけるものならずや。されども我はなんぢらの中に
つかふるもののごとし 二八 わが患難にあひてわれとともに居
しものなるなんぢらなり 二九 わが父のわれに任ぜしごとく
われもなんぢらに國を任ずべし 三十 これなんぢらわが國に
おいてわが食案に食飲し。一の位に坐してイスラエルの十二
の支派をさばかんがためなり 三一 主またいひけるは。シモンよシモン
よサタンなんぢらをもとめて麥のごとく簸んとせり 三二 され
どもなんぢの信仰のたえざるやう爾のためにいのれり。な
三三

めなり 三四 耶穌いひけるハペテロよなんぢにつげんけふ鷄
なかざるまへになんぢ三次われをしらずといはん○ 三五 また
かれらにいひけるハわれ財布 旅袋 履をもたせでなん
ぢらを遣せしときなにの缺たることありしや。かれらこたへけるハ
なかりき 三六 耶穌かれらにいひけるハ。今ハさいふあるもの
ハこれを取。たび袋あるものもまたしかり。これらをもたぬも
のハ衣服をうりて刀をかふべし 三七 われなんぢらにつげん
かれハ罪人のうちにかぞへられたりとありしと録さるゝこ
の言ハかならずわれにおいてとげらるべし。それハわれを指ることこ

とがにんのなかまと成らるべきはずなり。三八 かれら いひけるハ 主
みよこゝにふたつの刀あり。耶蘇かれらにいひけるハ。足れり 三九 耶蘇
いでゝ例のごとく橄欖の山にゆきけるにその門徒も志たがひ
けり 四十 そのところにいたりてかれらにいひけるハ。誘惑
に いらざるやう いのりませ 四一 耶蘇かれらをはなれて石の投らるゝ
ほどへだゝり曲膝いのりいひけるハ 四二 父よもし聖旨よろしく
ばこの杯をわれよりはなちたまへ。さりながらもわが意に
あらずして聖旨のまゝになしたまへ 四三 天使天よりくだり
てあらはれて健壮をそへぬ 四四 耶蘇いたく哀志みけるに
[illegible]汗ハ血の[illegible]地に[illegible]

るを見哭いひけるハ。なんぞねむるや起でまどひにいらざる
やう祈れ 四七 かく言とき許多のひとびときたる。よさ十二
のひとりなるユダといへるものそのまへにさきだちて耶蘇よ
接吻せんとちかよれり 四八 耶蘇いひけるハ。ユダなんぢハ接吻
をもて人の子をわたすや 四九 そのかたはらにあるもの
ども事のおよばんとするをさとりていひけるハ。主よわれらつ
るぎをもて撃べきか 五十 そのうちのひとり祭司の長のしも
べをうちてその右の耳をきりおとせり 五一 耶蘇こたへて。こ
れを聴せといひ。その耳にさはりていやしたり 五二 耶蘇ーよ

にきたりし祭司のをさ殿の監司と長老どもにいひける
ハなんぢら刀と棒とをもちきたり強盗をむかふがごとく
きたるか五三われ日々になんぢらとともに殿にありしときに
われに手をかくることなかりき。しかるに今ハなんぢらの時
かつ黒暗のいきほひなり五四かれら耶蘇をとらへ曳て祭
司のをさの家につれゆけり。ペテロはるかに従ひぬ五五ひとびと
中庭のうちに火をたきてともに坐しければペテロもその
なかに坐しをり五六ある婢かれが火のこのかたらに坐せる
を見これをつらつらくそいひけるハ。この人もかれとともな

んぢもかれらの一人なり。ペテロいひけるハ。人よわれハしからず
五九 おほよそ一時ばかりすぎてまたある人いひはりけるハ。
まことにこの人もかれとともにありし。これガリラヤの人なれ
ばなり 六十 ペテロいひけるハ。人よわれなんぢの言ところを
識ずといひもあへざるを忽ちにはとりなきぬ 六一 主身をかへ
してペテロを見たまへり。今日にはとり鳴まへに三次われを
しらずといはんと主のいひたまひし言をペテロおもひいだし
六二 そとへいでていたく哭り ○ 六三 耶穌をまもれるものども
嘲弄してかほを撲 六四 その目をおほひてとふていひけるハ。なんぢ

をうちものは誰なるか預言せよ 六五 またさまざまのことをいひてこれを譏誚り 六六 平旦に民のとしより祭司のをさ學者どもあつまりて耶穌を集議所にひきゆきて 六七 いひけるはなんぢもしキリストならばわれらにつげよ。耶穌いひけるは。たとひ我なんぢらにいふとも信ぜざるべし 六八 またたとひ我なんぢらにとふとも答ざるべし 六九 今よりのち人の子は大權ある神のみぎに坐せん 七十 みないひけるは。さらばなんぢは神の子なるか。耶穌いひけるは。なんぢらがいへるごとく我これなり 七一 かれらいひけるは。なんぞ證據をもち

いひけるハ。われらこの人が民をまどハし税をカイザルにを
さむることを禁止。みづから王なるキリストととなふるを見
たり 三ピラト耶穌にとひていひけるハ。なんぢハユダヤびとの
王なるか。こたへけるハ。なんぢがいへるごとし 四ピラト祭司の
長たちと衆にいひけるハ。われこの人にあへて罪あることを
みず 五かれらますます極力いひけるハ。かれハガリラヤよりは
じめてあまねくユダヤををしへこの處まできたりて民
をみだせり 六ピラトガリラヤときゝてこの人をガリラヤ人なる
かをとひ 七そのヘロデの所管なるをしりてこれをヘロデに

あらくる。この時ヘロデもエルサレムにありしが八耶穌を見
てはなはだよろこべり。そハ許多なるかれがうはさをきゝ
てひさしくこれを見んことをねがひ。またその奇跡なる
る事をみんと望みしかばなり九このゆゑに多言をもて
とひけれども耶穌ハなにもこたへざりき十祭司のをさ學
者たち側にたちてしきりにこれをうつたへぬ十一ヘロデその
士卒とともにかれをかろしめ嘲弄して華服をきせ。
またピラトにおくれり十二ピラトとヘロデさきにハ仇なりし
が當日たがひにしたしみをなせり○十三ピラト祭司のをさ

り。されどわれなんぢらが訟るところをもてなんぢらのまへに鞫どもその罪あることをみず
十五 ヘロデもまたしかり。なんぢらをヘロデにつかはせども耶蘇がせしことの死罪にあたることをうけざりき
十六 故にわれむちうちてこれをゆるさん
十七 それこの節期にかならずひとりを釋ことあるべきなり
十八 この時みな一齊によばはりてこの人を除きバラバをわれらにゆるせといふ
十九 このバラバは城下に一揆をおこし人をころして獄にいりしものなり
二十 ゆゑにピラトは耶蘇をゆるさんとおもひて復かれらにいひしかど
二十一 衆よばはりて。これを十字架につけよ

十字架につけよといふ 二二 ピラト三次いひけるハ。これハなんの
悪事をせしやわれいまだかれの死罪あるをきかざれバ
笞うちてゆるさん 二三 かれらはげしく聲をたてゝこのものを
十字架につけんといひ募まり。つひにかれらと祭司のを
さのこゑかちたり 二四 ピラトその求のごとくさだめて 二五 かれ
らがねがへる一揆をおこし人をころして獄にいれられしも
のを釋そのこゝろにまかせて耶蘇をわたせり 二六 かれら耶蘇
をひきゆくとき田間よりいできたれるクレ子のシモンといへ
るものをとらへそれに十字架をおはせて耶蘇にしたがはせ

エルサレムの女子よわがために哭なかれたゞなんぢの身となんぢの
子のためになけ 二九 産ざるものいまだ孕ざるの胎いまだ哺
せざるの乳は福なりといはん日きたらん 三十 その時ひとびと
山にむかひてわれらがうへに壓よ陵にむかひてわれらを掩へとい
はん 三一 もし青木にかくのごとくなさば枯木にはいかゞせられん
や 三二 また他にふたりの罪人を耶穌とともに死罪におこなは
んとてひきゆけり 三三 クラニオンといへるところにいた
りてこゝに耶穌および罪人を十字架につけぬ一人を耶
穌の右ひとりを左に於く 三四 耶穌いひけるは父よかれらを宥

ゆるしたまへその所爲をしらざるがゆゑなり。かれら鬮を
ひきて耶蘇の衣服をわかつ 三五 ひとびと立て耶蘇を見しが有司
もまたあざけりていひけるハかれハ他人をすくへり。
もしキリスト神のえらみたまへるものならバ自をすくふ
べし 三六 兵卒もまたかれを嘲弄しきたり酢をあたへて
三七 もしなんぢユダヤびとの王ならバなんぢをすくへと
いへり 三八 またギリキヤ ロマ ヘブルの文字にてこれハユダヤび
との王なりとかける罪標をそのうへに建たり ○ 三九 懸られ
たる罪人のひとり耶蘇をそしりていひけるハなんぢもし

こたへてこれをいましめいひけるハなんぢおなじく罪せ
うけるながら神をおそれざるか四一われらハ當然なる所行
こゝろの報をうくるなれどこの人ハなにも不是ことハな
さゞりしなり四二かくて耶穌にいひけるハなんぢその國に
きたらんとき我を憶たまへ四三耶穌これにいひけるハまことに
に我なんぢにつげん今日なんぢハわれとともに樂園に
在べし○四四時およそ十二時ごろより三時にいたるまで
あまねく地のうへ黒暗となりけり四五日光くらく殿のうち
の斗帳まんなかより裂けり四六耶穌おほごゑによばはり
いひけるハ父よわがたましひをなんぢの手にあづくといひて

氣たゆ 四七 百夫の長このありしことをみて神をあがめていひけるハまことにこのひとハ義人なりき 四八 これを見んとて聚まりしひと〴〵このありしことどもをみて胸を拊てかへり 四九 耶穌の相識のひと〴〵およびガリラヤより志たがひし婦どもとほく立てこれらのことを見たり○ 集議官なるヨセフといへる善かつ義なるひとあり 五一 かれらの評議と所為をうけがはざりき。これハユダヤのアリマタヤの邑の人にて神の國をまてるものなり 五二 この人ピラトにゆき耶穌の屍をこひて 五三 これをとりおろし布につゝ

耶蘇とともにきたりし婦たち後にしたがひてその墓と屍のおかれたるさまを見たり 五六かれらかへりて香料と香膏をそなへのひおきて誡にしたがひ安息日をやすめり

第二十四章

七日の首日の昧爽にかの女たち備おきたる香料をもちて墓にきたりしにほかの女もともにきたれり 二かれら石の墓より轉ばしありしをみて 三入けれども主耶蘇の屍をみざりき 四これがために躊躇をりしに、かがやける衣服をきたる二人そのかたはらにたてり 五かれらおそれて面を地にふせければその人いひけるは、なんぢらなん

んぞ死たるもののうちに生たるものを求るや 六 かれはこゝ
にあらず復活たり。なほガリラヤに居しときなんぢらに
かたりて。人の子かならず罪ある人の手にわたされ十
字架につけられ第三日によみがへるべしといひたりしを
憶せよ 八 かれらその言をおもひいで 九 墓よりかへりてこ
れらのことをことごとく十一の門徒とほかのでしたちに告
十 これらのことを使徒につげたるものはマグダラのマリア
ヨハンナ。ヤコブの母なるマリアおよび他にともにありし女たち
なり 十一 使徒そのものがたりを虚誕とおもひて信ぜざりき 十二 ペテロ

の門徒エルサレムより三里許へだゝりたるエマヲといへるむら
にゆきけるに 十四 たがひにこれらの所遇しことゞもをかたり
あへり 十五 このかく互論ずるときに耶蘇みづから近づきともに
ゆきけり 十六 されどその目まどはされて知ことを得ざりき 十七 耶蘇
いひけるは なんぢらあゆみつゝたがひにかたる談論こはな
んぞや 十八 その一人のクレオパといへるものこたへけるは なんぢは
エルサレムの旅びとにて獨このごろありしことをしらざるか 十九 こた
へじのかつあなることぞや これはいひけるは ナザレの耶蘇のことなる
り この人は神と萬民のまへにおいて行と言とにちからあるい

なる能ある預言者なりしが 二十 祭司のをさと有司らは
かれを死罪にさだめて十字架につけたり 二一 われらはかれこそ
イスラエルを贖ものはこの人なりと望をりし。またその
うへのみならず此等のことのありしより今日は第三日なる
に 二二 われらの中なる婦らもわれらを驚駭せり。
かれらあさとく墓にゆき 二三 その屍をみずしてきたり
り天の使あらはれて彼をよみがへりたりといへるを見
たりとつぐ 二四 また我らとともにありしものゝ墓に
ゆきたるに婦のいへるごとくなるを見たり且彼を見ざりき
二五 耶穌かれらにいひけるは預言者たちのいひし

難をうけてその榮光にいるべきにあらずや 二七 ゆゑにモーセ
よりすべての預言者をはじめすべての聖書にありて
おのれにつきてのことをぞ詳明されたり 二八 かれらゆく
ところの郷にちかづきけるに。彼ゆきすぎんとするけ
しきをみせぬ 二九 かれらしひてとゞめいひけるは。日かたぶき
て暮におよびぬ。われらとともに止まれ。かれいりてとゞ
まる 三十 ともに食につけるとき餅をとり謝して擘ち
かれらにあたへければ 三一 二徒のものゝ目あきらかにな
りて彼をしりけり。また忽その目にみえずなりぬ 三二 かれ

らたがひにいひけるは。途間にてわれらとかたらひ聖書
を解ひらけるときわれらがこゝろ熱しにあらずや 三三 この
ときかれら起てエルサレムにかへり十一の門徒および同人のあ
つまりをるにあふ 三四 その人いひけるは。主實に
よみがへりシモンにあらはれたまへり 三五 二徒も途間にあり
しことゞも餅を擘たまふによりて識たることをかたれ
り 三六 このことをかたるとき耶穌みづからその中に立
ていひけるは。なんぢら平安なれ 三七 かれら驚駭おそれて
みるところのものを靈なりとおもへり 三八 耶穌いひける
は。なんぢらなんぞおそるゝや。なんぞこゝろに疑をおこすや

ろよ靈はわがあるをなんぢらが見るごとく肉と骨はあ
らざるなり 四十 かくいひてその手足をみせしに 四一 かれら喜
びのあまり信ぜずして奇異とするときに耶蘇これに食物あるや
といひければ 四二 炙たる魚と蜜房をあたふ 四三 これを取て
そのまへにて食せり 四四 またかれらにいひけるは。モーセのお
きて預言者の書また詩の篇にしるされたることに
つきてすべてわがことのかならず應べきをわれなん
ぢらとともにありし時つげしところなり 四五 ここにお
いて聖書をさとらせんとてその聰をひらき 四六 いひける

は。まさにかく録されたり。このごとくキリストも苦をうけ第三日
によみがへるべし。四七 まさにその名によりて悔改と赦罪を
エルサレムよりはじめ萬國にのべつたへらるべし。四八 なんぢら
はこれらの事の證人なり。四九 みよわれ父のちかひのものを
なんぢらにおくらん。なんぢら上より權をさづけらるゝ
まではエルサレムにとゞまれ。五十 耶蘇かれらをともなひてベタニヤ
にいたり手を擧てかれらを祝す。五一 祝するときかれら
をはなれて天にあげられたり。五二 かれらこれを拜してい
たくよろこびエルサレムにかへり五三 つねに殿にいまして神を
頌め感謝せり。

第一章 太初(もとゐ)にことばあり。ことばは神(かみ)とともにあり道(ことば)はすなはち神なり 二 この道(ことば)ははじめに神(かみ)とともにありき 三 萬(よろづ)物(もの)これによりてつくらる。つくられたるものに一(ひと)としてこれによらでつくられしはなし 四 これに生(いのち)あり。このいのちは人(ひと)のひかりなり 五 光(ひかり)はくらきにてり暗(くらき)はこれを識(さと)らざりき〇 六 さてここに神(かみ)のつかはしたまへる ヨハネといふものあり 七 そのきたりしは證(あかし)のためなり。すなはち光(ひかり)につきてあかしをなしすべての人(ひと)をしておのれによりて信(しん)ぜしめんがためなり 八 かれはひかりにあらず光(ひかり)について

證をなさんためにきたれり 九 それすべての人をてらす眞のひかりは世にきたれり 十 かれ世にあり。世ハかれによりてつくられたるに世これをしらざりき 十一 かれおのれの國にきたりしにその民これをうけざりき 十二 これを接その名をしんぜしものにハ權を與たまひてこれを神の子となせり 十三 かゝる人も血脈によるにあらず情慾によるにあらずひとの意によるにあらずたゞ神によりてうまれしなり 十四 それことばは肉體となりてわれらのうちにやどれり。われらその榮をみるにまことに父のうみたまへる獨子のさかえにして恩寵と眞理にてみてり〔一〕 十五 ヨハネかれにつき證をなしてよばはりいひけ

るもの是さきにわれにおくれきたりし人なるハわれよりさきに
れるものなれバぞ我よりさきにありしものなればなりと
いひしハこの人なり
十六 われら皆かれのみちたる其中より
よりうけてめぐみのうへに恩寵をくはへらる
十七 律法ハモーゼに
よりて傳へられめぐみとまことハ耶蘇キリストによりてき
たれり
十八 いまだ神をみしひとあらずたゞうみたまへるひ
とりの子ちゝのふところにをるものゝみこれをあらは
せるなり（）
十九 ユダヤびと祭司とレビの人をエルサレムより
ヨハネのもとに遣はしてなんぢハ誰ぞとゝはしめたると
きあかしせること左のごとし
二十 彼かくすところなくいひ

あらはして我はキリストにあらずとあきらかにいへり
二一 またとひけるハさらバなんぢハ誰ぞヱリアなるかいなとこたふ。またなんぢハかの預言者なるかと問ひしにしからずとこたへたり
二二 ここにおいてかれらまた問けるハなんぢハたれぞわれらをつかはせしものにわれらがこたへをなさし得やうわきまへつけよ。なんぢみづからはいかにいふや
二三 ヨハネいひけるハわれハよばはるものゝ主の道をなほくせよと野によばはるひとのこゑなり預言者イザヤのいへるがごとし
二四 そのつかはされたる人ハパリサイのひとなりき
二五

にあらずエリヤにあらずかのよげんしやにもあらずしてなに
ぞバプテスマを施すや 廿六 ヨハネこたへていひけるハ我ハ水
をもてバプテスマをさづく されどなんぢらのしらざるとこ
ろのもの一人なんぢらのうちにたてり 廿七 これハおくれき
たりて我よりまされるものなり われハその履のひ
もをとくにもたらざるものなり 廿八 これらのことハヨハネのバプ
テスマをほどこせしヨルダンのむかふなるベタニヤにおいてありし
なり 廿九 あくる日ヨハネ耶穌のおのれにきたるをみてい
ひけるハ世のつみをおふ神の羔をみよ 卅 これハわがおくれき
たらんものを我まされるものなるぞそはわれより以前

にありしものなればなりとわがいひしはこの人なり 三一 我
も素よりその人をしらざりしかど。されどわがきたりて水にてバプ
テスマをほどこしゝはこれをイスラアルの民にあらはさんがた
めなり 三二 ヨハネまた證していひけるは われ靈の鴿のごと
く天よりくだりてそれうへにとゞまれるを見たり 三三 我も
きこのれをしらざりしかど我を使のそへし水にてバプテスマをほど
おさしめしものわれよりいひたるも なんぢ靈くだりてそれ
うへにとゞまるをみん これを聖靈をもてバプテスマをなれ
さとれなり 三四 我これを見てそれ神の子たるをあかしせしなり
三五 あくる日ヨハネ [illegible]

の歩をみて神の羔をみよといひ 三七 二人の門徒
きゝて耶穌のあとをしたひゆくを 三八 耶穌これらのしたがへる
を顧てなんぢらは何を求やとこれらにとふ。こたへて
ラビいづくにやどるやといふ ラビと譯ば師といふの義なり
り 三九 いひけるは來みよといひたまひければつひにゆ
きてそのやどるをたづぬるところを見てこの日ともにやどれ
り時はおよそ十時ごろなりき 四十 ヨハネのいひしことをきゝ
て耶穌にしたがへるふたりのものそのひとりはシモン
ペテロの兄弟アンデレなり 四一 かれまづその兄弟シモンに
あひていひけるはわれらメッシヤにあへり メッシヤを譯ば

キリストなり 四二 またかれを耶穌に携ゆきしにいゑす
視てこれにいひけるはなんぢはヨナの子シモンなりなん
ぢはケパととなへらるべし ケパを譯ばペテロなり（石） 四三 あ
くる日いゑすガリラヤにゆかんとしてピリポにあひわれに
したがへといへり 四四 ピリポはアンデレとペテロのまちなる
ベツサイダといへる邑のひとなり 四五 ピリポナタナエルにあひ
ていひけるはまへて律法のうちにはモーゼがしるせしとこ
ろ預言者たちのしるせしところのものにわれらあひたり
ヨセフの子ナザレの耶穌なり 四六 ナタナエルいひけるはナザレ
よりなにの善者いでんやピリポかれにいひけるはきたりてみよ

…耶穌ナタナエルの己にきたるをみて之を

さしていひけるは視よまことのイスラエルの人にしてその
こゝろに詭譎なきものぞ 四八 ナタナエルいえすにいひけるハい
かにしてわれをしりたまふや耶穌これにこたへていひけ
るはピリポがなんぢをよばざるさきに無花果樹のもとにた
なんぢのをるをみたり 四九 ナタナエルこたへていひけるは
ラビなんぢは神の子なりなんぢはイスラエルの王なり 五十 耶
穌こたへていひけるはなんぢ無花果樹のしたにをれる
をわれみしといひしによりてなんぢ信ずるかこれより
おほいなるおこなひを爾みるべし 五一 またいひけるは我まことに

ままことになんぢらにつげん天ひらけて神のつかひたち人の子のうへにのぼりくだりするをみん

第二章

第三日にガリラヤのカナにて婚筵ありしが耶穌のはゝもそこにありき 二 耶穌とそのでしも婚筵にまねかる、ぶだう酒つきければ母は耶穌にいひけるはかれらは蒲萄酒なし 四 耶穌これにいひけるは婦よなんぢとわれとなにのかゝはりあらんやわが時はいまだいたらず 五 そのはゝ僕どもにむかひてかれがなんぢらに命ずるところのことをなせよといひおけり 六 ユダヤびとの潔の例にしたがひて四五斗いるもの石甕むつそこにおかれありしが耶穌

みたせり
八 またこれを今(いま)くみとりて持(もち)ゆきふるまひを
つかさどるものにもたせよといひけれバ。これをもたせり 九
筵(ふるまひ)をつかさどるものの酒(さけ)となりし水(みづ)をなめてそれいづくより
きたりしかしらざれども水(みづ)をくみししもべハしれり 十
ふるまひをつかさどるもの新娶(はなむこ)をよびてこれにいひける
それおよそ人(ひと)ハまづ旨酒(よきさけ)をいだしゑひたけなはなるにお
よびてあしき酒(さけ)をいだすなんぢはよきさけをいままで
とゞめおけり 十一 まづかくて祝筵(いはひ)をガリラヤのカナにてな
せるハ休徴(しるし)のはじめにしてその榮(さかえ)をあらはせり門徒(で)この是

お信ぜり○ 十二 これのち耶穌その母兄弟およびでしたち
カペナウムにくだりそのところにをることひさしからざりし
て 十三 ユダヤびとらの踰越節ちかづきたれば耶穌エルサレムに
のぼりて 十四 聖殿にて牛ひつじ鴿をうるものと兌銀するもの
の坐せるをみて 十五 縄をもて鞭をつくりこれらおよび羊う
しをみやよりおひいだし兌銀するものの金をちらしその
案をたふし 十六 鴿をうるものにいひけるハこの物をとりて
ゆけ我ちゝのいへをあきなひの家とするなかれ 十七 門徒た
ちハちゝのいへのための熱心われをくらはんと録されたる
をおもひいだせり 十八 こゝにユダヤびとこたへて耶穌に

なんの体徴をしめすや 十九 耶穌こたへて。なんぢらこの聖殿
をこぼてわれ三日にてこれをたてんといひければ 二十 ユダヤ
人いひけるハ此みやをたつるにおよそ四十六年を費しまなん
ぢ三日にてこれをたつるかといふ 二十一 耶穌のかくいへるもおのがか
らだの殿をさせるなり 二十二 死よりよみがへりたまへるのち
門徒たちいゑすのことをかたりしをおもひいでゝ聖
書とかれのいひしことばを信ぜり 二十三 さて耶穌すぎこしの
節にエルサレムにありしにおほくの人かれのなせししるし
をみてその名をしんぜり 二十四 耶穌みづからをこれらにまか

せバそはすべての人をしりまし 二五 ひとのこゝろのうちを知
うゆゑは人はいとく證とさるゝものをもとめざるなり
第三章 ユダヤびとの宰にてバリサイの二コデモといへるひ
とあり 二 かれよる耶蘇にきたりていひけるハラビわれら
なんぢハ神よりきたりし師なるとしるなり神もし人とゝ
もあらずバなんぢがなせるこの休徵ハひとこれをなしこ
とあたはざれバなり 三 耶蘇こたへていひけるハまことにまことに
なんぢにつげん人もしあらたにうまれずバ神の國を
みることあたはじ 四 二コデモかれにいひけるハ人もや老ぬ
れバいかでかふたゝびうまるゝことを得んや母の胎

になんぢにつげん人は水と靈とによりてうまれざれば
神のくにゝはいることあたはざるなり 六 肉によりてうまるゝ
ものは肉なり靈によりてうまるゝものは靈なり 七 われ
爾はあらたにうまるべきことをいひしを奇とするなかれ
八 風はおのがまゝにふく。なんぢその聲をきけどもいづく
よりきたりいづくへゆくをしらず。靈によりてうま
るゝものもかくのごとし 九 ニコデモこたへていかでかゝる
ことあらんやといふ 十 耶穌こたへていひけるはなんぢは
イスラエルの師なるになほこのことをしらざるか 十一 まことに

に誠になんぢにつげん。われらしることをいひ見しことを
證するになんぢらはわれらのあかしをうけず、十二 もしわれ
地のことをいふもなんぢ信ぜずば、まして天のことをいは
んに何で信ずることを得んや 十三 天よりくだりし天にあ
る人の子のほかに天にのぼりしものなし 十四 モーセ野に蛇
をあげしごとく人の子もあげらるべし 十五 すべてこれを
信ずるものにほろぶることなくして永生をうけしめんが
ためなり 十六 それ神はそのうみたまへる獨子を賜ふほど世のひ
とを愛したまへり是はすべて之を信ずるものにほろぶ

たゞめんとにあらず。かれによりて世をすくはんがためなり
十八 かれを信ずるものハ罪にさだめられず信ぜざるもの
ハすでにその罪にさだめられたり。そハかみの生たまへるひとり
子の名を信ぜざるによる 十九 さばきの定るゆゑハ光よにき
たり。──ハ人その行のあしきによりてひかりを愛せずして。くら
みて暗をあいせしなり 二十 それ悪をなすものハ光をに
くみそのおこなひを責られざらんがためにひかりにきた
らず 二十一 眞理をおこなふものハその行のあらはれんがため
にひかりにきたる。それハ神によりておこなへるなり○ 二十二

のゝち耶穌(やそ)でしとユダヤの地(ち)にいたる。ともにかしこにとどまりてバプテスマをほどこせり 二三 ヨハネもまたサリムにちかきアイノムにおいてバプテスマを施(ほどこ)せり。そこに水(みづ)おほきがゆゑなり ひと〴〵きたりてバプテスマをうけたり 二四 このときヨハネはいまだ獄(ひとや)にいれられざりき 二五 ヨハネの門徒(でし)とユダヤびとゝきよめごとについてあらそひたりけるが 二六 かれらヨハネにきたりていひけるはラビ視(み)よなんぢとともにヨルダンのむかふにありてなんぢが證(あかし)せしそのバプテスマ施(ほどこ)すものはみなこれにきたれり 二七 ヨハネこたへていひけるはひとは天(てん)よりたまふにあらざればうけつることあたは

はさゝるなり われハキリストにあらずそのさきに遣さ
れしものなりといひしことを證するものハなんぢらなり
廿九 新婦をもてるものハ新郎なり されど新郎の友たちてその
こゑをきゝてこれがためによろこびおほいなり 我いまの
喜みちたることをえたり 三十 かれハかならず盛になり われハ
かならずおとろふべし 三一 天上よりきたるものハ萬物の
うへにあり 地よりいづるものハ地に屬しそのいふところも
地のことなり 天よりきたるものハばんぶつの上にあり 三二
かれハみづから見しところ聞しところのことを證すと
いへどもそのあかしをうくるものなし 三三 その證をうけしも

のハ印をおして神の眞なることをたしかにしも 三四 神のつかはせ
しものハ神のことばをかたるそは神これに靈をたまひて
かぎりなければなり 三五 父ハ子をあいして萬物をその手に
さづけたまへり 三六 子をしんずるものハかぎりなき生命をえ子に
したがはざるものハいのちを見ることをえずかへつて神の怒その
うへにとゞまらん

第四章 一 主おのれ門徒をとれることまさるバプテスマほどこ
こせることヨハネよりもおほしとパリサイの人のきゝし彼
しるに 二 されどそれ實ハいえすみづからバプテスマをほどこ
せるにあらず彼の門徒これをなせるなり 三 ユダヤをさりて
またガリラヤにゆく 四 サマリアをへざるべからざりしかバ

さりてまたガリラヤにゆく サマリアを歴してゆくことあ
たれバ 五 つひにサマリアのスカルといへる邑にいたれり。此
のまちハヤコブその子ヨセフにあたへし地にちかゝりし 六 こ
こにヤコブの井あり 耶穌たびのつかれにてそのゐどのか
たはらに坐せり。ときハひるの十二時ごろなりき 七 ひとり
のサマリアの婦みづをくまんとてきたりければ耶穌そのを
んなにむかひてわれに飲せよといふ 八 そはでしたち食物
買はんために邑へゆきてをらざりしゆゑなり 九 サマリア
のをんないひけるハなんぢハユダヤ人にしてなんぞサマリア
の婦なるわれにのむことをもとむるや。こハユダヤびとと

サマリアの人とハまじはりをせざれバなり 十 耶蘇こたへて
いひけるハなんぢもし神の賜とわれにのませよといふも
のゝ誰なるをしらバなんぢそれにもとめん。さらバ活るみ
づをなんぢにあたへべし 十一 をんな耶蘇にいひけるハ主よ
つるべなく井もまたふかしなんぢいづくより汲てそのい
ける水をもてるかの 十二 この井ハわれらの先祖ヤコブのあた
へしところなりかれもその子も畜までもみなこれを
のみたるがなんぢハ彼よりもまされるものならんや 十三 耶蘇
こたへていひけるハすべてこの水をのむものハまた渇ん
十四 しかれどもわがあたふる水をのむものハ…

きことなし　わがあたふる水ハそのうちにて泉となり湧いでゝかぎりなきいのちにいたるべし
十五 をんないひたるハ主よわがかわくことなくまたこのところに水をくみにきたらぬためそのみづをわれにあたへよ
十六 耶穌いひたるハなんぢゆきて夫をよびきたれ
十七 婦こたへていひたるハわれハ夫なし。いゑすハいひたるハをつとなしといへるハ理なり
十八 それハなんぢさきに五人のをつとありて今あるものもなんぢの夫にあらずなんぢのいひしハ眞なり
十九 をんないひけるハ主よわれなんぢを預言者としれり
二十 われらの列祖ハこの山にて拜せしになんぢらハ拜すべきところハ

エルサレムなりといふ 二一 耶穌いひけるはをんなよわれを信ぜよたゞこの山のみにあらず。またエルサレムのみにもあらずしてなんぢら父をおがむべき時きたらん 二二 なんぢら拝むる者の誰なんぢらはしらずわれらの拝する者をわれらはしる。それ救はユダヤびとよりいづるがゆゑなり 二三 まことの拝するもの靈と眞とをもてちゝををがむる時きたらん今すなはちそれなり。それ父はかくのごとくをがむるものを要めたまふ 二四 神は靈なればこれを拝するものも靈とまことゝをもてをがむべきなり 二五 婦いひけるはキリストととなへらるゝメッシヤのきたらんことをしる。この人来らばすべてのことを

居てのことはりをしらしめん　耶蘇いひけるはなんぢと
かたるところの我はそれなり 二七 ときに門徒きたりてこれ
のをんなとかたれるを奇みたれどそれなにをもとむるやま
たなにゆゑこれとかたれるとゝふるものもなかりき 二八
婦そのみづ瓶をのこして邑にゆきひとぐにいひけるハ 二九
わがすべてなせしことを我につげし人をきたりてみよこ
れキリストならずや 三十 こゝにおいて人々まちをいでゝ耶蘇
のもとにきたる 三一 そのあひだに門徒これに請てラビ食し
たまへといひければ 三二 耶蘇これにいひけるはわれにはな
んぢらのしらざる食物あり 三三 でしたちたがひにいひけるは食

物をこのわれにおくりしものも誰なるや 三四 耶蘇これらにいひ
けるハ我をつかハせしものの旨をおこなひその工を成し
とぐるこれわれが糧なり 三五 なんぢら穫時になるまでハなほ四
月あるといはずや われなんぢらにつげん目をあげてみよ
はや田ハいろづきてかりいれどきになれり 三六 獲ものハそ
の工錢をうけて永生にいたるべき實をあつむ このゆゑに播もの
とかるものとともによろこばん 三七 これハまきこれハ獲
といへるハこれにつきてまことなり 三八 われなんぢらの勞
せざりしところをからせんとしてなんぢらをつかハせり
他のひとびと勞せしよりなんぢらハそのらうしたる果と

つげたり かの婦すべてのなせしことをわれにつげたり
たりと証せしことばによりてその邑のサマリア人おほく
耶穌を信ぜり 四十 さればサマリアの人耶穌のもと
にきたりてともにとゞまり給んことをねがひしかば
イエスそこに二日とゞまれり 四一 彼のことばによりて信ぜ
しものさきよりもおほかりき 四二 かれら婦にいひけるハ今
なんぢのいひしことばによりて信ずるにあらずわれらみづ
からきゝて此ハまことに世のすくひぬしとしれバな
り○ 四三 二日ありて耶穌こゝをさりガリラヤにゆけり 四四 そハ
かれみづから預言者ハふるさとにてたふとばれざることな

しといひしによる 四五 ガリラヤにいたりしときガリラヤのひとびとかれを接たりそれはさきに節筵のとき耶蘇のエルサレムにておこなひしすべてのことをこれらもそのいはひにゆきてこれをみられたればなり 四六 耶蘇またガリラヤのカナにいたる、さきにこゝは水をさけとせしところなり、ときに王の直臣その子やまひにかゝりてカペナウンにありければ 四七 耶蘇のユダヤよりガリラヤにきたれることを聴きてきたりて耶蘇のもとにゆきてカペナウンにくだりその子をいやしたまはんことをこふそはその子死ぬるばかりなりければなり 四八 耶蘇これにいひけるはなんぢら休徴とことなるわざをみずば信ぜじ

これにいひけるハ主よわが子のしなざるさきにくだりた
まへ 五十 耶蘇いひけるハ往なんぢの子ハいくるなり。その人
い耶蘇のいひしことばを信じてさりぬ 五一 くだるときその僕
どもかれにあひてつげけるハなんぢの子ハいくるなり。か
れその愈そめし時をかれらにたづねければ。こたへてきの
ふひるの一時に熱さめたりといふ 五三 父ハ耶蘇のなんぢが
子ハいくるなりといひたまひしときその時のおなじき
としりてみづからおのれとその全家こぞりて信ぜり 五四 こ
の第二次のことハあるまゝに耶蘇ユダヤよりガリラヤにいでき
たりてなせるなり

第五章 そののちユダヤ人のいはひありければ耶蘇エルサレム
にのぼりき 二 エルサレムの羊門のほとりにはヘブルのことばに
てベテスダといふ池ありこのいけはいつゝの廊あり 三 そのうち
なかには病者めしひ跛者またおとろへたるものなどおほく
ふしゐて水のうごくをまちをる 四 それは天使ときどき池にくだり
てみづを動すことあり水のうごけるのち先にいけにいり
しものはなにのやまひなりともいえたり 五 三十八年やみ
たるもの一人ここにあり 六 耶蘇かれがふしたるをみて
その病のひさしきをしりこれにいひけるは愈んことを欲
がふや 七 やめるものこたへけるは主よみづのうごかするとき

われを扶ていけにいるゝ人なしわれいたらんとするときハ
他のひとくだりて我よりさきにいる 八 耶蘇これにいひけ
るハ起よねどこをとりあげてあゆめ 九 その人たちどころ
に愈てすなはちねどこをとりあげてあゆめり。この日ハあん
そくにちなりき 十 ユダヤ人いえしものにいひけるハ。けふ
ハ安息日なれバなんぢねどこをとりあぐるハよろしから
ず 十一 かれらにこたへけるハ我をいやせしものわれにねど
こをとりあげて行といひたり 十二 かれらたづねけるハなんぢ
に臥牀をとりあげてあゆめといひし人ハたれなるぞや 十三
いえしものそれハ誰なるをしらざりき。そハそのかしこにおほく

の人(ひと)あまたありしゆゑ耶蘇(いゑす)さけられたなり 十四 その後(のち)いゑす聖殿(みや)にてその人にあひいひけるは視(み)よなんぢはいえきまたと罪(つみ)をおかすことなかれ。おそらくはさきにまされる災禍(わざはひ)なんぢはこうむらん 十五 その人(ひと)ゆきてユダヤびとらにおのれをいやせしものは耶蘇(いゑす)なりとつぐ 十六 こゝにおいてユダヤ人(びと)いゑすを窘迫(せめ)てころさんとはかる。それかれがこれらのことをなせしは安息日(あんそくにち)なるゆゑなり 十七 耶蘇(いゑす)これらにこたへけるはわが父(ちゝ)はいまにいたるまではたらきたまふ我(われ)もまたはたらくなり 十八 これによりてユダヤびといよいよ耶蘇(いゑす)をころさんとはかる。そはあんそくにちを犯(をか)すのみならず[illegible]

おのれのちゝといひ己をかみとひとしくしたればなり こ
のゆゑに耶穌かれらにこたへていひたまひけるは誠に
なんぢらにつげん子はちゝのおこなふことをみて行ふの外
みづからなにごともおこなふことあたはずおよそ父の
おこなふことを子もまたおこなへるなり 二十 ちゝは子を愛
しみづからおのれのおこなふところをことごとくこれに示しまたな
んぢらをしてあやしましめんためにこれよりもさ
らに大なることをこれにしめさん 二一 それちゝは死しものを
起よみがへらせていのちをえさしむるがごとく子もおのれのお
こゝろにまかせて人をいのちをえさしむべし 二二 それ父はたれを

とさすべての審判はすべて子にゆだねたり 二三 これすべての
人をして父をうやまふごとく子をもうやまはしめんがた
めなり子を敬はざるものはこれを遣せし父をうやまは
ざるなりまことにまことになんぢらにつげん我ことばを聴われ
を遣せしものを信ずるものは永生をたもち且さばき
にいらずして死よりいのちにうつれり 二五 まことにまことになんぢ
らに告んしにしもの神の子のこゑをきかんとききたらん。い
まその時なるぞきゝしものはいきべし 二六 それ父は
みづから生をたもてり。そのごとく子にも賜てみづからい
のちをたもたせたまへり 二七 また人の子たるによりて審判をおこなふ権を

さばきをするの權威をあたへたまへりこれをあやしむことな
かれそハ墓にをるものハみなその聲をきゝていづるときき
たらんそのすでにあり　二九 善をなせしものハ生をうるよみ
がへりを惡をなせしものハつみを得るよみがへるべし　三十 わ
れなにごともみづから行ことあたはずきくところにし
たがひて審判をなすわがさばきハ公平なりそハ我みづからのむねをおこ
なはんとせず我をつかはせし父のむねをおこな
はんことをもとむればなり　三一 もしわがことを我みづからあ
かしせバそのあかしハ眞ならず　三二 別にわがことをあかしする
ものありそのわがことをあかしする證のまこと

なるをしる 三三 なんぢらさきに人(ひと)をヨハネにつかはせしに
かれ真理(まこと)のためにあかしをなせり 三四 されどわれ人(ひと)のあか
しをうけずばこのことをいふはなんぢらのすくはれんが
ためなるを 三五 ヨハネはもえてひかれる燈(ともしび)なり。なんぢらは
このんで暫(しばら)くそれひかりをよろこべり 三六 われはヨハネよりお
ほいなるあかしあるぞ。そは父(ちゝ)のわれに賜(たまひ)てなしとげしむる
事(わざ)すなはちわがおこなふところのわざそれ父(ちゝ)のわれを
つかはせしことゞ證(あかし)すればなり 三七 また我(われ)をつかはせしちゝ
もわがことをあかしせり。なんぢらいまだその聲(こゑ)をきかず
かつまだそのかたち形(かたち)をみで 三八 そして首(ことば)はなんぢらのうちにすまず

らざるなりそはなんぢらそのつかはせしものを信ぜざるに
よりてしかるなり 三九 なんぢら聖書（せいしよ）にかぎりなきいのち
ありとおもひてこれを探索（さぐ）るこのせいしよはわれについて
あかしするものなり 四〇 なんぢらわがもとにきて生（いのち）をえんがた
めきたるをこのまず 四一 われひとの榮（あがめ）をうけず 四二 われなんぢ
らを識（し）るなんぢらはそのこころに神（かみ）をあいするの愛（あい）あ
らざるなり 四三 われはわが父（ちち）の名（な）によりてきたれどもなんぢ
ら我（われ）をうけず もし他（ほか）のひとおのれが名（な）によりてきたらば
なんぢらこれを接（うけ）ん 四四 なんぢらたがひに人（ひと）のあがめを
うけて神（かみ）よりいづる榮（あがめ）をもとめざるものなるにいかでよ

く信ずることをえんや 四五 なんぢら我ちゝに訴るものとま
れ我おもふなかれ。なんぢらをうつたふるそのひとあり
即ちなんぢらが恃ところのモーセなり 四六 もしモーセを信
ぜばまたわれをしんずべし。そはモーセわがことを書たればな
四七 されどモーセのかきしことばをしんぜずばいかでわがい
ひしことを信ぜんや

第六章 このゝち耶穌ガリラヤの湖すなはちテベリアのみづう
みのむかふへ済しに 二 おほくのひとびとこれにしたがふ。そ
はこれがやみしものをいやせし休徴をみしがゆゑなり 三 耶
穌やまにのぼりて門徒とともにそのところにざせり 四 ときに

ユダヤびとのまつりの節はちかかりし 五 耶穌目を擧てお
おほくの人のきたれるを見てピリポにいひけるはいづこよ
りパンを買ひてこの人々に食しむべきぞ 六 みづからそのなさ
んとすることを知りたれどもこれを試んがためにかくいへる
なり 七 ピリポこたへけるは銀二百のパンも人ごとにすこ
しづゝあたへてなほ足ざるべし 八 門徒のひとりなるもの
シモン ペテロの兄弟アンデレイエスにいひけるは 九 こ
ここにひとりの童子あり大むぎの餅いつゝとちひさき魚
ふたつをもてりされどこの多くの人にはいかばかりぞ
十 耶穌いひけるはひとびとをすわらせよそのところはあを

らくの草ありておよそ五千人ほどまゐりぬ 十一 耶穌パンをとりて祝謝してでしにわたし門徒これを人にあたふまたかくのごとくにしてちひさき魚どもひとびとのこのみにしたがひてこれらに與へり 十二 みな飽たるのち耶穌でしらにいひけるはすこしもうしなはざるやうにそのあまりの屑をひろひあつめよ 十三 これらが食せしそのいつゝの大麦のパンの餘遺のきれをひろひあつめたれば十二の筐にみてり 十四 ひとびと耶穌のなせししるしをみてまことに世にきたるべき預言者なりといふ 十五 こゝにおいて耶穌このものらがきたりてしひて己をとらへて王になさんとするを知

うみをわたりて十七舟にのりカペナウムに向てうみをわたれる。既にくれたれども耶穌かれらにきたらざれば大狂風ふくによりてやゝに海あれいだせり 十九 一里十町ばかりこぎいだせるとき耶穌のうみをあゆみふねにちかづくをみて門徒らおそれしに 二十 耶穌いひけるはわれなり懼るなかれ 二十一 こゝにおいてよろこびてかれを舟にのせたればたゞちにそのゆかんとせるところの地につきぬ○ 二十二 明日このなたのうみべに立しひとびとは門徒ののりし舟のほかにはふねなく、また耶穌もでしとゝもにふねにのらで門徒

のみゆけるをしる 二三 このときテベリアよりほかのふねきたり
て主のいのりてひとびとに餅をくはせしところのちかくに
つけるを 二四 ひとびと耶穌のこゝにあらず門徒もまたあらざる
をみてかれらも舟にのりて耶穌をたづねんためにカペナウム
にいたれり 二五 湖のむかふにてかれにあひいひけるはラビ
何時こゝにきたりたまひしや 二六 耶穌こたへていひけるも
誠にまことになんぢらにつげん なんぢらのわれをたづぬ
るも休徴をみしゆゑにあらずたゞパンを食してあきたる
がゆゑなるを 二七 なんぢらくちはつる糧のためにはたらかずして
永生にいたる糧をもとめよ人の子さづくるかてなりのは

れはよりてひとゞ耶蘇にいひけるハわれらいかなることを
なさバ神の工をおこなへるや 二九 いえすこたへてこれらに
いひけるハ神のつかはせしものを信ずるハすなはちその
わざなり 三〇 かれらいひけるハわれらをしてなんぢを信ぜ
しむるためになんの休徴をなしてわれらにみするや何の
わざをなすや 三一 われらのせんぞ野にてマナをくらへり
しるされしごとく天よりパンをこれらにあたへて食しむとあるが
ごとし 三二 耶蘇いひけるハまことにまことになんぢらにつげん
天よりパンをなんぢらにあたへしはモーセにあらず

今わがちゝハ天より眞のパンをもてなんぢらにあたふ 三三
神のパンハ天よりくだりて生命をよにあたふるものなり
三四 かれらいひけるハ主よつねにその餅をわれらにあたへ
よ 三五 耶蘇いひけるハわれハいのちのパンなり我にきたる
ものハうゑずわれを信ずるものハつねに渇ことなし 三六 さ
れど我なんぢらがこれをみても信ぜざることをなんぢら
につげたりき 三七 すべて父のわれにあたへしものみな我にき
たらん。きたるものハわれかならず出さゞるべし 三八
わが天よりくだりしハおのれのこゝろにまかせて行んため
にあらずわれをつかはしゝものゝ意のまゝをおこなはん

らせなりさて父のわれをおくりしものゝ意は凡て
うしなはず末日にこれをよみがへらしむるはわれをつかは
せし父のこゝろなり　四十　おほよそ子をみてこれを信ずる
ものハかぎりなきいのちを得させられまさとい末の日にこれ
をよみがへらしむることをつかはせしものゝ意なり
むなり　四一　こゝにおいてユダヤびとら耶穌のわれは天より
くだりし餅なりといひしことをつぶやき　四二　いひけ
るハこれが父母はわれらの識ところなるもこ
れをヨセフの子いえすにあらずやいまなんぞわれハ
天よりくだりしといふや　四三　耶穌こたへていひけるはなん

もろたがひに譏ことなかれ 四四 それがしつかハせし父もしひかざれバ人よくそれにきたる。なし 我ハきたるものを末日にそれこれをよみがへらすべし 四五 よげんしやの書ハひとみなをしへを神にうけんとあるされバこのゆゑにもべて父よりきゝて學しものハわれにきたる 四六 されど父がみしものハなし たゞ神よりきたるものゝみこれをみたり

四七 誠にまことにわれなんぢらにつぐ それがし信ずるものハかぎりなきいのちあり 四八 それハ生命のパンなり 四九 なんぢらのせんぞハ野にてマナをくらひしかど死り 五十 ちゝべて

餅なり 五一 われハ天よりくだりしいけるパンなり人もしこ
のパン餅をくらはゞかぎりなくいくべし我あたふるパンハ
わが肉なりよの生命のためにわれこれをあたへん 五二 こゝに
ユダヤびとたがひにあらそひいひけるハこの人いかで
その肉をわれらにあたへてくらハしむることをえんや 五三
耶蘇いひけるハまことにまことになんぢらにつげんもし人の子
の肉をくらハずその血をのまざれバなんぢらにいのち
なし 五四 わが肉をくらひわが血をのむものハ永生あり。われを
をハりの日にこれをよみがへらすべし 五五 それわが肉ハまこ
とのくらひものまたわが血ハまことののみものなり 五六 わが

にくをくらひわがちを飲ものハわれにをりわれもまたか
れに居る 五七 いける父われをつかはせり。ちゝによりてわがいけ
るごとく我をくらふものもわれによりて生べし 五八 これ天
よりくだれるパンなり。なんぢらの先祖がくらひたれどな
ほ死しマナのごときものにあらずこの餅をくらふものハ
かぎりなくいくべし 五九 これらのことを耶蘇カペナウムの會
堂においてをしへをなせるときいひしことなり 六〇 門徒らも
のうちおほくの人これをきゝていひけるハ此ハはなはだ
しきことなり誰かよくこれをきかんや 六一 門徒のこれにこ
とにつハつぶやくを[illegible]耶蘇[illegible]

けるハこの言によりてつまづくか もし人の子がもとゐし
ところに升をみバいかに 六三 生をあたふるものハ靈なり肉
ハえきなし。わがなんぢらにいひしをしへハみたまなり生命
なり。六四 されどなんぢらのうちに信ぜざるものあり。それ耶
蘇のはじめより志んぜざるものハ誰おのれをわたすも
のハたれといふことをはじめより志ればなり 六五 耶蘇また
いひけるハ。この故に我さきにわが父あたへざれバ人よ
くわれにきたるものなしといひしなり 六六 これよりのち其門
徒おほくうしろへゆきて耶蘇とともにあゆまざりき 六七 これ
によりていゑす十二のでしにいひけるハなんぢらもまた

さらんとおもふや 六八 シモンペテロこたへけるハ主よわれら
ハたれにゆかんや永生のことばをもてるものハなんぢなる
ぞ 六九 またわれら信じてしる。なんぢハいける神の子キリスト
なり 七十 耶穌これにこたへけるハ。我なんぢら十二人を
えらびしにあらずや。されどそのうちのひとりハ悪魔なり
七一 これハシモンの子イスカリオテのユダをさしていへるなり。
これハ十二のひとりにして耶穌をわたさんとするもの
ぞ

第七章 このことのゝち耶穌ガリラヤを廻めぐりユダヤのう
ちにめぐることをこのまざりき。そはユダヤびとかれを殺

んとはかればなり 二 さてユダヤびとの構廬のいはひちか
づけり 三 こゝにおいて耶穌のきやうだいこれにいひける
はなんぢの行ところのわざを門徒にもみせんがためにこゝか
らさりてユダヤにゆけ 四 それおのれを顯さんとしてひ
そかに事をなすものあらず。なんぢこれらのわざをおこな
はゞおのれを世に顯せよ 五 これその兄弟もかれを信ぜざ
るがゆゑなり 六 耶穌かれらにいひけるはわが時いまだい
たらずなんぢらのときは恒にそなはれり 七 世はなんぢら
をにくむことあたはずわれを惡む。それはかれらがおこなふ
ところはあしきとわれ證すればなり 八 なんぢらこの節に

のぼれわが時(とき)いまだいたらざれば われ今(いま)このいはひにのぼらず 九 かくいひてガリラヤにとゞまれり 十 その兄弟(きやうだい)のゆきしのち耶蘇(いゑす)もあらはならずしてひそかに節(せつ)にのぼる 十一 いはひのときユダヤびと耶蘇(いゑす)をたづねていひけるハかれはいづくにあるや 十二 衆人(ぐんじゆ)のうちにてかれにつきさゝめくのうたがひいひあらそく或(あるひ)ハこれを善人(よきひと)なりといひあるひとハいな民(たみ)をまどはすものなりといふ 十三 されどもユダヤびとを懼(おそ)るゝによりてあらハにかれがことをいふ人(ひと)なし○

十四 いはひのなかごろ耶蘇(いゑす)みやにのぼりて教諭(をしへ)をなせば 十五 ユダヤびとこれをあやしみいひけるハこの人(ひと)ハいまだま

なりしにいかにして書をしるや　耶穌これにこたへてい
ひけるは。わがをしふるところはわがをしへにはあらず我(われ)を
つかはせしものゝをしへなり　十七　人(ひと)もしわれをつかはせし
ものゝ旨(むね)をおこなはゞこのをしへの神(かみ)よりいづるかまた
おのれによりていふなるかをしるべし　十八　おのれよりて
いふものはおのれのほまれを求(もとむ)るなり。おのれをつかはせ
しものゝ榮(ほまれ)をもとむるものは眞(まこと)なり。その衷(うち)は不義(ふぎ)なし　十九
モーセなんぢらに律法(おきて)をあたへしにあらずや。されどなん
ぢらのうちひとりもこれを守(まもる)ものなし。なんぢらなにゆゑわれ
をころさんと謀(はかる)や　二十　ひとぐこたへていひけるはなんぢ鬼(おには)

まつのれざるぞ。されバなんぢら我を殺(ころ)さんとするらんや 二一 耶蘇(いえす)
こたへてかれらにいひけるハわれさきに一事(ひとつのわざ)をなせしに
なんぢらこれを奇(あやし)とせり 二二 モーセなんぢらに割禮(かつれい)をさづけし
ハそのモーセよりいでしにあらずして列祖(せんぞ)よりいでしも
のならはせなり。これによりてなんぢら割禮(かつれい)をあんそく
にちにおこなふ 二三 人(ひと)もしモーセのおきてをやぶらざらん
ために安息日(あんそくにち)にこれをうくるときハ何(なん)ぞわれがあんそ
くにちにひとの全身(せんしん)をいやせしことを怒(いか)るや 二四 外貌(うはべ)に
よりて是非(よしあし)をさだむることなくおのれ義(ただしき)をもてさだむべし 二五 こ
のときエルサレムのある人(ひと)いひけるハこれかれらがころさ

んと[illegible]
てこれをとがむるものなし有司(つかさ)たちハこれをまことに
キリストなりと知(しる)ならん乎 二七 されどわれらハこの人のいづ
こよりきたりしをしる。されどキリストのきたらんときハ誰(たれ)も
その何處(いづこ)よりきたるをしるものなからん 二八 これによりて耶蘇(やそ)
ミやにてをしへをなしつゝ大聲(おほごゑ)によびいひけるハなんぢら
われをしりまたわがいづこより來(きた)るをしる。されど我(われ)ハおの
れよりきたれるにあらず。われをつかはせしものハ眞(まこと)
なるものにてなんぢらのしらざるところなり 二九 われハか
れを知(しる)てそれハかれより出(いで)かれハわれをつかはせしも

のあれバなり 三十 こゝにおいてかれら耶穌をとらへんとはかりき。されどその時いまだいたらざるゆゑに手だしをするものなかりき 三一 民のうちおほくの人これを信じていひけるハキリストのきたらん時そのなさんところの休徴このひとよりおほからんや 三二 パリサイの人たみどもの耶穌につきてこのくひそかなることをあまた聞きるをもち祭司のをさたちとパリサイのひとゝこれをとらへんとて下吏をつかはせり 三三 こゝにおいて耶穌いひけるハわれなほしばらくなんぢらとゝもに在てのちわれをつかはせしものにゆかん
三四 なんぢら我をたづぬるともあふべからずそのをるところ

…へきたることあたはざるべし　三五　ユダヤ人たがひにいひけるハわれらの遇(あふ)ざらんためハいづこへゆかんとするのギリシヤにちらしものゝゆきてギリシヤの人(ひと)をおしへんとするや　三六　彼(かれ)がかたりてなんぢらわれを尋(たづぬ)れどもあふべからず我(わが)をるところへなんぢらきたることあたはざるべしといひし言(ことば)ハなんぞや　三七　いはひのをはりの大(おほまつりひ)にはイエス立(たち)てよばゝりいひけるハ人(ひと)もしかわかバわれにきたりて飲(のめ)　三八　われをしんずるものハ聖書(せいしよ)にいへるがごとくその腹(はら)より活水(いけるみづ)かはのごとくながれいづべし　三九　このこといひしハおのれを信(しん)ずるものうけんとする

靈(みたま)を授(さづけ)られざりしぞ そハ耶穌(いえす)いまだ榮(さかえ)をうけざるまへなりしてみ
たまハまだくだらざればなり 四十 民(たみ)のうちにておほくのひとびと
このことばをききて これまことにかの預言者(よげんしや)なりといひ
四一 あるひハこれハキリストなりといひ あるひハキリストハ
ガリラヤよりいづべけんや 四二 聖書(せいしよ)ハキリストをダビデの裔(すゑ)
またダビデのすみし郷(さと)ベツレヘムよりいでんとあらはせしにあらず
やといふ 四三 かくて民(たみ)どもこれにつきてあらそひお
これたり 四四 そのなかにこれを執(とら)んとするものもありけれ
ど手(て)をくだすものなかりき 四五 下吏(したやく)どもさいしの長(をさ)とパリ
サイの人(ひと)のもとにかへりきたれば これら下吏(したやく)にいひけ

るハなんぞかれを曳きつれきたらざるや　しもやく答ていひし
るハいまだこの人のごとくいひしひとあらず 四十七 パリサイの
ひといひけるハなんぢらもまた惑されしや 四十八 有司またハパ
リサイのひとのうちにかれを信ぜるものあらんや 四十九 律法
をしらざるこのおほくのひとハ詛るべきものなり 五十 かれらの
うちの一人にて夜イエスにきたりしニコデモといへるもの
かれらにいひけるハ 五十一 それ人にきかずその行をしらざる
さきにその罪をさだむるハわれらの律法ならんや 五十二 かれ
らこたへていひけるハ爾もまたガリラヤよりいでしものか
なるか　尋よ　よげんしやハガリラヤよりいづることなし

五三 こゝにおいておのおの家にかへれり

第八章 一 いゑすは橄欖山にゆきたり 二 よあけにまた聖殿にいりたまふに民みなそのもとにきたりければすわりてかれらに教へ給ふ 三 こゝに姦淫をおこなふときとらへられし婦ありしをがくしやとパリサイの人これを耶穌のもとにつれきたり群集のなかにおきていひけるは 四 師よこのをんなは姦淫をおこなひをる時執られしものなり 五 このたぐひのごときものを石にてうちころすべしとモーセ律法のうちにいへり 然ばなんぢはいかにいふや 六 かくいひつるは耶穌をこゝろみて訟のいとぐちをひきいださんとおもへるなり 耶

き身をかゞめゆびにて地にものかきたまふかれらこれをくりかへしとひ
まうふまより耶穌おきてこれにいひたまひけるハなんぢらのう
ち罪なきものまづこれをいしにて撃べしといひ 八 また身
をかゞめてもまた畫ぬ 九 これらこれをきゝてその良心にせ
められ老しよりはじめわかきものまでひとりびとりいで
ゆきたゞ耶穌ひとりのこる。をんなハあのまゝなかのまに
てゐ 十 耶穌起てをんなにいひたまひけるハ婦よなんぢをうつたへ
くしものハいづこへゆきしやなんぢの罪をさだむるもの
のなきか 十一 をんないひけるハ主よたれもなし耶穌これに
いひたるハわれもなんぢのはたみを定めず。ゆきてふたゝび罪

ばせくのにあくのれ〇 十二 耶蘇またひとゞにつげていひける
もわれハ世のひかりなりわれにしたがふものハくらきな
かをあるかずば生のひかりをうるなり 十三 ここにおいてハり
サイの人いひけるハなんぢみづからおのれの證をなせ
りなんぢのあかしは眞ならず。十四 耶蘇こたへていひたるえ
われみづから己のあかしをなすともその證ハまことなり。そ
へわれハいづくよりきたりて何處へゆくをしれバなり。なんぢ
らハわがいづくより來りいづくへ去をしらざるなり 十五 なんぢ
らハ肉によりて人のつみをさだむ われハひとを罪とさだ
めず 十六 されどもし定むわがさだむるところハ眞なり。そハわ

我ひとりならず われハ我をつかハしゝ父とともなれバなり
なり 十七 二人(ふたり)のあかしハまことなりとなんぢらのおきてにも
しるされたり 十八 われが證(あかし)をなすものハわれなりわれを遣(つかハ)せ
しちゝもまたわがあかしをなすなり 十九 かれらいひけるハ
なんぢが父(ちゝ)ハいづくにあるや 耶穌(いえす)こたへけるハなんぢら
ハわれをしらず また我ちゝをもしらざるなり もしわれを
識(しり)たらバわが父(ちゝ)をもしりたるならん 二十 耶穌(いえす)これらの
ことバをみやの中(うち)さいせんのはこおかるゝところにてかた
りけれどもこの時(とき)ハまだいたらざれバたれも手(て)をいださゞれ
ばものなかりき 二 耶穌(いえす)またいひけるハわれ往(ゆか)んなんぢらを

われを尋べしなんぢらおのれが罪にしなんわがゆくところへはなんぢらきたることあたはざるなり
二二 これによりてユダヤびといひけるはわが往ところへなんぢらきたることあたはずといへるは。おのれを自殺せんとするかの
二三 耶穌かれらにいひけるはなんぢらは下よりいでわれは上よりいづ。なんぢらはこの世よりいでわれはこの世よりいでず
二四 このゆゑになんぢらはおのが過のつみに死んとわれいひしなり。なんぢらもしわれの彼なるをしんぜざればおのれの罪にしなん
二五 かれらいひけるはなんぢはたれなるや耶穌い

なりされどなんぢらにつきていふべきことおほし罪をさだむべきこと多端あり。されどわれをつかはせしものハ眞なり。ゆゑにわれハきゝしことをわれ世につぐ 二七 これハ父をさしていひしなることをかれらハさとらざりき 二八 このゆゑに耶蘇かれらにいひけるハなんぢら人の子をあげしのち我のそれなるをしらむ。またわがみづからなにごとをもなさずわが父のをしへにしたがひてこれらのことをいへるをしるべし 二九 われをつかはせしもの我とともにあり。ちゝハわれをひとりおきたまはず。そハわれ恒にかれのこゝろにかなふことをおこなふなり 三十 耶蘇このことをいひつるときおほくの人の

れバしんせうを 三一 耶蘇おのれを信せしユダヤびとにいひけ
るハなんぢらもしわがことばに居ばまことにわがでしなり
また 三二 まことをしらん眞理ハなんぢらを自由をえさせ
べし 三三 かれらこたへけるハわれらハアブラハムのすゑなり
いまだひとの奴隷となりしことなしなんぢらを自由をえ
させべしと爾のいひしハいかなることぞ 三四 耶蘇かれらに
いひけるハまことにまことなんぢらにつげん悪をおこ
なふものハあくの奴隷なり 三五 奴隷ハいつも家にをらず
子ハいつも居 三六 このゆゑに子もしなんぢらを自由とあらさ
へなバなんぢら誠に自由なるべし 三七 われなんぢらが

アブラハムのすゑなるをしるされどもわれをころさんとすこれ
ハわがことばなんぢらの衷にあらざれバなり 三八 われハわ
が父とともにありて見しことをいひ、なんぢらハなんぢら
のちゝとともにありてみしことを行ふ 三九 これにこたへて
耶蘇にいひけるハわれらのちゝハアブラハムなり 耶蘇いひ
けるハなんぢらもしアブラハムの子ならバアブラハムのわざを
おこなふべし 四十 さるにいまなんぢらハ神にきゝし眞理を
とつぐるわれをころさんとすこれアブラハムのわざには
あらざりし 四一 爾儕ハなんぢらの父のわざをおこなふなりかれ
らいひけるハわれらハ奸淫によりてうまれず只ひとりの

ちゝあり、すなはち神なり 四二 いゑすかれらにいひたまふハ神もしなんぢらの父ならば なんぢらわれを愛すべし われハ神よりいでゝきたれバなり それわれハおのれよりてきたるにあらず 神われをつかはしたまへるなり 四三 なんぢらなんぞわがいふ言をさとらざるや それわがをしへをきくことを得ざればなり 四四 なんぢらの父あくまより出てそのちゝの慾をおこなはんことをこのむ かれハはじめより人をころせしものなり 眞理にをらず それかれの衷にまことなければなり かれが謊をいふときハおのれよりいふ そいかなればそハかれハ謊者にしてまたいつはりの父なればな

ま四五われ眞理をいふによりてなんぢらわれをしんぜじ
なんぢらのうち誰かわれをつみにさだむるものあるやわ
れなんぢらにまことをつぐるになにゆゑにわれを信ぜざる
四七神よりいでしものハ、かみのことばを聽なんぢらのき
かざるハ神よりいでざるによりてなり四八ユダヤ人こたへ
ていひけるハなんぢハサマリアのひとにして鬼につかれたる
ものなりとわれらがいへるハ宜ならむや四九耶穌こたへて
いひけるハわれハおにゝつかれたるものにあらずわれハ
わが父をたふとびなんぢらハわれをかろんずるなり五十わ
れハみづからの榮をもとめずこれを求るの罪をさだむる

こゝろみそのはかり 五一 われまことに誠になんぢらにつげん
人もしわがことばをまもらバ、かぎりなく死をみざるべし
五二 ユダヤびと彼にいひけるはいまわれらなんぢが鬼につ
つきてるものなるをしる アブラハムもすでに死また預言者も
しねりしかるになんぢ云ひともしわがことばをまもらへ
かぎりなく死じと 五三 なんぢハわれらの先祖アブラハムより
もまされるものならんやアブラハムもすでに死よげんしやた
ちもしねりなんぢみづからを誰とするや 五四 耶蘇こたへけ
るハわれもしみづからあくがるならばわが榮をもとむるし我
わがむるものハわが父なるをなんぢらのわが神とに

なふるところのものなるを なんぢらハこれをしらず され
どこれを識われもしこれをしらずといはゞなんぢらのご
とき誑者となるらん。されどわれハこれをしりてその道を
まもるなり 五六 なんぢらのせんぞアブラハムハわが日をみ
んことを喜まさこれをみてたのしめり 五七 ユダヤびとこれ
にいひけるハなんぢいまだ五十にもならざるにアブラハム
をみしや 五八 耶穌これらにいひけるハまことに〱なんぢら
につげん我ハアブラハムのあらざりしさきよりあるものなり
五九 こゝにおいてひと〲これを撃んとて石をとれど耶穌ハ
かくれてそのなかをとほり聖殿をいでゆけり

第九章

耶蘇ゆくときうまれつきなる瞽者をみしが 二 その門徒かれにたづねていひけるハラビこのひとのめしひに生しハこれの罪なるやおのれによるかまた二親によるかの 三 耶蘇こたへたるハこのひとのつみにあらず亦そのふたおやの罪にもあらずこれによりて神のわざのあらはれんためなり 四 晝のうちハわれらのあらば我をつかはせしものゝわざをなすべきなり夜きたらんそのとき誰もわざをなすことあたはざれ 五 われ世にをるうちハよの光なり 六 このことをいひて地につばきし唾にてつちをときその泥をめしひの目にぬり 七 これにいひたるハシロアムの池にゆきてあら

へかれゆきてあらひて目みることをえてかへりきたれり
シロアムハこれを譯せばつかはされしものといふ義なり 八 隣の
ひとびとおよび素よりかれの乞食なりしをみしものどもい
ひけるハこれハすわりて物をこひし人ならずや 九 あるひ
とハこれなりといひあるひとハ似たるなりといふかれい
ひけるに我それなりと 十 かれらいひけるハなんぢの目を
いかにしてひらきたるや 十一 こたへていひけるハ耶穌といふ
ひと土をとりきわがめにぬりていふシロアムのいけにゆきて
あらへとわれゆきてあらひければ目みることを得たり 十二 ひと
びとかれにいひけるはこれはいづくにあるやこたへてし

らいばといふ　十三　うわろこの瞽なりしものをパリサイのひとゝにつれましらはひきいたれを　十四　つちねりしとき耶穌これが目をあけし日はあんそくまちなりき　十五　パリサイもひとゝも彼はどうしけるはなんぢのめはいくのましてあきたるやと答たるはこれどろ紙まくのめに置られそれをあらひて見ること能えたり　十六　あるパリサイのひとゝいひけるはこの人安息日をまもらざるとのゆゑは神よりいでしはあらじあるひといひたるも罪人いかでこのしるしをおこなふこと能得んやとことはおいてこれらあらそひわかれあり　十七　復めしひはいひたるはなんぢの目をあけしはよりなんぢこれのことをなんと

いふやこたへて　かれハこのまへにて預言者なり　十八　ユダヤびとかれ
のめしひなりしに見うるやうなりしことを　その二親をよ
びきたるまでハ信ぜざりき　またもちふるさおやをよびきたりて
十九　かれらとひたるそこの人をめしひにてうまれしといふと
ころ汝らの子なるか　いまいかにしてみることをうるえ
ふるや　二十　二親かれらにこたへけるハこれハわが子なると
うまれつきの瞽なることを知れる　二十一　されど今いかにしてめお
きよなりしかゝれらハ知らず　亦その目をあけしハ誰な
るかを知らず　かれハおとななりかれにたづねよかれみづか
らいふべし　二十二　二親のかくいひしハユダヤびとをおそれし

をそるゝ、そハ耶蘇がキリストといひあらはすものあらば會堂よ
りいださるべしとユダヤびとたがひにいひさだめたればなり
二三 ふたおやのこれハ年長なりかれにたづねよといひし
ハこのゆゑなり 二四 めしひなりしものをまたよびていひけ
るハなんぢ神に歸せよわれらハこの人のつみびとなるを
しる 二五 かれこたへけるハつみびとなるや否やそれハわれ
しらず我ハめしひなりしがいまめあきたるなれバこの一事
をしる 二六 このものらまたいひけるハこのものハ爾になにをなせし
やいかにしてなんぢが目をあけしや 二七 こたへけるハわれ

きかんとするか。なんぢらもその門徒とならんとおもふや
二八 こゝにかれらのゝしりていひけるハなんぢハその人(ひと)のでしなれ
らハモーセの門徒(でし)なり 二九 神(かみ)のモーセにかたりしことハわ
れらしれり。されどこの人(ひと)のいづこよりきたれるものをわれ
らそしらぬ 三十 そのひとこたへけるハ此(これ)ぞあやしきことな
るに彼きてわが目(め)をあけしにそのいづこよりきたれる
をなんぢらしらずといふ 三一 神(かみ)ハつみびとにきかず。されど
神(かみ)をうやまひてその旨(むね)をおこなふものにハ聽(きき)たまふとわ
れらしる 三二 世(よ)のはじめよりこのかたうまれつきなる瞽(め)
者(ひ)のめをあけしひとあるをきかず 三三 もしこのひと神(かみ)より

いでざれバなにごとをもなしえざるべし 三四 かれらこたへて
いひけるハなんぢもことごとく罪孽(つみ)にうまれしものなるに
反(かへつ)てわれらををしふるか。つひにこれをおひいだせり 三五 か
れらの逐(おひ)いだせしことをきゝて耶穌(いゑそ)たづねてこれにあひい
ひけるハなんぢ神(かみ)の子(こ)をしんずるか 三六 こたへていひたる
ハ主(しゆ)よかれをしてわが信(しん)ずべきものハたれなるや 三七 耶穌(いゑそ)
いひたるはなんぢすでにかれをみる今(いま)なんぢとものいふ
ものハそれなり 三八 主(しゆ)よわれしんずといひてこれを拝(はい)せり
三九 耶穌(いゑす)いひたるはわれさばきせんために世(よ)にきたる。すな
はちみえざるものをして見(みえ)みゆるものをかへつてめしひ

とならしむ 四十 耶穌とともにをりしパリサイのひとこのことばを聞てかれにいひけるハわれらもめしひなるか 四十一 耶穌これにいひけるハなんぢらもしめしひならバ罪なかるべしされどいまわれら見といひしによりてなんぢらのつみハのこれり

第十章

一 まことによくなんぢらにつげん羊牢にいるに門よりせずしてほかよりこゆるものハ竊賊なり強盗なり 二 もんよりいるものハそのひつじの牧者なり 三 かど守これのためにひらき羊ハそのこゑをきく。こゝにおのれのひつじの名をよびてこれをひきいだす 四 これその羊をひきいだ

はとらき先(さき)にゆくありびひつじはおのれのこゑをしりてくれは従(したがふ)
五 ひつじも別人(ほかのひと)にはしたがはずかへつて避(にぐ)そハほかのものの
ゐこゑをしらざればなり 六 耶蘇(いゑす)これらにこの譬(たとへ)をいへどこの
かれらハそのかたらるゝところいかなる意(こゝろ)をしらざりき 七
この故(ゆゑ)に耶蘇(いゑす)またこれらにいひけるハまことまことなん
ぢらにつげんわれハすなはちひつじの門(もん)なり 八 すべてわ
れよりさきに来(きた)りしものハぬすびとなり強盗(がうだう)なりひつ
じそのこゑをきかざりき 九 我(われ)ハもんなりもしひとわれよ
りいらバすくはれこのち出入(でいり)をなして草(くさ)をうべし 十 ぬすび
とのきたるハぬすまんとし殺(ころ)さんとしほろぼさんとする

のほかなし。わがきたるハひつじをしていのちを得させかつゆ
たかならしめんとなり 十一 われハ善ひつじかひなり。よき
ひつじかひハ羊のためにいのちを捐 十二 ひつじかひにあら
ずおのがひつじをもたで只やとはれてひつじをまもるも
のハ狼のきたるをみればひつじをすてゝ逃おほかみひつ
じをうばひてこれをちらせり 十三 雇工のにぐるハやとはれし
ものなればその羊をかへりみざるによりてなり 十四 われハよ
き牧者にておのれのひつじをしる。またおのれのひつじに
しらる 十五 父われをしるごとくわれもちゝをしる。われひつ
じのために命をすてん 十六 われハこの牢にあらざるほかの

ひつじあまたあり。これらをもつれきたらん。かれらはわが聲を
きかん。つひにはひとつの群ひとつの牧者となるべし 十七 わが
ちゝはわれを愛す。そはわれふたゝび命をえんがためにいの
ちをすつるがゆゑなり 十八 我よりこれをうばふものなし。ま
れみづからこれをすつるなり。われこれをすつるの權能あ
またふたゝびこれをうるのちからあり。わがちゝよりわれこ
の命令をうけたり 十九 さてこの言によりてまたユダヤびと
あらそひわかれたり 二十 その中なるおほくのものいひける
は鬼につかれてくるふものなるになんぞこれに聽や 二一 ま
さ或いひけるはこれおにゝつかれしものゝことばにあら

が鬼ハめしひの目をあくることをよくせんや 二二 冬時み
やきよめのいはひのとき 二三 イエス聖殿のソロモンの廊をあ
るきたまふ 二四 ユダヤびとこれをとりかこみていひけるハ
なんぢいつまでわれらの心をうたがはするや爾もしキリストならば
あきらかにわれらにつげよ 二五 イエスこたへけるハわれなんぢ
らにつげしかどもなんぢら信ぜず我ちゝの名によりてわ
がおこなふ事ハこれわれについてあかしするなり 二六 されどなん
ぢら信ぜず。こハなんぢらにいひしごとくわが羊にあら
ざればなり 二七 わがひつじハわがこゑを聴われハかれらを
識るかれらハわれにしたがふ 二八 われかれらに永生をあたふこの

れらハいつまでもほろびず亦これをわが手よりうばふもの
なし 二九 われにこれらを賜しちゝハすべてのものより
も大なりまたたれもちゝの手よりこれをうばひうるものな
し 三〇 われとちゝとハ一なり 三一 こゝにおいてユダヤびと石
をとりてまたこれをうたんとせり 三二 耶蘇かれらにこたへ
けるハわが父よりうけてまたおほくの善事をなんぢらにみ
せしがそのうちいづれのことによりてわれをいしにて
うたんとするや 三三 ユダヤびとこたへていひけるハ石にて
うたんとするハよきわざのためにあらずなんぢ褻瀆
こゝ彼いひこうなんぢ人なるにおのれを神となすにより

てなり 三四 耶蘇こたへけるハなんぢらのおきてにわれいへるな
んぢらハ神なりとかゝれしにあらずや 三五 聖書ハやぶる
ことあたハず。もし神のことばをうけしものをかみといひしは
三六 父のきよめわかちて世につかはせし者をわれかみの
子なりといふをなんぞこれをけがれごといふとい
ふべけんや 三七 もしわれわがちゝの事をなさずバわれを信
ぜざることなかれ 三八 もしこれを行バわれを信ぜずとも其
のわざを信ぜよ。そハ父のわれにあり我の父にあるこ
とをなんぢらしりて信ぜんがためなり 三九 このゆゑにかれら復とらへ
んとしたりしが耶蘇その手をのがれさりけり 四〇 このくにて又

とヨルダンのむかふなるヨハネのバプテスマをほどこせしと
ころにゆきてそこにとゞまれり 四一おほくの人かれにい
たりいひけるはヨハネは休徴をなさゞれどもこの人につ
きてヨハネのいひしことはみな眞なり 四二こゝにおいておほ
くのひとこゝにてかれを信ぜり

第十一章 こゝに病者ありラザロといひてベタニアのひとなり
ベタニアはマリアとそのあねマルタのすめる村なり 二マリア
はかつて主ににほひあぶらをぬり己のかみのけをもて主
のあしをぬぐひしひとにてこのやめるラザロはこれが兄弟
なり 三このゆゑにその姉妹は遣はしのもとに主のあいするも

のやめりといひつかはせり　耶穌これをきゝていひしは
これは死るやまひにあらず神のさかえのためなり神の子
をしてこれによりて榮をえせしめんがためなり　五　それ
マルタとそのいもうとゝラザロハいえすの愛するところの
ものなり　六　このゆゑに耶穌そのやめるをきゝてこのところ
に二日とゞまり　七　そののち門徒にいひけるハわれらま
たユダヤにゆくべし　八　でしいひけるハラビ　ユダヤ人さき
ごろ石をもてなんぢをうたんとせしにまたかしこにゆ
きたまふか　九　耶穌こたへけるハ一日のうちに十二時あ
るにあらずや人もし日間あるこのバつまづくことなしそ

ハこの世のひかりをみるによりてなり 十 また人もしよる
あるくのハつまづくべし そハ光そのひとになきがゆゑなり
十一 耶蘇このくいひてのちでしにいひけるハわれらの友ラザロ
いねたりわれこれをさまさんためにゆくべし 十二 門徒いひ
けるハ主よかれもしいねしならバいえん 十三 耶蘇ハかれの
しにしをいへるなれどでしたちハ寝てやすめることゝいひ
へるなからんとおもへり 十四 このゆゑに耶蘇あきらかにかれ
につげていひけるハラザロハ死ねり 十五 なんぢらをして信ぜし
むるためにわれのそこにあらざりしを喜ぶされどいまかれの
ところにゆくべし 十六 デドモとよばるるトマスほかの門徒らにハ

いひたるハわれらもまたゆきてかれとともにしぬべし
耶蘇いたりてラザロがすでに墓にをさめられて四日なりしを
しれり 十八 ベタニアはエルサレムにちかし。その間ハお
よそ八七丁なり 十九 おほくのユタヤびとマルタとマリアがその兄
弟のことによりてなぐさめんとてすでにかれらのもとに
きたりゐたり 二十 マルタハ耶蘇きたれりときゝてこれをいで
むかふ マリアハなほ室にざせり 二十一 マルタいえすにいひたる
ハ主よこゝにいませしならばわがきやうだいハしな
じ 二十二 然どなんぢいまなほなんぢが神にもと
むることをばみな神なんぢにあたふとしる 二十三 耶蘇いひ

けるハなんぢのきやうだいハよみがへるべし 二四マルタいえ
すにいひけるハかれが末日(をはりのひ)のよみがへるべきときよみ
がへらんことを知るなり 二五耶穌(いえす)かれにいひけるハわれハ
復生(よみがへり)なり生命(いのち)なりわれをしんずるものハしぬるともいく
べし 二六すべて生(いき)てわれをしんずるものハ永遠(とこしなへ)しぬること
なしなんぢこれをしんずるや 二七かれ耶穌(いえす)にいひけるハ主(しゅ)
よしかりわれなんぢハ世(よ)にきたるべきキリストかみの子な
ることをしんず 二八かくいひてかへりてひそかにその妹(いもと)マリアを
よび師(し)きたりてなんぢをよびたまへりといふ 二九マリアこ
れをききいそぎたちて耶穌(いえす)のもとにゆけり 三十いえすハま

さむらにいらずマルタの迎しところにまだいましけりマリアと
なぐさめてともに室にをりしユダヤびとマリアが急ぎたちて
いづるを見てこれは墓にゆきてなげかんとていひつつ
これにしたがへり 三二 マリアいえすのところにきたり彼を
みてそのあしもとに伏していひけるは主よもしここにいませ
しならばわが兄弟はしなざりしものを 三三 いえすマリアの
哭泣とこれとともにきたりしユダヤ人のなくをみてこころ
にいきどほりみづからなやみて 三四 いひけるは汝ら何処にこれ
をおきしや。これらいひけるは主よきたりてみたまへ 三五 耶
蘇なみだをながしたまへり 三六 ここにおいてユダヤびとのひ

たるハ視[み]よいかばかりかれを愛[あい]せるものぞ 三七 そのうちなる人[ひと]いひたるハめしひの目[め]をひらきたるこの人[ひと]ましてかれを死[し]ざらしむることあたはざりしや 三八 耶蘇[いえす]またこゝろをいたましめて墓[はか]にいたる。はかハ洞[ほら]にてその口[くち]のところに石[いし]をおけり 三九 耶蘇[いえす]いひたるハいしをのけよ死[し]しもののきやうだいマルタいひたるハ主[しゆ]よこれハはや臭[くさ]ししにてよりすでに四日[よか]をへたり 四十 耶蘇[いえす]かれにいひけるハなんぢもししんぜバ神[かみ]のさかえをみるべしとわれなんぢにいひしにあらずや 四一 つひにその石[いし]をしにしものをおきたるところよりとりのけたり。いえす天[てん]をあふぎていひけるハ父[ちゝ]よ

までハわれハきけるをわれこゝろへとなんぢハ謂にまされるなんぢがつねにわれに聴ことをしる。しかるにわがかくいふハかたハらにたてる人をしてなんぢのわれをつかはせしことを信せしめんとてなり 四三 如此いひておほごゑにてよばひいひけるハラザロよいでよ 四四 死者ぬのにて手足をまかれ面ハてぬぐひにてつゝまれて出いゑすハこれらにいひけるハこれをときてあるかしめよ 四五 マリアとともにきたりしユダヤびと耶蘇のせしことをみておほくこれを信せり 四六 されどもそのうちにパリサイの人ハゆきて耶蘇のせしことを告つげしものあり 四七 さるにおいて祭司の長たちとパリサイ

のひとゝ議官をよびあつめていひけるハわれらいかにせ
べきやこの人おほくの志るしをなせばなり 四八 もしかれをこ
のまゝにすておかバ人ミなこれを信ぜんさらバロマの人
きたりてわれらの地をも民をもうばふべし 四九 そのうちの
ひとりにてこの歳のさいしの長なるカヤバといへるもの
かれらにいひけるハなんぢらハなにをもしらず 五〇 また
みのために一人しにて擧國ほろびざるハわれらの益なる
ことをもおもはざるなり 五一 この言ハおのれよりいでしにハ
あらずこの年の祭司のをさなるより耶穌の民の
ためにしぬることを預言せるなり 五二 たゞこのたみのた

めのみちに散たる神の子どもをひとつにあつめん
がためなり 五三 さてこの日よりしてかれら耶穌をころさん
ことをはかる 五四 この故に耶穌これよりあらはにユダヤ
びとの中をあるかずそこをさりて野にちかきところなる
エフライムといふまちにゆきて門徒とともにとゞまれり 五五
ユダヤびとの逾越のいはひちかづきければひと〴〵おのれ
が潔んがためすぎこしのいはひのまへに郷間よりエルサレム
に上り 五六 耶穌をたづね聖殿にたちてあひかたりいひ
けるはいかにおもふやかれも節はきたらざるかと 五七 さい
しの長たちとパリサイの人ともそれぞれ令をいだして耶穌の

ありかをしるひとあらば告べしといへり。これかれをとらへ
んとするなりけり

第十二章 逾越のいはひの六日まへ耶穌ベタニヤにいたる。さき
に死しにてよみがへらせしラザロのをるところなり 二 こゝに
ていそくあるひとびとこのところにて耶穌にふるまひをま
うくマルタ給仕をなせりラザロも耶穌とともに坐せるもののな
かの一人なり 三 マリアは眞正のナルダなるあたひたかきに
ほひあぶら一斤をもちきたりて耶穌のあしにぬりまつりてお
のが頭髮にてそのあしをぬぐへり。あぶらのにほひあまね
く室中にみてり 四 そのでしの一人なるイスカリヲテのユダ

きるハちち耶穌をわたさんとはかるものいひけるハこの香
膏となにゆゑ銀三百にうりてまづしきものにほどこさゞる
や 六 かれがこのごとくいふハ貧者をおもふにあらずぬすびとに
してかつ金嚢をもちそのうちにおさめたるものをとりさりしも
のあればなり 七 耶穌いひけるハかれにまかせおけわ
が葬の日にこれをまうけたり 八 まづしきものハ
つねになんぢらとともにあれどわれハ常になんぢらと
ともにをらず 九 おほくのユダヤびと耶穌がここにをるを知り
てきたる。ただに耶穌のためのみにあらずまたそのよみがへ
らせしところのラザロをもみんとおもへるなり 十 祭司

のをさたちラザロをもころさんとはかりける 十一 そはラザロゆゑ
これによりておほくのユダヤびとゆきて耶蘇をしんずる
がゆゑなり 〇 十二 あくる日おほくのひと〴〵節にきたりし耶
蘇のエルサレムにきたらんとするをきゝて 十三 棕櫚の葉をとりゆきてかれ
らをむかへホザナよ主の名によりてきたるイスラエルの王はさ
いはひなりとよばはり 十四 いゑす驢馬の子をえてこれに
のる 十五 しるしてシオンの女よおそるゝなかれ視よなんぢの
王はろばの子にのりてきたるとあるがごとし 十六 門徒らはじ
めはこれをさとらざりしが耶蘇さかえをうけし
のちにこれら此事はかれにつきてしるされまたこれらを

ひとく彼におこなひしことをおもひいだせり 十七 [illegible]の
ラザロを墓よりよびいだしよみがへらせしときこれと
ともにありしものども證をなせり 十八 この休徴をなせしこ
とを聞きしゆゑよりてひとびとかれを迎へるなり 十九 ここにお
いてパリサイの人たちたがひにいひけるはなんぢらがはかると
ころの益なきをしらずや。みよ世はこぞりてこれにあつまれり
○二十 禮拜のためいたりのぼれるもののうちにギリシヤの
人あり 二一 かれらガリラヤのベツサイダのひとなるピリポにき
たり求ていひけるは君よわれら耶穌にまみえんことをね
がふ 二二 ピリポきたりてアンデレーにつぐアンデレーまたピリポと

こたへに耶穌は彼ら 二三 いふにこれらはこたへていひけるやう
人の子さかえをうくべきときいたれり 二四 まことにまことになんぢ
らはつげん一粒の麥もし地におちてしなずばひと
つにてのこらん。もし死ばおほくの實をむすぶべし 二五 そのい
のちををしむものはこれをうしなひその生命をおしまざ
るものはこれを存てかぎりなきいのちにいたるべし 二六 人
もしわれにつかへんとせばわれに從ふべしされはつかふる
ものは我をるところにをらん人もしわれにつかふればわ
が父はこれを貴べし 二七 いまわがこゝろうれへいふべきな
に我いはんや父よこのときよりわれをすくひたまへといは

むん。否これがためにわれ此時にいたれるなり ねがはく
ハ父よなんぢの名のさかえをあらはせこのとき天より
こゑありてわれその榮をすでにあらはせり再これをあ
らはすべし 二九 旁邊にたてるひとびときゝて雷なりと
いふ。あるひとハ天のつかひかれにかたれりといふ
三十 耶穌こたへていひけるハこの聲ハわがためにあらで
なんぢらのためなり 三一 この世ハいま罪にさだめらる。この
よの主ハいまおひいださるべし 三二 われもし地よりあげら
れなば萬民をひきてわれにきたらせん 三三 如此いふハそのい
つるそのいかなるさまにて死んとするをしめせるなり

三四 人々(ひと〴〵)これにこたへていひけるハわれら律法(おきて)にてキリストハかぎりなく存(ぞん)するものなりときゝしになんぢ人(ひと)の子(こ)ハあぐべくあげられんといふハなんぞや此(この)ひとの子(こ)とハ誰(たれ)なるや
三五 耶蘇(いえす)かれらにいひけるハなほしばらくのあひだ光(ひかり)なんぢらとゝもにありひかりのあるうちにあゆみて暗(くらき)におひつかれざるやうせよくらきにあるくものハそのゆくべきをしらざれバ
三六 なんぢらひかりの子(こ)となるべきために光(ひかり)をあるうちにひかりをしんぜよ耶蘇(いえす)これらをいひをはりてかれらをはなれて隠(かくれ)たり○
三七 いえすかれらのまへにかくおほくの休徴(しるし)をなしつれどもなほかれをしんぜざりき
三八 こハ預(よ)

言者イザヤのいひしことばのかなはんためなりそのことばにイザ
そのいふられぞや主の手はたれにあらはれしやとあるがごとし
かくて 三十九 イザヤまたいふ。かれら目にて見ずこころにさとら
ずあらためていやさるることを得ざらんがためはこれそ
のめを瞽しそのこころを頑梗せりと。このゆゑはかれら信
ずることあたはざりき 四十一 イザヤそのさかえを見しよりかれ
についてこのことをかたれるなり 四十二 されど有司のうちのおほくは
おほくかれをしんぜしものもありしがパリサイの人をおそ
れてあらはに信ずるといはざりき。その會堂よりしりぞけ
られんことをおそれたるによる 四十三 これかれら神のほま

れより人(にん)のほまれをこのめるなり ○ 四四 耶蘇(いゑす)よばはりていひけるはわれを信(しん)ずるものはわれをしんずるにあらず我(われ)をつかはせしものをしんずるなり 四五 またわれを見(み)るものはわれをつかはせしものをみるなり 四六 われは光(ひかり)として世(よ)にきたれりすべてわれをしんずるものを暗(くらき)にをらざらしめんためなり 四七 人(ひと)もしわがことばをきゝてまもらざるともその罪(つみ)をさだめずわがきたりしは世のつみをさだめんためにあらず世をすくはんためなり 四八 われを棄(すて)わがをしへをいれざるものはつみを定(さだむ)るものありすなはちわがいひし言(ことば)はおはりの日(ひ)これがつみをさだむべし 四九 それわれお

のれよりいふにあらずわれをつかはせし父わがいふべき
こと我がいふべきことを命じたまへるなり 五十 そのめいじ
たまふところは永生なるをわれしる。このゆゑにわ
がいふところは父のつげたまふままにいへるなり

第十三章

すぎこしのいはひのまへに耶蘇この世をさりて父
にかへるべきときいたれるをしり世にあるおのれの民
をあいしておはりにいたるまでこれを愛せり 二 ときに
まこのれ晩飯のせきにつくあくまはすでに耶蘇をわたさ
んとするこころをシモンの子イスカリオテのユダといふもの
心におこさしめたり 三 耶蘇おのれの手にちゝのすべての

ものがたまひしことゝ神(かみ)よりきたりかみにかへることゝ
をしり 四 ゆふげの席(せき)からたちてうはぎをぬぎ手巾(てぬぐひ)をとりて
おしまはしたまひ 五 然(さう)してたらひに水(みづ)をいれ門徒(でし)のあしをあ
らひそのまとひたるてぬぐひにてふきはじめ 六 つひに
シモン ペテロにおよぶ ペテロこれにいひけるは主(しゆ)よなんぢに
この足(あし)をあらふの 七 耶穌(いえす)こたへていひけるはわがなすことを
なんぢいまはしらず後(のち)あれはしるべし 八 ペテロこれ
にいひけるはなんぢ断(たえ)てわがあしをあらふべからず 耶穌(いえす)
こたへけるはもしわれなんぢをあらはずはなんぢわれと
と下濟なし 九 シモン ペテロこれにいひたるは主よたゞにわ

…のみならず手と首をもあらひたまへ　耶穌いひけるは
すでにあらひたるものはあしのほかの濯(すゝぎ)におよばず。たゞしく
全(まつた)きよし。なんぢらも潔(きよ)されどもおの〳〵はきよきに
あらば
十一 こは耶穌おのれをわたさんとするものゝ誰なるを
しるがゆゑにことごとくはきよきものにはあらずといへるなり
十二 かれらの足をあらひしのちその上衣(うはぎ)をとりまたすわり
て、かれらにいひけるはわがなんぢらになせしことをし
るやいなや
十三 なんぢらわれを師とよびまた主とよぶ。なんぢらの
いふところはよし我(われ)はまことにこれなり
十四 われすでになんぢ
らの師また主なるになほなんぢらのあしをあらふ。

らもおのおのたがひに足(あし)をあらふべし 十五 それなんぢらは例(ためし)を
しめせり。これはわがなせしごとくなんぢらも行(おこな)しめん
ためなり 十六 それまことにまことになんぢらにつげん しもべはその主(しゆ)
よりおほいならず。また使者(つかひ)もこれをつかはしゝものより大(おほい)
ならず 十七 なんぢらもしこれをしりてかくのごとくならば
福(さいはひ)なり 十八 わがいひしところはなんぢらをすべて指(さす)にはあら
らず。われはわれをつくの選(えらび)しものとしる。しかれども聖書(せいしよ)にわれと
ともに食(しよく)するもの、われにそむきて踵(きびす)をあげしとしるされ
しことをかなはせんためなり 十九 その事(こと)のいまだならざるさきになんぢ
らわれを信(しん)じてキリストとせんためにそのことのいたらざ

る今よりこれをなんぢらに告 まことにまことになんぢらに一
げんきくがはつかはすものをうくるものは我をうくるなりわれを
接るものはつかはせしものを接るなり 二一 耶蘇このことを
我いひて心にうれへあらはしていひけるは誠にまことに
なんぢらにつげん一人なんぢらのうちにてわれをわたすも
のあり 二二 門徒たちたがひにこの我みあはせ誰をさしてい
へるかをさとりえず 二三 耶蘇のあいせるひとりのでし耶
蘇のむねによりそひゐたりしが 二四 シモンペテロこれにたれをさし
ていへるかをたづねよと首をもてしめせり 二五 い
かの懐によりそひしもの耶蘇にいひけるは主よたれなる

るゝの 二六 耶穌こたへけるハわれひとつまみの食物にものを濡てあたふる人もそれなりとてつひに一撮のくひものはものとつけてシモンの子イスカリヲテのユダはあたふ 二七 彼のひとつまみのものをうけしそのときサタナこれにいれりこゝにおいて耶穌これにいひけるハなんぢがなさんとすることハ速になせ 二八 これハなにゆゑにかくいひしぞとともに席をとるものどもの中なるものしらざりき 二九 あるひとユダハ金嚢をあづかれるゆゑ耶穌これにいひしハいはひについて用べきものをかはしむるなるらんこの亦ハまづしきものにほどこさしむるならんとおもへり 三十 さて彼ハひとは

まみのくひものをうけてたゞちにいでゆけり時はよるなりき 三一 かれのいでしのち耶蘇いひけるは今人の子さかえをうく神もまたかれによりて榮をうくるなり 三二 神もしこれによりてさかえをうくるときは神もまたみづからこれをさかえのうちにこれをさかえしむ直にこれをさかえしめん 三三 小子よわれなほしばらくなんぢらとゝもにありたらんなんぢらわれを尋んわがゆくところになんぢらはいたることあたはじと猶太人にいひしごとく今またこれをなんぢらにいふ 三四 われ新誡をなんぢらにあたふなんぢらあいあいすべしとはこれなり。わがなんぢらをあいせるご

とくなんぢらもあひ愛すべし 三五 なんぢらもし相あいせ
ばこれによりて人々なんぢらのわがでしなることを志る
べし シモンペテロかれにいひけるは主いづくへゆきたまふ
や耶蘇これにこたへけるはわが往ところへはなんぢらい
ましたがふことかなはじ後にわれにしたがふべし 三七 ペテロこれ
にいひけるは主よなにゆゑにいまなんぢに従ことかなは
ざるぞ。われはなんぢのためにわが命をすてん 三八 耶蘇これ
にこたへけるはなんぢいのちをわがために捐るやまことに
まことになんぢにつげん鶏なかざるまへになんぢ三次
われをしらずといはん

第十四章 なんぢら心はうれふることなかれ神をしんじまた
われを信ずべし 二 わが父のいへには第宅おほししからずば
われかねてなんぢらにこれをつぐべきなり我なんぢらの
ためにところを備にゆく 三 もしゆきてわれなんぢらの
ために所をそなへをまうけおきてなんぢらをわれは納べ
しわがをるところはなんぢらも居しめんとてなり 四 な
んぢらはわがゆくところをしりまたその途をしる 五 トマス
いひけるは主よわれらなんぢのゆくところをしらねば何に
してそのみちをしらんや 六 耶穌これにいひけるはわれは
途なり眞なり生命なり生もしわれによらざれば父のもとに

にゆくことあたはざりし 七 もしなんぢらわれをしらバまたわがちゝ
をも識べし いまよりなんぢらこれをしるなり已になんぢ
らかれをみたり 八 ピリボこれにいひけるハ主よわれらに
ちゝをあらはしたまへさらバ足り 九 イエスこれにいひけ
るハ ピリボ われ如此ひさしくなんぢらとともにをりしに
いまだわれを識ざるか われを見しものは父を見しなり な
んぞちゝをわれらにあらはせといふや 十 われ父にをりちゝ
のわれにをることを信ぜざるか わがなんぢらにいふ
ことばはみづから語るにあらずわれにをる父そのわざをな
せるなり 十一 われはちゝに居ちゝはわれにをるとわがいふを信ぜよ

ことを信ぜよ。もし しんぜずバ わざの事によりてこれを信ぜ

べし 十二 まことに〳〵なんぢらにつげん。これをしんずるもの

ハわがなすところの事をなさん。かつこれより大なること

をなすべし。そハわれが父へゆけバなり 十三 なんぢらすべ

てわが名によりてねがふところハ ことゞも我これを

なさん 父のさかえの子によりてあらはれんがためなり 十四

もしなんぢらなにごとにてもわが名によりてねがひなバ我

これをなさん 十五 もしなんぢらわれを愛するならバ わが誡

をまもれ 十六 われちゝにもとめん 父かならず別になぐさむ

るものをなんぢらにたまひて かぎりなくなんぢらとともに

はぢらあらむべし 十七 これはまことなる真理のこゝろなり世はこ
れをうくることあたはずそはこれを見ずまたしらざるに
よるされどなんぢらはこれを識そはこれなんぢらとゝも
にをりまたなんぢらの衷にをるべければなり 十八 われなんぢらを
すてゝ孤子とせず再なんぢらにきたらん 十九 しばらくせば
世われをみることなしされどなんぢらはわれを見るわれい
きるによりてなんぢらも生ん 二十 その日はなんぢらわれわが父に
をりなんぢらわれに居われなんぢらにをることをしらん
二一 わがいましめをたもちてこれを守るものはすなはち
われをあいするなりわれを愛するものはわが父にあいせ

らはわれもまたあれ我にいゝしてこれに自己をあらはさく
し 二二 イスカリオテならざるユダかれにいひけるは主よいか
にしてみづからをわれらにあらはし世にはあらはさゞる
や 二三 耶穌こたへていひけるはもし人われをあいせ
ばわがことばをまもらん。またわが父はかれをあいせん。われら
きたりてかれとともにすまふべし 二四 われを愛せざる者はわ
がことばを守らず。なんぢらのきくところのことばはわ
が言にあらずわれをつかはせし父のことばなり 二五 われな
んぢらとともにをりてこれらのことを我なんぢらにかたる
されど 二六 わが名によりて父のつかはさんとする訓慰師を

なはち聖霊もきたりてのこらずなんぢらにをしへ亦わがすべてなんぢらにいひしことをなんぢらにおもひいださしむべし 二七 われ平安をなんぢらにのこし。わが安をさづくなんぢらに予るところは世のあたふるところのごときにあらず。なんぢらこころに憂なかれまたく懼なかれ 二八 われはゆきてまたなんぢらにはきたらんとわがいひしことをなんぢらきけり。もしわれをあいせば父にゆくとわがいへることをなんぢらよろこぶべきなり。そはわがちゝはわれより大なればなり 二九 事をいまだ成ざるまへになんぢらにつぐ事あらんときはなんぢらこれを信ずべきためなり 三十

この後われおほくの言をもてなんぢらにかたらじ そは此の世の君きたる由なり彼はわれにかゝることなし 三一 されど我これをなすハわが父をあいし又その命ぜしところのごとくおこなふことを世にしらしめんがためなり起よいざこゝを去るべし

第十五章 われハまことの葡萄樹なり我父ハ農夫なり 二 われにをりて實をむすばざるえだハこれをきりとり又實をむすぶ枝ハこれをかりこむ。そハますゝおほく實をむすばしめんためなり 三 いまなんぢらハわがいひしことばによりて既にいさぎよし 四 なんぢら我に居るべし我もまた

なんぢらにをらん枝(えだ)もしぶどうのきにつらならざれバみ
づから實(み)むすぶことあたはず。なんぢらもわれにつらな
らざれバまたかくのごとくなるらん。五 われハぶどうの樹(き)な
んぢらハそのえだなり人(ひと)もしわれにをりわれまたこれに
をらバおほくの實(み)をむすぶべし。それもしなんぢら我(われ)をは
なるゝときハなにごとをもなしあたはざればなり 六 人(ひと)も
しわれにをらざれバすなはちすてらるゝ枝(えだ)のごとくそとにすてら
れて枯(かる)るなりひとこれをあつめ火(ひ)になげいれてやくべし
七 なんぢらもしわれにをりまたわがいひしこと[illegible]にを
らバすべてねがふところ求(もとめ)はあたへらるべし

しなんぢらおほくの實をむすばゞわがちゝこれによりて
榮をうくべし。されバなんぢらわが門徒なるべし　九　ちゝわれを愛
するごとくわれもなんぢらをあいせり。なんぢらわが愛に
をれ　十　もしなんぢらわがいましめをまもらバわが愛にを
らん。これわがちゝの誡をまもりてそのあいにをるがごとく
し　十一　われこのことをなんぢらにかたるはわが喜なんぢら
にありてなんぢらのよろこびをみたさしめんがためなり　十二
われがなんぢらを愛せるごとくなんぢらもまたたがひにあ
いすべし。これわが誡なり　十三　ひとその友のためにおのれの
命をすつるはこれよりおほいなるあいはなし　十四　すべてを

がなんぢらにめいずるところのことをおこなはゞなんぢ
らわが友なり　十五　いまよりのちわれなんぢらを僕といはず。
そはしもべはその主のなすことをしらざればなり。われさ
きになんぢらを友とよべり。われなんぢらはわが父よりき
きしところのことはことごとくつげしによる　十六　なんぢらわ
れを選ばずなんぢらをえらべり。これなんぢらをしてゆ
きて實をむすばせそのみをたもたしめんがため。またなん
ぢらのすべてわが名によりてちゝにねがふところのもの
を彼をしてなんぢらにたまはらせんがためなり。われなんぢ
らをたてたり　十七　なんぢらたがひに愛せんがためにこれ

と命ぜし　世もしなんぢらをにくむことあらばなんぢらよりもさきにわれを悪と知れ　十九　なんぢらもし世のものならば世はおのれの屬をあいすべし。されどなんぢらはよのものにあらねば。われなんぢらを世よりえらびたり。これによりて世なんぢらをにくむ　二十　しもべはその主よりおほいならずとわがなんぢらにいひしことをこゝろに憶よ。ひともしわれをせめばなんぢらをも窘迫もしわがことばをまもらばなんぢらの言をもまもるべし　二十一　されどかれらはわれをつかはせしものをしらざるによりわが名のゆゑをもてこれらのことをなんぢらに加べし　二十二　われもしきたりてかたらざらまし

なからばかれらつみなかりつらん。されどいまその罪(つみ)いひわくるべきやうなし 二三 われをにくむものはまたわがちゝをもにくむなり 二四 われもし他(ほか)の人(ひと)のせざりしわざをかれらのうちにおこなはざりしならばかれら罪(つみ)なかりつらん。されどいまかれらはわれとわが父(ちち)とをまでに見(み)しうへにこれをにくめり 二五 このことのできしはかれらのおきてに故(ゆゑ)なくしてわれをにくめりと録(しる)せしことばにかなはせんためなり 二六 われなぐさむる者(もの)を父(ちち)よりおくらん。きたるちゝよりいづる眞理(まこと)のみたまなれぞのきたるときわがために證(あかし)をなすべし 二七 なんぢらもまたわれと偕(とも)にはじめよりをりしによりてあかしをなさん

べし

第十六章 わがこれらのことをなんぢらに語るはなんぢらが
つまづかざらんためなり 二 ひとびとなんぢらを會堂よりし
りぞくべし。またすべてなんぢらをころす者みづから神に
つかふるとおもふときいたらん 三 これらのことをなんぢら
になすは父とわれとをしらざるがゆゑなり 四 われこれらのことを
なんぢらにかたるは時いたりてわがこれらのことをいひしこと
をなんぢらがおもひいでんためなり前にこれをなんぢら
にいはざりしは我なんぢらとともにをればなり 五
われ今われをつかはせしもののもとにゆかんとす。されどなんぢら

らのうちわれはいづこへ往とたづぬるものなく 六 うへつら
て我これらのことをいひしによりて憂なんぢらのこゝろにみ
ちり 七 されど眞をなんぢらにつげんわがゆくハなんぢらの
益なりわれゆかずハなぐさむるものなんぢらにはきたらざるべし
もし往ばこれ我なんぢらにおくらん 八 かれきたらんとき
罪につき義につきさばきにつき世をしてはぢありとさと
らしめん 九 つみにつきてといへるはわれを信ぜざるによ
りてなり 十 たゞしきにつきてといへるはわれ父へゆ
くによりてなんぢらまたわれを見ざればなり 十一 審判につ
いてといへるはこのよのぬしさばかるゝとうられぞなり 十二 ま

れなほなんぢらにおほくかたるべきことあれども今(いま)なん
ぢらさとることあたはず。十三されど彼(かれ)すなはちまことの靈(みたま)の
きたらんときはなんぢらをみちびきてすべての眞理(まこと)を志ら
しむべし。そはかれ己(おのれ)よりかたるにあらずそのきゝし
ところのことをなんぢらにいひ亦(また)きたらんとすることを
なんぢらに志めすべければなり。十四かれわが榮(さかえ)をあらはさ
ん。そはわがものをうけてなんぢらにしめせばなり。十五すべ
てちゝのもちたまふものはわがものなり。これ故(ゆゑ)にわれわ
がものをうけてなんぢらに示(しめさん)といへり。十六志ばらくせばな
んぢらわれを見(み)じ。また志ばらくしてわれをみるべし。これ

まさ父へゆくなり 十七 らうはおいら門徒のうちにてあるも
のたくびひはいひけるは暫せばあんちらわれをみしまうし志
ばらくしそわれをみるべしといひ且それわれんちらくゆ
くなりとされらはいひしんなふのことぞや 十八 これらまう
いひけるはこの志ばらくといひしは何ごとのおとぞやそのい
へることをおまされくしらば 十九 耶蘇これらのこゝろをとさる
おまそいひけるは志ばらくせば我をみじまう志ばらく
してわれをみるべしと言しこのことはよりてあんぢうた
がひはさぶねおふての 二十 誠はまことにまれあんちらはつげ
んなんぢらはなげきこうあしを世ままろこうおべし。なんぢら

うれふるあらん されど その憂はかはりて よろこびと なる
べし 二一 をんな子をうまんとするときは うれふ。その期いたる
るによりてなり。されど すでにうみぬれば もとの苦をわする世
にひとのうまれたるよろこびによりてなり 二二 かくのごとく
なんぢらも いま憂ふれども われまた なんぢらを見ん その
とき なんぢらのこころ よろこぶべし。その喜樂をうばふも
のあらじ 二三 その日なんぢら われにとふところ なかるべし。
まことにまことに なんぢらにつげん およそ わが名によりて ちち
にもとむるところのもの 父はこれを なんぢらにさづけたま
ふべし 二四 なんぢら いままで わが名によりて もとめたること

となし求よさらバうけんしかしてなんぢらのよろこび満
べし 二五 たとへをもてこれことをなんぢらにかたりしが譬
喩をもちゐずしてなんぢらにかたり父についてあきらかに
にしめすときいたらん 二六 その日なんぢらわが名によりて
もとめん。われなんぢらのために父にねがはんといはず 二七
それちゝみづからなんぢらをあいしたまふなり。これなんぢ
らわれを愛しまたちゝよりわがきたりしことを信ずるに
よる 二八 われちゝよりいでゝ世にきたれり。またよをはなれ
て父にゆかん 二九 でしかれにいひけるはなんぢいまあきらか
にいひて譬喩をいはず 三十 われらいまなんぢのしらざる

ところなくまた人のなんぢにとふを用なきことをしる。こ
れによりてわれら神よりなんぢのいできたまひしことをしん
ず 三一 耶穌かれらにこたへけるはいまなんぢら信ずるか 三二
ときまさにいたらん今いたりぬ。なんぢら散ておの〳〵その
屬するところにゆきさりわれを一人のこさん。されどわれ
ひとりにあらず父われとともにいませり 三三 われこの
ことばをなんぢらにかたりしはなんぢらわれにおいて
平安をえせしめんがためなり。なんぢら世にありては患
難をうけん。されどおそるゝなかれわれすでに世に勝て

第十七章

耶穌このことばをかたりて天をあふぎいひけ

るハ父(ちゝ)よときいたりぬ。なんぢの子(こ)なんぢのさかえをあらはさんがためになんぢの子(こ)のさかえをあらはしたまへ 二 これなんぢわれにたまひしところのものにわれ永生(かぎりなきいのち)をあたへんがためにすべてのものをおさむる權威(けんゐ)をわれにたまひけれバなり 三 かぎりなきいのちとハ唯(たゞ)ひとりの眞神(まことのかみ)なるなんぢとそのつかはせしいゑすキリストを知る是(これ)なり 四 われなんぢの榮(さかえ)をよにあらはしゝなんぢのわれに託(まか)しゝところのつとめハこれことごとく成ぬ 五 ちゝよ今(いま)われをしてなんぢとゝもに榮(さかえ)をえせしめたまへ。まゑるちち創世よりさきハなんぢとともにもちしところのさかえを得(え)せしめたま

へなんぢ世よりえらびてわれにたまひし人々になんぢ
の名をあらはせり。かれらはなんぢの屬にしてなんぢ
かれをわれに賜へかれらはなんぢのことばを守れり
七 かれらいまなんぢのわれにたまひしものは皆なんぢよ
りいでしことをしる 八 そはなんぢがわれにたまひし言を
かれらにあたへしがなり。かれらこれを受まさにわがなん
ぢよりいでしことをまことに知かれらなんぢのわれをつかは
せしことを信ぜり 九 われかれらのために祈わがいの
るは世のためにあらずなんぢのわれにたまひしもののた
めなるのみ。そはかれらはなんぢのものなればなり 十 凡て

わかのものはなんぢのものなんぢのものはわかのものなり且
われはかれらによりてさかえをうく 十一 われいまより世にを
らんず。かれらハよのなかにをる。われなんぢにいたる聖父よなん
ぢのわれにたまひしものをなんぢの名によりてたもちかれらを
保守てわれらのごとくかれらをも一になしたまへ 十二 われ
かれらとともにありしときかれらをなんぢの名にまもりし
われかれらをまもりてなんぢのわれに賜しものをわれまも
りしにかれらのうち一人もほろぶるものなし。たゞ沉淪
の子ほろびたり。これ聖書にかなはんためなり 十三 われい
まなんぢにいたる。われ世にありてこのことばをかたるは

わが喜樂をかれらにみたしめんためなり　われなんぢの
ことばをかれらにさづけたり世はかれらをにくむ。そは我
よのものにあらざるごとくかれらも世のものにあらざれ
ばなり　十五　われなんぢにかれらを世よりとりさらく、といの
らばず、たゞかれらを保守てあしきにおちいらしめざれとい
のる　十六　われよの屬にあらざるごとくかれらも世のものに
あらず　十七　なんぢのまことを彼もてかれらをきよからしめよ。な
んぢのことばは眞理なり　十八　なんぢわれをよにつかはせし
ごとくわれもかれらを世につかはせり　十九　われかれらのため
にみづからを潔これかれらもまことによりてかれらのきよから

ぜんしゃなり 二十 それしじうれくのしめまのみいのちぎこの
れらのきしへはよりでそれを信ずるものしあおも祈家
り 二 ごおけあ一はあらんしあなり父よあんぢそれはきり
それまさなんぢは居このくのごとくこのれらもそれらはきりて
ひとつはあらんしあこのら世をしてなんぢのそれをつくのをせ
しらと紙信ぜしめんしああり 三 あんぢのそれさたまひし
榮紙それうまらはさげふり。これわれらの一なりてがごとく
くのれらもさこびはひとらはなりんしあり 三 それらぜ
らはきりなんぢそれはぞる。それこのれらをしてひとらは全
あらしめこのら世をしてあんぢのそれ紙つくのいせしらとま

たなんぢわれを愛するごとくかれらをもあいせることを
しらしめんとなり 二四 父よなんぢのわれに賜しものゝわが
をるところにわれとともにをりてわが榮すなはちなんぢ
がわれにたまひしものをみんことをねがふ。それ世基をお
かざりしさきになんぢわれをあいしければなり 二五 ただし
きちゝよ世はなんぢをしらずわれはなんぢを識かれらも
なんぢのわれをつかはせしことをしれり 二六 われなんぢの
名をかれらにしめせり復これをしめさん。そはなんぢのわ
れをあいするの愛かれらにをりまたわれかれらにをらん
ためなり

第十八章 耶穌このことばいひてのちそのでしとともにいでゝ
ゆくケデロンの河をわたりそのところにある園のうちにはいりし
とともにはいりぬ 二 耶穌をわたしたるユダこの處をしれり
いゑすはしば〳〵その門徒とともにこゝにあつまりたればな
り 三 このときユダ一隊のつはものと羣吏をさいしのをさ
たちおよびパリサイのひとよりうけ炬とてうちんと兵器とを
たづさへてこゝにきたれり 四 いゑすは事のおのれにおよぶを
んとするをことごとく知いでゝかれらにいひけるは誰をさ
がするぞ 五 かれらこたへけるはナザレの耶穌なり 六 いゑす
はかれらにいひけるはわれぞそれなり 耶穌をわたしゝユダ

かれらとともにたてり 六 耶穌かれらにむかひてわれなり
といひたまへるときかれらしりぞきて地にたふれけり 七
いゑすまたかれらにたれをたづぬるやととひたまひしか
ばかれらナザレの耶穌なりといふ 八 いゑすこたへけるはわ
れすでになんぢらに我はそれなりといへりもしわれをた
づぬるならばこの輩をゆるしてさらしめよ 九 これ耶穌が
われにあたへしもののうち一人もわするるものなしとい
ひし言をかなへんためなり 十 ときにはシモンペテロ剣をお
びたりしがこれをぬきて祭司のをさのしもべをうちてそ
のみぎの耳をきりおとせり しもべの名をマルコスといへ 十一

耶蘇ペテロにのたまひけるハつるぎを鞘にさしおさめよ父のくだされまし〳〵し杯をわれのまざらんや 十二 このとき隊のつかさあかおゝびそのうしらとユダヤ人のあらく耶蘇をとらへしばりて 十三 まづこれをアンナスのもとにつれゆくぞかれハこの歳のさいしのをさカヤパの外舅なるによりてなり 十四 ユダヤびとらに議てひとり民のためにしぬるは益ありといひしハこのカヤパなりき 十五 シモンペテロとほかのまたひとりのでし耶蘇にしたがひけりこのでしハ祭司のをさのしるところのものなれば耶蘇とともにさいしのをさの庭にいりき 十六 ペテロハ門外にたゝずめばさいしのをさのしるところのでしハ

でゝ門をまもる婢につげてペテロをともなひいるこゝに
おいてもんをまもる婢ペテロにいひけるはなんぢもこの
人のでしのひとりならずやペテロしからずといふ 十八 しもべ
どもとしもやくどもは寒さによりて炭をたきそのところにた
ちてあたゝまるペテロもかれらとともにたちて燬れり 十九
さいしのかしら耶穌にそのでしとその道のことをたづね 二十
耶穌これにこたへけるはわれあらはに世にかたれり。われ
つねにユダヤびとの平生あつまるところなる會堂および
聖殿にてをしへをなしひそかにかたれることなし 三 なん
ぞわれにたづぬるやわれがかたりしことを聽ものにたづ

ねまゝかれらわがいひしところをしれり 二二 耶蘇かくいひし
まうさりらはたてるひとりの小吏てのひらにてこれを打
いひけるはなんぢさいしの長にこたふるはかくのごとき
か 二三 耶蘇かれにこたへけるはもしわがいひしことよか
らずばそのよからざるを證せよもしよくばなんぞわれを
うつや 二四 さてアンナス耶蘇をしばりてさいしのをさカヤバ
のもとにおくれり 二五 シモンペテロ立てあたゝまりをりしに
あるひとびといひけるはなんぢもかれの門徒のひとりなるか
ぞやペテロうけがはずしてしからずといへり 二六 さいしの
をさのしもべの中のひとり即ちペテロにみゝをそがれし

もの總戚いひけるハ我なんぢがこれとともに園にあ
りしをみしにあらずや 二七 ペテロまたうけがハず。やがて雞
なきぬ 二八 ひとびと耶穌をひきてカヤパより公廳にゆけり
時ハ夜あけがたなりきこれらの人ハ汚穢をうけんことをおそれ
てやくしよにいらざりしハすぎこしのいはひを食せんとそ
れぞなり 二九 ピラトいでてかれらにいひけるハいかなる訟を
もてこのひとをうつたふるや 三十 ひとびとこたへけるハかれ
もし惡事をせるものにあらずバなんぢにわたさじ 三一 ピラト
かれらにいひけるハなんぢらこれをとりてなんぢらの律法
にしたがひてさばきせよ ユダヤのひとびとこれにいひけるハ

われらはひとをころさんの權(ちから)なし 三二 これ耶穌(いえす)のそのしなん
とする狀(ありさま)をさしてかたられることばにかなへり 三三 ピラト復(また)や
くしよにいり耶穌(いえす)をよびていひけるはなんぢはユダヤびと
の王(わう)なるや 三四 耶穌(いえす)こたへけるはなんぢこのことを
いつるはみづからによるかまたはつゐそ人(ひと)のつげしによるとい
ふ 三五 ピラトこたへけるはわれはユダヤ人(ひと)ならんやなんぢの
くにの民(たみ)とさいしの長(をさ)となんぢをわれにわたせりなんぢ
なにをなせしや 三六 耶穌(いえす)こたへけるはわが國(くに)はこの世(よ)のく
にあらずもしわがくにこれよの國(くに)ならばわがしもべら
われをユダヤびとにわたさざるためにたゝかふべし。されど

まくがくにハこの世のくにあらざるなり 三七 ピラトかれにい
ひけるハさらバなんぢハわうなるか耶穌こたへけるハな
んぢのいふところのごとくわれハ王なりわれこれがため
に生これがために世にきたれり。それハ眞理につきてあかし
をなさんためなり。すべてまことにつくものハその聲をき
く 三八 ピラトかれにいひけるハ眞理ハいかなるものぞやこの
ことをいつるのちまた出てユダヤびとにいひけるハわれ
ハこの人ハつみあるをみず 三九 爰なんぢらハひとつ例
ありそれすぎこしの節にひとりの囚人をなんぢらにゆる
す。なんぢらユダヤびとの王をゆるさんことを欲ふや 四十

ひと〴〵また喊叫いひけるハこのひとにあらずバラバを釋
バラバハぬすびとなりけり

第十九章

そのときピラト耶穌をとらへてむちうつ 二 兵卒ども
いばらにて冕をあみこれの首にかぶらしめまたむらさき
の袍をきせて 三 いひけるハユダヤびとの王やすかれとて
て掌にてこれをうてり 四 ピラトまたそとにいでゝかれらに
いひけるハこれをこのまへにつれいで罪あるを見ずとこれをしらせ
んとてかれをなんぢらにひきいだせり 五 いゑすハ棘のかんむりを
かうぶりむらさきのうちぎをきてそとに出 ピラトかれらに
いひけるハみよこれその人なり 六 さいしの長たちとあら

やくこれをとりて十字架につけよじふじかにつけよとさけ
びければピラトかれらにいひけるハなんぢらこれをとりてじ
ふじかに釘よわれハこれにつみあるをみざるなり 七
ユダヤびとこれにこたへけるハわれらに律法(おきて)ありそのおきて
てらさばかれ死(しぬ)べきものなりぞかれみづから
を神の子となせばなり 八 ピラトこのことばをきゝてます〳〵
おそる 九 また公廳(やくしよ)にいりていエスにいひけるハなんぢい
づこのものぞ耶蘇(イエス)こたへせざりき 十 ピラトこれにいひけ
るハわれにこたへざるか我(われ)なんぢをじふじにつくる權
威(ゐ)ありまたなんぢをゆるすにけんゐありこのことばしらさ

るか 十一 耶蘇こたへけるはなんぢ上よりけんゐをあたへら
ずばわれにむかひて権威あることなしこのゆゑにわれを
なんぢにわたせしもののつみ尤おほいなり 十二 このゝち
ピラトこれをゆるさんと謀しかれどもユダヤびとさけん
でいひたるはもしこれをゆるさばカイザルは忠臣ならずす
べてみづからを王となるものはカイザルにそむくものなり
十三 ピラトこのことばをきゝて耶蘇をひきいだし鋪石といふ
るところヘブルのことばにてガバタといふところの
さばきの座にすわりけり 十四 それ日はすぎこしのい
はひの備日にてときはおほよそ十二時ごろなりきピラト

ユダヤびとにいひけるハなんぢらの王をみよ　十五　かれらさけびてこれを除（のぞけ）これをのぞけ十字架（じふじか）につけよといふピラトかれらにいひけるハわれなんぢらの王をじふじかに釘（くぎ）べけんや。さいしのをさたちこたへけるハカイザルの他（ほか）われらに王なし　十六　ついにピラトかれを十字架（じふじか）につけしめんとてこれをかれらにわたせり。かれらハおいてかれら耶蘇（いえす）をとりてひきゆけり　十七　耶蘇（いえす）ハじふじかをおひて髑髏（されかうべ）といへるところにいでヘブルのことばにていはゆるゴルゴダといふところにゆけり。こねところにて　十八　かれらかれを十字架（じふじか）につけたり。ほかに二人（ふたり）のものをかれとともに十字架（じふじか）につけらる。ひとりハ右（みぎ）ひとりハ左（ひだり）

いゑす中にされたり 十九 ピラトまたふだを十字架につけ此に
ユダヤびとの王なるナザレのいゑすなりとしるしたり 二十 お
ほくのユダヤびとこの罪標をよめり そは耶蘇をじふじ
かにつけしところは京城にちかければなり。そのふだはヘブル
ギリシヤロマのことばにて書り 二 ユダヤびとの祭司のを
さたちピラトにいひけるはユダヤびとの王としるすなかれ
みづからユダヤ人のわうなりといひしとしるすべし 三
ピラトこたへけるはわがしるせしところ已にしるしたり
三 へいそつども耶蘇をじふじかにつけしのちそのうはぎ
をとり四にわけておのおのその一をとりまたしたぎをとれ

で。この裏衣はぬひめなくうへよりまつたく織るものなり
ければ 二四 たがひにいひけるは これを裂ずして たれのもの
とならんかの鬮にすべし。こハ聖書に これらたがひにわが衣
をわけつわがしたぎをくじにすれといひしにかなはせんため
なり兵卒どもまでこのことをなせり 二五 さて耶穌のはゝ
とはゝの姉妹およびクロパの妻のマリアまたマグダラのマリア
その十字架のかたはらにたてり 二六 いゑす母とあいすると
ころの門徒とそのかたはらにたてるをみてそのはゝにいひけるは
婦よこれなんぢの子なり 二七 またでしにいひけるはこれな
んぢの母なり。このときその門徒これをおのれの家につれ

ゆけり　廿八　かくて耶穌すべてのことのをはりぬるをしれる故志
を聖書にかなはせんためにわれ渇くといへり　廿九　このところ
に醋のみちたる器皿ありしうへへいそうども海絨をもて
ひたし牛膝草につけてその口にあてたり　三十　いゑす醋をうけ
しのちいひけるハ事をはりぬ。かうべをたれて靈をわたらせ
ぬ○　三十一　この日はいはひのそなへびなり。このあんそくにち
ハ大いなるあんそくにちなれバ屍をしふドのうへにおく
こらん故このまざるゆゑにユダヤびとピラトにむかひて
かれらの脛を折てそのしかばねをとりのぞくことをねがふ
ぬ　三十二　ここにおいて兵卒ども耶穌とともに十字架につけら

れしものゝひとりのあしをくだきてまたひとりの
あしををり 三三 のちに耶穌にきたりしにはやすでに死たるをみ
てそのあしををらざりき 三四 一人のへいそつ戈にてその脇を
つきければさらにちと水となかれいでたり 三五 これを
みしもの證をたつ。そのあかしはまことなり。かれまことをみづ
からいふところの眞なるをしる。なんぢらをして信ぜしめ
んためなり 三六 このこと成りしはその骨のひとつもを
をらるまじきとあるに應せんためなり 三七 またほかの
書にかれらその刺しものを見るべしといへり ○ 三八 こ
の後アリマタヤのヨセフといふものまで前にユダヤびと

をおそれて隠(しのび)にいゑすのでしとなれるもの耶蘇(いゑす)の志かば
ねをとらんとてピラトに求(こ)ふピラトこれをゆるせしにより
きたりてその屍(しかばね)をとれり 三九 またさきに夜間(よる)いゑすにきたりし
ニコデモといふひと没藥(もつやく)と蘆薈(ろくわい)をまぜおよそ百斤(ひやくきん)ばか
りたづさへきたる 四十 かれら耶蘇(いゑす)のしかばねをとりてユダヤ
びとの葬(はうむり)のならはしにしたがひこれを布(ぬの)と香(かう)にてつゝめ
り 四一 さて十字架(じふじか)につけしそのあたりにそのあり園(その)のうち
にいまだ人(ひと)をはうむりしことなきあたらしきはかあり 四二
この日(ひ)はユダヤびとのいはひのそなへ日(び)なりまた墓(はか)ちかゝ
りければそこに耶蘇(いゑす)をおけり

第二十章

一 週のはじめの日のあさいまだくらきうちにマグダラのマリア墓にきたりて石のはかよりとりのけありしを見 二 つひにシモンペテロまた耶穌のあいせしところの門徒にはしりゆきていひけるははかより主をとりしものあり。それらいづこにおきしやその處をしらずと 三 ペテロと彼ひとりのでしいでゝ墓にゆく 四 ふたりともにはしるほかのでしペテロよりとく趣てさきにはかにいたりぬ 五 俯てまてのぞねをつゝみし布をおけるをみたれどもいらざりき 六 シモンペテロおくれてきたり墓にいりつゝみしぬののおけるを見たり 七 そのかうべをつゝみしてぬぐひは屍を裹しぬのとともに

ほかにはなしてべつのところに疊ておけり 八 こゝにおいてさきに墓にきたれるかのでしもいりきたりみて信ぜり 九 しるしとて耶穌のよみがへるべきことのあるをかれらいまだしらざるなり 十 かくて門徒はおのれのやどにかへれり 十一 マリアは墓のそとにたちて哭つゝはかにむかひかゞみて 十二 ふたりの天使しろきころもを着いえすのしかばねをおきたりしところの首のかたにひとり足のかたにひとり坐しをるをみたり 十三 天のつかひかれにいひけるは婦よなんぞなげくや。かれこたへけるはわが主をとりしものゝおきたるところをしらざればなり 十四 このごといひてふり

うしろを耶蘇のたちしをみる。されども耶蘇なることをしら
ず。十五 いゑすかれにいひけるハをんなよなんぞなげくや誰
をたづぬる。マリア園をまもるひとならんとおもひこれ
にいひけるハ君よなんぢもしこれをはこび移しならバい
づこにおきしぞわれにつげよわれまさにこれを取べし。十六 耶蘇か
れにマリアよといふ。婦うしろをみてこれにラボニといへり。こ
れを譯すれバ夫子なりと。十七 いゑすかれにいひけるハ我に捫
ることなかれ我いまだ父にのぼらざれバなり。わが兄
弟にゆきていへわれハわが父すなハちなんぢらが父にわ
が神すなハちなんぢらがかみに升と。十八 マグダラのマリア主

をみしことゝ主のかくおのれにいひたまへるといふこ
とを門徒たちにゆきてつぐ○ 十九 この日はくれがたにすな
はち一週のはじめの日でしたちユダヤびとをおそるゝに
よりてあつまれるところは門をとぢおきしが耶蘇きたり
てそのうちにたちかれらにいひけるはなんぢら安かれ 二十
かくいひしのちその手とわきをかれらに見せしかばでしたち主
をみてよろこべり 二一 耶蘇ふたゝびかれらにいひけるはなんぢ
らやすかれ父のわれをつかはせしごとくわれもなんぢら
を遣ん 二二 このくいひしのち氣をふきかけてかれらにいひけるは
聖靈をうけよ 二三 なんぢら誰のつみをゆるすともその罪ゆ

るされたれのつみを定るともそのつみさだめらるべし 二四
耶穌きたりしとき十二のでしの一人なるデドモととなふ
るトマスかれらとともにをらざりき 二五 このゆゑにほかの門
徒これにいひけるはわれら主をみたりトマスこれらにいひ
けるはわれもしその手にくぎのあとを見わがゆびを釘の
あとにさしわが手をそのあばらにさゝんにあらずば信ぜじ
二六 八日をすぎてのち復でしらいへのうちにをりけるが
トマスもこれとともにをれり門をとぢたるに耶穌きたりて
そのうちに立ていひけるはなんぢらやすかれ 二七 つひに
トマスにいひけるはなんぢの指をこゝにのべてわがてを見

なんぢの手をのべてわがあばらにさせ信ぜざるなかれ信
ぜよ 二八 トマスこたへていひけるはわが主よわが神よ
二九 いえすかれにいひけるはなんぢわれをみしによりて信
ずみずしてしんずるものはさいはひなり 三十 この書にしる
さゞるふしぎなるあまたのしるしを耶蘇でしのまへにてな
せり 三一 このふみをしるせるはなんぢらをして耶蘇のかみ
の子キリストなることを信ぜしめこれをしんじてその名によ
りていのちをえせしめんがためなり

第二十一章 この〻ち耶蘇またテベリアのみづうみにてでしたちに
おのれをあらはせりそのあらはせること左のごとし 二 シモン

ペテロとデトモといへるトマスおよびガリラヤのカナのナタナヘル
とセベダイの子たちまたそのほかの二人のでしともにおり 三
シモンペテロかれらにいひけるハわれ漁にゆかん。かれらい
ひけるハわれらもともにゆかん。かれらいでゝ舩にのりし
がこの夜ハなにのえものもなかりき 四 すでによもあけた
るに耶蘇きしにたてり。されど門徒たちそのいゑすなるこ
とをしらざりし 五 耶蘇かれらにいひけるハをさな子どもよ食
物おるや。かれらこたへけるハなし 六 耶蘇かれらにいひけ
るハ網をふねのみぎにうてば獲物あらん。つひにあみをう
つ魚おほきによりてひきあぐることあたはず 七 こゝにお

いく耶蘇のあいせしところの彼でしペテロにいひけるは
これ主なりシモンペテロ主なりときゝて裸なりしがころも
をつけ帯してうみにとびいりぬ 八 あとのでしたちハ小舟
にてうをのいりたるあみをひきていたれり其岸をさる
ことそほうろび五十間ばかりなりけれバなり 九 岸につき
しに炭火とそのうへにのせたる魚および餅あるを見る
十 耶蘇これらにいひけるハいまとりしところのうをを少
しもちきたれ 十一 シモンペテロふねに往あみをきしにひきした
りしにその網のなかにハおほきなるうを百五十三尾いりさ
ましかくおほかりけれどもあみハやぶれざりき 十二 耶蘇の給ふ

まいひけるハきたりて食せよ。でしたち敢てかれハなんぢいかなる人ぞとたづぬることをせず。これハ主なりとしれバなり耶穌きたりてパンをとりかれらにあたふ魚をもまたそのごとくせり 十四 耶穌よみがへりしのち自己をでしたちにあらはせることこれ三次なり 十五 さてかれら食しそののち耶穌シモンペテロにいひけるハヨナの子シモンよなんぢこれらのものにまさりてわれを愛するや。かれいひけるハしかり主よ然われなんぢを愛することハなんぢしれり。耶穌かれにいひけるハわが羔をやしなへ 十六 またふたゝびかれにいひけるハヨナの子シモンよわれを愛するや。かれいひけるハ主よ

よしより わがなんぢをあいまする ことハ なんぢしれり 耶穌(いゑす)
これにいひけるハ わがひつじを牧(やしな)へ 三たびこれにいひ
けるハ ヨナの子シモンよ なんぢわれをあいするやと このペテロ三たび我(われ)を
あいまするやといはれしによりて憂(うれ)へていひけるハ 主(しゆ)
しらざるところなし わがなんぢを愛(あい)まする ことハ なんぢし
れり 耶穌(いゑす) これにいひけるハ わがひつじを牧(やしな)へ まことにまことにな
んぢにつげん なんぢ幼(をさな)きときみづから帯(おび)しこゝろのまゝにせ
てあるきぬ 老(おい)ては 手(て)をのべ 人(ひと)なんぢをそてこゝろのまか
ならざるところにひきゆくらん 是(これ)いへるハそのいか
なる死(し)をもて神(み)をあがめんといふことをしめしたるなりんこ

れかくいひてのちまたかれにいひけるは我にしたがへ
ペテロふりかへりて耶蘇(いえす)のあいせしでしのしたがへるをみる
このでしは食(しよく)せるときいえすのむねによりて主(しゆ)よなんぢを
ものはたれぞやといひし門徒(でし)なり 二一 ペテロこれをみて耶(い)
蘇(えす)にいひけるは主(しゆ)よこの人(ひと)いかに 二二 耶蘇(いえす)これにいひける
はわれもしかれがながらへてわがきたるをまつをのぞま
ば汝(なんぢ)になにかあらんやなんぢはわれに從(したが)へこゝ
においてこの言(こと)きやうだいのうちにつたはりてこの門徒(でし)
しなじといへりされども耶蘇(いえす)ペテロにこれはしなじとい
ひしにあらでもしかれがながらへてわが来(きたる)をまつを我

Bible. N.T. Japanese. 1877.

Title: 新約聖書
(Shin'yaku seisho; the New Testament)

Place: Yokohama

Publisher: 米國聖書會社 (The American Bible Society)

Date: 1877-79.

3v.(double leaves) in 1 case

LIBRARY OF PRINCETON
MAR 15 1968

SCC
7409
v.1

PRESENTED
IN MEMORY OF
NANNIE FLETCHER BASORE

AN EARLY MISSIONARY OF THE
PRESBYTERIAN CHURCH
IN YOKOHAMA

HER COPY OF THE FIRST
TRANSLATION OF THE BIBLE
INTO JAPANESE

LIBRARY OF PRINCETON
MAR 15 1963

PRINTED FOR THE AMERICAN BIBLE SOCIETY *
米國聖書會社藏板

SCC
7409
v.1

BS315
.J35
1877
v.1